

斧の勇者の魔王譚

カゲムチャ（虎馬チキン）

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「盾の勇者の成り上がり」の世界に「斧の勇者」として召喚された主人公。

下手に原作知識がある分、スタートから死亡フラグに怯え、武器泥棒に怯え、ラスボスに怯え……。

それでも、彼は彼なりのやり方で世界を救う！

全ては自分の為に！

自分の命を守る為に！

たとえ、その果てに魔王と呼ばれようとも……！



完結から随分経ってから支援絵を貰ってしまった……。

昔書いた作品でも、未だに読んでくれたり、支援絵をくれたりする読者様がいるって
いうのは嬉しいですね！

目次

第一章 勇者召喚編

1話	1話	9話	8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話
72	65	56	50	42	35	28	21	13	6	1

第二章 メルロマルク編

2話	2話	2話	2話	1話	1話	1話	1話	1話	1話	1話	1話
186	175	166	157	147	137	131	121	110	100	92	80

3 5 話	3 4 話	3 3 話	3 2 話	3 1 話	3 0 話	2 9 話	2 8 話	2 7 話	2 6 話	第三章 暗躍編	2 5 話	2 4 話
293	285	274	265	255	245	236	226	218	211		205	196

4 7 話	4 6 話	4 5 話	4 4 話	4 3 話	4 2 話	4 1 話	4 0 話	第四章 靈龜進行編	3 9 話	3 8 話	3 7 話	3 6 話
409	401	393	382	372	362	352	341		335	325	313	303

5 8 話	第 五 章 鳳 凰 討 伐 編	5 7 話	5 6 話	5 5 話	5 4 話	5 3 話	5 2 話	5 1 話	5 0 話	4 9 話	間 章	4 8 話
505		497	491	483	475	464	456	448	439	429		418

7 0 話	6 9 話	6 8 話	6 7 話	6 6 話	6 5 話	6 4 話	最 終 章 世 界 救 濟 編	6 3 話	6 2 話	6 1 話	6 0 話	5 9 話
625	614	604	592	576	567	557		548	538	528	520	512

×× 7 7 7 7
話 4 3 2 1
話 話 話 話

672 662 649 641 632

第一章 勇者召喚編

1話

俺の名前は「奥寺夕」おくでらゆう。

今年二十歳になる、しがないフリーターだ。

俺という人物を一言で言うなら、モブである。

さして優秀なわけでもなく、何か特別な才能があるわけでもなく。

優柔不断で流されてばかり。

フリーターなどという現状に不満を抱きつつも、何とかしようと行動を起こす事も出来ない。

上昇思考のない小物にして、小市民。

それが俺だ。

……言っていると悲しくなってくるが、事実なのだから仕方がない。

きっと、俺が唐突にいなくなっても、世界は何の不都合もなく回るのだろう。

いや、いなくなった事にすら気づかないかもしれない。

それくらい俺は世界にとってどうでもいい存在だったのだ。
まさに、その他大勢のモブ。

なのに、何をどう間違ったのか……

「おお！ 勇者様！ この世界をお救いください！」

今、俺の目の前には、膝をついて頭を下げる、魔法使いみたいな格好をした連中の姿。
下を見れば、光り輝く魔法陣。

周りを見渡せば、怪しい儀式やってみす、と言わんばかりの、ファンタジーな内装
の数々。

そして、この手に握られたのは、世界の命運！ ……ではなく、なんかどっかで見た
ようなデザインをした、『斧』。

どう見ても薪割り用には見えない。

シンプルだけど、戦う事を目的とした形状をしている。

所謂「戦斧」というやつだ。

まごうことなき武器である。

あー、これは。

このシチュエーションは。

俺の頭に浮かんだのは、今、転生と並んでネットで流行しているアレだ。

——異世界召喚。

——そして、勇者召喚。

つまりアレか？

俺が勇者として召喚されたと？

そういうことか？

そういうことなのか？

思い出すのは、こうなる前の最後の記憶。

趣味のネット小説あさりをしている最中、大型トラックにはね飛ばされてミンチになつた記憶だ。

死因は歩きスマホ。

あれ危ないよねー。

今際の際に、文字通り身に染みてわかつたよ。

痛みという形でな！

で、目が覚めたら、ここに立っていたという訳だ。

いやー、トラックにはね飛ばされて死ぬとか、如何にも異世界召喚っぽいなー。
いや、この場合、召喚じゃなくて転生か？

まあ、どっちでもいいか。

にしても、死因歩きスマホで……

勇者の死に方じゃねーな！

かつこ悪い事この上ないぜ！

ハッハッハ！

あー……。

無理矢理テンション上げて現実逃避しても虚しいだけだぜ……。

「どうして、ここうなった……」

思わず、そんな眩きが口から漏れた。

そして、視線は天を仰ぐ。

そこには当然答えをくれる存在などなく、あつたのはレンガみたいな天井だけだった。

訳のわからん、この状況。

でも、これだけは言わせてほしい。

なんで斧？

2 話

——盾の勇者の成り上がり。

それは、俺が生前最後に読んでいたネット小説にして、我が死因となった歩きスマホ……そこに表示されていた小説でもある。

こじつけに等しい言い方をしてしまえば、この作品のせいで俺は死んだのだと言えなくもない。

完全に八つ当たりだけでも。

で、この作品のあらずじをざっくりと説明すると、こうだ。

伝説の武器に呼び寄せられ、異世界に召喚された主人公「盾の勇者」は、冒険開始最初期の段階で唯一の仲間裏切られ、強姦冤罪の濡れ衣を着せられて、勇者から一文無しに性犯罪者に転落。

その状態でも折れる事なく、悪足掻きを続けた末に復讐に成功。

某逆転裁判も真つ青な程劇的な無罪判決を勝ち取り、遺恨を残しつつも本来の使命である世界救済のために戦い続け、遂には世界を救った英雄となる。

こんな感じ。

我ながら上手く纏めたな。

俺はこの作品がそこまで好きだった訳じゃないけど、なんだかんだで最後まで読んだ。

外伝まで読んだ。

トラックにはね飛ばされたのは、外伝の外伝を読んでた時だ。

……思ったより好きだったのかもしれない。

ツンデレか。

俺は金髪ツインテールの美少女じゃないんだけどなー。

話が逸れた。

なんで自分が似たような経験（勇者召喚）を現在進行形で体験してる時に、他人の、それもフィクションの話をしてるのかというと、

つい先程、この話が他人事でもフィクションでもなくなってしまうたからだ。

あの後、俺は呆然としたまま召喚された場所から連れ出され、王様と謁見させられた。

……知らない国の王様と謁見とか、日本の常識に当てはめて考えればトランプ大統領とOHANASHIしてるようなものだけど、もうその程度じゃ驚かんよ。

驚いてる暇もなかったよ。

直後に、衝撃の事実を知る事になったんだから。

立派なお髭を生やした王様の口から聞かされた説明を要約すると、こうだ。

この世界は今、「厄災の波」なる現象に襲われ、滅びに向かっている。

波とは次元に入る亀裂のようなものであり、そこから這い出してきた魔物達によって、既に世界中で甚大な被害がでている、らしい。

世界各国はこの事態を重く捉え、古からの伝承に従って勇者召喚の儀式を執り行つた。

伝説の武器を携えた勇者達。

剣、槍、弓、盾の四聖勇者。

鞭、爪、槌、小手、杖、投擲具、そして斧の七星勇者。

俺はこの七星勇者の一人「斧の勇者」であり、他の勇者同様、世界のために戦つてほしい。

だつてさ。

——ここまで聞いて、俺の頭はパンクした。

めっちゃ聞き覚えのある設定だったからだ。

これ「盾の勇者の成り上がり」の設定その物やないか!?

パクリか!?

二次創作か!?

警察に通報したる!

心の中で謎の関西弁が乱舞するくらいに混乱した俺の様子に気づいたのか、王様が「今日はもう、ゆっくりと休んでください」と言ってくれたので、お言葉に甘えて案内された客室に行き、とりあえずベッドにダイブして爆睡した。

その後、起きてから現在の状況を確認して、今に至る、というわけだ。

「アカン! これは、アカン!」

そして今、俺は客室のベッドの上で頭を抱えてゴロゴロしている。

なんで頭を抱えているのかって?

原作知識を基に考えた俺の現状が、ひたすらアカン事になってるからだよ!

どのくらいアカンのかと言うと、一寝入りして落ち着いて尚、謎の関西弁が抜けないくらい、アカン!

アカン! アカン! 標準語で言うのと、やばい!

ふう。

落ち着け。

落ち着け、俺。

とりあえず深呼吸だ。

「す~~~~~は~~~~~」

よし、落ち着いた。

落ち着いたところで、もう一度よく考えよう。

俺がこれだけ取り乱してる理由。

それは、原作での斧の勇者の末路にある。

原作での斧の勇者。

彼には名前すらない。

特に描写される事なく、気づいたら死んでいた哀れなキャラクター。

それが斧の勇者だ。

なんて可哀想な奴だ……。

他人事じゃないけど。

で、問題はその下手下。

これは原作知識、正確には外伝の知識のお陰で判明している。

この世界には伝説の武器を強奪するために勇者を暗殺して回ってる連中がいる。

転生者、転移者、憑依者。

波の黒幕が尖兵として派遣した、勇者以外の異世界人達。

ゲーム風に言えばプレイヤーキラー。

俺に言わせれば武器泥棒。

そんな奴らだ。

伝説の武器は装備から外れない。

呪いの武器もかくやというほど外れない。

なのに原作では、俺の手にへばりついて離れない、ヤンデレのような伝説の斧は、武

器泥棒筆頭みたいな奴に奪われていた。

まるで、寝取られだな！

ハツハツハ。

笑えねー……。

そして、さらに問題なのは、彼がお亡くなりになった時期だよ。

本編では描写されてないけど、パラレル世界みたいな外伝では語られてた。

召喚直後だ。

この斧は勇者が強くなる前に武器泥棒の一人に奪われ、「私のために争わないでー」とばかりに武器泥棒同士で奪い合われた後、武器泥棒筆頭の下に。

そして、最終的には主人公サイドの緑の鳥に使われる事になるのだ。

斧お前はそれでいいかもしれないけどなあ！

俺は死にたくないんだよ！

「チツクシヨー!!」

俺は頭から布団を被った。

3話

どうやら、いつの間にか寝ていたらしく、俺は掛け布団に埋もれた状態で目を覚ました。

時刻は早朝。

窓を上げれば、爽やかな朝の日差しが差し込んでくる。

小鳥の囀りも聞こえてくる。

「うむ、実に平和な朝だ」

——窓の外に広がる、ファンタジーな街並みさえなければ、さぞ癒された事だろう。

「異世界召喚とか、夢であってほしかった……」

どうやら夢落ちは許してくれなかったらしい。

目が覚めたら、自宅のポロアパートの布団の上というのを多少は期待してたんだけど、そんな希望は見事打ち砕かれた。

神はいなかった。

いたとしても、敵方だ。

でも、不思議と心は凧いでいる。

昨日の混乱は完全に抜けたし、恐怖も絶望も感じない。

今の俺は凄く冷静だ。

悟りを開いて、諦めの境地に至ったのかもしれない。

もしくは、ただ寝ぼけてるだけかもしれない。

まあ、どっちでもいい。

なんにせよ、ようやく本当に落ち着いたお陰で、状況を客観視できるようになった。

自分が何をすべきなのかもわかった。

まずは強くなる事。

これしかない。

昨日はつい原作知識を確定事項みたいに捉えて絶望したけど、よく考えてみれば未来なんて確定していないんだから、努力しただいでひっくり返せる筈だ。

というか、そう思わないとやってられない。

それに、幸いにして根拠はある。

それは、盾の勇者の成り上がり外伝、「槍の勇者のやり直し」。

これは本編において撃沈された四聖勇者の一人、槍の勇者が時を巻き戻すスキルの力で世界をやり直す……所謂もしもの世界、ifを量産するようなストーリーだった。

いつ、どこで、なにを变えようと、どういう変化が起きて、バッドエンド直行みたいな。そこでは強くてニューゲーム状態の槍の勇者が、大抵の問題を腕力と戦闘力で解決していた。

もつとも、割と複雑な分岐条件があるみたいで、そんな俺Tueeeeeee! ばかりして解決する問題なんてたかがしれてたけど……。

でも、ここで重要なのは、能力と立ち回りしだいでは、未来を変える事ができるという点。

これが唯一の希望だ。

俺の武器は原作知識。

俺はこの世界が辿る未来とあらゆる設定を知る男。

言ってみれば、攻略本だ。

アイム、パーフェクトブックマン。

うる覚えの箇所が大量にあるとか、そもそもこの知識が当てにならない可能性も高いとか、どう足掻いてもラスボスには勝てる気がしないとか、不安を上げればきりが無い。でも、やるしかない。

この力を使って、なんとしてでも生き残る。
それしか俺に残された道はない。

俺は死にたくない。

思い出すのはトラックにひき殺された瞬間。

あの時、俺は即死できなかつた。

身体がミンチになるという想像を絶する痛みの中、不意に襲ってきたデッドエンドに
混乱する頭を、恐怖が支配した。

痛かつた。

苦しかつた。

そして何より、怖かつた。

もう二度と、あんな思いはしたくない。

俺が死ぬと言うのなら、殺される運命だと言うのなら、殺られる前に殺るだけだ。

俺は殺る！

殺ってやるぞ!!

全てを踏みにじってでも生き残ってやる!!

「うおおおおおおおおおおおおお!!」

カースシリーズ

——の斧が解放されました。

「気合いの雄叫びを上げる中、固く握りしめた斧から、何か得体の知れない感情が伝わってくるような気がした。

心を塗りつぶすような、どす黒い感情が。

……だが、そっちに意識を向ける前に、俺はある重大な事実気づいてしまった。

「……………」

いつの間にか、部屋の扉が開いていた。

シンプルながら品のある扉だ。

きつと、いいお値段のする素材を使っているに違いない。

高級感があるもの。

勇者様のお部屋の扉に相応しい扉だ。

扉っていうか、ドアだ。

——そして、ドアを開けた姿勢のまま硬直したメイドさんが一人。

美少女だ。

美少女メイドだ。

年齢はおそらく、俺より少し下。

流れるような黒髪を後ろで一本に纏めた、人形のように整った顔立ちの美少女メイド。
ド。

彼女がモデルになったフィギュアがあつたのならば、飛ぶように売れることだろう。

そんな彼女の視線は俺に向けられている。

平々凡々な顔立ちをしている俺としては、こんな美少女に見つめられると、照れるより先に威圧感を覚えてしまう。

しかし、それはあくまでも平時の話。

今、俺を襲っているのは、威圧感どころの話じゃない。

今の自分を客観的に見つめてみよう。

唐突に窓の外に向かって雄叫びを上げた男である。

ついでに言うのと、昨日から部屋の外に聞こえるような絶叫を何回か上げたような気がする。
する。

うん。

控えめに言つて、危ない人だ。

そんな危ない人を見る目に好意的な感情が混ざる訳もなく。

彼女の顔には、まるで見てはいけけないものを見たかのような、理解不能な存在を見るかのような表情が浮かんでいた。

要するに、ドン引きである。

「……………おはようございます。斧の勇者様」

それでもプロ根性の成せる技か、なんとか表情を取り繕って話しかけてきた。

さつと目を逸らされたのは仕方あるまい。

そして声が震えているのは、気のせいではあるまい。

俺は彼女に向かって、頭を下げた。

「見なかった事にしてくれませんか……………」

「……………はい」

そんな懇願に、彼女は気まずげに頷いてくれた。

その心中がどうなってるかなんて、考えたくもない。

ああ。

居たたまれない。

さつき絶対に生き残ってやるとか言つといてなんだけど、死にたい。

その後、彼女の案内で食堂に案内されて朝食をとり、そのさらに後に、王様に呼び出されて謁見の間みたいな場所に案内された。

彼女は最後まで、目を合わせてくれなかった。

4話

美少女メイドに連れられて、再びやってきた謁見の間（仮）。

なんで再びこんな所に呼ばれたのかと言うと、なんでも、昨日は俺が混乱の極地に達して目を回したせいで謁見と説明が中断されたから、その続きをやりたいそうです。

納得の理由だ。

……ちなみに、その説明をしてる最中、やっぱり美少女メイドは目を合わせてくれなかった。

納得せざるを得ない理由がある。

ちくしょう（涙）。

「おはよう、斧の勇者様。……とりあえず一つ聞きたいのじゃが、何かシヨックな事でもあったのですかな？」

いろいろとシヨックが抜けていない俺を見て、サンタクローズ、もしくはダンプルドアのような立派なお髭を生やした王様は、なんとも的確な質問をぶつけてきた。きつと、シヨックが顔に滲み出ているのだろう。

王様は、割と本気で心配してくれてるようだった。

……やだ、この王様優しい。

原作知識に出てくるクズ王とは大違いだわ。

でも、今はそつとしておいてください。

メイドさんというか、他者にドン引きの眼差しで見られるというのは、心が折れかねない程の精神的ダメージが発生するのです。

だから、聞くなよ。

絶対、聞くなよ。

「何もありませんでしたよ。ええ、何も、何もね」

「そ、そうか。それならばいいのじゃが」

それ以上ツッコむんじゃねえぞという絶対の意志を言葉に乗せると、空気の読める優秀な王様はわかってくれたらしい。

やはり、亀の甲より年の功。

どこぞの霊亀より使えそうだ。

頼りにさせてもらおう。

「オホンッ。では、改めて、昨日の話の続きをしようかの。

斧の勇者様。貴殿にはこれより波と戦う力を得るため、武器と己とを磨く、冒険の旅に出てほしいのじゃ」

「旅、つすか?」

「さよう。伝説の武器とは最初から強い訳ではない。

勇者自身の手で育て、鍛え、そうしてはじめて何者にも勝る強力な武器となる。

そして、それは勇者自身もまた同じじや。

Lvを上げ、技を磨き、心を鍛え、武器と共に成長する。

「そのための旅じや」

「はあ……」

なんか語り出したぞ、この王様。

ドヤ顔でかっこいい感じの事言ってるよ。

なに? この人、厨二病キャラ?

それとも、この世界では厨二チックな発言がデフォルトなんだろうか?

でも、内容そのものは予想通りだ。

なにせ、原作で盾含めた四聖勇者が受けた説明とほぼ同じなのだから。

伝説の武器の強化方法。

その基本は、魔物の素材をはじめとした、あらゆる素材を武器に吸わせる事。

そうする事によって伝説の武器は形状を変え、ステータスの向上や技能、スキルと
いった恩恵を勇者に与えてくれる。

この事実は初日に王様と話した時に「ステータス魔法」なる、まんまゲームのステータスのように自分の力を確認する魔法の説明をされ、

その後、ベッドにダイブしてから寝落ちするまでの間に、当然のように存在したヘルプを見て確認した。

……その際、斧固有と思われる強化方法を発見したから、試しに原作知識に登場する他の武器の強化方法もできるかと思つてやってみた。

そしたら、できた。できてしまった。

強くなれるのは望むところだけでも、また原作知識の通りになった……。

それすなわち、未来にやってくるかもしれない絶望の信憑性も増したということ。

乾いた笑いが出たよ。

……やめよう。

未来の事は今考えても仕方がない。

まずは現状の問題から。

取りあえず、今は旅についての話の途中だ。

「無論、我らは国を挙げて勇者様を最大限支援すると約束しよう。

仲間、装備、資金。その他にも必要なものがあつたら言つて下され。できる限りは揃

えよう」

「まずは仲間じゃな」と言つて王様は手を叩いた。

すると、壁際に立つていた騎士っぽい男と冒険者風の女の子が進み出てる。

パーティーメンバーだろうか？

それと同時に、なぜか美少女メイドまで進み出た。

え？ あの子もパーティーメンバーなの？ 一緒に旅するの？

……どうしよう、すげえ気まずくなりそうなんだけど。

そもそもメイドつて戦闘職だっけ？

それとも支援職か？

もしくは厨二的ロマンの塊、戦闘メイドという可能性もあるか。

「まずは彼女から紹介しようかの。」

近衛侍女を勤めておるミラですじゃ。まだ若いが国内でも指折りの実力者ですぞ。

顔合わせも兼ねて、一日足らずではあるが勇者様の下へ予め派遣させてもらった」

戦闘メイドでした。

美少女メイド、改め、戦闘メイドのミラは澄ました顔でペコリとお辞儀した。

そこに、先程まで視線すら合わせてくれなかったメイドの面影はない。

仕事熱心と言うべきか、面の皮が厚いと言うべきか……。

「次は彼じやのう。近衛騎士団所属、若手最強と名高い騎士アルバじや。」

その武勇はアームストロング騎士団長のお墨付き。

必ずや、勇者様のお役に立つことじやろう」

次に紹介されたのは騎士つぽい男、アルバさんとやら。

年齢は俺よりちよつと上くらいか。

眼光の鋭い美形だ。

ていうか、俺としては騎士団長の名前の方が気になる。

なんだ、アームストロングって。

「最後に、冒険者ギルドより雇い入れた冒険者、パール殿じや。他二人と同じく年若い
が、既にドラゴンの討伐など多大な実績を上げております。頼りになりますぞ」

「よろしくお願ひしまゝす」

最後に紹介されたのは、冒険者のパールちゃんとやら。

一人だけ陽気な挨拶をしてきた。

見た感じ15歳くらいに見えるのにドラゴン退治とか、マジやべえな。

ていうか、露骨に怪しい。

武器泥棒の一人じゃね？

俺の直感も、こいつはビッチだと囁いている。

あと王様よ、なんでこの子だけ、殿つてつけて呼んでんの？

色香に惑わされたか？ ロリコンか？

あ、いや、この子だけ冒険者で外部の人間だからか。

その後、支援金とか初期装備一式とかを手渡され、俺達は旅立った。
とても先行き不安な冒険が、始まる……！

5話

城から旅立った俺達は今、城下町に居た。

え？ 早く冒険に出ないのかつて？

パーティーメンバーですら疑ってかからなければいけないこの状況で、何の準備もなしに冒険に行けるとしても？

とりあえず、最低限の戦力アップだけでもやっておきたいんだよ。

という訳で、まずは武器屋にやって来た。

なぜ武器屋かというと、勇者の武器の強化方法の一つ、ウエポンコピーを使うためだ。

ウエポンコピーとは。

既存の武器に触れることによって、勇者の武器がそれをコピーしてくれる便利機能のことだ。

コピーした武器は、勇者の武器の形状を変更することによって普通に使える。

例えば、今俺が手に持っている斧は「スモールアックス」という名の初期の武器だが、あそこにあるバトルアックスあたりをコピーすれば、それだけで性能が上がることだ。

ろう。

しかも、新たなスキルが手に入る可能性もあるし、一定時間装備し続ける事によるボーナスもある。

やらない理由がない。

「勇者様、ここで何するんですか？ 装備はお城で貰いましたし、武器屋に寄る必要はないと思うんですけど？」

だがそんなこと勇者以外の人間に分かる筈もなく、冒険者のパールちゃんから否定意見が出た。

この子は現状最も怪しい子だ。注意せねば。

まあ、その根拠は俺の直感という何とも頼りないものだが、信用して死ぬよりはいいだろう。

とりあえず、今は言い訳をしなれば。

「いや、俺いきなり勇者として呼ばれた訳だからさ。正直不安だから、少しでも戦力アップしたくて」

「えー……。はじめは初期装備から使った方が良いでしょう。最初っから強い武器使っても振り回されて怪我するだけです。これ冒険者としての常識です」

やべえ、論破されそう。

パールちゃんのトーク力を侮った。

そうだよ。見た目中学生くらいとはいえ、彼女は这个世界の住人で戦闘経験者。

素人の俺がこういう話で勝てる訳がない。

ええい！

それでも諦める訳にはいかん！

いつ殺されるか分からない俺には、一刻も早いパワーアップが必要なんだ！

なんとか誤魔化さねば！

「いや、なら触るだけ。触るだけだから」

「戦力アップはどうしたんですか……」

結局、パーティーメンバーの三人から呆れた目を向けられたが、何とか店中の斧をコ

ピーすることができた。

それにしても、さすが斧の勇者の召喚国。

マイナー武器の筈なのに、いろんな種類の斧があった。

勇者の武器の効果によって、俺は斧以外の武器を装備できないから、これは非常に助

かる。

俺はホクホク気分で武器屋を出た。

そして、武器屋が見えなくなるくらい離れてから斧の形状を変えた。

店で売っていた斧の一つ、「アイアンアックス」へと。

ここはパールちゃんのアドバイス通り、最初は弱い武器から始めよう。

たしかその方が、一定時間装備によるボーナスこと、能力開放までの時間も短かった筈だ。

「……オクデラ殿、その斧、先程店にあった物と似ているが」

そしたら、今度はアルバさんから突っ込みがきた。

まあ、ウエポンコピーの説明してないからね。

そりゃ気になるわな。

「これは勇者の武器の強化方法の一つですよ。さっきの店の武器をコピーさせてもらいました」

「……それは泥棒では？」

もつともな突っ込みだ。

あなたは常識人枠か。

しかし、この問答は原作でもされていたこと。

言い訳は考えてある。

「現物はなくなっていないからセーフで」

「……はあ。今回はそういうことにしておこう」

なんか、あんまり納得してなさそう。

他のメンバーも、心なしか俺を見る目に軽蔑の色があるような……。き、気のせいだと思いたい。

後になって気づいた。

どうせウエポンコピーのことがバレるなら、先に説明しとけば良かったと。

そうしたら、パールちゃんとの無駄なやり取りもなかったのにと。

後悔先に立たず。



そんなこんなで強化フェイズを終え、いざ実戦へ！

パーティーメンバーに後ろから刺されないかが一番心配だが、どのみちレベル1の俺じゃ録な抵抗ができない。

つまり、これは避けては通れない道だ。
腹を括れ!

まあ、せめてもの抵抗として、人の多い初心者用の狩場で戦うことにした。
ここなら目撃者が多いから、下手な真似はできない……筈だ!
でも、やっぱり怖えー。

そんな感じで内心ビビりまくながらの狩り、もといレベル上げが始まった。

「あー、勇者様、お誂え向きの相手が来ましたよ」

パールちゃんがそう言って前方を指差した。

彼女が指差した先を見てみれば、そこにはなんか動く風船というか、そんな感じのモンスターがいた。

あれ、なんかどっかで見たことあるわ。

パッ○ンに似てる。

「バルーンですね。雑魚なので、初めての戦闘相手にはいいかもしれませんね」

美少女メイドこと、ミラにもそう指摘された。

……この子、旅に出てもメイド服のままなんだよな。

外でその格好って、恥ずかしくないのかね。

それはともかくとして、バルーンか。

思い出した。あれ、原作にも出てきたわ。

原作主人公が最初に戦った奴だ。

俺も同じ道を歩むことになるとは、これが因果ってやつかね。

「じゃあ、やるか」

俺はそう言つて斧を構えた。

異世界での初戦闘が始まった。

6話

「ガァー！」

そんな風船みたいな間抜けな外見の割には凶悪な声を上げて、バルーンが突撃してきた。

俺は斧を振り上げて、それに備える。

「そりゃー！」

バルーンが斧の間合いに入った瞬間、俺はおもいつきり斧を振り下ろした。

すると、パァンという軽快な音を立てながら、バルーンはあっさりと破裂した。

ふ……ざつとこんなもんよ。

「おう、お見事」

「最初にしては中々」

「まあ、筋は良さそうですね」

パーティーメンバーから三者三用のお褒めの言葉を戴いた。

なんとも上から目線の意見だが、これは仕方がない。

実際、彼らは戦闘初心者俺なんぞよりよっぽど上にいるのだから。

そんな格上を警戒するとか、なんかもう無駄な努力に思えてきた。

いや、死にたくないから警戒は続けるけどさー。

武器強化のため、バルーンの亡骸を武器の中に入れる。

あと、そこから辺に転がってる石とか土とか、とにかく武器に入れられそうな物は片っ端から入れていった。

その後も遭遇したバルーン並の雑魚モンスターを相手に無双し、その亡骸も武器に入れた。

その結果、Lvが2に上がり、結構な数の斧が開放されたぜ！

どれもこれも雑魚い武器ばかりだけどな……

やっぱり超格下を相手に無双しても実入りが悪い。

本格的にレベルを上げたいんなら、そこそこ強い敵を倒さなきゃ駄目だなこりゃ。

「勇者様もそこそこ戦闘に慣れたみたいですし、もうちよつと強い魔物が出る場所に行きませんか？」

どうやら俺と同じことをパールちゃんも思ったらしく、狩場の変更を提案してくる。

他の二人も肯定的な雰囲気だ。

これ以上ここに居てもあんまり意味がないというのは、どうやらパーティーの共通認識みたいだな。

さて、乗るべきか、拒むべきか。

乗った場合のメリットは、この延々として進まないレベル上げの効率を上げられること。

逆にデメリットは、森の奥とかの人目につかない場所に誘導されて殺される危険性があるということ。

どうするか。

一刻も早く強くなりたいけど、危険な橋は渡りたくない。

でも、そんな都合の良いことってあるのか？

果たして、一度も危ない橋を渡らずに強くなれるもののだろうか？

これから俺は想像を絶するような困難に立ち向かわなくてはならない。

それなのに、こんな所であるかどうかも分からない危険に尻込みして立ち止まってていいのか？

よし、決めた。

「そうだな。じゃあ、狩場を変えようか。良さそうな所に案内してくれる？」

「は〜い、分かりました〜。お任せあれ〜」

という訳で、俺は突き進むことに決めただぜ！

この茨の道をな！

立ち止まってちや、前には進めねえんだよ！

「あ、でも、人目に付く所でお願いなね」

「……勇者様つて、割とチキンですよね」
なんだろう。

最低限の安全を確保しようとしただけなのに、なんかまた、パーティー内での人望が下がった気がする。

解せぬ。



という訳で、やって来ました強い狩場。

現在地は森の中。

一見、暗殺に最適のポイントのように思えるけど、どうも近くで騎士団が演習を行っているらしく、耳をすませば「ぶつ殺せ！」とか「ぶつ倒せ！」とかの叫び声が聞こえる。

ここなら、なりふり構わず大声で助けを求めれば、とりあえず命だけは助かりそうだ。
安心安心。

ちなみに、この場所にはミラが先導してくれた。

最初はパールちゃん「この森の中は、そこそこ強いのが出ますよ〜」って言ってアバウトな位置どりをしようとしたんだけど、

ミラが「でしたら、こちらの方角がよろしいかと。騎士団が演習を行っているので、チキンな勇者様のご要望に添えるかと思えます」って言い出したので、こういう形になった。

当然、俺はどっちも信用してなかったので、ちよつとでも人目がなくなったら、即引き返すつもりだった。

結局、嘘はつかれなかったから、取り越し苦勞で済んだけどな。

良かった良かった。

という訳で、レベル上げという名の虐殺の時間が始まった。

「アクセルスマッシュユ〜！」

「ギャオオオオオオオオッ!!!?」

俺は斧の初期スキルを使って、この森の魔物を相手に無双していた。

どうやら俺のステータスは自分で思ってた以上に高いらしく、この程度のレベルのモ

もしかしたらこう考えること自体が敵の思惑なのかもしれない。

実際、俺は原作知識で知った最悪の可能性を恐れるあまり、仲間を信用できていない。これが敵の狙いという可能性もある。

まあ、そんなことを言い出したら本当にきりがないんだから、考えるだけ無駄かもしれないけどさー。

とりあえず、今はこのままのスタンスで行こう。

油断せず、できるだけ迅速に強くなる。

俺から武器を強奪しようとする輩がいるにせよいないにせよ、強くなればそれだけ狙いにくくなるのは確かだろうから。

それから数日間、俺はLv上げに勤しんだ。

自分より格下の魔物は一人で倒し、苦戦するような強敵はパーティメンバーの力を借りて倒した。

警戒していた裏切りも襲撃もなく、全ては順調に思えた。

そして、あのイベントがやって来た。

7話

「活性化？」

「うむ。我が国アックスフォード近隣にある山、ドラウキユーア山脈が活性化を始めたよ。この山脈は戦力強化のまたとない機会。」

故に、我らは騎士団、魔術師団、飛竜兵団などの主要な戦力を順に派遣し、全体のレベル上げを行う事とした。ついでには斧の勇者様にも、それに参加して欲しいのじゃ」

旅を始めて数日後。

旅という割に、未だ召喚された場所であるこの国の首都周辺に留まっていた俺達は、唐突に王様に呼び出された。

「てつきり、もっと活動的になれよおおお!! 　って感じのお叱りために呼び出したのかと思えば、どうやら違ったらしい。」

「……そして今さらだけど、この国アックスフォードって名前だったのか。」

「いかにも、斧の勇者の国って感じやな。それにしても活性化かー。」

聞いたことあるイベントだ。

たしか、十年だか二十年だかに一度、その土地で手に入る経験値が増加する現象……
だったと思う、多分。

これは素直にありがたい。

実は、迅速に強くなるんだ（キリツ）とか言ったは良いものの、結局チキンプレイをやつてたせいで、思った程強くなれてないんだ。

今の俺の実力がどのくらいかと言うと、模擬戦でパーティーメンバーの誰にも勝てないくらいって言えば、よく分かるだろうか。

うん……

一番警戒してる身内の犯行に対抗できないとか、それちよつとどころじゃなくヤバイよね。

今のところ、誰も俺を害そうとする気配はないから、取り越し苦労で終わってくれば良いんだけど、それでも彼らとその気になればいつでも殺されてしまう立場というのは怖くて仕方がない。

早急に強くならなければいけない状況だ。

だから、活性化の話は本当にありがたいのだ。

いや、ホント、マジで。

これは乗るしかないぜ！ このビックウェーブにな！

「行きます！ ぜひ行かせていただきます！」

「そ、そうか。では、準備が済みしだい出発する。勇者様達は飛竜兵団の訓練場へ向かってください。彼らに送らせよう」

という訳で、活性化イベントに参加する事が決まった。くくく、待っているよ魔物ども。

我が斧の錆にして、経験値を貪り尽くしてくれるわ！



「はじめましてであります、勇者様！ 私は飛竜兵団団長、ソラ・クラウドと申します！ 本日は勇者様方の護送を仰せつかりました！ よろしくお願いするであります！」
であります、だと!?

現実ではまずお目にかかれない伝説の語尾ではないか！

まさか、こんな所で伝説と合間見えようとは……！

と、冗談はさておき。

王様に言われた飛竜兵团とやらの訓練場にお邪魔したら、伝説の語尾を持つ人物にお出迎えされた。

ソラと名乗ったこの人物を一言で言うところ、ロリだ。

であります語尾のロリータとは……

アックスフォードめ。

恐ろしい人材を隠していたものよ……！

冗談はさておき。

このソラとかいう子、見た目十四歳くらいか？

うちの最年少メンバーであるパールちゃんよりも尚幼い。

真面目な話、なんでこんな小さい子が団長なんてやってるんだろう？

気になる。

気にはなるけど、今必要なのは詮索ではなく挨拶だな。

名乗られたら名乗り返すのが礼儀だ。

「はじめまして。俺は奥寺夕。斧の勇者やっています」

返事は愛想よく。

これはどんな仕事でも共通の常識だ。

フリーター時代に培ったスキルである。

「お話は聞いているであります！ 他国に続いて、ついに我が国にも神が降臨なされた
と！ お会いできて光栄であります！」

ソラちゃんぐいつと俺に詰め寄りながら、テンション高くそんなことを口走った。

お、おう……顔が近い。

そして、ソラちゃんの目が必要以上にキラキラしてやがる。

この子、もしかして狂信者の類いか？

この世界では勇者が神のように信仰の対象となつてゐることは知つてた。

この間、この国の教会に行つてきたけど、やっぱり「我らが神よ」的な感じで祈られたし。

しかもどうもこの国、名前からしてアックスフォードとかいう斧っぽい名前なだけあつて、斧の勇者を特に信仰してゐるらしい。

この国の宗教も世界的に有名な四聖教とか七星教とかじゃなくて、斧教とかいうちよつと語呂が悪いやつだった。

だから、こういう特に信心深い人もいるんだらうなー、と思つてはいたけど、実際に見てみるとこう……若干引くわ。

気圧されるというかなんというか。

「隊長、落ち着いてください。勇者様がたじろいでますよ」

「あう」

そんなことを考えていたら、ソラちゃんの後ろから現れた長身の女性が、ソラちゃんの首根っこを掴んで俺から引き剥がす。

ふう、助かった。

あのまま美少女に詰め寄られたままだったら、新しい扉開くところだったぜ。

ロリコンという、開けてはいけない扉をな。

「申し訳ありません勇者様。隊長が失礼をいたしました」

「いえいえ、迷惑という程のことじゃないですよ」

むしろちよつと嬉しかったですよ。

若干気圧されたとはいえ、至近距離で美少女のご尊顔を拝めるとか、結構な役得ですよ。

ありがとうございます。

「それで、あなたは？」

「は！ 申し遅れました。私は飛竜兵団副団長、ジュピター・オーブラと申します」

そう言つて頭を下げるジュピターさんとやら。

彼女はなんというか……とても仕事ができそうな雰囲気の人だ。

ピシッと着こなした軍服が、そんな印象を抱かせる。

むしろ、こっちの方が団長じゃね？

まあ、俺が口を出す問題じゃないんだけど。

「ガーハツハツハツハ!! 久しぶりじゃねえのアルバ!!」

俺が飛竜兵団の謎に頭を悩ませていると、後ろからそんな声が聞こえてきた。

その声の主と思われる人物は、ガチムチだった。

ガチムチな身体を巨大な鎧で包んだ巨漢だった。

そんなガチムチ鎧は、俺の後ろでパーティーメンバーの一人、騎士のアルバさんの背中をおもいつきり叩きながら大笑いしていた。

なにがそんなにおかしいのだろうか？

ほら見ろ。

アルバさんもしかめっ面じゃないか。

「あの人は？」

「あの方は、本日我々と共に勇者様方の護衛をしてくださる、騎士団長のアームストロング様であります！」

俺の質問には、ソラちゃんが元気に答えてくれた。

そうか。

あれが前に王様が言っていたアームストロング騎士団長か。

名前のとおり、腕力の強そうなお方だ。

アームストロング大佐とお呼びしたい。

アームストロング大佐に続いて、騎士団と思われる鎧に身を包んだ人達が何人か現れた。

どうやら、彼らはアルバさんの知り合いらしく、フレンドリーにアルバさんの肩とか背中とかを叩きまくっている。

アルバさんはずっとしかめっ面だ。

あの人、騎士団での人間関係が上手くいってなかったんだろうか？

「では、皆様お揃いになられたので、これよりドラウキューア山脈に向けて出撃するであります！」

そんなソラちゃんの宣言と共に、今回のイベントの幕が切って落とされた。

なんか、個性豊かな面々が現れたもんだけど、はたしてどうなるのやら。

不安だ。

8話

「おー……凄い」

「お褒めの言葉、光栄であります！」

現在、俺はソラちゃんの相棒だという空飛ぶトカゲ……飛竜に乗ってドラウキユーア山脈に向かって飛んでいる。

ロリータでもさすが隊長と言うべきか、ソラちゃんの使役する飛竜は、他の奴より二回りくらい大きくて、なんか凄い力強さを感じる。

たぶん、Lvとかめっちゃ高いと思う。

今の俺が戦ったら、一瞬でひき肉にされそうだ。

「どうですか、勇者様。隊長のパートナー、グレゴリオは、最高位のドラゴン『竜帝』に匹敵する程の力があるのですよ」

「自慢の相棒であります！」

俺が飛竜を見詰めていたら、何故かジューピターさんが自慢気に語ってきた。

それに気を良くしたのか、ソラちゃんが飛竜……グレゴリオの背中を優しく撫でる。

グレゴリオはそれに「グルルルル」という、たぶん機嫌が良い感じの唸り声で答え、

ジユピターさんは、そんなソラちゃんを慈愛の眼差しで見守っていた。それを見て俺は思った。

この人は、ロリコンだ。

そんな温かくも微笑ましい光景を見ている間に、ドラウキユーア山脈に到着した。

ドラウキユーア山脈は山脈と言うだけあって、思わず、アルプスと眩きたくなるような、雄大な絶景だった。

ここでレベル上げするのか……。

登山は経験がないんだけどな。

「ようこそいらつしやいました、斧の勇者様とアックスフォードの皆様。私、このドラウキユーア山脈を任されております、ルーガス伯爵と申します」

そんな事を考えていたら、山の管理をしているらしい人が挨拶にやって来た。

ちなみに、アームストロング大佐との挨拶は出発前に済ませてある。

「ガツハツハー」とよく笑う、気の良い御仁だったよ。

でも、あの太くて逞しい腕でぶん殴られたら生き残れる気がしないので、この人にだけは命を狙われたくないと本気で思った。

どうか、大佐が敵の刺客じゃありませんように。

そんな事を思いながら、伯爵にドラウキユーア山脈の中で使う施設の案内を受けた。俺達が宿泊するのは、お城を改造したでっかいホテルだった。

フリーター時代に泊まろうと思ったら、全財産を使いきる覚悟が必要だったと思う。そこにタダで泊まれるっていうんだから、勇者つてのは良い御身分だよな。

その代わり、世界の為に命懸けで戦わなくちゃいけないんだから、まあ正当な報酬かね。

合間にちよくちよく、ドラウキユーア山脈の始まりの話とか、この山を開拓した謎の生物についてのうんたらかんたらが伯爵の口から語られたけど、興味がなかったからスルーした。

重要な話とも思えないから、問題ないでしょう。

どう考えても、ここにオブジェとして飾られてるペンギンもどきみたいな謎生物が、物語の核心に関わる重要なフラグとは思えないんだよ。

実際、原作知識でも、特に何も語られなかったしね。

それすら罠だったら大したもんだけど、さすがにないと思うんだ。

だって、こんな罠、地味すぎるでしょ。

「——お、あれは」

ペンギンもどきのオブジェから視線を外したら、その隣にある石碑に目が行った。

これは知ってるぞ。

もし原作知識の通りなら、これは、

「それは碑文ですな。勇者ならば独自の魔法が覚えられますぞ」

俺が石碑を見つめているのに気づいた伯爵が普通に説明してくれた。

ありがとうございまーす。

そしてこの石碑は、やっぱり原作知識の通りだった。

勇者に特別な魔法を授けてくれる石碑だ。

原作でも、主人公の盾の勇者が、こことは違う活性化地で同じ石碑から魔法を覚えてた。

その魔法はどうもそこそ優秀らしく、その後も長きに渡って愛用してたような気がする。

できる事なら、俺もそれにあやかりたい。

だが、しかし、

「勇者様々？ どうしたんですか々々？」

石碑を見つめたまま、まんじりとも動かない俺にパールちゃんが語りかけてきた。

俺はそれにこう応える。

「字が……読めない……」

その言葉を聞いて、パーティーメンバー全員と、一緒に行動していたソラちゃん、ジュピターさん、アームストロング大佐、さらに案内役の伯爵までもが、なんとも言えない生暖かい視線で俺を見てきた。

やめろー！

そんな目で俺を見るな！

仕方ないじゃないか！ 俺が召喚されてからまだ一週間くらいしか経ってないんだぞ！

この石碑に書かれてるのは、魔法言語とかいう勉強しないと覚えられない特殊な言葉なんだから、俺が読めないのは至極当然だろう!?

頑張ってお勉強してるけど、勉強時間が圧倒的に足りないんじゃないやボケツ！

と、心の中で盛大に愚痴を垂れ流しました。

その後も案内は続けられ、いくつか注意事項を教えられてから解散となった。

この後は、各々自分のチームに戻ってレベル上げに勤しむ事になる。

という訳で、ソラちゃんとジュピターさんは飛竜兵団に、アームストロング大佐は騎士団に戻って行った。

俺はもちろん、いつも通り勇者パーティーと一緒に狩りに出る事になる。

もちろん、大声を出しても他のチームに聞こえないような遠くへは行かないつもり

だ。

これもいつも通りだな。

でも、ここは活性化中の経験者増加ポイント。

いつも通りの狩りをして、その効率は段違いになる筈だ。

ここで俺は力をつける。

最低限、パーティーメンバーには負けないだけのレベルを手に入れる。

手に入れなければならぬのだ。

よっしゃあ！ やってやるぞお!!

その意気込みで、俺はドラウキユーア山脈を駆け回った。

今までとは比べ物にならない勢いで上がるレベル。

次々に覚える使えるようなスキル。

本格的に稼働し始めた強化方法。

それらの要素が、俺を調子に乗らせた。

少しだけ傲慢になって、少しだけ周囲が見えなくなった。

——だからこそ、あんな悲劇が起きた。

9 話

その日もいつもと同じ、Lv上げの日だった。

活性化地の経験値効率の良さにウハウハが止まらず、Lvと武器解放、そして強化方法の正式稼働によって他のパーティーメンバーよりも頭一つ抜けたステータスを手に入れた俺は調子に乗っていた。

自分では努めて冷静になろうとしていたが、どこまで行っても勇者になろうとも俺の性根は平凡な一般市民。

自分を完全に律しきるなんて仙人みたいな事できる訳なかった。

アレだ。

宝くじが当たったみたいな感覚だ。

それを貯金しようと努力しても結局は理由を付けて使ってしまう。

そんな感覚に似てる。

ましてやステータスだけとはいえ、警戒していたパーティーメンバーよりも強くなったんだ。

張り詰めていた緊張の糸が緩んでも仕方がないと言いつつもいたい。

でも、それじゃ駄目だったんだ。

襲い来る死亡フラグをへし折る為には、いつまでも一般人の感覚でいては駄目だった。

常に緊張感を保ち、仲間の裏切りにも国の陰謀にも対応できるように動く。

そんな、まさしく歴戦の勇者のような強い心を持たなければこの世界では生きていけない。

これは、その事を俺に自覚させる為に起きた事件だったのかもしれない。

この事件を後から振り返って、俺はそう思った。

「がっ……!?!」

鋭い痛みが背中に走る。

戦闘が終わった直後、勝利の瞬間という一番油断するタイミングで背後からナイフで刺されたからだ。

痛みを我慢して、刺して来た相手を振り払って距離を取る。

そして振り替えれば、冷酷な目をしたパーティメンバーがいた。

「おう。今のを食らってまだ動きますか。さすがは仮にも勇者様って事ですかね」

「だから一撃で殺した方がいいと言ったのだ」

「まあまあ。大丈夫ですよ。だってこれ、ただのナイフじゃないですし」

呑気な声で話し合うパールちゃんとアルバさん。

その様子はいつもと変わらないように見える。

だが、この二人が俺を刺して来たという事実は変わらない。

最初に抱いた嫌な予想が的中してしまった訳だ。

やはり俺は、仲間を疑っていて正解だった。

裏切りを見越していて正解だった。

まさか二人がかりで来るとは予想外だったが。

だが、疑心を抱いたのが正解だったとしても、それに対応できなければ意味がない。

現状はかなりヤバい。

大声で助けを呼ぼうとしたのに、声が出ない。

体もなんだかしびれて動けない。

状態異常。

沈黙と麻痺つてところか。

あのナイフに毒が塗ってあったって事だ。

「もう動けないでしょ勇者様。やつとあなたを殺せますよ。勇者様つてば無駄に警

戒心が強いんですもん。おかげで無駄に苦労しました〜」

「最も厄介だったのはミラの監視だな。あの国と宗教の犬め。奴がいなければもっと早く殺せていただろうに」

「そうですね。あの人がいないタイミングを見計らうのが一番苦労しましたよ。私なんて特に疑われてたみたいですし?」

ミラは今、諸々の報告の為に王様への書類を書いているから、ここにはいない。

俺は三人全員を疑ってたから、ミラがいない状態でも狩りを続けようと言い出した二人の本心を見破る事ができなかった。

仲間をちゃんと疑ってかかったのに、結果はこれか。

信じるべき者と疑うべき者の区別もつかなかった。

いや、ミラがこいつらにとって邪魔だったってだけで、俺にとって味方と言えるのかはわかんないけど。

やっぱり、どこまで行ってもモブでしかない俺に、この世界は難易度が高すぎたって事かね。

この二人が何で俺を殺そうとするのか、その理由も見当がつく。

ステータスも充分とは言えないまでも強くなった。

これだけのアドバンテージを与えられていながら、結局はこの様か。

「はあく……。なんで生まれ変わってまでこんな苦労しないといけないんでしょうね」

パールちゃんが小声でそうぼやく。

生まれ変わる。

転生者。

「せっかく強キャラになれたんだ。俺が最強になる。その為の礎となつて死ね」

アルバさんがそう言つて俺に武器を向ける。

強キャラになる。

憑依者か。

ハハハ。

見事に予想が当たつてんじゃないか。

波の黒幕が派遣した尖兵。

伝説の武器を奪うプレイヤーキラー。

武器泥棒。

それが襲つて来るつてわかつてたのに、防げなかった。

やっぱ俺はどこまで行つてもモブだよ。

平凡な男だ。

物語の主人公のように、かっこよく窮地を脱するなんてできやしない。
ここで。物語に何の関係もないこんな所で死ぬのが俺の運命か。

ふざけんな。

「……………ない……………」

「ん？ 何か言いましたか？」

パールちゃんの声が酷くウザつたい。

俺を殺そうとする奴の声だ。

ウザくて当然か。

「……………たく……………ない……………」

「誰か来ても面倒だ。早く殺すぞ」

アルバさんの声を聞いて殺意が沸く。

俺を殺そうとする奴の声だ。

殺意が沸いて当然か。

「死に……………たく……………ない……………」

そうだ。

俺は死にたくない。

最初に誓ったじゃないか。

殺される前に殺るって。

全てを踏みにじってでも生き残ってやるって。

その誓いを果たさないと。

「だから……俺の代わりに……」

「お前らが死ぬ」

俺の目の前に画面が表示される。

武器の解放状態や進化先が表示されるステータス画面。

それが裏返った。

そしてそこに、黒とも赤ともつかない不気味な色をしたもう一つの画面が現れた。

これを俺は知っている。

カースシリーズ。

呪いの武器だ。

カースシリーズ

傲慢の斧

能力未解放……装備ボーナス、スキル「ダークスラッシュャー」

専用効果 腕力向上 耐久力向上 全耐性向上

スベテヲフミニジル、シンネントサツイノ斧

傲慢の斧。

心の中で育ち続けた恐怖が、歪な信念となって俺に力を与えた。

俺の手の中には、まるで悪魔が使うような、禍々しい漆黒の斧があった。

それを強く握り締める。

耐性の向上によって、俺を縛っていた状態異常が消え去る。

これで、奴ヲをコロセル……

「な、なんですかアレ……！」

「往生際の悪い……！」

俺ハ、目ノ前ノ敵^{テキ}ニ向カツテ、斧ヲ振り上げタ。

10話

「ダークスラッシュャー」

傲慢の斧に搭載されている唯一の直接攻撃スキルを敵二人に向けて放つ。

斧を振り上げ、振り下ろす。

たったそれだけの動作で、斧にまとわりついた不気味な闇が、斬撃の形となってドラウキューア山脈の一角を破壊した。

「なんなんですかアレ!？」

「チートか……!?!? おもしろい! その力、ますます欲しくなった!!」

だが、これだけでは敵を殺せなかった。

それも当然か。

いくらステータスが上がるとも、俺の戦闘技術は、素人に毛が生えた程度でしかない。

対して、向こうは、なんだかんだで勇者のパーティーに選ばれる程のエリート。

こんな大振りの一撃で殺される程、弱くはないという事だ。

だが、そうとわかっていても、殺そうとして放った攻撃で殺せなかったという事実に、

俺は苛立った。

早く、俺ノ前カラ失セロ、裏切り者ドモ。

早く、死ネ。

死ネ、死ネ、死ネ、死ネ、死ネ。

俺ヲ、イラツカセルナ。

感情の解放によるグロウアップ！

カースシリーズ、傲慢の斧の性能向上！

傲慢の斧Ⅱ

能力未解放……装備ボーナス、スキル「ダークスラッシュャー」「デッドエンドクロス」
専用効果 腕力向上 身体能力向上 耐久力向上 全耐性向上

俺の心に呼応したかのように、傲慢の斧が更に禍々しく進化する。

技術で劣るのならば、それを補って余りある、圧倒的な力で踏み潰せ。

そう言われているような気がした。

その感覚に、俺は身を任せる。

俺に向けて突撃してきたアルバさんに向かって一歩、踏み込む。

その一步が地面を砕き、俺の体は、凄まじい速度での移動を可能とした。
「何ッ!?!」

予想外の速さに驚愕するアルバさんの体を、傲慢の斧が薙ぐ。

咄嗟に防御に回された剣を容易く両断し、その脚を付け根から切断した。

「アガア!?!」

苦悶の声を上げるアルバさんに向けて、更に二度、斧を振るう。

まるで、罪人の首を跳ね、処刑するかのようになり、斧はアルバさんの両腕を断ち斬った。

これで、アルバさんは両手脚を失った。

もう動けない。

だが、まだ殺さない。

殺したいけど、殺さない。

こいつには、こいつらには、俺が完全に覚醒する為の生け贄になってもらう。

次に俺は、出遅れていたパールちゃんの方に顔を向けた。

「ヒイツー!」

悲鳴を上げて逃げようとするパールちゃん。

それを許す俺ではない。

お前には、ここで死んでもらう。

だって、生きていたら、俺の生存を妨げる障害になるかもしれないから。

「アクセルスマツシュ」

「ギイツ!?!」

背を向けて逃げるパールちゃんに、俺は容易く追い付き、まずはアルバさんと同じく、両脚を狙ってスキルを使う。

脚を失い、それでも残った腕で這って逃げようとするパールちゃんに、容赦なく斧を振り下ろす。

狙いは両腕。

これで、パールちゃんも、アルバさんと同じダルマ状態だ。

パーティーメンバーでお揃いだなんて、洒落てるなあ。

「許して……許して……」

うわ言のようにそう呟くパールちゃんの頭を掴んで移動し、アルバさんが転がってる場所に放り投げる。

ああ、この辺り一面、真っ赤な血で汚れきってるよ。

仲間の……いや、元仲間の血で出来たこんな惨状を見ても、俺は何も感じなかった。

いつもの俺なら余裕でリバーズしてただろうに、今は吐き気どころか、殺す事、傷つける事への忌避感すら感じない。

これが、カースシリーズの精神汚染というやつかね？
まあ、どうでもいいか。

「うぐつ……あ……」

「うう……あう……」

苦しうにうめき声を上げるアルバさんとパールちゃん。

これはもう、放置すれば出血多量で死ぬだろう。

だが、俺はあえて、自分の手でトドメを刺す。

元仲間を自分の手で殺す事によって、そんな非道に手を染める事によって。

この歪な信念を本物としよう。

もう後戻りできないくらいにハマって、不退転の覚悟を決めよう。

俺は、傲慢の斧が進化する事によって追加された、新たなスキルを使おうとした。

それを後押しするように、俺の視界に詠唱が浮かぶ。

俺はそれを、無機質な声で読み上げた。

『その愚かなる罪人への我が決めたる罰の名は、断罪の十字架による磔也。神をも裁く絶対の力に囚われ、届かぬ叫びと共に朽ち果てるがいい』

「デッドエンドクロス」

詠唱を終えた途端に、俺の中からスキルを発動させる為の力、SPが急速に失われて

いく。

そして失われた、俺から引き出された力による現象が起こる。

アルバさんとパールちゃんの体が、地面を離れて宙に浮かび、不自然な体勢で静止した。

手足がなくなっているからわかりづらいが、ちょうど、見えない十字架に拘束されるような体勢で。

そして、二人の背後に、うつすらと、徐々に影が濃くなるように、黒い十字架が現れた。

罪人を裁く二つの黒い十字架は、その身から発する黒い光を徐々に強めていき、

——やがて、漆黒の極光を放った。

黒い光が晴れた時、そこには何もなかった。

まるで、魂までも消滅させられたかのように、そこに二人の姿は跡形も残っていなかった。

こうして俺は仲間殺しという大罪を犯し、外道への第一歩を踏み出したのだった。

11話

裏切り者を殺し終え、俺は少しの間、その感傷に浸る。

といつても、そんなに強い感情がある訳ではない。

仲間に裏切られた。

仲間に殺されかけた。

人を殺した。

仲間を殺した。

そんな、人格が歪んでもおかしくない程の衝撃体験をしたというのに、俺の心はどこまでも空虚だった。

裏切られた事に対する怒りも。

仲間を殺した事に対する悲しみも。

裏切り者を殺してやったという喜びもない。

さつきまではあったのに、二人を殺し終えた瞬間、綺麗さっぱり消え去った。

まるで、もうどうでもいいと言っても言うかのように。

あるのは、ただ生き残ったという事実だけだ。

俺は、手に持った己の武器を見る。

カースシリーズ、傲慢の斧。

多分、俺の心がこんなに空虚で落ち着いているのは、この斧のせいなんだろう。

このカースシリーズというのは、原作にも出てきた。

主人公である盾の勇者は、自分をひたすらに貶める連中への怒りで『憤怒の盾』という武器を解放し、それを、いざという時の切り札のように使っていた。

だが、このカースシリーズには、切り札になり得る程の強力な力の代償として、精神を汚染するという特性がある。

盾の勇者は、憤怒の盾を使う度に、仲間をも巻き込みかねない程の、強い怒りに浸食されていた。

俺の今の精神状態は、おそらく、この傲慢の斧に浸食された状態なんだろう。

人を殺しても、仲間を殺しても、何も感じない。

それを当然の事のように受け入れている。

それに、盾の勇者は、精神汚染を気にして憤怒の盾を長時間使う事はなかった。

俺はどうだ？

戦闘終了後に、こうして呑気に考察を続けている間中、傲慢の斧を出しっぱなしだ。しかも、戦闘中に、この斧から流れてくる感覚に身を任せた覚えがある。

これはもう、完全に浸食が完了しちやったって事じゃね？

いわゆる、手遅れというやつだ。

俺は晴れて、血も涙もない冷血クソ野郎に進化した！

わーい！

拍手ー！

……ふう。

こんなふざけた思考ができるって事は、前の俺と完全に別人って訳でもなさそうだな。

それでも、今まで心の中にあつた恐怖とか、不安とか、その他もろもろの感情が、カースシリーズに呑み込まれて消えた。

残っているのは、純粹に「死にたくない」という想いのみ。

今なら、死なない為になら、どんな外道にでもなれる気がする。

狂人とか、サイコ野郎とか言われても反論できないような精神構造に変わった感じだ。

果たして、今の俺を、かつての冴えないモブキャラ「奥寺夕」と同一人物と言っているのかどうか？

うーん。

哲学。

まあ、いいか。

これからも死亡フラグは襲ってくるんだろうし、それに立ち向かう為には、これくらい吹っ切れた精神状態の方がやり易いだろう。

少なくとも、序盤の裏切り者とかいうかませ犬キャラを相手に、過剰にビクビクするよりは、よっぽど良い。

昨日までのチキン野郎は死んだのだ！

アルバさんとパールちゃんの二人と共に死んだのだ！

今、この時をもって、俺は生まれ変わった！

俺こそが、真の『斧の勇者』である！

さて。

自己診断も終わった事だし、帰るとするか。

とりあえず、ソラちゃんやアームストロング大佐に、あの裏切り二人組の事を伝えな
いといけないな。

あと、ミラにもか。

パーティーメンバーで唯一、俺を裏切らなかつた少女。

まあ、彼ら彼女らが信用できるとは限らないけども。

原作では、盾の勇者は国ぐるみの陰謀に巻き込まれていた。

だったら、俺も召喚国であるアックスフォード自体を疑ってかかった方がいい。

というか、目につくもの全てを疑った方がいいな。

精神汚染という名の精神強化がなされた今の俺なら、それだけのものを同時に疑っても、不安や恐怖で潰れる事もないだろう。

それで、いざ国が裏切っていたら、今回みたいに殺すか、勝てない場合は逃げればいい。

まあ、アックスフォードに関しては、殺そうと思えば殺すタイミングはいくらでもあった訳だし、今さら殺しに来る可能性は低いと思うけども。

いや、でも、俺を利用してしようとしてくる可能性はあるか。

そのくらいなら別にいいけど、まあ、警戒だけはしておこう。

そんな事を考えながら、山道を進んだ。

宿泊しているホテルに向かって。

その時、何とはなしに遠くの空を見上げた。

大きなドラゴンが一頭、悠々と大空を飛んでいた。

デカいな。

ソラちゃんのグレゴリオだろうか？

でも、それなら、周りに他の飛竜兵団のドラゴンがいないのは不自然か？

それに、遠目でわかりづらいけど、あのドラゴン、グレゴリオよりも体格が良いよう
な……。

ていうか、あのドラゴン、こっちに向かって来てね？

なんか、あの大きな瞳が、俺をロックオンしてる気がするんですけど。

嫌な予感がした。

その直感を信じて、戦闘態勢をとる。

そして——嫌な予感は当たった。

——ドラゴンの背中から、正確には、ドラゴンの背に乗った人物から、極大の閃光が射出された。

「なっ!?!」

明確に、俺を狙った一撃。

本能的な直感がささやく。

この攻撃を食らってはいけない。

防いでもいけない。

避けるしかない。

幸いな事に、ドラゴンと俺の間には、まだ結構な距離があった。

故に、回避は余裕をもって成功した。

だが、それで喜べはしない。

何故なら、俺の行く手を遮るように、ドラゴンが山道に着地したのだから。

「おいおい、避けるなよ。せっかく、斧の勇者がここに来るって話聞いて、遠路はるばる来たんだから、これ以上の手間かけさせんな。おとなしく死んどけ」

そして、ドラゴンの背中から下りてきた男が、そんな身勝手な台詞を口にする。

それだけで理解できた。

こいつは、俺の命を狙う敵。

アルバさんやパールちゃんと同じ、殺して排除しなければならぬ相手。

だが、こいつの相手をするというのは、それ以上の意味がある。

俺は、こいつの顔を知っている。

この世界の原作小説『盾の勇者の成り上がり』。

俺は、それをネットで読んだ訳だが、主人公達のイラストが見たくて、ネットで画像を検索したり、書籍版をチラ見した事がある。

その知識の中に、こいつの顔がある。

原作において、五つの七星武器を揃えた、武器泥棒筆頭。

その名は『タクト』。

原作において、こいつが手にしていた武器の中には、今、俺の手の中に握られている伝説の斧もあった。

つまり、運命が、俺を殺しに来た。

「やる気か？ まあ、別にいいけどさ。無駄な足掻きにしかないぜ。——なんせ、俺のLvは300超えだからな！」

そう言つて、タクトは手に持った禍々しい黒い爪を俺に向けた。

ドラゴンの背中からは、そんなタクトの仲間と思われる連中が、何人か下りてきた。

ここを乗り越えられるかどうか。

それは、俺が運命に抗えるかどうかの試練。

原作通り、斧の勇者として死に、武器を奪われるか。

生き残り、運命に立ち向かう事ができるか。

ここが、分岐点。

ターニングポイントだ。

俺は、ただ生き残る為だけに、斧を構えた。

12話

斧を構え、タクトと向き合う。

だが、状況は、どう考えても俺が不利。

俺はまだ、召喚されてから一週間ちよつとしか経っていない。

準備不足もいいところだ。

このドラウキューア山脈である程度の強化ができたとはいえ、さすがにタクトの強さには届いていないだろう。

現在の俺のLvは70。

資質向上という、Lvと引き換えに能力値を上げる強化方法を使っているから、実際はもつと上だとは思う。

他の強化方法も、本格稼働し始めたばかりだが、それなりの強さを俺に与えてくれている。

加えて、傲慢の斧というカースシリーズの力もある。

戦えない事はあるまい。

だが、それでも俺の不利は変わらない。

何故なら、

「タクト、油断するでないぞ。相手は仮にも勇者じゃ。……まあ、問題ないとは思うがの」

「タクトが負ける訳ない」

「その通りよ！ タクトは最強なんだから！」

「ですね」

俺は一人で、タクトには仲間がいるからだ。

ドラゴンが変身したトカゲっぽい女、羽の生えた女、人魚っぽい女、銃を持ったメイド服の女。

その数、四人。

タクトを入れて五人。

原作知識に出てきたよりも随分少ないが、これは知識が間違っているのか、それとも、常にフルメンバーが揃う訳ではないという事か。

多分、後者だろうな。

奴らの余裕ぶつこいた態度を見ればわかる。

こいつら、俺をなめきってる。

ピクニック感覚で、俺の武器を奪いに来たと見た。

ふざけやがってえ……！　という気持ちは不思議と沸いてこない。

俺の精神は傲慢に支配されている筈なのに、とても冷静に思考ができています。なめられてるのを好都合だと考えられるくらいに。

傲慢とは、プライドだ。

だが、俺のプライドは、何としてでも生き残る事。

それだけだ。

こいつらの言動は、俺のプライドに欠片たりとも傷をつけていないのだろう。

だから、こんなに冷静でいられる。

冷静に、生き残る術だけを模索できる。

精神の成長によるグロウアップ！

カースシリーズ、傲慢の斧の能力向上！　プライドアックスに変化！

プライドアックスⅢ

能力未解放……：装備ボーナス、スキル「ダークスラッシュャー」「デッドエンドクロス」

専用効果　腕力向上　身体能力向上　耐久力向上　全耐性向上

また、カースが進化した。

傲慢の斧、いや、プライドアックスが、より禍々しく形を変える。

より一層、精神異常者への道突き進んでしまった感があるが、戦力的には嬉しい誤算だ。

これで、勝率が多少は上がった。

……さて。

「じゃあ、死ね！ ヴァーンズインクロー！！」

殺るか。

「ダークスラッシュャー！」

タクトの放った閃光と、俺の放った黒い斬撃がぶつかり合う。

威力は……やはり、タクトの方が上か。

だが、思った程の差はない。

一気に押し負けるといふ事はなく、ある程度は拮抗している。

カースの力は、予想以上の力を俺に与えていた。

それでも、火力で負けている事には変わりはない。

このまま何の手も打たなければ、タクトの閃光が俺を襲うだろう。

ダークスラッシュャーとぶつかって威力を落としたなら、その一撃で死にはしなうと思
うが、

タクトの攻撃をうっかり武器で受ければ、武器を奪われる。

そうなれば、俺の戦闘力と生存率は一気に下がるだろう。

それを許す訳にはいかない。

タクトの攻撃と俺の攻撃が拮抗している間に、狭い山道から飛び降り、攻撃範囲の外へと逃れた。

そのまま、斧をピツケルのように使って岩壁に突き刺し、それを支えにして移動する。

「よし！ やった！」

タクトのそんな声が聞こえた。

やったじゃねえよ。

まだ殺られてないっての。

だが、油断慢心、大いに結構。

その隙につけこんで、ぶっ殺してやる。

岩壁に張り付いて移動し、タクトの後ろを取る。

そして、勝利したと思いい込んで、隙だらけの背中に向かって、俺は襲いかかった。

「パワードアックスV！」

「ツ!? タクト！ まだ終わっておらんぞ！」

しかし、振り下ろした斧は、直前で俺の襲撃に気づいたドラゴン女に止められた。

斧の刃を素手で掴みやがった。

真剣白刃取りだ。

たしか、原作知識の通りなら、こいつは竜帝。

最高位のドラゴン。

その名は伊達じゃないって事か。

クソッ。

「よくやった、レールディア！ そのまま押さえてろ！」

「わかった！」

タクトの指示に従い、ドラゴン女が斧を掴む手に力を籠めた。

そして、タクトの手の中に、鞭が出現する。

他の連中も、攻撃態勢に入った。

マズイ！

「ハウンドウィップ！」

「ハイクイツク！」

「メイルシュトゥリームスピア！」

「狙撃！」

四人分の攻撃が、俺に向けて殺到する。

一番ヤバイのは、言うまでもなく、タクトの攻撃。

ドラゴン女を巻き込まないように、弧を描いた鞭の攻撃が迫る。

狙いは、ドラゴン女に止められている斧。

先に武器を奪うつもりか!?

させるか!

「ああああ!」

「グッ……!?!」

俺は斧から右手を離し、ドラゴン女の首を掴んで、締め上げた。

両手で斧を掴んでいるドラゴン女に、これを防ぐ事はできない。

そのまま、ドラゴン女を盾にして、タクトの鞭にぶつける。

これで、タクトの攻撃は、俺の斧には届かない。

武器を奪われるという、最悪の事態は避けられた。

「レールディア!?!」

自分の攻撃を味方に当ててショックでも受けたのか、タクトが動揺した声を上げた。

そして、俺の首締めに加えて、タクトの鞭を受けたドラゴン女には、それなりのダメージ

を与えた。

だが、戦況が逆転した訳ではない。

むしろ、逆だ。

俺はさっきよりも追い詰められている。

俺は、タクトの攻撃を防ぐ事に、全神経を集中した。

つまり、違う角度から放たれた、他の連中の攻撃を甘んじて受けたのだ。

羽の生えた女の蹴りが、ドラゴン女を掴み上げていた、俺の右腕を粉碎した。

人魚っぽい女の銃撃によって、俺の脇腹に風穴が空いた。

メイド女の銃撃が、俺の脚を撃ち抜いた。

控えめに言って、満身創痍。

全身がポロポロになった。

でも、ただでやられっぱなしになるつもりはない。

残った左腕に力を籠め、スキルを発動する。

今の俺に使える中で、最も使い勝手が良く、高威力の必殺スキルを。

「ダークスラッシュャー！」

闇の斬撃を、まずはドラゴン女に向けて放った。

理由は一つ。

一番狙いやすい場所にいたからだ。

「バカな……!?!」

振り下ろされた斧は、弱っていたドラゴン女を頭の先から真つ二つに両断し、絶命させた。

続いて、体を捻るようにして、ダークスラッシャーを横薙ぎに振るう。

それによって、俺の周囲に寄っていた他の連中を吹き飛ばした。

『ギャアアアアアア！』

でも、それで死んだ奴はいない。

ドラゴン女を両断した事で、大幅に勢いを殺された攻撃で死ぬ程、こいつらは弱くなかったという事だ。

それでも、そこそこのダメージは与えた。

少しの間は、立ち上がれまい。

その隙に、俺はドラゴン女の死骸を斧に吸寄せた。

強い魔物の素材は、武器を強化してくれる。

それは確かにそうだ。

しかし、それを狙った訳ではない。

今は、そんな場合じゃないとわかっている。

なのに、何故か、本能的に体が動いた。

まるで、何かに操られたかのように。

それが必要だと言うがごとく。
体は動いた。

「レール……ディア……？」

その時、タクトが呆然とした様子で小さく呟いた。
ドラゴン女の死が信じられないと言わんばかりに。
隙だらけだ。

だが、その隙を突くだけの力は、すでに俺には残されていなかった。

体中の傷が痛む。

今にも意識が飛びそうだ。

なんとかタクトに飛びかかろうとしたが、体は言う事を聞いてくれなかった。

「デメエえええええ！ 許さねえ！ 絶対に許さねえぞお！」

タクトの怒りの咆哮を、ただ聞いている事しかできない。

「ヴァーンズインクロー！」

タクトが再び放った閃光を、今度は避ける事も、迎撃する事もできなかった。

ただ、最後の抵抗とばかりに、斧を左手で持って体の後ろに隠し、右半身で攻撃を受けた。
俺は体がバラバラになるような痛みを感じた。

しかし、武器は奪われていない。

それに、痛みがあるという事は、生きている証拠だ。

まだ、俺は死んでいない。

それだけを思いながら、俺は吹き飛ばされた。

そして、そのまま落ちていく。

タクトの攻撃によって、山道から空中へと押し出され、重力に引かれて落ちていく。

なんとかしなければならぬ。

なのに、体は全く動かない。

意識も徐々に薄れていく。

このまま落ちれば、死ぬのだろうか？

嫌だ。

死にたくない。

でも、もう何もできない。

無力感に苛まれながら。

運良く助かる事を祈りながら。

俺は、意識を失った。

第二章 メルロマルク編

13話

パチパチという聞き慣れない音が聞こえた。

その音を聞きながら、俺は目を覚ました。

目が覚めた。

という事は、どうやら、永遠の眠りにはつかずに済んだらしい。

運が良いな。

とにかく、死ななくて良かった。

だが、今の状況はどうなってるんだ？

さつきから聞こえる、この音はなんだ？

それを確かめるべく、体を起こそうとして……

「あ痛ッ!?!」

体中に激痛が走った。

悶絶ものの痛みだ。

前までの俺なら、耐えられずに失禁していただろう。

カースの力で精神が強化された今の俺ですら、思わず泣き叫びたくなる程、痛い。

「ああ、お目覚めですか。思ったよりもお元気そうで、何よりです」

痛みに悶えていると、そんな声が聞こえてきた。

この状態を見て「お元気そう」とか、どんな皮肉だ？

そう思つて声の主の方に目を向けると、そこには見知った相手がいた。

「ミラ……！」

「その通りです。どうやら、頭の方もご無事みたいですね」

そこにいたのは、俺の最後のパーティーメンバー。

唯一、俺を裏切らなかった少女。

戦闘メイドのミラだった。

その近くでは、焚き火がパチパチという音を立てている。

聞き慣れない音の正体はこれか。

それはいいとして、問題はミラの格好だ。

俺の知るミラとは、若干、姿が違っていた。

「君、そんなにスカート短かったっけ？　なんか、あとちよつとでパンツが見えそうなんだけど……」

「セクハラですよ」

「あ痛ッ!？」

俺の発言に気を悪くしたのか、ミラが特に痛い右腕をツンツンと指でつついてきた。それだけで、凄まじい痛みが発生する。

何しやがる、このヤロー……!」

「それが、自分の衣服を千切ってまで手当てをしてくれた相手に対する言葉ですか。とても勇者の発言とは思えませんね。改めていただけると助かります」

「手当て……?」

そう言われて自分の体を改めて見てみると、体中に紺色の布が巻かれていた。手当てという言葉を感じるなら、これは包帯代わりという事か。

つまり、俺は女の子のスカートを全身に纏っているという事に……

「今、何か考えましたか?」

「いえ、ナニモ」

布からなにやら良い匂いがするようだが、考えないようにしよう。それよりも、気にするべきは、今の状況だ。

「……手当てしてくれたって事は、君が俺を助けてくれたのか?」

「はい」

「そうか……ありがとう」

「いえ、勇者様をお助けするのは当然の事ですので」

ミラはいつもの澄まし顔でそう言った。

勇者を助けるのは当然の事、か。

たしかに、この世界において、勇者は神の如く敬われている。

厄災の波を静める為に、ひいては世界を守る為に、なくてはならない存在だ。

それを敬うのも、助けるのも、当然と言えば当然なんだろう。

しかしだ。

「君はなんで、俺を助ける?」

「?」 質問の意味がわかりません。勇者様をお助けするのは当然の事と申し上げた筈ですが。……もしかして、今しがたの記憶を忘れてしまう程に、頭がおかしくなってしまうのですか?」

「いや、そういう意味じゃないから」

頭がおかしくなったのは否定しないが、聞きたいのは、そういう事じゃないんだ。

「俺は、君が俺を助ける個人的な理由が聞きたい」

「個人的な理由、ですか?」

「そう。国の命令か、単純に良心に従ってるのか、それとも俺を利用する為か。……そういう、君個人の考えを聞きたい」

そして、返答によっては、この場で殺す。

今の俺は死にかけだが、カースシリーズによって強化されたおかげで、ミラ一人殺すくらいの力は残っている。

命の恩人であろうと関係ない。

俺は、目につくもの全てを疑う。

そう決めたのだから。

俺は、そんな殺伐とした思いを抱きながらミラの返答を待つ。

真面目に聞いている事がわかったのか、ミラは茶化さずに、真剣に答えてくれた。

「……そうですね。私があなたをお助けする理由は、ひとえに信仰心ゆえ、ですかね」

「信仰心？」

「ええ。こう見えても、私は斧教の敬虔な信者ですの」

斧教。

斧の勇者のみを崇める、アックスフォードの国教だったな。

理由としては、アックスフォードという国を作ったのが、何代か前の斧の勇者だったからだと聞いた。

王を神として崇めた結果生まれたのが、アックスフォードと斧教だという話だ。

だが、俺の原作知識には、神と崇める勇者を殺害する事も辞さない邪教の存在もある。

俺を信仰対象としているからと言って、裏切らないという保証はない。

「君は、斧教や国が俺を殺せと言ったら、どうする?」

「当然、勇者様をお守りします。勇者様がどのような方であれ、害する事は教義に反しませんので。」

背信者に従うつもりはありません」

「へえ」

本当かね?

「じゃあ、俺が悪い事をやり始めたら、どうする?」

「そこに大義がないのなら、お止めします。ただし、できうる限り武力には頼らず、話し合いによつての和解を求めます」

「ほお」

それはまた、立派な事で。

「じゃあ、最後。君は俺を裏切らないか?」

「はい。決して。仮に袂を別つたとしても、決して敵対する事はないと誓います」

「……そうか」

さて。

この言葉、信じていいものか。

正直に言うと、わからない。

こんな短い問答で全てを断定できる程、俺はミラの事を知っている訳じゃない。決して裏切らない、本当の仲間として信じる事など、できはしない。でも、だ。

「……………」

俺は、自分の体に巻きつけられた、包帯代わりの布を見る。

これは、ミラが俺の命を救ってくれた証だ。

裏切るのならば、命の恩人だろうと関係なく殺す。

だが、裏切らないのならば、それなりに信用できるのではないか？

だって、俺を殺そうと思えば、寝ている隙にいくらでも殺せたのだから。

あくまでも信用であって、信頼する訳ではない。

今は生かしておいて、利用して、用済みになってから殺されるという可能性もある。

気は抜けない。

警戒は欠かさない。

今度こそ、後ろから刺されるような醜態は晒さない。

それでも、今、この場で殺す理由はない。

「……………わかった。今のところは、その言葉を信じておく事にしよう」

「それは何よりです」

俺は、今はミラを殺さない事に決め、殺伐とした考えを心の底に沈めた。

こうして俺は、最後に残った仲間を失わずに済んだのだった。

14話

「——つまり、ミラは俺が山から落ちるところを見て、助けに飛び込んで来てくれた訳か」

「はい。川に落ちたのを確認した時は、さすがに焦りましたね」

ミラと和解(?)した後、お互いの情報と、現在の状況の確認を行った。

アルバさんとパールちゃんの二人に裏切られた事、殺されかけた事、そして、タクト一味に襲われた事も話した。

タクトに関しては、奴が鞭の勇者である事、七星武器を奪う能力を持っている事、それを俺は特殊な知識によって知りえている事までミラに明かした。

どうも、「勇者はこの世界の理を理解している」という伝承があるらしく、ミラはこの話をすんなりと信じてくれた。

ついでに、俺がこの知識をあまり信用していないという事も話しておいた。

先に明かしておかないと、あとでめんどくさい事になりそうだと思ったからだ。

決して、ミラを信頼して明かした訳ではない。

ないっつらない。

それよりも、重要なのはミラの行動と、現在の状況だ。

ミラの話によると、前々からあの裏切り二人組、アルバさんとパールちゃんの二人の事は、行動の節々から怪しいと睨んでいたが、決定的な証拠がある訳でもなく、あくまで疑念というレベルで監視に留めていたらしい。

そんな中、ドラウキユーア山脈において、ミラは王様への報告書作成の為に、一時パーティーを離れざるを得なくなる。

不安ではあったが、パールちゃんはともかく、アルバさんの方は騎士団での実績もあり、疑念程度では揺るがないだけの信用があった。

アックスフォードの国民は、敬虔な斧教信者が多いらしく、アルバさんもその一人だったのだそうだ。

故に、そこまで酷い事にはならないだろうと判断して、ミラは俺達を送り出した。

俺は、その話を聞いて、そこが憑依者の厄介なところだなと思った。

しかし、やはり二人の行動に疑念を持っていたのが功を奏したのだろう。

不安を払拭しきれなかったミラは、報告書の作成を即行で終わらせ、俺達に合流するべくホテルを出た。

そして、山道を登っている間に、山の上で派手な黒い光が炸裂したのを見て、何かがあったのだと確信して、その場に急行したらしい。

その黒い光とは、おそらく、俺のデッドエンドクロスだろう。

あの後、すぐにタクトと戦う事になって、無駄にSP使うんじゃないやなかったと若干後悔したが、それがミラを呼び寄せたと思えば、決して無駄ではなかったという事だ。

何が幸いするかわからないな。

で、黒い光が炸裂してから少しして、今度は閃光が炸裂し、巨大なドラゴンが山に降り立った事を確認した。

もう嫌な予感しかなかったミラは、より一層ペースを上げて先を急いだ。

しかし、ミラが現場に到着する直前に、タクトの攻撃によって俺が空中に放り出されたのを確認。

山の下を流れていた川に落ちたのを見て、慌てて下山。

川の流れに沿って全力疾走しながら俺を探し、数日かけてようやく俺を発見。

回復魔法で治療し、それで治りきらなかった為、やむなくメイド服のスカートを千切り、包帯代わりにして、応急措置を済ませてくれたらしい。

「――で、現在に至るといふ訳か」

「そうなりますね」

俺は、大怪我した上に気絶した状態で、数日間、川流れをしていたって事か。

よく死ななかつたな。

勇者の生命力の成せる技か、それとも生への執着心が生んだ奇跡か。まあ、なんでもいい。

とにかく、生き残ったというのは事実なのだから。

だが、しかし。

今度は新たな問題が発生した。

それは……

「……もしかして、俺達って今、遭難してる」

「そうなりますね」

ミラが顔色一つ変えずにそう言った。

何故、そんなに落ち着いていられるのか……。

遭難って、普通に命に関わる事態だろうに。

しかーし！

こんな時の為に、俺には一つの切り札がある！

そう！

俺は召喚された直後に教会に行つて手に入れていたのだ！

自らの生命線となるであろうスキル……そのスキルを宿した武器の解放に必要な素

材を！

それによって手に入れたスキルの名は「ポータルアックス」！

その名の通り、瞬間移動を可能とするスキルだ！

あらかじめ登録した場所にしか飛べないが、それでもこんな状況では頼りになる事この上ない。

裏切り二人組やタクト一味に襲われた時には、使えなかったけどな！

たしか、活性化された土地では使えないんだ。

俺は、その事を原作知識で知っていた。

だからこそ、逃げられないと思って戦闘を挑んだ訳だし。

いや、戦闘に踏み切ったのには、カースシリーズの影響も大いにあったとは思うけども。

まあ、それはいいだろう。

結果として生き残ったんだし、今使えれば文句はない。

「ポータルアックス！」

そして、俺は転送スキルを使った。

現在登録している場所は、アックスフォードの召喚の間と、雑魚狩りをした草原の二ヶ所。

その内、草原の方を選んでスキルを発動。

スキルは、発動者である俺と、パーティーメンバーであるミラを見慣れた草原へと転送……しない。

何故か、発動してくれない。

「あれ？」

「？ 今、何かしましたか？」

ミラが、雑魚の攻撃を受けたボスキャラみたいなお事を言った。

しかし、それを気にしている余裕はない。

なにせ、生命線と思っていたスキルが不発に終わったのだから。

なんでだ!?

また使用不能な条件の何かに引っ掛かったのか!?

肝心な時に使えねえ!

だが、もう怒る気力すらわかない。

何だかんだで、俺は満身創痍なんだ。

無駄に消費する体力はない。

「ハア……。まあ、とりあえず、川上に向かって歩けば、ドラウキューア山脈には戻れるよな。そうするしかないか」

「申し訳ありませんが、勇者様の手当てをするのに適した場所を探して森の中を進んだ

為、川の位置を見失いました」

「ああ……そう……」

神は、俺をどこまで追い詰めれば気が済むんだ。

「……とりあえず、腹減ったなあ」

ミラの話が確かなら、俺は気絶していた数日間、何も食べていない事になる。

そりゃ、腹の一つも減るだろう。

でも、食べ物なんてないんだろうなー。

神は俺に厳しいもんなー。

ていうか、神って敵側だし。

「……………どうぞぞ」

しかし、俺の予想に反して、食べ物があった。

ミラがおずおずとした様子で、石で出来た鍋を取り出した。

なんか、手作り感溢れる鍋だった。

もしかしなくても、ミラの手作りだろうか？

だが、そんな事はどうでもいい。

食べ物だ。

食べ物が目の前にあるのだ。

「おお………」

神は俺を見捨てていなかった。

もちろん、敵側のなんちゃって女神ではなく、何処かにおられる本物の神だ。

早速、真の神とミラに感謝しながら、ありがたく、いただく。

たとえ、毒殺が狙いだったとしても構うものか！

大丈夫！

プライドアックスには耐性向上の効果もある！

どんな毒も怖れるに足らず！

唯一の懸念は、これまで一切澄まし顔を崩さなかったミラが渋い顔をしている事だ

が、きっと大丈夫だと信じよう。

そう意気込んで、俺は鍋の中の料理を口にした。

そして、それは俺の予想に違わなかった。

悪い意味で。

「ぐふふうっ！」

それを口に入れた時の感想は、ただ一言。

不味い。

そうとしか言えない。

それ以外の感想を持つ事は許さぬと言わんばかりの、素晴らしい猟理だった。料理ではない。

猟奇的な料理と書いて、猟理だ。

「おまツ……!? メイドのくせに、まさかの飯マズって……!」

「……料理はメイドの仕事ではなく、コックの仕事です。だから、仕方がないのです。ええ。これは仕方がない事なのです」

「目をそらしながら言うなよ。涙が出てくるわ……!」

やはり神はいなかった。

遭難中、ずっとこれを食べねばならないかと思うと、本気で絶望が襲ってくる。

仲間裏切られた時も、タクトに襲われた時も感じなかった絶望が、カースシリーズによって強化された筈の俺の精神耐性を貫いて襲ってくる。

どんだけの破壊力だよ。

泣くわ。

「文句があるなら、食べなくて結構ですが?」

「くツ……!」

結局、空腹には勝てずに猟理を食べた。

涙を流しながら食べて、食べて、食べ続けて。

ごちそうさまでした、と言うと同時に気絶した。
そんなこんなで、俺とミラの遭難生活が幕を開けた。
先行き不安なんてもんじゃないかった。

15話

「死ぬ……マジで死んでしまう……」

「大げさですね。食事が不味い程度で」

ミラとの遭難生活が始まって、早、数週間が経過した。

その間、俺は猟理以外の料理を口にしていない。

自分で作ろうと思った事もあったんだが、タクトとの戦いで負った右半身の怪我の治りが思ったよりも遅く、

体が自由に動かない事もあって、料理みたいな繊細な仕事はミラに任せるしかなかった。

いくら猟理とはいえ、食材をそのままの状態で食べるよりはまだマシだというのが、なんとも泣けてくる。

日本のコンビニ弁当が懐かしい。

あれって、相当クオリティが高かったんだなあと、こんなに状況に陥ってから、しみじみと思った。

「さて、食事も終わった事ですし、包帯を取り替えますね」

「ああ、うん。よろしく」

「では……」

『力の根源たる私が命ずる。真理を今一度読み解き、彼の者を癒せ』

「ドライファ・ヒール」

飯のあとは、治療の時間だ。

まずは包帯代わりの布を取り外し、ミラの回復魔法を傷にかける。

一人分の回復魔法では、あの致命傷クラスの傷を全快させる事はできないが、さすがに数週間もかけ続け、ドロップという強化方法で生み出した回復薬なんかと併用する事によって、随分と治ってきた。

この分なら、あと数日で完治しそうだ。

まあ、大きな傷痕は残りそうだけど。

そして、回復魔法をかけてから、包帯代わりの布を巻き直す。

この布は、ミラが水の魔法で洗浄して使い回している。

本当は真新しい包帯に替えるのが一番だとは思いますが、そんな物はないのだから仕方がない。

「こんな物質カッカツ状態の中、ミラの得意魔法が水と回復だったのが唯一の救いか。

「終わりましたよ」

「ん、ありがとう。……じゃあ、行くか」
「はっ」

治療が終わったら、冒険の時間だ。

深い森の中を進み、どこにあるのかもわからない人里を目指す。

相変わらず、転送スキルが使えないからな。

いい加減、人里を見つけないと、冗談抜きでミラの狩りに殺されてしまう。

一応、人里を見つけれなくとも、アックスフォードに帰る手段はあるにはある。

世界各地に存在する、波の到来を知らせる重要アイテム「龍刻の砂時計」。

これに勇者の武器をかざして登録すると、波が発生した瞬間、勇者は仲間と共に、強制的に波が発生した現場に転送される。

俺は、遭難する前にアックスフォードの龍刻の砂時計に登録しておいた。

そして現在、俺の視界には波までのカウントダウンが表示されている。

大体、残り一週間ってところだ。

それまで待てば、俺とミラはアックスフォードで発生する波の現場に飛ばされ、そこで国に保護してもらおう事ができるだろう。

国が信用できるかどうかは、ひとまず置いておいくとして。

とりあえず、この遭難生活からは、確実に脱出できる。

だが、俺はあと一週間、ただ待っているつもりはない！

一週間も猟理を食べ続ける気はない！

もう数週間も猟理を食べ続けたんだ！

いい加減、この猟奇的な料理から解放されたい！

不味い猟理は、もう嫌だ！

その一心で人里を探す。

この数週間、歩き続けて、人里のひの字も見つからなかったが、諦める訳にはいかな
い。

多分、もうちよつとで見つかる筈なんだ。

俺の直感がそう言っている。

そう思わないと、やってられない。

血走った目で、人の痕跡を探る。

しかし、見つかるのは、人ではなく魔物の痕跡のみ。

今も、俺達を獲物と見なした魔物が襲いかかって来た。

お前はお呼びじゃないんだよ！

「パワードアックスX！」

そんな魔物に向かって、八つ当たり気味に全力のスキルを叩きつける。

パスワードアックスは、その名の通り、力強く斧を振り下ろすだけのスキルなんだが、全力で振り抜いたせいで、魔物を跡形もなく消し飛ばし、地面にデカイクレーターを作る程の馬鹿げた威力の必殺スキルに進化している。

しかも、怪我した右腕を使わないように、左腕一本で放ってこれだ。

おわかりいただけただろうか？

これを見てわかる通り、俺はこの数週間で飛躍的に強くなっている。

遭難当初は、プライドアックスに頼らなければ、そこら辺の魔物に苦戦するくらいの力しかなかったのに、

今では、能力解放の為にあって使ってる弱い斧で一撃必殺ができる程に成長した。

これは、ひとえに時間の問題だ。

強化方法は時間をかけて経験値や熟練度、そして素材を貯める事によって真価を發揮する。

例えば、今使ったパスワードアックスにしても、スキルに特殊なポイントを割り振る事でそのスキルをパワーアップさせるといふ強化方法を使った結果だ。

他にも色々併用してる。

多分、今の俺ならタクトにも勝てると思う。

この上、アックスフォードに戻ってから、必要な素材を国に調達してもらえれば、更

に強くなれるだろう。

順調だ。

今となつては、万が一、ミラが後ろから刺してきたとしてもノーダメージで済むだろう。

仲間の裏切りを過剰に警戒する必要がなくなったという意味でも順調だ。

今のミラが俺を殺そうと思つたら、狐狸の腕前を磨くしかないんじゃないか？

そのミラにしても、この遭難生活の中で強くなつていく。

勇者の武器には、パーティーメンバーの成長に補正をかける機能もある。

ミラの髪の毛を斧に吸わせて「仲間の斧」という武器を解放。

更に、レベルと引き換えにステータスを上昇させる資質向上の強化方法をミラにも使つた。

元々、ミラは王様が太鼓判を押し、アルバさんとパールちゃんの二人が警戒するような、国内有数の強者。

それが勇者の武器によつて強化された今、もう単騎でタクトと戦えるんじゃないか？ つてくらしいの強さになつてる。

そんなミラを圧倒するステータスを俺は手に入れた訳で。

うん、本当に順調だ。

順調なんだ。

なのに、なんで遭難生活からは抜け出せないんだ!?

ホント、こんな状況でさえなければ、手放して喜べるくらいの成長ぶりなのに……。それもこれも、俺を襲撃したタクトが悪い。

おのれ、タクト!

いずれリベンジして、この手で殺してやるからなあ!

首を洗って待ってけ!

「……ユウ様、何か良い香りがしませんか?」

タクトへの恨みを心の中で募らせていた時、ふと、ミラがそんな事を言い出した。

ちなみに、ミラは俺の事を「勇者様」ではなく「ユウ様」と呼ぶようになった。

これは、俺から頼んだ事だ。

勇者様とか呼ばれてたら、またタクトの同類が襲って来るかもしれないからな。

必要な事だったんだ。

それはともかく、良い香りだと?

ここ最近、猟理のせいで、すっかり味覚と嗅覚をやられてしまった俺には、ちよつとわからない。

あ、でも、意識してクンクンしてみれば、確かに匂うような気がする。

空気を漂う、なんか良い匂いが。

「ホントだ。これ、何の匂いだろ？」

「おそらく……誰かが料理を作っているのではないのでしょうか？」

今なんつつつた？

料理？

料理と言ったか？

猟理じゃなくて？

ミラの言葉の意味を脳が正しく認識した瞬間、グウーーーーー！と、お腹が凄まじい音を立てた。

同時に、ほとんど駄目になっている嗅覚に全神経を集中させる。

なんとしてでも、この匂いの元を突き止めるのだ！

料理Ⅱ人の痕跡とか、今だけはどうでもいい！

とにかく、まともな料理が食べたい！

最悪、殺してでも奪いとってやる！

「こつちだ！ ついて来いミラ！」

「犬ですか、あなたは……」

死ぬ気で探知した匂いの元に向かって走る！

ミラは呆れた顔をしつつも、黙ってついて来た。

なんだかんだ言っても、ミラだってまともな料理が恋しいのだろう。

いくら自分で作った物とはいえ、お城勤めのエリート様が、あんな猟理に耐えきれない訳がない。

走る走る走る。

料理に近づくとにつれて匂いが強くなり、口の中に唾液が広がった。

近い！

料理はすでに、目と鼻の先にある！

「そこだあー！」

そして俺は飛び込んだ。

その桃源郷へと。

そこに、それはあった。

質素な鍋。

その中から香りを放つ、ずっと求め続けてやまなかつたもの。

だが、その鍋を囲むように、一組の男女がいた。

「え？」

「何だ……！」

その男女は、警戒するような視線を俺に向けていた。

その男女の顔には見覚えがあった。

タクトと同じ、原作に登場する人物。

それと、こんな所で出会った事に、心の底から驚いた。

しかし、今はそんな事、どうでもいい。

「ご飯食べさせてくださいー！」

俺は、その二人に向かって土下座した。

頭が地面にめり込むくらいの勢いで土下座した。

まともな料理が食べられるのならば、プライドなんてクソ食らえだ！

「……は？」

「えーと……」

二人は困惑していた。

無理もないが、俺だって困惑している。

それに免じて、どうかご飯を食べさせてください！

お願いします！

そんな思いで、俺は土下座をし続けた。

原作主人公『盾の勇者』いわたになおぶみ岩谷尚文と、

そのパートナーにしてヒロイン、獣耳と尻尾を持った亜人の少女、ラフタリアの二人
に向かつて。

16話

「……何をやっているんですか？ ユウ様？」

土下座をする俺の背後から、ミラの冷えきった声が聞こえた。

ミラは敬虔な斧教徒。

俺に斧の勇者として、神としての品格を求めているふしがある。

そんなミラからすれば、俺のこんな姿土下座を見るのは、それはもう嫌だろう。

でも、今はそれどころじゃないんだ！

見逃してくれ！

「……何者だ、お前ら？」

「見ての通り、哀れな遭難者です！ とてもお腹が空いています！ なので、ご飯を分け

てください！ お願いします！」

俺は恥も外聞も脱ぎ捨てて、土下座を続けた。

ミラの冷たい視線が痛い。

顔上げてないからわかんないけど、気配だけでもわかる事はある。

きつと、ミラは今、ゴミを見るような目で俺を見ているのだろう。

そして、盾の勇者様は不審者を見るような目で俺を見ているのだろう。だが、土下座はやめない。

土下座で飯が食えるのなら安いものだ！

「ナオフミ様……どうしましょうか……？」

「……はあ。とりあえず、顔を上げろ」

顔を上げろと言われたので、ゆっくりと顔を上げた。

すると、そこには盾の勇者様の差し伸べられた手があった。

おお。

これが救いの手か。

「食わせてやってもいいが……金を払え」

「君に人の心はないのか!？」

思わず叫んでしまった。

どうやらあれは救いの手ではなく、「食いたければ、出すモン出しな」というヤクザの手だったらしい。

そういうえば、こんなキャラでしたねえ！ 盾の勇者様はよお！

「ナオフミ様……それはちよつと……」

「ふん。物乞いに一々施してたらキリがないだろ。それに、俺は施しをするような善人

じゃない。

——で、どうする？ 金を払って食うか、払わずに餓えるか。俺はどっちでもいいぞくつ……！

痛いところを容赦なく突いてくるな、この野郎！

だが、言ってる事は正論と言えば正論だ。

彼らには、俺達に施しを与える義理も義務もないのだから。

俺はおそろおそろミラの方に視線を向け、助けを乞うた。

「ミラ……お金持ってない？」

ミラが俺を見つめる視線は、どこまでも冷たかった。

この目を見ていると、なんか妻に金をせびる駄目亭主になったかのような気分になるな……。

やっぱり駄目なのだろうか？

お金ないのだろうか？

そうなったら最終手段に踏み切るしかないぞ。

すなわち、コロシテデモウバイトル。

「……はあ。ホテルを出る時に持ってきた路銀がいくらかあります。それを使いましょう」

「おお……！　ありがとうございます！　この恩は忘れないぜ！」

ミラは、「仕方がないですね」とばかりに、ドラウキューア山脈のホテルから持ってきたという、旅用のバックパックから金貨袋を取り出し、いくらかのお金を尚文くんに払ってくれた。

ありがたや、ありがたや。

まあ、自分も食べたいって気持ちも大きいんだろうけど。

なんにしても、これでまともな飯が食えるぞ！

「おい待て。この金、普通の通貨と違うぞ」

なん……だと……!!?

どういう事だ!?

「?　ああ。もしかして、気づかないうちに国境を越えていたのですかね。そうになると、それは他国の通貨という事になります。それでは駄目でしょうか？」

「……まあいいだろう。両替できそうな奴には心当たりがある。だが、手数料として多目に貰うぞ」

「それは構いません。ユウ様も構いませんね」

「もちろんだ！」

飯が食えるなら、文句はない！

金貨で腹は膨れないんだよ！

それに、そんなはした金くらい、アックスフードに戻れば、いくらでも支給してもらえそうだし。

「ならいい。ラフタリア、皿を用意してやれ」

「あ、はい！」

そうして、遂に俺達はまともな食事にたどり着く事ができたのだった。

そこら辺の魔物の肉や、適当な野草を煮込んだようなスープを遠慮なくいただく。

……旨い。

旨いという感想しか出ない。

そういえば、盾の勇者は料理上手だったっけ。

そうか。

これが料理か。

ようやく、料理というものが何かを思い出せたような気がする。

「旨いー！ 旨いー！」

「これは……確かに……」

「ふふっ、良かったですね」

一心不乱にスープを食う俺と、なんだかんだで旨そうに食べるミラを、ラフタリア

ちゃんが慈愛の眼差しで見つめていた。

それを気にする余裕もなく、俺は食べ続けた。

そうなれば当然、皿の中身はすぐになくなる。

「あ……」

俺の口から、そんな声が出た。

喪失感が、俺の全身を駆け巡る。

もつと味わって食べばよかった……。

「おかわりが欲しければ、追加料金を払えよ」

「どこまでも、がめついな君は!？」

結局、料理の誘惑に負けて、俺達は追加料金を払った。

そう。俺達は、だ。

ミラもおかわりしてた。

「——それで、結局、お前らは何者なんだ?」

そして、スープを食べながら、尚文くんが話題を振ってきた。

その目には、俺達への警戒心がありありと浮かんでいる。

まるで、ちよつと前までの俺を見ているようだ。

「さつきも言ったつしよ。俺達はただの遭難者だよ。数週間前にちよつと強盗に襲われ

ちやつてさ。で、なんとか逃げられたは良いものの、遭難して森をさまつてたつて訳だ」

「ほお。そつちの女がメイド服着てるところを見るに、お前は他国の貴族か何かつてところか？」

「まあ、似たようなもんかな」

そんな尚文くんに対して、とりあえず、当たり障りのない返答をしておいた。

……さて、ここまでなあなあで済ませちゃつてたけど、せつかく原作主人公と遭遇なんて事態になつたんだし、真面目に考察をしよう。

ひとまず原作知識が正しいと仮定すると、時系列的に、今は勇者が挑む最初の波が来る直前つてところか？

パーティーメンバーが二人だけつて事は、その可能性が高い。

序盤の展開なんて、ぶつちやけ、かなりうる覚えだけだな。

でも、そんなうる覚えの知識でも参考にはなる。

さしあたっては、この知識の信憑性がどの程度のものなのか確認しておきたい。

「ねえ尚文くん」

「馴れ馴れしく呼ぶな」

「まあまあ、良いじゃん。それで提案なんだけどき。少しの間、俺達を護衛として雇つて

みない？ 今なら報酬は一日三食のご飯でいいよ」

「はあ？」

尚文くんは困惑した声を上げた。

ミラは「何言ってるんだ、こいつ」と言わんばかりの目で睨みつけてくる。

考えあつての事だから、今はちよつと黙って見守ってほしい。

「で、どうよ？」

「ふざけんな。お前達を雇って、俺に何のメリットがある？」

「メリットはあるよ。ここう言う自信和慢になるかもしれないけど、俺達は地元の国では国内有数の実力者だ。見たところ、君達は冒険者か何かでしょ。戦う事を生業にしてる人種だ。そんな君達にとって、強い戦力がこんなにお得な値段で雇えるって、破格の条件だと思うよ」

「……………」

尚文くんは顎に手を当てて、無言で考え込んでしまった。

何考えてんのかなー。

十中八九、打算的な事だと思うけど、さて、食いついてくるかどうか。

まあ、別に食いついてこなくても、そんなに問題はない。

その場合は、こつそりとストーリーキングするだけだ。

ただ、俺のスニーキング能力は決して高くないし、できれば近くで観察したいから、食いついてくれた方が嬉しい。

「……………何が目的だ？」

長い沈黙の末、尚文くんは、そんな問いを投げ掛けてきた。

これは手応えありじゃないかしら？

じゃあ、とりあえず、それっぽい答えを返してみよう。

「目的ね。あえて言うなら、君の料理に惚れたからかな」

「……………なんだ、そりゃ？」

「いやいや、本気で言ってるよ。あとは、ちよつとした気まぐれかな。

本当は人里見つけたら、すぐ地元に戻るつもりだったんだけど、少しくらい寄り道して、君の料理を食うのも良いかならうって思っただけ。

ここで会ったのも何かの縁だしね」

「……………」

尚文くんは、まとも黙って考え込んでしまった。

さて、どうなるか。

大分怪しい言動をしてる自覚はあるけど、尚文くんだって波に向けた戦力は欲しい筈。

でも、たしか、今の尚文くんは人間不信。

それを理由に突っぱねるか、実利優先で雇い入れるか。

人としての度量が試されるね。

「……………とりあえず、お前らがどれだけ使えるか見てからだ。本当に戦力になるのか確認してから決める」

「オツケー。それで良いよ」

決断を先延ばしにしたか。

でも、この感じを見るに、俺達が有用だと判断すれば雇いそうだな。

人間不信の状態で、こんな怪しい連中を雇うなんて、さすが主人公ってところか。

少なくとも、前までの俺には逆立ちしても真似できないぜ。

その後、狩りにおいて圧倒的な実力を見せつけた俺とミラは採用され、尚文くん達と一時的にパーティーを組む事となった。

この行動によって、原作知識とどれだけの差違が生じるのか。

あるいは、原作知識の通りにこの世界は回って行くのか。

確かめさせてもらおう。

17話

「——それで、どういうおつもりですか、ユウ様？」

「まあ、落ち着け。それは今から説明しよう」

尚文くん達とパーティーを組んだ日の夜。

彼らが泊まつてる村の宿屋ではアックスフォードの通貨が使えず、尚文くんも信用できない奴らと一つ屋根の下に泊まるのは抵抗があつたつばいので、俺達は野宿する事が決定した。

それに関しては不満もあるが（特にミラが）、ミラと二人で内密の話もしたかつたら、二人きりになれるのは好都合でもある。

俺は早速、ミラへの説明を開始した。

「まず、ミラは気づいたかい？ 尚文くんの正体」

「……確証はありませんが」

「おつ、さすが。じゃあ、一応答え合わせしところか。ミラの予想を聞かせてくれ」

「わかりました。戦闘中に盾の形状を変えているところを見て、もしやと思いましたが。」

ナオフミ様の正体は——四聖の盾の勇者様、という事で合っていますか？」

「大正解〜!」

さすがは、できる女、ミラ。

そこら辺には、当然のように気づくか。

まあ、これは尚文くんが、武器の形状変化ができるのは勇者か、それに類似する武器を持った者だけって情報を知らないせいで、俺達の前でもポンポンと武器を変えちゃったのが原因だけでも。

いや、知らないっていうのは、俺の予想にすぎないか。

案外、護衛として雇ったんだから、波の時にどうせバレると思って、勇者である事を隠す必要性を感じなかったってだけかもしれないし。

まあ、それはいいんだ。

どうでも。

「……その様子だと、ユウ様は最初からご存知だったようですね」

「そうだね。知ってた」

「でしたら、ユウ様の行動はいささか不可解ですね。自分が七星勇者だという事を明かすでもなく、わざわざ護衛として雇われるなんて回りくどい事をした理由。お聞かせ願えますか?」

「もちろん話すさ。その為に、あの二人から離れたんだから」

そうして、俺は説明を始めた。

今回の俺の行動について。

そして、今回の目的について。

「まず、俺がなんで尚文くんの正体を知ってたと思う?」

「……………勇者の知識ですか?」

「当たり前」

さすが、ミラ。

勘が鋭い。

「でも、前にも話した通り、俺はこの知識を信用していない。しかし、今のところは、全て知識の通りになってる。

……………だから確かめる必要があるんだ。知識の信憑性がどんなもんなのか。どのくらい信じて、どこから疑えばいいのか。尚文くんに近いのは、その確認の為だよ。

まあ、出会ったのは完全に偶然だけど」

「?」ユウ様のお考えはわかりましたが、ナオフミ様に近づく事が、どうして知識の信憑性に繋がるのですか?」

ん? 話が噛み合わないぞ?

なんでって、そりゃあ……あ、そういうえば、ミラには原作知識の事を特殊な知識とし
か言つてなかつたっけ。

そうなると、尚文くんとの関連性は見いだせないか。
うっかりしてた。

説明不足だった。

「ごめんごめん、言い忘れてた。尚文くんとの関連性ね。——それは、俺の知識が物語の
形をとっているからさ。尚文くんを主人公とした小説の舞台。それを読む事によって、
俺はこの世界の事を知った。だから、知識との差違を調べるには、主人公の近くを探る
のが一番って訳だ」

「……そういう事ですか」

今の説明だけで納得してくれたらしい。

さすがはミラ。

理解力のある女。

優秀だな。

裏切つてほしくないな。

まあ、ここまで俺の秘密を明かした以上、裏切りなんて絶対に許さないけどな。

俺から離れるようなら、奴隷にしても繋ぎ止めてやるよ。

……できれば、そうならない事を願おう。

「ユウ様のお考えはわかりました。つまり、当面の目的はナオファミ様の監視、いえ、観察という事でよろしいですか？」

「まあ、そうなる。でも、アックスフォードの波が一週間後に迫ってるから、そう長くは続けられない。それまでには国に戻るから、そのつもりで頼む」

「かしこまりました」

よし。

これで説明終わりだな。

さて、寝るか。

多分、明日も早いんだろうし。

しつかり寝て、英気を養わないと。

……せつかく人里に来たんだから、久しぶりにベッドで寝たかったなあ。

今さら言っても仕方ないけどさあ。

はあー……。

ああ、そうだ、もう一つ言い忘れてた。

「ミラ」

「はい。なんででしょうか？」

余計なお世話かもしれないけど、これだけは伝えておかないとな。

これは、いわゆる心構えの問題ってやつだし。

「忠告しとくけど、尚文くん達にあんまり情を移すなよ。彼らとは……」

「――最終的に敵対する可能性も高いからな」

「……そうですか。かしこまりました。肝に銘じておきます」

「うん。肝に銘じといてくれ」

じゃあ、明日に備えてお休み。

って言っても、野宿なんだから、ミラと二時間交代で見張りに起きなきゃいけないんだぞな。

はあ……。

ホント、久しぶりにベッドで寝たかったわ。

そんな事を思いながら、俺は意識を落とし、眠りに就いた。

18話

翌日。

尚文くん雇われた俺達は、早速、雇い主様のレベル上げのお手伝いをしていた。

「あらよつと」

向かって来たヤマアラとかいう、ハリネズミっぽい魔物に斧を振り下ろす。

今の俺は勇者の立場を隠してるので、スキルは封印だ。

ついでに、武器の形状変化も封印。

能力解放用に出してた弱い斧で頑張るしかない。

しかーし。

そんな縛りプレイ状態であろうとも、この辺りの魔物では、俺の相手にならなかった。

今も、哀れな犠牲者ヤマアラちゃんは、自慢の針をへし折られて、無残なミンチになつてしまった。

弱い！

弱すぎるぞ！

これなら、遭難生活中に出会った連中の方が、よつぽど強かったわ！

今考えてみると、あいつら、レベル100とか超えてたのかもしれない。

タクトに付けられた傷があったとはいえ、プライドアックスを使った俺とミラの二人がかりじゃないと抜けられない魔の森だったからな、あそこ。

なんぞ、森の主的な奴が縄張りにでもしてたのかもしれない。

それに比べると、今の職場はイージー過ぎてアクビが出るわ。

雑魚ばかりだもんよ。

でも、雑魚とはいえ狩りまくったおかげで、尚文くん達のレベルがそこそこ上がったらしい。

まあ、尚文くん達も雑魚だもんね。

レベル的な意味で。

「今までの苦労は何だったんだ……」

憂鬱な感じでそう呟きながら、尚文くんは俺が仕留めたヤマアラを解体して盾に吸わせていた。

そうする事で、伝説の武器は強化されるからね。

でも、俺の目の前でそれをやるって、もはや勇者である事、隠す気ねえだろ。

まあ、そんな無粋なツツコミはするまい。

言いたくないなら、言わなくていいさ。

詮索して機嫌を損ねられたら面倒だし。

それに、観察するだけでも十分効果はあるでしょ。

「あつちも順調そうだな……」

ポツリと呟くように、尚文くんがそう言った。

その視線の先を辿ってみれば、ミラがラフタリアちゃんに剣術を教えているところだった。

ミラは、基本的に片手持ちサイズの小さな杖を使って戦う魔法使いだけど、接近されたり、魔力を温存したい時とかは、短剣を使って近接戦闘もこなせる万能型だ。

だからこそ、新米剣士であるラフタリアちゃんに、近接戦闘を教える事ができる。

……敵対する可能性がある相手を強くしてどうすんだという話だけど、それを言ったらこのレベル上げ自体がそうだし、今さらだろう。

それに、あれくらいなら問題ないんじゃないかな。

たった数日、ちよつと剣を教えた程度で劇的に強くなる訳がないし。

ちなみに、なんでミラが剣を教える事になったかというところ、ラフタリアちゃんに頼まれたからだ。

尚文くんからも、「雇われの身なんだから、仕事の一環だと思え」と言われて、しぶしぶ教えてる。

やる気はなさそうだけど。

逆にラフタリアちゃんは、やる気マックスだな。

足して二で割れば、ちょうど良いかもしれない。

そんな感じで二人を見守っていると、少しして一区切りついたのか、訓練をきり上げて、こっちに向かつて来た。

ラフタリアちゃんは疲労困憊。

対するミラは汗一つかいてない。

これは、ステータスの差か、技術の差か。

多分、両方だな。

「お疲れ、二人とも」

「つ、疲れました……」

「この程度で情けないですね。修行が足りません」

ミラ先生、厳しい！

さすが、国内有数の戦闘エリート。

弟子に求める基準が違うね。

「ラフタリアが使い物にならないとなると、そろそろ狩りを中断して村に戻る……いや、城下町に戻って、ラフタリアの装備を一新するか」

「……ナオフミ様？」

ん？　なんか、ラフタリアちゃんが怖い笑顔を浮かべてるぞ？

怒りの矛先は……普通に尚文くんか。

「私の装備を買っていただけるのは非常に嬉しいのですが、その前にご自身の格好を少々お考えください」

「なんか変か？」

「いやいや、普通に変でしょ、尚文くんよ」

俺は思わずツツコミを入れた。

「……どこがだ？」

「わかんないのか？　戦闘職のくせに鎧の一つも着けてないところだよ！」

「ユウさんの言う通りです！　盾以外、村人とほとんど変わらないじゃないですか！」

「む？　だが、それを言うなら、ユウも同じだよ」

「俺は、鎧着けると傷が痛むという理由があるからだよ。一緒にしないで」

そう。

実は、俺はまだ、タクトにやられた傷が完治していないのだ。

昨日、尚文くんに両替してもらった（多分、盛大にぼったくられた）お金で、村の人達から清潔な包帯を購入したから、本当にあともう少しで治ると思う。

でも、現時点で鎧とか着けようものなら、ヒリヒリと痛むのは目に見えている。だから、着けてないだけだ。

君と一緒にしないでくれ。

「……だが、怪我の一つもしないし、まだ必要ないだろ」

「じゃあ、俺が殴ってあげようか？ 多分、骨くらい粉碎できると思うけど」

「ユウさん。少し黙っててください」

「い、イエッサー……」

ラフタリアちゃんの怖い笑顔が俺にも向いてしまった。

恐ろしや恐ろしや。

触らぬ神に祟りなしだ。

ここは、おとなしく口を閉じよう。

「ユウさんの話は冗談だとしても、今のナオフミ様に傷をつけられるような強者が身近にいるのは事実です。戯れはほどほどにしませんと死んでしまいます」

「……………」

「いい加減、ご自身の装備を見直す時です。期限が近づいているのでしょう？」

「……………ああ」

「では、今は私よりもナオフミ様の装備を探すという事で良いですね？」

「そうだな。とりあえず装備を買って、残った金でお前の武器を買えば良いか」
「はい」

お、どうやら話は終わったみたいだな。

だったら、もう口を開いても良いのか？

良いよな？

良いだろう？

という事で、口を挟ませてもらおう。

「ところで尚文くん。期限って何？」

俺は確認の意味をこめて、あえて質問した。

もうすぐ、この国に波が襲来する事は知っている。

尚文くんが盾の勇者として、それに参加せざるをえないのも知っている。

だが、それはあくまでも、原作知識によってもたらされた情報だ。

この知識は疑ってなんぼ。

確認のしすぎという事はない。

「それは……」

「ナオフミ様、やっぱり隠すべきではありませんよ。隠しきれぬ事でもないですし」

「……チツ。まあ、そうだな」

なんか尚文くんが俊巡してたけど、ラフタリアちゃんに言われて、覚悟を決めたような顔になった。

やっと、秘密を言う気になったか。

「ユウさん、ミラさん……ナオフミ様は伝説の四聖勇者の一人、盾の勇者様です。そして、世界の為に波と戦わなければならない使命を背負っています。

……今まで黙っていた事は謝ります。でも、ナオフミ様にも事情があつたのです。どうか、許してください。

その上でお願いします。どうか、ナオフミ様に力を貸していただけなideしうか。お願いします。ナオフミ様には、強い味方が必要なのです」

ラフタリアちゃんは、そう言つて、頭を下げた。

深く深く頭を下げた。

……ふむ。

ラフタリアちゃんが言つた事が本当なら、俺の知ってる原作知識と全く同じだ。

これは、知識の信憑性がかなり高いという事になるか……？

いや、断定するのは危険だな。

もしかしたら、前提条件からして間違つているという可能性だつてある。

例えば、このラフタリアちゃんの一見真摯に見える言葉は真つ赤な嘘で、尚文くんが

盾の勇者というのも実は嘘。

尚文くんの正体は波の尖兵で、本物の盾の勇者を殺して入れ替わっている、という可能性だって、決して否定はできないんだ。

視野を広く持とう。

そういう可能性も考慮して、あとで探りを入れとこう。

騙されて、窮地に陥るなんて事がないように。

……と、考察はここまですて、とりあえずは返事しておくか。

どちらにせよ、俺に断る気はないし、ひとまずは尚文くんに協力し、近くで観察するという目的を変えるつもりもないのだから。

「……盾の勇者様ねえ。まあ、尚文くんが何者であろうと、雇われ期間中は協力するって約束を違える気はないから安心しなよ。というか、薄々そうじゃないかな。って感づいてたしね、俺は」

「……気づいてたのか」

「そりゃあね。魔物の死体やら何やら吸収して強くなるなんて妙ちくりんな武器持つてる人は限られてるもん。勇者だって事隠すつもりなら、そこら辺は気をつけた方が良さ、尚文くん」

「……チツ。食えない奴だ」

尚文くんは悪態を一つついた後、俺に向かって手を差し出してきた。
握手かな？

「……改めて、よろしく頼む」

握手だわ、これ（確信）。

断る理由もなかったので、俺は差し出された尚文くんの手を握った。

シエイクハンドである。

「こちらこそよろしく。ま、俺達は地元で用事が残ってるから、短い付き合いになるだろうけどね。あ、ミラもそれで良いか？」

「はい。問題ありません。私はユウ様に従いますので」

こうして、尚文くん達に秘密を打ち明けられ、俺達は真の協力関係を結んだ。

言葉にした通り、極々短い期間限定の関係になるだろうけど、その間はこの友情(?)を大事にするのも悪くはないだろう。

わざわざ関係を悪化させる必要もないしな。

そうして俺達は話を済ませ、一路、城下町へと向かったのだった。

19話

「お、盾のアンちゃんじゃないか。一週間ぶりだな」

そしてやって来た、四聖勇者の所属国、メルロマルクの城下町。

尚文くんは迷わず商店街へと歩いて行き、一軒の武器屋に入った。

この店は知ってる。

原作にも出てきた、尚文くんを唯一助けてくれた恩人の鍛冶師がやってる店だ。

へえ。

ここがね。

「嬢ちゃんは、しばらく見ない間に見違えたなあ……別嬪さんに育つたじゃねえか」

「はあ？」

尚文くんが武器屋の親父さんと話をしている間、俺は店内を物色させてもらった。

意外と品揃えが良いわ、この店。

剣とか槍とかのメジャー武器以外にも、いろいろ置いてある。

特に、アックスフオードの王都にすら無かった種類の斧がいくつかあったのは収穫

だった。

多分、ここの親父さんのオリジナルなんじゃないかな。ありがたくウエポンコピーさせてもらいましたとも。

もちろん無断で。

「——で、あつちのウロチヨロしてるアンちゃんと、逆に静かすぎる嬢ちゃんは新しい仲間か？　なんだなんだ、人間不信も少しは克服したのか？　順調そうじゃねえか！」

「仲間じゃない。一時的に雇ってるだけだ」

「雇ってるって……そんな金どこにあつたんだよ？」

「……あいつは、妙な報酬に釣られる変人なんだよ」

「……大丈夫なのか、それ？」

「腕は確かだ。それ以外の部分については何とも言えんがな」

「そ、そうか……。まあ、アンちゃんが良いなら、それで良いんじゃないやねえか？」

「なんか失礼な会話が聞こえたような気がしたけど、気にせずにウエポンコピーを続行。」

クツクツク。

大漁大漁。

これで、また強くなれそうだけ。

「おい、俺とラフタリアは、鎧の材料を買いに行つて来るが、お前らはどうする？」

そうして店中の斧をコピーし終えた頃、尚文くんが声をかけてきた。
「買い出しに行くとな？」

もちろん俺達もついて……いや、他にやる事があつたな。

「じゃあ、俺達は通貨の両替に行つて来るわ。これ以上、尚文くんにも両替を任せると、どこまでもぼつたくられそうだし」

「よくわかつてるじゃないか」

尚文借金ほど信用できない金融業者も中々いないだろう。

という事で、俺達は二手に別れる事となつた。

尚文くんとラフタリアちゃんは買い出しへ。

俺とミラは、場所を教えてもらつた、両替してくれそうな業者さんの所へと向かう。

お昼頃に近場の定食屋で待ち合わせという事になつた。

そんな感じで紹介されたのは、なんか特徴的な喋り方をする小太りのおじさんがやつてる店。

なんでも、尚文くんが鼻根にしてる魔物商だそうだ。

……たしか、この人も原作に出てきたな。

正体は奴隷商人だつたっけ？

気になつたので、ちよつと鎌をかけてみたら、案の定、奴隷商人である事が発覚した。

尚文くんから既に事情を聞いてる風の雰囲気を出して話したのが効いたな。とにかく、両替ついでに、原作知識の検証が進んだのは嬉しい誤算だった。

……にしても、奴隷か。

ミラを奴隷にして、俺に逆らえないようにしちやおつかなくという考えがチラツと頭に浮かんだけど、やめておいた。

そんな事がアックスフオードや尚文くんの耳に入ったら、変な疑惑が生まれそうだもの。

下手な事はしない方がいい。

そして、その日は定食屋で飯食った後、軽くレベル上げをして終了となった。

明けて翌日。

武器屋の親父さんは相当仕事が早いみたいで、オーダーメイドの特注品だというのに、もう尚文くんの鎧を仕上げたらしい。

その名も「蛮族の鎧」！

ついに尚文くんが、盾の勇者のイラストで見慣れた姿になった。

しかし、実際に見てみると、こう……

「なんか山賊っぽいね。ちんけな悪役って感じがして」

「ユウさん、なんて事言うんですか!? ナオフミ様、似合っていてカッコいいですよ!」
「ラフタリア、世辞はいい……………こいつ、本心で言ってるやがる」

マジかい。

ラフタリアちゃんの美的センス、どうなってんだろうね?

まあ、なにはともあれ、これで尚文くんの装備も整った。

準備万端。

あとは波を待つのみってね。

「そーいや、そっちの斧のアンちゃんは鎧いらねえのか?」

おっと。

準備万端じゃないのが、約一名ここにいたわ。

思わずといった感じで、親父さんにツッコまれてしまった。

たしかに、この中で鎧を着けてないのは俺だけだ。

尚文くんは蛮族の鎧。

ラフタリアちゃんは、普通の服の上に皮の鎧。

ミラは、遭難前に着けていたメイド服の雰囲気合った特殊な軽鎧を、今は村で買った普通の服の上に着けている。

俺だけが布の服装じゃ、そりゃ心配にもなるか。

「んー……」

どうするか？

実は鎧を着けない理由だったタクトにやられた傷に関しては、昨日までの治療で遂に完治したんだよな。

だから、鎧を着けられないって事はない。

でも、ぶつちやけ今の状態でも鎧を着けた尚文くんより防御力高いし。

ここで買わなくても、アックスフオードに戻れば遥かに性能の良い鎧を支給してもらうなり、ドロップという強化方法で出すなりできるし、今買う必要はない。

しかし、見てくれを整えるのは大事か。

幸い、金には困ってないしね。

「そうだなー。じゃあ、適当にサイズの合う鎧を売ってください」

「適当って……良いのか、それで？」

「はい。間に合わせで大丈夫です」

という事で、適当にサイズの合った鉄の胸当てと籠手を購入。

俺もようやく、それっぽい格好になった。

「おう。なんだか新米冒険者みたいだな」

親父さんには、そう言って笑われたけどな。

まあ、俺は勇者歴一ヶ月未満の新米だし、ちようど良いのかもされない。

でも、一応、鏡の前に立って変なところがないか確認しておこう。

「さて、これからどうするか」

「そういえば、城下町の雰囲気がピリピリしてますものね」

「波が近いからだろうけど、どこで、いつ起こるんだ？」

「ん？ アンちゃん、教わってないのか？」

「何をだ？」

俺が鏡の前で一人ファッションショーをしている間に、親父さんと尚文くん達の間で話が進んでいた。

どうやら、龍刻の砂時計の情報を教えてもらってららしい。

そんな勇者の基礎知識すら教えてもらえなかったとは、哀れ尚文くん。

それを思えば、情報量という一点のみにおいて、原作知識を持つ俺はかなり恵まれてたんだなあ。

代わりに、序盤から何度か死にかけたけど。

果たして、どっちがマシなのだろうか？

「いつ頃かわからないなら、見に行ってみれば良いんじゃないか？」

「そうだな。お前らもそれで良いな？」

「オツケー」

「どうやら結論が出たらしい。」

原作知識の信憑性を確認するという目的がある以上、俺達が尚文くんの選択を否定する理由はない。

つまり、特に異論はないって事だ。

武器屋の親父さんに別れを告げ、俺達はこの国の龍刻の砂時計がある時計台へと向かった。

そこで愛想の悪いシスターに連れられ、教会のようになっていた時計台内部へと足を踏み入れる。

そして、時計台の中央に、それはあった。

内部に赤い砂を蓄えた、巨大な砂時計。

これこそが龍刻の砂時計だ。

俺もアックスフオードで同じ物を見た。

ちなみに、何故、時計台が教会のようになっていて、シスターが案内人を務めているのかというと、この国は龍刻の砂時計を宗教が管理しているからだ。

これは原作知識で知り得た情報だけど、この様子を見るに間違っていないだろう。

だって、同じく宗教によって龍刻の砂時計を管理していたアックスフォードと霧囲気が似てるもの。

もつとも、アックスフォードはその成り立ちからして半分宗教国家みたいなもんだから、このメルロマルクとはいろいろ違うとは思うけどね。

例えば、アックスフォードは国王が斧教の教皇を兼任してるところとか。

原作知識の通りなら、メルロマルクはそうじゃない筈だ。

そして、これまた原作知識を信じるのなら、この国の宗教の名前は「三勇教」。

名前の通り、四聖勇者の内、盾の勇者以外の三勇者を崇める宗教だ。

で、この三勇教の教義において盾の勇者は悪者であり、尚文くんはこの後、壮絶な嫌がらせを受ける事になる。

あくまでも原作知識の通りに進めばの話だけどね。

実際にどうなるのかは、その時になってみなければわからん。

と、俺がそんな事を考えている間に、尚文くんは俺がアックスフォードでしたように、勇者の武器を龍刻の砂時計にかざして登録を済ませていた。

これで、尚文くんの視界には波までのカウントダウンが表示され、定刻になれば、俺達は自動的に波の現場に飛ばされるようになった筈だ。

……さてと。

本来ならこれで用事は終わりなんだが、俺からすれば、ここからが本番だな。なにせ、原作序盤の知識はうる覚えだが、この後の展開は覚えている。

その通りになるのだったら、この後は――

「ん？　そこにいるのは尚文じゃねえか？」

その時、軽薄そうな男の声が奥の方から聞こえた。

見れば、槍を持った男が、女の子ばかりをぞろぞろと引き連れて現れた。

尚文くんの方を見る。

その顔は、怒りに染まっていた。

それを見て、俺は思った。

ああ。

やっぱり、また知識の通りになったか、と。

「お前も波に備えて来たのか？」

男が、尚文くんに向かって再度声をかける。

例によって、その顔には見覚えがあった。

四聖勇者の一人『槍の勇者』にして、「盾の勇者の成り上がり」外伝、「槍の勇者のや

り直し」主人公。

北村元康が、そこにいた。
きたむらもとやす

20話

「なんだお前、まだその程度の装備で戦っているのか？」

元康くんは、小馬鹿にするような感じで尚文くんをデイスった。

……やべえ、この人が尚文くんを馬鹿にするとか、凄い違和感がある。

俺の中での彼へのイメージは「愉快な狂人」だ。

原作での彼は、とある事件をきっかけにして精神がぶっ壊れ、尚文くんをお義父さんと呼ぶエキセントリックなキャラへと変貌を遂げる。

外伝の主人公として描かれた時は、既に覚醒後の人格だった為、俺の中では、そんなエキセントリックなキャラとしてのイメージが固まってしまったのだ。

だから、こんなラノベによく出てくるかませ犬みたいなマネされると、違和感が凄い。でも、そんな感想を抱けるのは、原作を知っている俺だけだ。

他の皆さんは全く違う反応をしている。

尚文くんは殺意を迸らせてるし、ラフタリアちゃんは困惑してる。

ミラは、いつものすまし顔で我関せずだ。

ここは、俺も傍観に徹するべきか。

「……」

その時、尚文くんが動いた。

喋るのも煩わしいとばかりに無言できびすを返し、この場から立ち去ろうとする。

「何よ、モトヤス様が話しかけているのよ！ 聞きなさいよ！」

だが、そんな尚文くんの態度が気に入らないのか、元康くんの隣にいる一人の女が文句をつける。

尚文くんは、はち切れんばかりの殺意を籠めて女を睨みつけるも、女は挑発するように舌を出して馬鹿にした。

アツカンベード。

なるほど、実際にこの目で見てみると、よくわかる。

こいつは、性格が悪いわ。

俺の知識が確かならば、この女は尚文くんが強姦冤罪の罪を被せ、勇者としての立場を失墜させた張本人。

そして、勇者同士を仲間割れさせる事を目的とする、波の尖兵。

更に言うならば、波の黒幕に通じる、世界の敵。

それが真実ならば、タクト以上の最重要危険人物という事になる。

……恐ろしい事だ。

「ナオフミ様？ こちらの方は……？」

しかし、そんな事を知っているのも、やはり俺一人。

ラフタリアちゃんは、困惑した様子で、尚文くんに説明を求めた。

ミラは相変わらず我関せずだ。

その面の皮の厚さは健在なようで何よりです。

「……」

だが、尚文くんはラフタリアちゃんの質問に答えない。

拒絶のオーラを放ちながら質問を無視し、出口に向かって歩く。

しかし、その足が不意に止まった。

尚文くんの視線は、入り口からお供を引き連れて入ってきた、二人の少年を見据えて

いた。

「チッ」

「あ、元康さんと……尚文さん」

その少年のうちの一人。

弓を持った少年が口を開いた。

四聖の『弓の勇者』川澄樹かわすみいつきだ。

彼が尚文くんを見る目は、まるで犯罪者でも見るかのように不快そうだった。

まあ、冤罪とはいえ、尚文くん犯罪者だもんね。

この情報は原作知識だけでなく、そこから辺で情報収集もして集めた情報だ。

それによって、少なくとも尚文くんが犯罪者として扱われているのは確実、という事は突き止めた。

そう考えれば、樹くんの態度も納得がいく。

「……」

そして、もう一人の少年。

四聖の『剣の勇者』あまぎれん天木錬は、こっちに興味がないのか、我関せずといった感じだ。

ミラと同じ対応だな。

鉄面皮のスキルレベルは、ミラの方が高そうだけど。

こうして、四聖勇者が一堂に会した訳だが、残念な事に、その仲は良好とは言いがたい。

まさに原作知識の通りだ。

また一つ、検証が進んだ。

「あの……」

「ていうか、誰だその子達。すっごく可愛いな」

おっと。

ここで元康くんがラフタリアちゃんとミラの二人に目をつけた。

そういえば、まともだった時期の元康くんは女好きだったな。

壊れた後とは真逆だから、やっぱり違和感がある。

「はじめましてお嬢さん方。俺は異世界から召喚されし四人の勇者の一人、北村元康と言います。以後お見知りおきを」

「は、はあ……勇者様だったのですか」

「……」

ラフタリアちゃんは目が泳いでいた。

どう見ても、混乱している。

逆にミラは、すまし顔を一切崩さずに軽く一礼した。

どう見ても、冷静そのものだ。

クールビューティーってやつだ。

その冷静さをラフタリアちゃんにも分けてあげたくなる。

「あなた方のお名前はなんでしょう？」

「えっと……ら、ラフタリアです。よろしくお願いします」

「ミラと申します」

おいおい。

ラフタリアちゃん、冷や汗まで掻いてるぞ。

逆にミラは氷のような無表情だ。

イケメン勇者に迫られても欠片も態度を崩さない鋼の精神。

素直に尊敬できるわ。

「あなた方は本日、どのようなご用件でここに？　あなた方のような人が物騒な剣と鎧を持つているなんて、どうしたというのです？」

「それは私達がナオフミ様と一緒に戦うからです」

「え？　尚文と？」

「……なんだよ」

元康くんが怪訝そうな目で尚文くんを睨みつけた。

その隣にいる俺は眼中にないらしい。

男に興味はないっけか？

「お前、こんな可愛い子供達をどこで勧誘したんだよ」

「貴様に話す必要はない」

「てつきり一人で参加すると思っていたのに……お嬢さん方の優しさに甘えているんだな」

「勝手に妄想してろ。それに、ラフタリアはともかく、ミラはこいつの連れだ。俺が勧誘

した訳じゃない」

「はっ？」

おい。

尚文くんがいきなり俺を指差して巻き込みやがった。

せつかく原作に影響を及ぼさないようにおとなしくしてたのに、何してくれちゃつてんの。

……はあ。

仕方ない。

こうなつたら、挨拶くらいはしておくか。

「はじめまして槍の勇者様。俺はユウ。ミラ共々、訳あつて尚文くん……盾の勇者様に協力しております。どうぞよろしく」

「あ、ああ」

元康くんは、今まで眼中に入れてなかった俺の突然の参戦に、ちよつと面食らつていた。

そして、元康くんの注意が俺に向いた瞬間に、尚文くんは撤退を開始していた。

うおい!!

俺は囧か!?

「では、失礼」

元康くんに軽く一礼して、早足で尚文くんを追いかける。

当の尚文くんは、出口付近で残り二人の勇者に声をかけられていた。

「波で会いましょう」

「足手まといになるなよ」

その台詞を聞いた尚文くんの機嫌が急降下するのがわかった。

いや、尚文くんのご機嫌は、元康くんが登場した瞬間から急降下してたけどさあ。

どうやら、尚文くんはこの二人に対しても良い印象を持っていないようだ。

ここも、原作知識の通りだな。

つまり、四聖勇者は見事にバラバラ。

チームワーク？ なにそれ、おいしいの？ そんな状態という訳だ。

これが世界の希望である四聖勇者の現状だって言うんだから笑っちゃうよねえ。

原作だと、紆余曲折の末に和解して真の仲間になるんだけど、これを直に見ると、とてもそうは思えなくなる。

もしかしたら、原作知識に含まれているかもしれない嘘とは、四聖勇者の和解の事かもしれない。

そんな考えまで出てくる始末だ。

その後、尚文くんは心配するラフタリアちゃんを振り払い、ろくな攻撃力もないくせに一人で魔物に突撃し、鬱憤を晴らすかのように暴れ回った。

波まであと一日しかないって言ってたくせに、こんな調子で大丈夫かねえ。なんとも不安な気持ちにさせられたが、それでも時は止まる事なく流れる。

その日は結局、尚文くんの鬱憤晴らしに付き合っただけで終わり、日が暮れた。そして、翌日。

俺にとっても尚文くんにとっても初めてとなる、

——「厄災の波」到来の日がやって来た。

21話

波到来の日。

俺達は、開始時刻までの間、宿の一室で待機していた。

この波が原作知識の通りの規模なら、今の俺の力を持つてすれば楽勝だろう。

だが、油断はできない。

実はそれが嘘で、油断したところを強襲してアボンさせるのが狙いかもしれないのだから。

気は引き締めとかないといけない。

「あと少しで波だ」

「はい！」

「了解」

でも、気は引き締めても過度な緊張はしない。

今日も俺は、カースの力で精神が安定しております。

プライドアックス様々だぜ。

逆にラフタリアちゃんは緊張してるみたいだけど。

尚文くんも顔が強張ってる。

平気な顔してるのは、俺とミラだけだ。

「ナオフミ様……ちよつとお話しして良いですか？」

「ん？ 別に良いが、どうした？」

「いえ、これから波と戦うと思つて、感慨深くなりまして」

ラフタリアちゃんは、どこか遠い目をしながらそう言った。

なんだろう？

お話つて、何を語る気だろう？

原作知識を参考にしようにも、そんな細かい会話まで覚えてる訳がないので、わからない。

でも、まあ、

「込み入った話するなら、俺達は出てようか？」

もし、尚文くんと二人きりで話したいのなら、その気持ちを尊重するくらいのデリカシーはあるよ俺は。

「……いえ、できればお二人にも聞いていただけると助かります。なにぶん、少し重い話になつてしまうので、ご気分を害されるかもしれませんが……」

「ふーん。まあ、聞かせてくれるつて言うなら聞くけど。ミラはどうする？」

「私はユウ様のお側に仕えるのが仕事ですので」

「ああ、そう」

という事で、俺達もラフタリアちゃんの話を聞く流れになった。

「では……」

そうして、ラフタリアちゃんは語り出した。

それは、ラフタリアちゃんの過去バナだった。

波が来る前、この国の片隅にある村で、両親や友達と一緒に平和に暮らしていた事。

勇者達が召喚される前に到来した最初の波で、大量の魔物達に村を蹂躪され、両親を含めた大勢の人を殺された事。

そのショックで心が壊れてしまった事。

その後、抜け殻のような精神状態でさまよい歩き、気がついたら奴隷として売られていた事。

自分は役に立たない奴隷であり、買われては奴隷商人の下に戻されるといいう日々を繰り返していた事。

時には虐待も受け、精神が完全に壊れる寸前で——尚文くんを買われた事。

ラフタリアちゃんは、そんな自分の呪われた過去を語った。

「私は、ナオフミ様に会えて良かったと思っています。だって、私に生きる術を教えてください」

「……そうか」

「だから、頑張ります」

「……そうか」

「ああ……頑張れ」

そんなお涙頂戴の過去バナを、尚文くんはほとんど聞き流していた。

ひでえ奴だと思うけど、それも仕方がないのかもしれない。

今の尚文くんの顔には、それくらい余裕がない。

前にも感じたけど、本当に、まるでケースに浸食される前の、全てに対して過剰に怯えていた頃の自分を見ているようだ。

俺と尚文くんじゃ、追い詰められ方も、感じている事も、抱いている気持ちも違うだろうけど。

それでも、余裕を失っている様子はよく似てるんじゃないかと、そう思う。

それに……。

「そっかあ……。ラフタリアちゃんも大変だったんだねえ……」

尚文くんを酷い奴だと罵る権利は、俺にはない。

だって、俺は何も感じなかったのだから。

口では労りの言葉を吐いてはいるが、その実、俺が今の話を聞いて抱いた感想はただ一つだ。

——ああ、これも原作知識の通りだな。

そんな無機質で無感動な想いが一つだけ。

まるで、テレビで遠い国の戦争のニュースを見た時のような。

そのニュースを「つまらない」と言つて、あつさりチャンネルを変える時のような。

そんな気持ちにしなければならない。

「よしー なら、これはリベンジマッチだな！ 思う存分やり返してやろうぜ！」

「はー！」

そして、こんな薄っぺらい応援の言葉を吐く事に、罪悪感の一つも抱かない。

重症だ。

やはり俺は、力と引き換えに、まともな倫理観を喪失している。

これが、カースシリーズの代償。

プライドアックスに頼り続け、能力を解放してしまう程に長く使い、呪いの力にどつ

ぶりと浸かつてしまった事の代償。

だが、それを後悔はしていない。

壊れた事も含めて俺の選択、俺の決断の結果だ。

傲慢たる俺は、自分の決断に自信を持たなくてはならない。

精神の浸食率上昇によるグロウアップ！

カースシリーズ、プライドアックスの能力向上！

プライドアックスⅣになりました！

呪いの力が更に俺を蝕む音が、俺の頭の中だけに虚しく響いた。

しかし、その感傷に浸る間もなく、タイムリミットが訪れる。

「来るぞ……！」

尚文くんがそう言った直後。

ビキン！

という、ガラスの割れるような音が大きく世界に響いた。

次の瞬間、フツと景色が一瞬にして変わる。

これが転送の感覚か。

「空が……」

転送された場所で、尚文くんが空を見上げて呟いた。

つられて俺も空を見上げる。

空は、まるで大きな亀裂が入ったかのようにヒビ割れ、その亀裂は不気味なワインレッドに染まっていた。

そして、亀裂の中から大量の魔物がウジャウジャと現れた。

「これが、波か……！」

思わず声が出た。

話には聞いていたし、原作では何度も読んだけど、やっぱり直に見ると迫力が違う！

「……」

尚文くんが、現在地を確認するように、キョロキョロと周囲を見回す。

そこで、波の亀裂に向かって飛び出す三つの人影が目に入った。

そして、その三人を追う人影が十人弱。

三勇者と仲間達だろう。

彼らは上空へ向けて、照明弾のような光る何かを打ち上げた。

国の戦力にこの場所を伝える為だろう。

「ナオフミ様！ ……ここは、リユート村近辺です！」

その時、ラフタリアちゃんが焦ったように現在地の分析を述べた。

リユート村？

はて、どこかで聞いたような。

ああ、思い出した。

尚文くん達と初めて会った日に泊まった村の名前だ。

そういえば、原作にも出てきたような気がする。

「ここは農村部で、人がかなり住んでいますよ！」

「もう避難は済んで……」

そこまで言つて、尚文くんはハツとしたような顔になった。

いつどこで起こるか分からない厄災の波に対して、避難なんてできる訳ないと気づいたらしい。

「ちよつと待てよ、お前ら！」

尚文くんが声を張り上げて三勇者に語りかけるが、彼らは聞こえていないのか、あるいは聞く耳持っていないのか、わき目も振らず、波に向けて一直線に突撃して行った。

彼らの辞書に人命救助の文字はないらしい。

薄情な事で。

「チツ！ お前ら！ 村に行くぞ！」

「はい！」

「了解！」

そうして、尚文くんは三勇者達とは別の方向へと走り出した。

波を鎮める為ではなく、人を救う為に。

世界の為ではなく、人の為に。

盾の勇者は駆け出した。

……そして、どこまでも原作通りな展開に、俺はひっそりとため息を吐いた。

2 2 話

俺達が村にたどり着いたのと、波から出てきた魔物達が村に到達したのは、ほぼ同時だった。

その場に居合わせた騎士や冒険者達が迎撃に当たってたけど、多勢に無勢。波の魔物はやたらと数が多く、防衛線は早くも決壊寸前だった。

「ミラー！」

『力の根源たる私が命ずる。真理を今一度読み解き、彼の者を水の刃で切り裂け』
「ドライファ・ウォーターカッター」

俺の言葉を受けたミラーの水魔法によって、かなりの数の魔物が高出力の水刃によって切り裂かれ、絶命した。

あの地獄の遭難生活を共に乗り越えたおかげで、ミラーとの連携プレーは随分と上手くなったのだ。

今みたいに、言葉一つで意志疎通を図る事など朝飯前だぜ。

しかし、まあ……。

「こりゃ、文字通り、焼け石に水かね？」

「……数が多いですね」

魔物は次から次へと溢れだし、ミラが殺した分もすぐに補充される。

それでも、強くなった今の俺とミラなら、大魔法や高範囲スキルを連発して殲滅できるかもしれない。

でも、それはやらない。

目的はあくまでも尚文くん、ひいては原作キャラの観察。

疑われないようにある程度は頑張るけど、頑張り過ぎて原作の流れを破壊でもしたら目も当てられないからな。

「チッ！ お前らは村民の避難誘導をしろ」

「ナオフミ様は……?」

「俺は敵を引き付ける!」

そう言つて、尚文くんは単騎で魔物の群れに突撃して行つた。

さて、俺はどうするか?

言われた通りに避難誘導に回るか、それとも……。

うん。決めた。

「ミラはラフタリアちゃんについて行ってくれ。俺は尚文くんを援護してくる」

「かしこまりました。お気をつけて」

「ユウさん！ ナオフミ様をお願いしますー！」

という事で、俺は尚文くんの援護……という名目で近くで観察する事にした。

やっぱり、観察は主人公の近くでやるのが一番でしょ。

軽く走って尚文くんに追いつき、斧を振り回して、尚文くんの周囲の魔物を薙ぎ払う。スキルが使えないから、一体一体手作業で仕留めた。

……地味にめんどくさいな、これ。

「……なんで来た？」

「いやいや、攻撃力0の人を一人にする程、俺は鬼じゃないって」

不機嫌そうな尚文くんをなだめつつ、斧を振るう手は止めない。

どうも、この魔物達はかなり弱いみたいで、俺はおろかレベルの低い尚文くんすらダメージを与えられていない。

どうやら、いきなり強い波が来るかもという俺の心配は杞憂で終わったらしい。

今回の波は、原作通りの弱い波だ。

それでも、俺達以外にとっては十分な脅威。

尚文くんが必死に魔物を引き付け、俺が蹴散らしても、こっちの劣勢は変わらない。

そこら中に、負傷者が転がっている。

「ゆ、勇者様？」

「ああ……お前ら、俺達が引き付けている間に、さっさと態勢を立て直せ！」
「は、はい！」

尚文くんがそう言うて指示を出すと、戦士達は負傷者を連れて撤退した。
ついでに、負傷してない奴も撤退した。

そして誰もいなくなった。

真面目に戦ってるのは、俺と尚文くんだけだ。

他は全員逃げてしまった。

「おい……！」

「まあ、仕方ないさ。誰だって自分の命は惜しいだろうし」

俺が彼らの立場でも迷わず逃げるね。

だつて死にたくないもん。

今、俺が逃げずに戦ってるのは、単純に逃げる必要がないだけだ。

頑張つてレベル上げをした甲斐があるつてもんよ。

「しかしまあ、こんなに大量の魔物を相手にするのは初めてだなあ。斧一本でチマチマやつてると嫌になつてくるよ」

「お前はミラみたいに魔法は使えないのか？」

「あー……まあ、使えるっちゃ使えるけど……」

一応、魔法を習得する為の水晶玉をアックスフォードに貰ったから、俺も魔法を使えない訳じゃない。

使えない訳じゃないんだけれども……。

『力の根源たる俺が命ずる。理を今一度読み解き、彼の者を風の力で打ち倒せ』

「ファスト・ウィンドブロー！」

俺の放った風の魔法が魔物の一体に直撃し、その体をバラバラに吹き飛ばした。

でも、それだけだ。

わざわざ口に出して詠唱までしたのに、大群の中の一体を倒す程度の効果しかない。

素直に斧振り回してた方がよっぽど手っ取り早い。

「ご覧の通りです」

「使えねえな」

尚文くん酷い！

でも、仕方ないんだ。

俺が覚えた魔法は、特殊な水晶玉を使って覚えたレベルの低い魔法のみ。

そんな弱い魔法じゃ、罵倒されるのも仕方ないんだ。

強い魔法を覚えたければ、魔法文字を学んだ上で、魔法書という本を読んで覚えるし

かないからなあ。

一応、遭難生活中もミラから魔法文字を教わつてたけど、まだ完全には覚えてないし、魔法書を読む機会にも恵まれてない。

そういうのはアックスフオードに戻ってからだな。

少なくとも、今は使えない。

めんどくさいけど、チマチマと片付けるしかないか。

「エアストシールド！ 早く逃げろ！」

「あ、ありがとう」

「きゃあああああああああああああ！」

「シールドプリズン！」

俺が魔物の駆除に精を出している間に、尚文くんはスキルを使ってピンチの人を助けていた。

やさぐれてるくせに、困ってる人を見捨てられないとか、君は根っからの善人でヒーローだな。

まさに勇者。

カッコいいねえ。

でも、そんな尚文くんの事を気に入らない人もいるらしい。

——頑張る俺達の頭上に、火の雨が降り注いだ。

「ツ!？」

「おっと」

斧を回転させて、火の雨を弾いて防ぐ。

多分、俺達の防御力ならノーガードでも大丈夫だったと思うけど、念の為だ。火の雨が俺達の周りにいた魔物を焼き払う。

結果オーライだけど、あんまり良い気分じゃないな。

「おい！ こつちには味方がいるんだぞ！」

「ふん、盾の勇者とその仲間か……しぶとい奴らだな」

俺達を巻き込んで魔法を放ったと思われる人物。

鎧姿の連中（多分、この国の騎士）を引き連れた隊長っぽい人が、俺達を見て吐き捨てた。

その目には、尚文くんへの嫌悪感がありありと浮かんでいる。

嫌われてるねえ、尚文くんよ。

そんな隊長さんの行動と態度にカチンときたのか、近くまで来ていたらしいラフタリアちゃんが剣を振りかぶって隊長さんを襲った。

それを隊長さんは剣で受け止め、つばぜり合いになる。

「お二人に何をなさるのですか！ 返答次第では許しませんよ！」

「お前も盾の勇者の仲間か？」

「ええ！ 私はナオフミ様の剣！ 無礼は許しませんよ！」

「……亜人風情が騎士団に逆らうとでも言うつもりか？」

「守るべき民を蔑ろにして、味方である筈のお二人もろとも魔法で焼き払うような輩は、騎士であろうと許しません！」

「五体満足なのだから良いじゃないか」

「良くありません！」

隊長さんとラフタリアちゃんが言い合いを始めた。

ラフタリアちゃん、殺意マックスだ。

よく見れば、少し離れた所でミラも冷たい殺気を放ちながら騎士達を睨んでいた。

騎士達も騎士達で、反抗的なラフタリアちゃんを囲むように展開して剣を抜く。

災害の真つ最中だつてのに、よくやるわ。

「シールドプリズン！」

「な、貴様……」

その時、尚文くんが盾の檻を作り出すスキルで隊長さんを閉じ込めた。

そして、殺気の籠った視線で騎士達を睥睨する。

「……敵は波から這いずる化け物だろう。履き違えるな！」

尚文くんの正論に、騎士達はバツが悪そうに顔を逸らした。どうやら、自分達が悪い事やってる自覚はあるみたいだな。

「犯罪者の勇者が何をほざく」

しかし、反省はしてないっぼい。

凄いなー。

その反骨心はどこから来るんだろう？

ああ、宗教感か。

あとは、ちっぽけなプライドかね。

「なら……俺達は移動するから、残りはお前達だけで相手をするか？」

無駄話してる間に、また魔物が群がってきた。

斧で叩き潰すも、全ての攻撃は防げず、何体かが尚文くんを襲いかかる。

その全てを、尚文くんは涼しい顔で耐えていた。

ノーダメージだ。

さすが盾の勇者。

これなら俺の助けはいらないな。

でも、それは尚文くんに限った話だ。

騎士の皆さんじゃノーダメージとはいかないだろうね。

そして、ちよつとでもダメージを受ければ、あとは数の暴力に踏み潰されて死ぬ。

それが理解できたのか、騎士の皆さんは青い顔をしていた。

そんな彼らを見無視して、尚文くんはラフタリアちゃんに話しかける。

「ラフタリア、避難は済んだのか？」

「いえ……まだです。もう少しかかると思っています」

「そうか。じゃあ早く避難させておけ」

「ですが……」

「味方に魔法をぶつ放されたが……問題は無い」

その時、尚文くんがチラツと俺を見た。

フフン。

感謝してくれてもいいんだぜ！

そんな気持ちでウインクしたら、すぐに目を逸らされた。

あれ？

「ただ……俺が手も足も出せないと舐めた態度を取っているのなら、——殺すぞ。どんな手段を使つても。最悪、お前らを化け物のエサにして俺達は逃げてもいいんだぞ」

尚文くんの脅しが効いたのか、騎士達は息を呑んで引き下がった。

やっぱり君達も命が惜しいか。

わかる。わかるよ、その気持ち。

その後、スキルの効果時間切れで檻から解放された隊長さんが、懲りずに尚文くんに
噛みついたけど、

「そうか、お前は……死ぬか？」と脅されて、他の騎士同様引き下がった。

結局、全員保身に走ったのだ。

カツコ悪い事この上ないが、人間なんてそんなものって事やね。

そして、数時間後。

何事もなく波は鎮圧された。

23 話

波が去った後、俺達は助けた村人達から感謝されまくった。

特に感謝されていたのは、直接的に命を救った尚文くんだ。

もつとも、当の本人はずっとしかめっ面だったけど。

まあ、ラフタリアちゃんは素直に喜んでいたし、別にいいだろう。

そして、この後はお城で戦勝会だそうだ。

尚文くんは行きたくなさそうだったけど、報酬が出るといふ事で、しぶしぶ出向く事にしたっぽい。

尚文くん、貧乏だからなあ。

——でも、俺達と一緒にには行かない。

「尚文くん」

「なんだ？」

リユート村から城下町へと戻る道中で、俺は話を切り出した。

「無事に波を乗り越えた事だし、俺達はここらでおさらばするよ。突然だけど、お別れの

時間だ」

「! ……そうか」

尚文くんはちよつと驚きながらそう言った。

でも、それ以上は何も言わなかった。

……え?

それだけ?

「ありや? もつと驚かないの? なんていきなり!? とか言うかと思つたのに」

「言うか。俺達は元々そういう関係だろ。短期間の雇用契約。短い付き合いになると言つたのはお前だ」

「えー……。それでも、もうちよつと寂しがってほしかつただけど……。ドライだなあ、尚文くんは」

「何とでも言え」

まったく。

そんな薄情者はおいといて、ラフタリアちゃんはどうかだろう?

別れを惜しんだりしてくれないかな?

「ミラさん……! 短い間でしたが、本当にお世話になりました……!」

「お礼はいりません。仕事の一環ですから」

おおう……。

マジか。

別れを惜しんではいるけど、どう見てもミラに対してだけですよ。

そりゃ、ミラはラフタリアちゃんに剣術を教えたりしてただけどさあ。

それでも、俺の事をアウトオブ眼中にするのは酷くね？

俺だつて尚文くんを助けたりしたんだけど……。

とか思っていたら、ラフタリアちゃんは俺に向かつても頭を下げた。

「ユウさんも本当にお世話になりました。お二人がナオフミ様の味方してください」

事、決して忘れません。本当に本当にありがとうございました……！」

わあ……。

前言撤回。

めっちゃ感謝されとる。

良い子だ。

尚文くんと違って、めっちゃ良い子だ。

こんな良い子と、この先敵対するかもしれないと思うと胸が痛……くないな。

びつくりするくらい心が痛まないわ。

カースシリーズの精神汚染は深刻だ。

でも、それはそれとして、こうも素直に感謝されると照れるね。

「……さて、これ以上一緒に居ても尚文くんが寂しくなるだけだろうし、そろそろ行くね」

「おい」

「じゃあね二人とも！ 縁があつたら、またどこかで会おう！」

そうして俺達はパーティーを解消し、別れた。

ここから先は、お互い別々の道を進む。

俺は原作とは違う道を行くつもりだ。

その果てに、尚文くん達と敵対する事もあるだろう。

つまり、これは別れではない。

別離だ。

もう二度と、仲間として会う事はないかもしれない。

——さらばだ、尚文くん。ラフタリアちゃん。

そして俺とミラは、メルロマルクを去った。

——というのは嘘だ。

俺は今、メルロマルクのお城にいる。
時刻は夜。

例の戦勝会が開かれる時間。

そこに俺は忍び込んだ。

斧を隠密効果のある片手サイズの小きな斧に変え、「クローキングアックス」という気配を消すスキルを使って、観客の中に紛れ込んだのだ。

ちなみに、ミラはいない。

あいつは目立つ美少女だから、城下町の酒場で待ってもらっている。

正直、ここまでの事をして、俺の隠密能力はそこまで高くはない。

近づかれれば余裕でバレる。

それでも、群がる観客の中に紛れてしまえば、そう簡単には見つからないだろう。

なんでこんな事をしているのかと言うと、この戦勝会において、原作でかなり印象に残るイベントが起こるからだ。

アックスフォードに戻る前に、最後にこれだけは確認しておきたかった。

そして、戦勝会で出される豪華な料理が食べたかった。

あ、この鳥肉みたいな料理うめえ。

日本では食べた事ないお味。

何の肉だろ？

フィロリアル？

「おい！ 尚文！」

そうして、俺が豪華な料理を存分に堪能していた時、会場中に響く大きな声が聞こえてきた。

これは槍の勇者こと元康くんの声だ。

声の元を見れば、元康くんが尚文くんに向かって、片方だけ外した手袋を投げつけているところだった。

……始まったか。

「決闘だ！」

「いきなり何言ってるんだ、お前？」

「聞いたぞ！ お前と一緒にいるラフタリアちゃんは奴隷なんだってな！」

そこから、元康くんと尚文くんの言い合いが始まった。

「人を隷属させるさせるなんて、人として許せん！」と怒り心頭な元康くんに対して、尚文くんは終始不機嫌な感じで「俺が奴隷を使って何が悪い？」とか言っていた。

お互いに自分の意見を譲らず、議論は平行線を辿った。

そして、議題は決闘うんぬんの話に戻る。

「勝負だ！ 俺が勝ったらラフタリアちゃんを解放させる！」

「なんで勝負なんてしなきゃいけないんだ？ 俺が勝ったらどうするんだ？」

「そんな時はラフタリアちゃんを好きにするがいい！ 今までのように！」
「話にならない」

尚文くんは怒れる元康くんを無視して立ち去ろうとした。

まあ、勝負したところで、尚文くんには一切のメリツトがないからね。

でも、それは許されなかった。

「モトヤス殿の話は聞かせてもらった」

人混みを切り裂いて、豪華な服を身に纏った一人の老人が、尚文くんと元康くんの元に現れた。

原作知識の通りなら、あの人はこの国メルロマルクの国王様だ。

周囲の人達の反応からして、その情報は間違っていないっぽい。

ついでに言うと、尚文くん、というより盾の勇者が大っ嫌いな人で、この国での尚文くんの冷遇に一役買ってるって話だ。

「勇者ともあろう者が奴隷を使っているとは……噂でしか聞いていなかったが、モトヤス殿が不服と言うのならワシが命ずる。決闘せよ！」

「知るか。さっさと波の報酬を寄越せ。そうすればこんな場所、俺の方から出て行ってやるよ！」

……あの尚文くんへの接し方を見るに、その情報も間違っただけさそうだな。

王様が尚文くんを見る目には、隠しきれない嫌悪感が浮かんでいる。

こんだけ嫌われて嫌がらせまでされれば、そりゃ、尚文くんも反発するだろうよ。

そして、王様の行動は嫌うだけに留まらなかつた。

彼はこの場で、尚文くんに特大の嫌がらせをしたのだ。

王様がため息を吐きながら指を鳴らす。

すると、兵士達が尚文くんを取り囲み、同時にラフタリアちゃんを押さえつけて拘束した。

「ナオフミ様！」

「……何の真似だ？」

「この国でワシの言う事は絶対！ 従わねば無理矢理にでも盾の勇者の奴隷を没収するまでだ」

「……チツ！」

王様は権力という理不尽な力を使って、尚文くんを決闘の場に引き摺り出す。

尚文くんの心中は穏やかじゃなさそうだ。

怒りと殺意が心の中で暴れ狂っている事だろう。

そうして逃げ道を塞がれた尚文くんは、元康くんと決闘せざるを得なくなつた。

尚文くんの攻撃力は0に等しい。

普通に考えれば、尚文くんに勝ち目はない。

決闘という名の公開処刑が始まった。

——どこまでも、原作知識の通りに。

24話

「では、これより槍の勇者と盾の勇者の決闘を開始する！ 勝敗の有無はトドメを刺す寸前まで追い詰めるか、敗北を認める事」

城の中庭。

大勢の観客が見物する中で、審判が決闘のルールを説明する。

俺はご馳走を口に運びながら、その光景を見守っていた。

「では——勝負！」

「うおおおおおおおおおお！」

「でりやあああああああああ！」

俺が高級なお肉をモシヤモシヤしてる間に、決闘が始まった。

元康さんの苛烈な攻撃を、尚文くんは前進しながら必死に耐える。

そして、槍の間合いの内側まで詰め寄り、元康さんの顔面に渾身のパンチを放った。

しかし、そこは攻撃力0のへなちよこパンチ。

仮にも勇者である元康さんにダメージを与えられる道理はない。

だが、尚文さんの攻撃はこれで終わらなかった。

尚文くんがマントの下に隠していた何かを取り出し、元康くんの顔面に引っ付けた。
「ふー」

元康くんが小さく悲鳴を上げる。

その顔には、まるで風船のような姿をした見覚えのある魔物が噛みついていていた。

奴の名はバルーン。

俺がこの世界で初めて戦った魔物であり、ぶつちやけ雑魚中の雑魚だ。

でも、そんな雑魚モンスターを、尚文くんはマントの下に隠して、恫喝用の攻撃手段として使っていた。

もちろん、雑魚故に元康くんに与えるダメージは微々たるものだ。

平時であれば、すぐに振り払って終わりだっただろう。

しかし、尚文くんに押さえつけられている今の元康くんには、バルーンを振り払う事ができない。

そうこうしている内に、尚文くんは更に追加のバルーンを取り出し、今度は元康くんの股間に投げつけた。

「オラオラオラ！」

「グ……てめえ！ 何の真似だ！」

「どうせ勝てないなら、精一杯嫌がらせしてやるよ！ ターゲットはモテ男の命である

あれ、下手したらトラウマになりそうだ。
少なくとも、俺は絶対やられたくないな。

「ぐあつ……!」

しかし、そんな尚文くんの快進撃もここまで。

客席から飛来した風の魔法が、元康くんのにし掛かって拘束していた尚文くんを直撃し、その体勢を崩した。

あれは俺も使っていた魔法「ウインドブロー」だ。

それを放ったのは、例の尚文くんを陥れた世界の敵こと、通称ビッチ。

奴は、してやったりと言わんばかりの笑顔で、尚文くんに向けてあつかんべーをして
いた。

「てめええええええ!」

尚文くんがそれに気づいて怒りの咆哮を上げるが、時すでに遅し。

尚文くんがよろめいた隙に拘束を外し、バルーンを全て倒した元康くんが、反撃の一
撃を繰り出す。

それを諸に食らって尚文くんは倒れ、その首筋に元康くんの槍が添えられた。

「はあ……はあ……俺の勝ちだ!」

「何が勝ちだ、卑怯者!」

「何の事を言ってるやがる。お前が俺の力を抑えきれずに立ち上がらせたのが敗因だろ！」

「お前の仲間が決闘に水を差したんだよ！ だから俺はよろめいたんだ！」

「ハッ！ 嘔吐きが負け犬の遠吠えか？」

「ちげえよ！ 卑怯者！」

尚文くんが吠えるも、判定は覆らない。

ビッチの横槍を目撃したかもしれない観客は口をつぐみ、尚文くんの援護をしてくれる者は誰一人としていない。

それどころか。

「罪人の言葉など信じる必要はない。槍の勇者よ！ そなたの勝利だ！」

王様が元康くんの勝利を宣言した事で、完全に決着がついてしまった。

尚文くんの敗北という、彼らが望んだ結果だけを残して。

「さすがですわ、モトヤス様！」

その時、ビッチが元康くんを駆け寄った。

そして、白々しく元康くんを褒め称える。

「ふむ、さすがは我が娘、マルティの選んだ勇者じゃ」

そこに投下される王様の爆弾宣言。

なんと、ビッチは王様の娘だったのだ!

「な、んだとっ……!?!」

尚文くんも大層びっくりしてる。

自分を嵌めた相手が国王の娘、つまり王女だったというのは衝撃の事実だろう。要するに、尚文くんは国ぐるみで嵌められた。

それを認識した訳だからね。

「いやあ……俺もあの時は驚いたよ。マインが王女様だなんて、偽名を使って潜り込んでたんだな」

「はい……世界の為に立候補したんですよ♪」

呑気に話すビッチと元康くんを見つめる尚文くんの視線がヤバイ。

どう見ても、殺意の波動に目覚めちゃってますよ。

原作知識の通りなら、たしかこのタイミングでカースシリーズ「憤怒の盾」を目覚めさせたんだっけか。

つまり、「傲慢の斧」を出した時の俺に近い精神状態って事だ。

精神異常者の道へようこそ。

「さあ、モトヤス殿、盾の勇者が使役していた奴隷が待っていますぞ」

そして、傷ついた尚文くんの見ている前で、ラフタリアちゃんに刻まれた奴隷の証、

主人の命令に逆らえなくなる魔法「奴隷紋」が解呪され、消え去る。これでもう、ラフタリアちゃんは尚文くんの奴隷ではなくなった。

「ラフタリアちゃん！」

元康くんが嬉しそうな顔でラフタリアちゃんに近づく。

そんな元康くんをラフタリアちゃんは……思いつきりビンタした。

「この……卑怯者！」

「……え？」

呆気にとられる元康くんに向かって、ラフタリアちゃんは結構キツイ言葉の雨を降らせた。

ラフタリアちゃんも相当頭にキテるらしい。

言葉攻めには容赦がなかった。

そして、ラフタリアちゃんはぶっ壊れる寸前の尚文くんに近づいて行く。

「く、来るな！」

案の定、尚文くんはラフタリアちゃんを拒絶した。

もう何も信じられないかと思ってそう。

このままだと尚文くんは俺と同じ……いや、俺以上に精神を病んで狂っていくだろう。

——でも、俺と違って、尚文くんには狂ってしまふ前に救いの手が差し伸べられた。ラフタリアちゃんが狂乱する尚文くんの手を握り、優しく抱きしめて慰める。

尚文くんがここまで追い詰められる原因となった強姦冤罪。

「俺はやってない！」と叫ぶ尚文くんを、ラフタリアちゃんは肯定した。

決して口先だけの言葉ではなく、俺の目から見てもわかるくらいに心を籠めて「信じている」と言っていた。

そうして優しくされて、ついに感情が抑えきれなくなつたのか、尚文くんは泣いた。ラフタリアちゃんに抱き付きながら、わんわんと泣いていた。

その後、どこぞで観戦していたらしい練くんと樹くんが出て来て、ビッチが決闘に横槍入れたという事を証言し、

判定が覆つて、決闘は元康くんの反則負け。

つまり尚文くんの勝ちという形で決着した。

尚文くんは泣き疲れたのか、ラフタリアちゃんに抱き付いたまま眠ってしまった。

そこまで見届けた俺は、城から抜け出した。

見たかったものは見れた。

もう、ここに用はない。

今度こそ本当にさよならだ。

「じゃあね尚文くん。ラフタリアちゃん。——次は敵として会おうぜ」

最後に俺は、二人のいる城を見上げながら小さくそう呟き、その場から立ち去った。

25話

「よつ、お待たせ」

「お帰りなさいませ。ご覧になりましたか？」

「ああ、バツチリ。てことで、もうメルロマルクに用はない。行くぞ」

「かしこまりました」

酒場でミラを回収し、俺達は城下町の外へと向かって歩く。

その道中で、ミラが話を振ってきた。

「それで、どうでしたか？ 知識の確認の方は」

「いやー、もうびつくりするくらい知ってる通りの流れになったよ。ここまでくると不気味だな」

「では、知識を信じる事にしたのですか？」

「いんや、疑う事はやめない。大事なところで足下搦われても困るからな」

「左様ですか」

ミラに向かって話しながら、自分の中での原作知識に対するスタンスを固める。

今回、いくら原作に影響を与えないようにおとなしくしていたとはいえ、俺達という

イレギュラーがいたにも関わらず、原作知識は怖いくらい正常に作用した。

細かい台詞まで記憶している訳じゃないから断言はできないけど、それでも俺が覚えている範囲では、原作との差異はほとんどなし。

全部が全部、俺の知ってる通りになった。

だが、決して油断してはならない。

昔、こんな話を聞いた事がある。

『優れた詐欺師は、九割の真実の中に一割の嘘を混ぜ込む』

つまり、この原作知識も、大部分は本当でも肝心なところに嘘が混ざっており、思わぬところで足を掬われて失敗する……なんて事が起こり得るのだ。

それを避ける為には、今まで通り疑い続ける必要がある。

疑い、自分の目で確認し、あるいは情報を集めて、知識を多角的な面から見て検証する。

知識に騙される確率を下げたいのなら、それが一番確実だろう。

結局、俺のやる事は変わらない。

でも、今回の件で原作知識の有用性もまた確認できた。

大部分が本当かもしれないという事は、やはり大きなアドバンテージになる。

原作に出てくる事象の数々を上手く利用できれば、破滅の運命を覆す事も十分に可能

だろう。

俺の勝利条件である生存という未来に光明が見えた。

「ま、その前に波だな」

尚文くん達と冒険してたせいで、アックスフォードの波まであと三日くらいしかない。

それまでに戻って、王様あたりに話をつけて、ある程度の準備を整えておきたい。

アックスフォードを信用する訳じゃないけど、斧教なんてけつたいな宗教がある以上、一番利用しやすい国はあそこだろう。

計画の準備をする上で、国の協力はあつた方が良い。

利用し、利用されるズブズブな関係になればベスト。

それが無理そうなら、利用するだけしてポイだ。

ミラには悪いが仕方がない。

城下町を出て、人目につかない場所を目指して進む。

今は夜だからどこにも人目なんてないけど、できれば昼間でも目立たない場所に行きたい。

そして、森の浅い所におあつらえ向きの死角を見つけ、そこを転送スキルのポイント

に指定。

これで、転送スキルを使えば、いつでもこの場所に来る事ができるようになった。

メルロマルクは原作序盤の舞台だ。

また用事ができる事もあるだろう。

すぐに来れるようにしておいて損はない。

「ポータルアックス！」

そして、例の肝心なところで役に立たないスキルを使った。

前科があるもんだから、ちゃんと発動してくれるか不安だったけど、どうやら今回は大丈夫みたいだ。

転送スキルは正常に起動し、俺とミラを設定済みのポイントの一つ、アックスフォー
ド王城、召喚の間へと運んだ。

目に入ったのは、この世界に来て初めて見た光景。

俺が斧の勇者として召喚された場所。

でも、あの時とは違って召喚の間には誰もいないし、印象的だった魔法陣も光を失っている。

とりあえず召喚の間を出て、ミラの案内で城内を歩く。

目的地は王様の執務室だ。

今は夜だが深夜じゃない。

この時間なら、まだ王様は執務室にいるだろうとミラは予測した。

目的地にたどり着き、コンコンと、ミラが執務室の扉を叩く。

「誰じゃ？」

「ミラです。斧の勇者様をお連れしました」

「！ わかった。入るがよい」

入れと言うので、遠慮なく扉を開けて中に入った。

約一ヶ月ぶりに王様と対面する。

前と変わらず、立派なお髭だった。

さて、こっちの王様はメルロマルクの王様よりも話のわかる人だと嬉しいけど、果たしてどうか。

前に抱いた印象の通りなら、少なくともあつちの王様よりはマシだと思うけど、それでも相手は一国の国王という政治家のトップだ。

ついでに、この王様は斧教の教皇を兼任する聖職者でもある。

お腹の中が真っ黒でも何ら不思議ではない。

まずは状況を説明して、その後、協力の要請をしないとな。

ともかくにも話し合いが必要だ。

——さあ、暗躍を始めようか。

第三章 暗躍編

26話

「——ふうむ、なるほど。ドラウキューア山脈で行方不明になられたと聞いた時には心臓が止まるかと思いましたが、まさかそんな事が起きていたとは……。アルバとパール殿がのう……。にわかには信じられませぬ……。」

それに鞭の勇者殿、いやタクトがしつこく斧の勇者様との対談を希望してきたのはそれが理由か。復讐でもするつもりかのう」

王様に一通りの事情を話し終え、一息つく。

いつの間にか給仕に回っていたミラが紅茶を入れてくれたので、遠慮なくいただいた。

飲み終えた後にミラの絶望的な猫理スキルの事を思い出して冷や汗が出た。

でも、どうやら紅茶を入れる等のメイドとしての技術レベルは高いらしく、紅茶は普通に美味しかった。

安心したけど、無駄にドキドキしてしまった。

「そして、斧の勇者様はタクトのような輩の目から逃れる為、できるだけ秘密裏に動きた

いと」

「そういう事です。基本的に旅に出ていて連絡が取れないって事にでもしといてください」

「かしこまりました。斧の勇者様の御心のままに」

王様は俺の要求を快く受け入れてくれた。

これが口約束で終わるといふ可能性もあるけど……まあ、ひとまずは信じよう。裏切られそうになったら、殺すなり、逃げるなりすればいいし。

で、本題はこつからだ。

今の要求は軽いジャブみたいなもの。

アックスフォードにはもつともつと役に立つてもらわないと困る。

俺は次の要求を口にした。

「ところで、この国にも諜報部隊ってあるんですか？」

「ええ。『影』と呼ばれる部隊がありますが、それが何か？」

あ、この国の諜報部隊も影って名前なんだ。

原作知識ではメルロマルクの諜報部隊がそう呼ばれてたけど、案外、この世界において『影』っていうのは『忍者』とか『スパイ』みたいな共通の概念なのかもしれない。

……いや、そんな事はどうでもいいんだよ。

「じゃあ、その影を使って色々と情報を集めてください」

「情報?」

「そう。他国の勇者の動向、過去の勇者の伝説、封印された魔物の伝承。そんな感じの情報を色々調べて、俺に教えてほしいんです」

「……それが斧の勇者様にとって必要な事なのですか?」

「そういう事になりますね」

「あいわかりました。お任せください」

よし!

第二関門クリア!

これで俺は、アックスフォードという国の力によって、大量の情報を入手する事ができるようになった。

原作知識の検証も、一人でやるよりは遥かに効率が良いだろう。

……大事な情報が人伝になっちゃうのが不安だけど、こればかりは仕方がない。

欲しい情報の量は膨大であり、俺一人で全て集めるなんて土台無理な話なのだから。情報の確度を落としてでも、人手を使って人海戦術をやった方が良い。

それでも、特に重要な情報の最終確認だけは怠らないようにしよう。

「それで、他には何かありますか?」

「いえ、今のところはないですね。

強いて言うなら、他国の勇者の動向、——そして『四霊』という魔物の情報を最優先で集めてほしいって事くらいです」

「四霊、ですか？ ……よくわかりませぬが、斧の勇者様が望まれるのならば善処いたします」

「ええ。よろしくお願いします」

さて、話してのうちに夜も更けてきたし、そろそろお開きにするかね。

明日は波に備える為に、アームストロング大佐あたりと会って作戦を決めとかなきゃいけないし。

……でも、せつかくだ。

もう一つだけ確認しておこう。

「王様。最後に一つだけいいですか？」

「一つと言わず、いくらでも仰っていたいただいて構いませんが、なんですか？」
なんとも太っ腹だなこの王様。

前に言ってた「最大の援助」をするって言葉は嘘でも何でもないって事だ。
さすがは斧教教皇。

——でも、これを聞いた後も、その態度を崩さずにいられるか？

「あなたは、いやアックスフオードは。

俺の為に、ひいては世界を救う為に、嫌われ者になる覚悟がありますか？

世界の為に許されざる大罪に手を染め、世界中の憎悪を受けるか。

あるいは、大罪を犯しながらも口をつぐみ、罪の意識と向き合いながら生き永らえるか。

そんな重責を背負う覚悟がありますか？」

「それは……どういう意味ですか？」

「……まだ確証がないので明言は避けます。でも、もしかしたら、そんな決断を迫られる日が来るかもしれない。それも近いうちに。……だから、その時にどうするのか、それだけは考えておいてください」

それだけ言って、俺は立ち上がる。

「では、失礼しますね。明日は忙しくなりそうですから。」

あ、波に向けた話し合いがしたいので、明日アームストロングさんあたりと会える予定を作っておいてくださると助かります」

「え、ええ。かしこまりました」

「ではでは」

そうして俺は執務室から立ち去り、ミラに案内されて、今日の寝床である王様が用意

してくれた城の一室に向かう。

その途中で、俺はミラに声をかけた。

「ミラ。前にお前は言つたよな。俺が悪い事をやり始めたら、そこに大義がない限りは止めるって」

「……はい」

「じゃあ、俺が大義の為に悪い事をやり始めたらどうする？」

「……………」

その問いに、ミラは答えなかった。

迷っているのだろう。

自問自答の末に、ミラがどんな答えを出すかはわからない。

それは王様にも言える事だ。

決断の結果、俺の敵となる可能性は十分にある。

でも、必要な問いだったんだ。

早まったかなあ、という思いは確かにある。

伝えるのは、もうちよつと後でも良かったかもしれないという若干の後悔もある。

それでも、これは計画の為に避けては通れない道だった。

遅かれ早かれ、多分いつかはこうなった。

なら、迷う時間がある今の内に言っちゃった方がいい。

それで駄目だった時、軌道修正する時間だつて欲しいし。

「……こちらが、ユウ様のお部屋になります」

そうこうしている内に、部屋の前までたどり着いてしまった。

まさかミラと同じ部屋で一緒のベッドに寝るといふ訳にもいかないので（遭難生活中はさんざん一緒に寝泊まりしてたから今さらな気もするが）今日はこちらでお別れだ。

「じゃあ、お休み、ミラ」

「……はい。お休みなさい、ユウ様」

そうして俺は部屋に入り、ミラと別れた。

さて、明日はアームストロング大佐と波についての話し合いだ。

早く寝て、体力を温存しなくては。

そう思うも、この日はなかなか寝付けなかった。

27話

「ガツハツハツハ！ 無事で何よりだぜ勇者様！」

「勇者様あ！ 心配したであります！」

翌日。

この国を襲う波が二日後に迫ったこの日。

その対策を話し合う為にアームストロング大佐と会談をする予定だったんだけど、王様の計らいによって、国の主だった戦力である他の重鎮も、この会議室のような部屋に召集された。

騎士団長のアームストロング大佐。

飛竜兵団団長のソラちゃん。副団長のジュピターさん。

そして、俺のお付きとしてミラがいて。

あともう一人、知らない人がいた。

「コホッ……はじめまして斧の勇者様。私はアックスフォード魔術師団団長……コホッ……シルベスター・ストロームと申します。コホッ……コホッ、コホッ……コホッ……ゴホッ！ゴホッ！ゴホッ！ゴホッ！」

魔術師団団長と名乗ったその人は、なんとも不健康そうな中年男性だった。

しかも、いきなり咳き込み出した。

……この人、戦力として使えるのか？

すぐにもベッドの中に放り込んだ方が良いんじゃないだろうか？

「えつと……大丈夫ですか？」

「ご心配なく。ただの持病です。……コホツ」

うーん……。

まあ、本人が大丈夫というのなら大丈夫という事にしておこう。

それに、この人が本当に戦力にならないただの病人なら、戦闘集団の団長なんて地位は与えられていない筈だ。

素直に大きな戦力として計算しておこう。

「全員が揃いましたので、これより波に対する緊急対策会議を始めさせていただきます」
そして、ミラが司会進行を務め、会議が始まった。

ちなみに、ミラの顔はいつもの無表情だ。

昨日の夜に見た迷いはどこにもない。

一晩考えて答えを出したのか、それとも迷いを顔に出していないだけか、俺にはわからない。

ミラの鉄面皮を突破して、その奥の感情を伺う事はできない。だからこそ、今は前と変わらずに接する。

仕事熱心なミラの事だ。

そうすれば、あいつもまた表面上は前と変わらずに俺と接するだろう。

今はそれでいい。

それはそれとして、今は波への対策を話し合う場だ。

とりあえず意見があるなら言うべきだろう。

俺はこの手の会議のお約束に従い、きちんと手を上げてから発言した。

「とりあえず勇者である俺の戦力分析から話しますね。」

俺はこの数週間の間に大きくレベルを上げ、ひよんな事から他国の波に参加して来ま
した。

その時の経験から考えて、二日後に迫った波が、その他国の波と同程度の規模ならば、
——俺一人で楽勝です。5分とかからずに殲滅できるでしょう」

「なんと!!? 凄まじいでありますな! さすがは我らが神であります!」

「ガツハツハツハ! 言うようになつたじゃねえか勇者様!」

「コホツ……それが本当ならば頼もしい限りですな」

俺の語った話は、概ね好意的に受け止められた。

正直、懐疑的な目で見られるかと思つてたけど、まさかの全肯定にちよつとびっくりだ。

いや、狂信者のソラちゃんと、頭の中まで筋肉で出来てそうなアームストロング大佐はともかくとして、

冷静そうなジューピターさんとシルベスターさんは少し疑つてただけど、ミラが特に反論せずに軽く頷いた事で、俺の言葉を信じてくれたっぽい。

それでも、勇者がどんだけ戦力として期待されてるのが、よくわかる反応だ。

しかし、俺が暴れるという作戦には重大な欠点がある。

「……でもまあ、それだけ派手に暴れば当然目立つ訳で。ドラウキユーア山脈で襲撃してきた連中の同類が寄つて来る可能性はあるんですよねえ」

「その話は聞いているであります！ 腐れ背信者どもと鞭の勇者のクソ野郎でありますな！ 勇者様のお命を狙うとは不届き千万！ もし見かけたら、私とグレゴリオのコンビで滅殺してやるでありますよ！」

「隊長、そんな事したらフォーブレイと戦争になるのでやめてくださいね。勇者様にご迷惑がかかっています」

「む!? それはマズイでありますな！ ……仕方ないけど自重するであります」

おお。

ソラちゃんが暴走しそうになったけど、しっかりとジュピターさんが宥めてくれた。保護者や。

手綱が付いてるっぽいし、あの二人は大丈夫だな。

そして、ジュピターさんが言った事も正論だ。

たしかに、俺はタクトが憎い。

できる事なら、この手で殺してやりたい。

けど、それをすればタクトの所属国である世界最大の国、フォーブレイが敵に回る。

そうになったら面倒なんてもんじゃないぞ。

よって、タクトへの復讐は後回しだ。

世界が平和になった後にも、ひっそりと暗殺しよう。

そうじゃなくても、原作通りに行けば、タクトは尚文くん達が殺してくれる。

そういう意味でも、タクトには下手に手を出さないのが賢明だろうな。

話が逸れた。

だから、今は波への対処が最優先だつちゅうねん。

「——それで、俺が波で暴れるべきか否かですけど、どうしましょうか？ 皆さんの意見を聞かせてください」

「普通に戦えば良いんじゃないかねえか？」

「力は使ってなんぼだろー！」

脳筋の騎士団長が即答したけど無視。

他の意見はありませんかー。

「コホツ……その脳筋に賛同する訳ではありませんが、私も勇者様がご活躍されると
いう案には賛成です。」

これは勇者様が召喚されてから最初の波。そこで武勇を示す事ができれば、兵達の信
頼を一気に得る事ができるでしょう。

襲撃者の問題を棚上げしてでも、やる価値はあるかと」

シルベスターさんが、どこぞの脳筋とは違って、とても理知的で説得力のある意見を
出してくれた。

これだよ。

こういう意見を求めていたんだよ。

それでこそ、会議なんて開いた価値があるってもんよ。

シルベスターさんの提案は非常に魅力的だ。

アックスフォードの兵士達の好感度は上げた方が良い。

計画の最終段階では彼らの協力が必要だ。

だが、計画の内容が外道すぎるから、自分から協力させるのは至難の技。

でも、俺への好感度カンストの状態で、「苦悩の果てに望まぬ決断をする悲劇の英雄」

みたいな小芝居でもすれば、もしかしたら付いてきてくれるかもしれない。

これはもう、この作戦に決定という事で、残りの時間は懸念事項を潰す案を考えた方が良いんじゃないだろうか？

「正直かなり心惹かれる提案ですね。反対意見がなければ決定して詳細を詰めたいんですけど、どうですか？」

「俺は最初から賛成だぜ！ まあ、根暗の意見が採用つてのは気に入らねえけどな！ ガツハツハツハ！」

「私も賛成であります！ 我らが神が御威光を示されるというのなら否などないでありますよー！」

アームストロング大佐とソラちゃんは賛同。

ジュピターさんはソラちゃんの保護者として来てるので、ソラちゃんのフォロー以外では口を挟まず、ソラちゃんの決定に従う。

シルベスターさんは発案者なので、言うまでもなく賛成だ。

よつて、この場でまだ意見を言っていないのは、あと一人だけ。

「……皆様の意見が一致しているのならば、それで宜しいかと存じます」

その最後の一人、ミラも消極的ながら賛同を示し、これによつて今回の波へのスタンスが決まった。

残りの時間は、万が一波が予想より強かった場合や、裏切り者が出た場合、タクトなどの襲撃者が襲って来た場合、などなど様々な状況への対処法の詳細を話し合い、会議は解散となった。

——その二日後、アックスフォードに波がやって来た。

28話

波までの二日間。

俺は自分の戦力向上に努めた。

具体的には、武器に吸わせられそうな物を片っ端から放り込み、新しい斧を解放させる作業を行った。

当然、強化方法に使う特殊な素材も含めてだ。

二日のできる強化なんて、それが限界だった。

それでも、今までやれなかった事をやっただけあつて、相当強くなったけども。

そして、現在。

00:05

俺の視界に表示されている波へのカウントダウンが、残り5分を切る。

今、俺はドロップで生み出した立派なフルプレートメイルに身を包み、今回の波に挑むアックスフォードの兵士達の前に立って演説を行っていた。

威風堂々。

思わずミラが惚れるくらいカッコいい、皆が理想とするような『斧の勇者』を演じた

つもりだ。

会場は大興奮。

兵達の士気は最高潮。

この国は本当に敬虔な斧教徒が多いらしく、俺の雄姿に感涙する奴までいる始末だった。

そんな伝説のライブも終わりの時間だ。

俺は最後に締め言葉の言葉を口にした。

「——以上だ。波までの時間はあと僅か。諸君、俺と共に戦おう！ 厄災の波を、我々の手で撃ち破るのだ！」

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！』

響く歓声。

鳴り止まぬ拍手。

OK。掴みはバツチリだ。

この調子で人望集めれば、ホントに地獄の底までお供してくれるかもしれない。

頼もしい限りだ。

00:01

そして、波の時間がやって来る。

「行くぞ！」

『オオッ！』

00:00

ビキン！

メルロマルクの時と同じく、カウントダウンが0になると同時に、大きな音が世界に鳴り響いた。

波が始まり、俺達はその発生地点へと飛ばされる。

尚文くん達と組んでいた時とは違い、今回は騎士団をはじめとした国の兵士達と一緒にだ。

四聖勇者達は使っていないかったけど、事前に登録さえすれば、波への参加人数に上限はない。

何人でも一緒に連れて行けるのだ。

そうして飛ばされた場所。

その空は、つい三日程前に見た時と同様にヒビ割れ、不気味なワインレッドに染まっていた。

そこから沸き出す大量の魔物も含めて、あの時と何ら変わらない。

せいぜい、魔物の種類が多少変わった程度だ。

俺は魔物の群れと対峙するように、静かに兵士達の前へと進み出た。

斧をプライドアックスに変え、腰だめに構える。

そして、初手から必殺スキルを放ち、殲滅を開始した。

「ダークスラツシャーX！」

強化された事によって、前とは比べ物にならない破壊力となった闇の斬撃が全てを薙ぎ払った。

これだけで、見えている範囲の魔物が全滅した。

兵士達が大歓声を上げる。

だが、まだ終わっていない。

波の中から追加の魔物が出てくる。

その中には、空を飛ぶ一際巨大な魔物の姿もあった。

ここ数日の間に習得した鑑定スキルを、その魔物に向かって使う。

次元ノ荒鷲あらかし Lv60

こいつだけ、他の魔物よりレベルが高い。

無駄に凶体もデカいし、多分こいつが今回のボスだろう。

すぐに撃ち落としてやる。

「シルベスターさん、地上の指揮を頼みます」

「コホッ……了解しました勇者様」

シルベスターさん地上部隊を任せ、俺は足に力を籠めて大ジャンプした。

馬鹿みたいに強くなった俺の体は、たった一回のジャンプで次元ノ荒鷲がいる上空にまで飛び上がる事を可能とした。

弾丸のように飛翔し、次元ノ荒鷲と接触した瞬間、俺は斧を振り抜いた。

「マウンテンブレイクX！」

技名の通り、本当に山をも両断できそうな一撃が、山のような巨体を誇る次元ノ荒鷲を真っ二つに切り裂き、絶命させる。

その死体はゆっくりと落下していき、波の魔物達の多くを下敷きにして圧殺した。

同時に、空に発生していた不気味なヒビ割れが消え去り、ワインレッドの空は、いつもの晴天へと戻った。

ボスの死によって、波が収まったのだ。

あとは残党を片付けるのみ。

それも、既にシルベスターさんの指示によって散っていた兵士達によって成されていた。

魔物の数は大きく減っている。

おそらく、俺が手伝うまでもなく数分のうちに鎮圧されるだろう。

こうして、俺がアックスフォードで挑んだ最初の波は、宣言通り5分とかからず鎮圧されたのだった。

全てが終わった後、兵士達は勝どきを上げ、俺は褒め称えられた。というより、崇められた。

膝について祈りを捧げる奴の多い事多い事。

ていうか、全員じゃねえか！

恐るべし宗教の力。

そうして、俺の計画は順調すぎるスタートを切ったのだった。



「ふう、終わったあ……」

「お疲れ様でした」

その後、諸々の後片付けを終わらせて城へと帰還した。

兜を外し、ミラに飲み物を貰って寛ぐ。

すっかり兜って蒸れるのね。

できれば使いたくないなあ。

でも、これからの事を考えれば『斧の勇者』の顔は割れてない方が良い。

俺の顔立ちは平凡だが、タクトにつけられた傷痕が右の頬つぺたに残ったせいで、目立つ特徴が出来ちゃったからね。

なら兜で隠せば良いじゃない！

兜だけ着けてたら違和感が凄いから、兜に似合う鎧も必要だよね！

そんな感じで今のスタイルに落ち着いた。

後悔はしていない。

兜が蒸れるし鎧は暑いけど後悔はない。

ないっつらない。

そういう事にしておこう。

「で、どうだった？ 俺の華麗なる雄姿を見た感想は！」

俺は会心のドヤ顔で隣に控えるミラを見た。

この間の話のせいで若干暗くなっちゃったミラを励まそうとして、ちよつとテンション上げてみたんだけど……ミラはきよとんとした顔になっただけで、何も返してくれな

い。

いや、そりやそうか。

普通はこんな状況でテンション上げたりなんてしねえ。

失敗した。

なんか滑つたみたいになつた……。

「……ふっ」

と思つたら、ミラが笑つた。

笑つた？

あの冷酷鉄面皮で無表情がデフォルトのミラ様が笑つただと!?

何が起きた!?

精神攻撃でも受けたのか!?

「あなたは変わりませんね。そうでした。勇者様は最初から頭のおかしいお方でした」

……は？

それどういう意味？

ていうか何の話？

「なら、私のやる事も変わらない」

「いや、あの、ミラさん……」

「ああ、俺の華麗なる雄姿を見た感想でしたっけ？——カツコよかったですよ。とても」

ミラはとても綺麗な笑顔でそう言って……その後どこかに行ってしまった。

時間を見れば、とつくにミラの勤務時間外だ。

帰ったのだろう。

「ええ……」

残されたのは困惑ぎみの俺一人だ。

何だったんだろう……。

なんか、とつても爽やかで吹っ切れたような笑顔だったんだけど、ミラの身に何が起

こつたんだ？

まさか、あんな励ましとも言えないような、ふざけた言葉一つで立ち直った？

だとしたら、あいつの精神はどういう構造をしてるんだ？

……まあ、でも、立ち直ってくれたならそれで良いか。

それ以上は考えないようにしよう。

どうせ考えてもわかんないだろうし。

もう、それで良いや。

翌日から、ミラはなんだか元気になった。

……ような気がした。
無表情に戻ったから、
わかりづらかった。

29 話

「懐かしいな……我が悪夢の地よー」

あれからそんなに時間は経ってない筈なのに、何故かもう既に懐かしいと感じる。

ここにはろくな思い出がない。

タクトにやられて遭難し、痛みを堪えながら魔物と死闘を繰り広げ、ミラの狩理に殺されかけた。

そんな悪夢のような思い出ばかりが残る土地。

ドラウキューア山脈近隣地帯、魔の森（俺命名）。

そこに、俺とミラは再び訪れていた。



話は少し前に遡る。

アックスフオードの波を鎮め、俺は暇になった。

いや、正確に言えばすぐに片付けなきゃいけない問題がなくなったただけであつて、この先の事を考えれば、やらなければならぬ事は山積みだ。

でも、俺にできる事というのは意外と少なかったのだ。

計画の要である四霊の調査は既に始まっている。

影の皆さんが各国に散つて情報を集め、文官の皆さんが国内に残っている書物やら壁画やらの解読を始めた。

まだこの世界の文字すらろくに読めない俺に手伝える事はない。

せいぜい、口頭で進捗状況を聞くくらいだ。

原作知識の検証も進んでいる。

これまた影の皆さんが各国に散り、原作キャラの動向や経歴なんかを調べているのだ。

今のところ知識との差異は確認されていない。

だが、油断は禁物だ。

アックスフオードの人心掌握は順調。

波での活躍がかなり効いたらしく、これ以上は何もしなくても大丈夫なくらいだ。

という事で、次の波とかの大きなイベントがあるまでは放置。

未だにしつこく対談を申し込んでくるタクトへの言い訳として「斧の勇者は、波が終わったら、すぐにまた旅に出てしまった」という事にしてあるし、必要以上に兵士達と接触するのはやめといった方がいい。

どこから情報が漏れるかわからないから。

という訳で、俺は他の仕事の手伝いをするのではなく、自分にしかできない事をした方が良くと判断した。

決して俺が役立たずだった訳ではない。

そこは間違えないように。

とりあえず、本格的な教材とミラ先生のスパルタ教育により、魔法文字の習得を目指してみた。

高度な魔法を使いこなす為には、魔法文字の読み書きが必須だ。

魔法という手札が使えるようになれば、俺の戦闘力は更に飛躍的な向上を遂げるだろう。

強さがなければ、俺の計画は立ち行かなくなる。

そう考えれば、これは最優先事項と言っても過言ではない。

それと平行して、もう一つやっておきたい事があった。

それはドラゴンの勧誘だ。

ただのドラゴンじゃない。

欲しいのは最高位のドラゴン『竜帝』だ。

それを仲間に加えたい。

原作知識の通りなら、竜帝は太古の昔から蓄えてきた、あらゆる知識を持っているらしい。

それが本当なら、是非ともその知識を手に入れたい。

俺の原作知識と同じで、竜帝の知識も無条件に信じる訳にはいかないだろうけど、情報 の真偽を確かめる事なら後でいくらでもできる。

それよりも竜帝の知識を手に入れる事ができれば、少なくともノーヒントで色々と探し回るよりは遥かに効率が良いかなる筈だ。

で、そう考えた俺は、ミラに魔法文字を教えてもらってる時に聞いたんだ。

「ここら辺に竜帝って生息してない？」
ってな。

ぶつちやけ駄目元で聞いただけだった。

でも、ミラは言ったんだ。

「竜帝かどうかはわかりませんが、強いドラゴンが縄張りを持つている場所になら心当たりがあります」

ってな。

俺は驚いた。

こんな簡単に見つかるもんなのかと。

まあ、その強いドラゴンが竜帝とは限らないけど、違ったら経験値の足しにすれば良いだけの話だ。

という事で、竜帝捕獲ツアーの開催が決定した。

成功すれば多大なりターンがあるツアーだ。

駄目でも経験値が手に入る。

無駄足って事はない。

だが、勉強時間をもったいたないというミラ先生のお言葉により、ツアーは近日中に開催される運びとなった。

そうして俺達は、手の空いてる飛竜兵団の人にこつそりと運んでもらって、この場所にやって来た。

いや、戻って来た。

ミラの言った心当たりのある場所というのが、この魔の森の事だったのだ。

そして、現在に至る。



俺達は魔の森を歩き、懐かしい種類の魔物達を迎撃する。

やつぱり、ここの連中は強い。

あの頃よりも遥かに強くなった俺がそう感じるんだから、相当のもんだ。

こんなに強い魔物が跋扈する土地を縄張りにしてるって事は、なるほど、そのドラゴンは相当強いんだろう。

もしかしたら、本当に竜帝かもしれない。

そして、今さら思い出したけど。

たしか、転送スキルが使えない条件の内の一つに、強力な魔物が縄張りにしてる土地つてのがあったような気がする。

土地や空間に異常があると、転送スキルは使えないって話だ。

そう考えれば、遭難生活中に転送スキルが使えなかった事にも説明がつく。

本当に今さらだけだな。

ちなみに、強くなって余裕のできた俺達は、襲いかかってくる魔物達を殺すのではな

く、手加減して戦闘不能にするにとどめた。

これから縄張りの主を勧誘に行くんだ。

その手下かもしれない連中を殺したら心証が悪くなるだろ。

まあ、遭難生活中に殺しまくってたから、もう手遅れかもしれないけど。

あれは不幸な行き違いって事で納得してくれないかなー。

そんな事を考えながら、ズンズンと魔の森を進む。

主がどこにいるのかわからないから、進む方向は適当だ。

ただ、なんとなく魔物が多く出現する方に進んでる。

縄張りの主なら、配下のたくさんいる場所に居るんじゃないかという、適当な推測に

基づく行動である。

それでも、何も考えずに進むよりは良い筈だ。

そうしてしばらくした頃。

倒して気絶させた魔物の数が百を越えたあたりで、遂にそいつが現れた。

「そこまでだ人間どもー！」

ガオオオオオオオオオ！ という咆哮を上げながら、紅い鱗を持った一匹の巨大なドラ

ゴンが飛来した。

デカいな。

タクトのところに行ったドラゴン女よりは小さいが、ソラちゃんのグレゴリオよりも大きい。

そして、グレゴリオ以上の凄まじい威圧感を放っている。

たしか、グレゴリオは竜帝に匹敵する力があるって聞いた。

それが誇張でないのなら、そのグレゴリオよりも明らかに強そうなこいつは、竜帝である可能性が高い。

これは、当たりを引いたかもしれない。

でも……

「よくもオレ様の縄張りで好き勝手に暴れてくれたなあ！ 死ね！ 極炎プレス！」

このドラゴン、大層ご立腹である。

話なんて聞いてくれそうにないぞ！

「ドライファ・ウオーターウォール！」

ドラゴンが放った炎のプレスを、ミラが魔法で生み出した水の壁が相殺する。

そして、炎によって水が蒸発し、水蒸気が辺り一面を覆い尽くして視界を塞いだ。

俺はそんな水蒸気の煙を切り裂きながら、ドラゴンに向かって突撃を敢行する。

「うおおおおおおおおおー！」

野生のドラゴンが飛び出して来たのなら、やる事は一つ。

こういうのは、モンスターをゲットする時のお約束だ。

すなわち……一回ぶっ飛ばしてから仲間にする！

そうして俺は、ドラゴンを倒して「仲間になりたそうに、こちらを見ている」状態にするべく、戦いを挑んだ。

30話

「パワーブレイクー！」

まずは小手調べ。

俺は、斧のくせに何故か覚えられた、強烈なパンチを繰り出すスキルを、ドラゴンの顔面に叩き込んだ。

殺したい訳ではないので、スキル強化もしていない手加減した一撃だ。

それでも、強化されまくったステータスによって繰り出された俺の鉄拳は、ドラゴンの巨体をおもしろいくらい派手に吹っ飛ばした。

「ぶべらっ!？」

ドラゴンが悲鳴を上げながら飛んでいく。

俺の手には、鱗を砕き確実にダメージを与えたという手応えが残った。

この程度の攻撃が効くなんて……竜帝って実はあんまり強くないんだろうか？

いや、竜帝って言ってもピンキリか。

少なくとも、タクトのドラゴンはもつと強かった。

「どうやら、私の助力は必要なさそうですね」

今ので俺とドラゴンの力量差を見切ったのか、ミラが後ろに下がって観戦モードに入ってしまった。

そんな舐めプして、相手がいきなり覚醒とかしたらどうするんだ……。

もうちよつと慎重にいこうぜ？

「へっ、やるじゃねえか人間！ 今のはちよつと痛かったぞ！ だが！ その全力の一撃でオレ様を殺し切れなかった時点で勝敗は決した！ 諦めて死ぬがいい！」

……まあ、でもこんな嘔ませ犬全開のセリフを吐くような奴が相手じゃ仕方ないか。俺まで気が抜けそうになつたぞ。

そこまで計算してやってるんなら大したもんだけど、多分、違うと思う。

「オラアアアアア！ ドラゴンクロー！」

ドラゴンが雄叫びを上げながら爪を振りかざしてきた。

大振りで隙だらけの動きだけど、あえて回避も反撃もしない。

「仲間になりたそうに、こちらを見ている」状態にする為に、可能なら力を差を見せつけたい方が有効だろう。

俺は、ドラゴンの爪を片手で受け止めた。

「何ッ!？」

「終わりか？」

そして、強者っぽいセリフを呟く。

これで心折れてくれないかなー。

「調子に乗るな！ ドラゴンテイル！」

駄目だった。

ドラゴンはその巨体を回転させて、遠心力というエネルギーの乗った尻尾を叩きつけてきた。

凄まじい衝撃が俺を襲う。

なかなか良い攻撃だった。

しかし、そんな攻撃を、俺はまたしても片手で受け止めた。

「バカな……!?!」

「それがお前の全力か？」

「クソツタレがああああああああ！」

ドラゴンは俺に返事をする余裕すらも無い、狂乱したかのように暴れ出した。

明らかに心が折れかけている。

もう少しだ。

「なら、今度は俺から行くぞ」

そう言って、俺は拳ではなく斧を構えた。

当然、素手で戦うより伝説の武器を使って戦った方が圧倒的に強い。クツクツク。

ただでさえ勝ち目のない敵が、超パワーアップを果たすというインフレの恐怖を味わうがいい！

「大激震X！」

振り上げた斧を地面に向けて叩きつける。

それを起点とし、スキルの効果によって引き起こされた大地震が、魔の森全域を大きく揺らした。

「ウオツ!？」

そして、その揺れがドラゴンの体勢を崩し、決定的な隙が生まれる。

俺はその隙を見逃さず、容赦なくドラゴンの頭に重い一撃を叩き込んだ。

「アクセルスマッシュV！」

「ぐはあ！」

さつき素手で放ったスキルとは比べ物にならない威力の攻撃をもろに食らったドラゴンは、地面に頭をめり込ませて沈黙した。

よく見てみれば、頭部にあつた鱗が完全に砕け、額が割れて、そこから血をダラダラと流している。

そしてピクリとも動かない。

……あれ？

これ殺っちゃった？

「ぐ……うう……」

と思つたら、小さな呻き声が聞こえてきた。

ああ、良かった。

瀕死だけど死んでなかった。

これでモンスター○ールが投げられる。

間違えた。

勧誘の話し合いができる。

「オレ様の……負けだ……。くっ……。殺せ……」

早速話しかけようとしたら、このドラゴン、何か敗北した女騎士みみたいな事言い出した。

お前、それ凌辱フラグだからな。

お前みたいな敵ついドラゴンを凌辱って、誰得だよ？

ヤらんぞ。

というか殺らんぞ。

「こっちは勧誘しに来たっちゆうねん。

「あー……とりあえず安心しろ。俺達はお前を殺しに来た訳じゃないから」

「どういう……事だ……？」

「……とりあえず話を聞く気にはなつたみたいだな。よしつ、ミラ、頼む」

「かしこまりました」

『力の根源たる私が命ずる。森羅万象を今一度読み解き、彼の者を癒せ』

「ツヴァイト・ヒール」

また暴れられても困るからか、ミラは弱めの回復魔法をドラゴンにかけた。

この世界の魔法は、頭につくのが「ファスト」「ツヴァイト」「ドライファ」の順で強くなる。

つまり、今使った「ツヴァイト・ヒール」は、遭難生活中に俺にかけ続けてくれた「ドライファ・ヒール」の一段階下という事になる。

これで、ひとまず死ななくらいには回復した筈だ。

「じゃあ、話し合いを始めるか。とりあえず自己紹介だな。俺はユウ。斧の勇者だ」

「！　そうか勇者か……。どうりで強い訳だ……」

ドラゴンは俺が勇者という事に驚いたみたいだけど、すぐに納得してくれた。

やっぱり、一度ボコボコにしたのが効いてるらしい。

「で、俺達はお前を勧誘しに来たんだ。殺しに来た訳じゃない」

「勧誘？」

「そう、勧誘。竜帝を仲間にしたくてな」

「じゃあ、なんでオレ様はボコボコにされたんだ？」

「お前がいきなり襲いかかってくるのが悪い」

問答無用だったもんな。

でも、そのおかげで上下関係を叩き込めたと思えば、結果的には良かったかもしれない。

「それで改めて聞くけど、俺の仲間になる気はないか？ 仲間になってくれるなら、お前

にも十分な見返りをくれてやる。——ミラ、あれを」

「はい」

ミラが背中に背負って持って来たバックパックの中に手を入れる。

そして、そこからお目当てのブツを取り出した。

戦闘中に落とすのも嫌だからという理由でミラに預けていた、ある物を。

「そ、それは……!?!」

ドラゴンがミラの取り出したブツを見て、目を見開く。

その反応を見て、俺は今回使った原作知識が間違っていなかったであろう事を察し

た。

ミラが取り出したブツ。

それは竜帝の核石だ。

その名の通り、竜帝と呼ばれるドラゴンの核となる部位である。

これはタクトのドラゴン女を殺した時に、死体ごと武器に吸わせて回収した物だ。

一度武器に吸わせた物を取り出す方法がわからなくて小一時間程悩んでたら、俺の意思を察したのか、武器の方から吐き出してくれた。

思い返せば、ドラゴン女の死体を武器に吸わせた時、俺は何かには操られたかのような感覚を覚えた。

多分、あれはこの伝説の武器の意思だったんだと思う。

カースにどっぷりと浸かって、武器との結びつきが強くなった今ならわかる。

あの時、武器が俺にこいつを回収させたのは、この時の為だ。

そもそも、竜帝と他のドラゴンの違いとはなんぞや？

その答えは、この竜帝の核石を体内に持っているか否かである。

核石を持つ竜帝は、本能的に他の竜帝の核石を求め、食べて取り込んで一つになろうとする。

そうして最終的には世界中に散らばる竜帝の欠片が一つとなり、真の竜帝が誕生する

のだ。

そして、ここからが重要な部分。

俺が求めている竜帝の知識とは、竜帝の核石の中にある。

核石を集め、取り込む事によって、竜帝は過去にその欠片の持ち主が体験したあらゆる知識を得る事ができるという訳だ。

……これも例によって原作知識頼みの情報なので、本当かどうかはわからない。

だから本人ならぬ本竜に見せて確認しようと思ったんだけど、どうやら当たりみたいだ。

ドラゴンの視線は核石に釘付け。

よしよし。

掴みはバツチリだな。

「俺の仲間になるなら、これをお前にあげるけど、どうする？」

「ふ、ふん！ まあ、どうしても、どうしてもと言うなら、オレ様の力を貸してやる！

ありがたく思え！」

よし！

ツンデレドラゴン、ゲットだぜ！

たしか、魔物をパーティーに加える為には、魔物紋つていう奴隷紋の魔物版みたいな

ものを刻まなきやいけないって話だったな。

アックスフオードに戻ったら、早速それを手配してもらおう。

その後で存分に知識を吐き出して役に立ってもらおうではないか！

こうして、俺の仲間にドラゴンが加わったのだった。

31話

「おお、ご主人！ 起きたか！」

城に用意された寢室から出て朝御飯を貰いに食堂へ行くと、知らない奴に声をかけられた。

ダボダボな服を着た、見覚えのない女の子だ。

歳は……10〜12歳くらいか。

燃えるような真紅の髪をショートカットにした美少女だった。

「誰？」

思わずそんな声が出た。

おかしいな。

俺には小さな女の子にご主人なんて呼ばれる筋合いはないんだけど……。

もしかして寝惚けてるのかな？

「何言ってやがんだご主人？ オレ様だ。イグニだ」

「いや、イグニなんて奴知らないけど……ん？ オレ様？」

その特徴的な一人称には聞き覚えが……いやいやいや、待て待て待て。

まさか、まさか……!?

「お前……! 昨日のドラゴン!」

「おう! やつと思いい出したか!」

ええ!?

お前メスだったの!?

ていうか、なんで人間の姿してんだ!

待て待て、落ち着け。

落ち着け、俺。

落ち着いて記憶を整理しよう。

たしか、昨日は転送スキルを使ってアックスフードに帰って来た。

イグニを仲間にした事によって、その縄張りの中でも転送スキルが使えるようになって

たらしい。

それから、ミラが事前に手配してくれてた、竜帝を縛れるくらい強力な魔物紋をドラゴンに刻んで契約し、その効果を確認してから、約束通りタクトのドラゴンの核石をあげたんだ。

で、何だかんだで、魔の森の探索やら、ドラウキューア山脈への移動やらで結構時間を使ったから、全部終わる頃には夜になって、そのまま寝た。

そして、朝起きたらこの状況だ。

なるほど。

わからん。

確認作業が必要だ。

俺はおもむろにメニューを開き、そこに表示されている魔物紋の項目を弄って、契約したドラゴンに軽い痛みが走るように設定した。

「痛ッ!?!」

そしたら、目の前の少女が突然苦しみだした。

ふむ。

なるほど。

「たしかに、お前があのだらゴンなのは間違いないみたいだな」

「いきなり何しやがる!?!」

「いや、本物かどうか確認しようと思って」

「もつと他にやり方あんだろうが!」

怒られてしまった。

でも、仕方ないじゃないか。

一番手っ取り早い方法がこれだったんだから。

「それより、その姿はなんなん？　いつから人化できるようになったんだ？」

「これは、昨日ご主人がくれた竜帝の欠片に入ってた技術だ。ありや相当デカイ欠片だったからな。他にも色々覚えられたぜ！」

ほほう。

つまり竜帝の知識を手に入れたって事か。

それは頼もしい。

食事が終わったら、早速、色々教えてもらおうか。

その後は文官の皆さんの所に派遣して、知識と文献の照合をしてもらおうか。

そうすれば、竜帝の知識の信憑性も上がるだろう。

もし全く当てにならないかったら……まあ、その時はその時だ。

普通に戦力として働いてもらおう。

ちなみに、ドラゴンことイグニが俺をご主人と呼ぶ理由は、俺が魔物紋によつて契約した主だからだそう。

ついでに、ダボダボの服を着てるのは、変身能力がある奴用の特殊な服を作るのに時間がかかるから、それまでの繋ぎだそう。

服の下にはちゃんと、ドラゴンの翼と尻尾があった。

俺が「そういえば翼とかどうしたんだ？」と聞いたら、躊躇なく服を捲つて見せつけ

てきたのにはビビったぜ。

恥じらいというものが足りない。

いや、魔物なんだから当たり前なのかもしれないけど。

……そこら辺の教育はミラ先生にお願いするか。



食事が終わった後、イグニに色々な事を尋ねて教えてもらった。

四霊の事、過去の勇者の事、ドラゴンが使う特殊な魔法の事、本来は100で制限されるLvの限界突破方法の事。

実にいろんな話を聞いた。

中には、俺の原作知識にない話がいくつもあつた事から、信憑性は高いんじゃないかと睨む。

そして、一通りの聞き取り調査を済ませた後は、予定通り文献を漁ってる文官の皆さんの所へと派遣した。

良い報告を期待してる。

その後は、いつも通りミラ先生監修によるお勉強の時間だ。

ひたすらに知らない文字、わからない文字を見ていると吐き気がしてくる。

英語の授業を受けてた時と同じだ。

こういうのは苦手なんだよ。

それでもやらなきゃいけないから頑張るけどさー……。

合間合間に気分転換もかねて入れてる戦闘訓練がなかったら、本気で嫌になりそう
だ。

そんな日々が一週間程続いたある日。

最近恒例となっている、他国に散った影の皆さんが集めた情報をミラが俺に報告する
時間に、興味深い話を聞いた。

「ふーん。メルロマルクに謎の行商人現る！ か」

「はい。影からの報告によると、鳥のような奇妙な魔物を連れ、奇跡のように効果の高い
治療薬を売って回っているとの事です」

「へー」

それ、十中八九、尚文くんだろうな一。

また原作知識の通りになったのなら、俺達と別れてわりとすぐの段階で行商人を始めた筈だ。

鳥みたいな奇妙な魔物っていうのは、フィロリアル女王種だったっけ。

あのお肉が美味しい魔物だ。

ただ、フィロリアルは食用としてだけじゃなく、馬の代わりとしても使われてる。

むしろ、そっちが主流だね。

尚文くんはそっちの用途で使ってるんでしょ。

そして、勇者が育てたフィロリアルは特殊な進化をして王種、もしくは女王種になる。

具体的には、もの凄く強くなった上に、ウチのイグニみたいに人化できるようになる。

これは、イグニの竜帝の知識にもあった事だから、多分、間違いないと思う。

でも、尚文くんが行商やってるってのは原作知識頼みの情報だから、本当かどうかはわからない。

その行商人を見つけて本人かどうか確認すればいいんだろうけど……めんどいからやらない。

俺だって暇じゃないんだ。

「他には、剣の勇者がドラゴンを討伐した。槍の勇者が伝説の植物の力でとある村の飢

鐘を救ったなどの噂が流れているようですね」

「ほー」

そういえばあつたね、原作にもそんなイベント。

どっちも割かし重要なフラグだったと思う。

でも、そこまで興味ないかな。

錬くんが討伐したドラゴンの方は、イグニの事を考えれば核石を回収したいところだけど、その核石が死体の中に残って放置されてる可能性は低そうだし、

何よりアックスフォードから、そのドラゴン退治の現場までは遠い。

無駄足になりそうだから放置でいいや。

元康くんが使ったっていう伝説の植物の方はちよつと興味ある。

名前は……たしか、「バイオプラント」だったっけ。

原作知識の通りに使えるのなら、かなり便利に使える代物だった筈だ。

でも、それってどっちかっていうと生活に便利って感じだから、やっぱり興味はちよつとしか湧かない。

せめて戦力として使えるんだったら話は別なんだけどねー。

……ん？

バイオプラント？

戦力？

なんだろう？

何か思い出せそうな気が……。

「ツ!？」

思い……出した……。

これは……上手くいけば計画の成功率を格段に上げる事ができるかもしれない。無駄足になる可能性はあるし、何よりも危険だけど、やってみる価値がある。

リターンの大きさを考えれば、リスクを承知で賭けに出る価値がある。

「ミラ」

「なんででしょうか」

俺は、今回の予定をミラに告げた。

「槍の勇者が飢饉を救ったという村の場所を教えてください。あと、イグニを呼べ。今日はそこに向けて出発する」

「かしこまりました」

ミラはそう言って一礼し、村の場所を聞く為か、それともイグニを呼ぶ為にか、部屋を出て行く。

よし。

俺もすぐに準備を整えて……

「ああ、ユウ様。移動中もお勉強は続けますので、そのつもりでいてくださいね」
「……………はい」

最後にミラが言い放った言葉によって、俺のテンションは急降下した。

3 2 話

前にメルロマルクを去る時に登録したポイントへと転送スキルで瞬間移動し、そこから十分に人里から離れるまで徒歩で移動してから、イグニをドラゴン形態に変身させる。

そして、俺とミラはその上に乗って目的地へと向かった。

ちなみに、イグニはこの一週間でイグニの為に仕立てられた特殊な服を着ているので、変身しても服が破れる事はない。

不思議な事に、ドラゴン形態の時は服がどこかへと消えるのだ。

サービスショットはなくなったが、俺がロリコンに目覚める可能性もなくなった。良かった良かった。

で、今回向かったのは、元康くんがバイオプラントで飢饉から救ったという村だ。

場所としては、メルロマルクの南西部に位置するらしい。

結構遠かったけど、イグニの飛行速度をもってすれば一日以内にたどり着けた。

さすがは竜帝。

速いのなんの。

背中ではミラ先生の授業を受けてる間に到着したよ。

早くしないと、原作知識の通り、尚文くんがバイオプラントを回収しちゃう可能性が高かったから、これには本当に助かった。

勧誘しといて良かった。

早速、村の周辺へと降り立つ。

尚文くんと鉢合わせする可能性があるから、村へは行かない。

イグニを尚文くんに見られたら面倒な事になりそうだし。

「――で、ここが例の場所か」

「そうなりますね」

「うひゃあ……めちやくちや生い茂ってんなあオイ」

イグニが言う通り、村の周辺は明らかに異常繁殖したとしか思えない大量の植物が生い茂っていた。

もはや森だ。

そして、森を形成する程の植物全てが、まるで魔物のように俺達に襲いかかってきた。

「極炎ブレス！」

それをイグニが炎のブレスで焼き払った。

おい!?

何してくれちゃってんの!

「どうよ、ご主人! パワーアップしたオレ様の力は?」

「馬鹿かお前は! 森の中に火を放つ奴があるか! それに俺はこの植物自体に用があるんだよ! 焼き払ってどうする!?!」

「う、その、すまん……」

イグニがしゅんとしてしまった。

……なんだろう。

今の姿だと、なんかいたいけな幼女をいじめてるみたいで奇妙な罪悪感があるな……。

まるで悪い事したような気持ちになる。

まあ、その、なんていうか……。

「その、悪い。怒鳴りすぎたな。まあ、次からは気をつけてくれれば良いから。あんまり気にするなよ」

「……そうか? そうだな! そうするぞ!」

イグニは元気になった。

……うん。

ここで甘くしてしまう辺り、俺に躰の才能はないな。

でも、まあ、最低限言う事聞いてくれれば、別に躰なんてしなくてもいいか。

ペットじゃないんだし。

「何をやっているんですか……」

そんなやり取りを見ていたミラには呆れられてしまった。

いや、ミラに呆れられるのは日常茶飯事か。

とにかく、気を取り直して行ってみよう！

周りの植物はイグニが燃やしちゃった訳だけど、さすがに森全体を焼却する程の火力を放った訳ではないみたいで、前方100メートルくらいが焦土と化しただけで済んでいた。

バイオプラントの生息域から考えれば、微々たる損傷だ。

それに、驚異的な事に、焼け野原となった土地を修復するかのようには、バイオプラントが蠢き、浸食を開始していた。

これじゃ、一時間もしない内に元に戻りそうだ。

なんちゆう生命力。

そして、俺は斧でバイオプラントをいくらか刈り取り、武器に吸わせた。

すると、「植物改造」や「植物解析」といった効果を持つ新しい斧が解放される。

まずは一つ、目的を果たした。

あとはバイオプラントの種を回収したいんだけど……。

それが中々見つからない。

種を探して森の中を歩き続ける。

途中、バイオプラントの亜種みたいな魔物が襲ってきたけど、軽く返り討ちにしながら進む。

そんな魔物なのか植物なのかよくわからない連中が多く出没する方向を目指して進んだ。

イグニを探した時と同じ理屈だ。

手下が多くいる場所に大元がいるんじゃないかっていう推測だ。

で、どうやらその推測は意外とよく当たるみたいで。

進んだ先に、明らかに他の植物とは違うボスっぽい外見の奴がいた。

一見すると大木に見える、巨大な蔓の集合体。

その幹の部分に大きな目玉があつて、俺達を睨み付けている。

うん。

明らかにボスっぽい。

こいつが大元なら、体内とかに種持つてそう。

「よし！ やるぞ二人とも！」

「かしこまりました」

「よっしゃあ！ 殺つてやるぜ！」

ミラはローテンションで、イグニはハイテンションだ。

でも、大丈夫だろう。

二人とも、この程度の相手に負けるような奴じゃない。

唯一の懸念は、イグニがこいつまで燃やしちゃう事だけど……やらないよね？

ちゃんと注意したもんね？

「オラアアア！ 死ねえええ！」

大丈夫だよね？

なんだかとっても心配なんだけど。

だが、俺の予想に反してイグニは冷静だった。

ちゃんと炎を使わずに腕を使い、指を爪に見たてた攻撃でバイオプラントを縦に引き

裂いた。

「!!!」

!!!植物のくせに、まるで驚愕でもしたかのように、バイオプラントが縦に裂けた目玉を

見開いて硬直した。

しかし、すぐに全身の蔓が蠢いて集結し、あっさりと損傷を修復してしまった。でも、俺は確かに見た。

縦に裂けたバイオプラントの内部。

そこに種らしき物が大量に詰まっていたのを。

「クソツ！ 効かねえ！」

「いや、大丈夫だ！ イグニ、もう一回やれ！ ミラは魔法で援護！」

「わかった！」

「了解しました」

俺の指示通りに、イグニが再度バイオプラントに飛びかかる。

一度見せた攻撃が二度通じるくらいに、両者の実力はかけ離れている。

イグニの攻撃はさつきと同様の結果を生み、あっさりとバイオプラントを引き裂いた。

「ドライファ・ウォーターカッター」

そして、ここからがさつきと違う展開。

縦に引き裂かれたバイオプラントを、ミラの魔法が更に切り裂いてバラバラにした。

それでも、すぐに蔓は蠢き、損傷は瞬く間に回復していく。

イグニを静止しつつドラゴン形態に変身してもらって、即座に乗り込んで撤退する。その巨体にバイオプラントの蔓が絡みついたが、圧倒的過ぎるパワーの差であつさりと引きちぎり、撤退は簡単に成功した。

こうして、俺はバイオプラントの種を手に入れた。

そして、この種が予想を遥かに超えた利便性を誇る奇跡の代物だという事を、この時の俺はまだ知らなかった。

33話

「おおー… 凄いいい！」

俺は今、ミラ先生の授業の休み時間にバイオプラントで遊んでいた。

植物改造の技能によって、まずは他の能力を犠牲にして繁殖力と成長力に特化させ、それを撒いて種の数を増やした。

次に、これを何とかして戦力として使えないかと頭を捻らせてただけど、

考えてみれば、特に弄らなくても、そこそこ強い魔物くらいの力はあつた訳だから、バイオプラントは元々戦力として使える植物だったという事に気づいた。

問題は言う事を聞かせる事ができない点だけど、これは仕方ない。

だって、植物だし。

人間様の都合なんて考えてくれる訳ないし。

一応、バイオプラントも魔物扱いだから、本来植物にある筈のない知能というステータスを上げて、イグニみたいに魔物紋を刻めば制御できると思う。

でも、膨大な数のバイオプラントに一々魔物紋を刻むのって凄まじい手間だし、コストも悪すぎる。

何の意味もない。

だから、今のところバイオプラントは、襲ってほしい敵の目の前に撒いて嫌がらせに使うのが、戦力としての唯一の使い道だ。

それだけでも相当使える事には変わりないから、別に良いんだけどさ。

これ以上を求めるのは、もう少し俺が進化してからだと思う。

で、今は植物改造の技術的なものを上げる為に、色々と実験中だ。

半分遊びである。

例のコスパが悪い手段を使って言う事聞かせたバイオプラントに、メイドっぽいシルエットになるように指示して「自律式ミラ人形！」とかやって遊んでるだけだ。

ちなみに、ミラ人形は意外にハイスペックだった。

特に料理なんてオリジナルより上手い。

それを見たミラが不機嫌になってしまう程に。

まあ、何にせよ順調だ。



そんな感じで、バイオプラントが日常にちよつとした彩りを添えてくれた一方、俺の生活は変化していた。

バイオプラントを取りに行く時に思い付いたとある目的の為に、ある事をやり始めたのだ。

——それは、まさに暗躍と呼ぶに相応しい非道な事を。

「じゃあ、イグニ。行って来る」

「おうー。気をつけろよー」

時刻は深夜。

草木も眠る丑三つ時。

場所はアックスフォードから遠く離れた、とある国の上空。

イグニの背中の上。

俺はドロップで出た不気味な仮面を被り、そこに立っていた。

そして、俺はそこから飛び降りた。

普通に考えれば自殺行為だが、今の俺のステータスなら、この程度の高さは問題ない。眼下にあった城に大きな音を立てながら着地した。

城の壁にヒビが入り、音を聞き付けた兵士達が騒ぎながら音の原因を探して走り回

る。

「クローキングアックスX」

俺は隠密スキルでできる限り気配を消し、慌ただしい城の中に踏み込んだ。

目指すのは城の金庫。

大量のお金が置いてある場所。

要するに強盗である。

何故にこんな事をしているのかというと、武器の強化方法の一つに、金銭を使ったパワーアップというものがあるからだ。

お金を武器に入れる事でポイントが溜まり、それを使って他の強化方法の性能を上げる事ができる。

要するに課金システムである。

そして、その課金システムには湯水のように大量の金銭が必要なのだ。

ここまで言えばわかるだろう。

そんな大金を味方であるアックスフォードに要求して、国家が傾く程の大出費を強いる訳にはいかない。

確実に人望がなくなるし、味方戦力を低下させてどうする？

という訳で、お金はアックスフォード以外から調達する事にした。

念の為にアックスフオードからもメルロマルクからも遠く離れ、俺の原作知識にもないような国をターゲットに選んだ。

ちなみに、初犯ではない。

既に他の国でも何度かやってる。

こういう辺境の国なら原作に影響を及ぼす事もないだろうし、存分に迷惑をかけても良い。

なんなら潰しちゃっても良い。

むしろ、潰した方が良い。

ぶっちゃけ、そっちが本命みたいなもんだ。

「む!? 曲者!」

だが、そう上手くはいかない。

俺の隠密能力はそんなに高くはない。

近づかれれば、普通に気づかれる。

気づかれれば、不法侵入者で強盗の俺は、当然、お城の兵士達に襲われる訳だ。

「がッ……!?!」

そんな不審者を捕まえようとしただけの何の罪もない兵士達を、俺は手に持った片手サイズの小さな斧（隠密技能を向上させる効果がある）で躊躇なく殺害する。

頭蓋を叩き割り、そのまま頭から尻にかけて、縦に真つ二つにした。

ついでに、その死体を武器に吸わせる。

最初は証拠隠滅のつもりでやってたんだけど、人間の素材で解放された武器が意外と優秀だった事もあって、余裕がある時は解体して吸わせるようになった。

特に「ブレインアックス」という武器に内包されてた「悪意感知」という技能が最高に便利だ。

あらゆる悪意を感知し、使いこなせば、どんな嘘でも見抜く事ができるようになった。当然、善意から出た優しい嘘でもだ。

善意からの行動であろうと、いや、善意からの行動だからこそ、嘘を吐く時に必ず小さな罪悪感が生まれる。

それを感知するのだ。

……人間のどこのパーツを吸わせたら出たのかは、聞いちゃいけない。気分が悪くなるだろうから。

これはもう、いよいよ本格的な外道になって、文字通り人の道から外れちゃった感があるけど、知ったこっちゃやない。

俺の目的は自分が生き残る事だ。

その為には、滅びかけているこの世界を救わなければならぬ。

だって、自分の住んでる世界が壊れたら、必然的に俺も死ぬだろうから。そして、それを成し遂げる為には力がある。

力がなければ、世界を救うなんて偉業を成し遂げられる訳がない。

その力を得る為ならば手段なんて選んでられない。

どんな事でもやる。

どんな大罪にでも身を染める。

そうして大罪すらも力に変えて世界を救おう。

全ては、俺が生き残る為に。

そのまま何人かの兵士を殺害し、城の金庫が空っぽになるまで武器にお金を吸わせ、宝物庫にも立ち寄って、お金になりそうな物も全部武器に吸わせて、その場を去った。

イグニは街の外の森で待機する手筈になっている。

それを回収して、夜が明ける前に転送スキルで引き上げる予定だ。

でも、その途中で貴族が住んでるっぽい屋敷にも立ち寄り、同様の強盗行為を繰り返す。

ついでに冒険者ギルドに商人ギルド、その他もろもろ。

時間が許す限り、金を持っていそうな所を徹底的に潰して回った。

「お！ 終わったか、ご主人！」

「ああ。終わった」

全てが終わり、イグニと合流する頃には朝日が昇る時間になっていた。手に入れた金銭は膨大。

俺は過度な幸福を手に入れた。

逆に、あの街は貧困に喘ぐ事になるだろう。

一夜にして街全体の金銭の殆どを奪われたんだ。

そうならない方がおかしい。

おまけに、ここはこの国の首都だ。

首都の機能が麻痺すれば、その貧困は国中に広がるかもしれない。

それで良い。

それが目的なのだから。

「じゃあ、イグニ。最後にいつものあれをやるぞ」

「おう！ 任せろ！」

俺の命令を受けたイグニが、ドラゴン形態で大きく息を吸い込む。

そして、——潜伏していた森に向かって、全てを焼き尽くすような灼熱のプレスを

放った。

森に潜む魔物達は、その多くが死滅するだろう。

そこそこの経験値になる筈だ。

「大激震X」

そして俺も、イグニとの戦いでも使った大地震を引き起こすスキルを放った。

あの時よりも、更に出力を上げて。

地震と火災が森を滅ぼし、生態系を破壊していく。

今ので結構な数の魔物が死んだみたいで、俺の方にも結構な経験値が入ってきた。

順調だ。

俺は今日の戦果に満足しつつ、転送スキルを発動させた。



「お帰りなさいませ」

アックスフォードの城に戻ると、ミラがいつもの無表情で出迎えてくれた。

……ミラには、俺がこんな外道をしているという事は伝えていない。でも、勘の鋭いミラの事だ。

影の皆さんが持つてきた情報を聞いて、既に気づいているかもしれない。それでもミラは何も言わない。

いつもの無表情で、俺を迎えてくれる。

イグニ？

あいつも変わらないけど、それはあれだろ。

人と魔物じゃ感性が違うんだろ。

同じ事でも、ミラとイグニじゃ、その意味合いが全く違う。

「……ああ、ただいま」

そして、俺もまた何も聞かずに、ただそれだけを言う。

ミラは一礼してから、自分の部屋に帰って行った。

こんな早朝まで起きててくれたのだろうか？

俺が朝帰りした次の日は休みという事にしてるけど、それでもわざわざ夜更かしをする理由にはならない筈だ。

夜更かしは美容の天敵だし。

「……………」

しかし、しかしだ。

俺はそんなミラの姿に、少しだけ、ほんの少しだけ、安らぎを感じてしまっている。

まったく……罪深い事だぜ。

そうして朝日は昇り、俺達は眠りについた。



そんな感じで、昼と夜でまったく違う生活を送る内に、尚文くん達と別れてから約一ヶ月半が経過した。

アックスフオードを味方につけ、イグニを勧誘し、バイオプラントを手に入れた。俺の暗躍はまずまずの成果を上げたと言えるだろう。

そして、またこの時期になった。

——再び、波がやって来る。

34話

00:05

俺の視界に表示されているカウントダウンが、波の到来がすぐそこにまで迫った事を教えてくれる。

ただし、これはアックスフォードの波のカウントではない。

数日前に夜の闇に乗じてメルロマルクの三勇教会に忍び込み、そこにある龍刻の砂時計に登録する事で表示されるようになったカウント。

つまりメルロマルクの波のカウントである。

原作知識にも出てくる、メルロマルク第二の……いや、勇者召喚前の波も含めれば、第三の波だ。

今回、俺はこの波に参加してくる。

ちよつと思ふところがあつたので、尚文くん達と鉢合わせるリスクを呑み込んでまで参加を決意した。

でも、まだ尚文くん達に、俺が斧の勇者だというのはバレたくない。

そしたら政治的にめんどい事になりそうだし、

もう二度と味方面で尚文くん達に近づいて情報収集するなんて真似もできなくなるから。

一応、尚文くん対策は考えてある。

兜に特殊な加工をして、ボイスチェンジャーみたいな機械的な声に変換する機能を取り付けた。

フルフェイスの兜だから顔も見えないし、鎧一式もアックスフォードで斧の勇者として戦った時とは変えている。

これなら、姿を見ただけでは、俺とも斧の勇者とも結びつけられないだろう。

多分……。

00:01

と、そんな事を考えている間に、もう時間だ。

「じゃあ、行って来る」

「行ってらっしゃいませ」

「土産を期待してるぞ！」

自室で待機していた俺を、ミラとイグニが見送ってくれた。

今回、この二人は連れて行かない。

ミラを連れて行ったら、斧使いと魔法使いのコンビという類似点から尚文くん達に勘

づかれるかもしれないので却下。

イグニは竜帝で、尚文くんのパーティーには種族的にドラゴンと仲が悪いフィロリアルがいる。

そこから竜帝という正体が露見するのはマズイのでお留守番だ。

イグニの存在は、できるだけ外部には隠しておきたい。

何せ、ウチの切り札だからな。

00:00

そして、タイムカウントが0になる。

ビキン！

前と同じく、今回もまたガラスを割ったような大きな音が世界に響く。

同時に俺は波の現場へと転送された。

波が起きている現場は、やっぱり空がヒビ割れて、不気味なワインレッドに染まっている。

近くには、尚文くん含めた四聖勇者とその仲間達もまた転送されて来た。

俺はとりあえず、スキルによって気配を消し、そこら辺の茂みへと隠れた。

注意して見れば簡単に見つかるだろうけど、波に注意が向いてる今なら見つからないだろう、多分。

見つからないように注意しながら、尚文くん達を観察する。

前回と違って、今回は勇者達と一緒に転送されてきた連中がやたらと多い。

おそらく、俺がアックスフォードの波でやった編隊機能を使ったんだと思う。

一々細かい展開までは覚えてないから、原作知識と同じなのは判別できない。

でも、それとは別にわかる事もあった。

尚文くんのパーティーメンバーと思われるのが一人、いや、一匹増えている。

フクロウみたいな外見で、体長二メートルくらいあるデカイ鳥の魔物。

イラストで見た通りなら、あれがフィロリアル・クイーンってやつだろう。

もしそうなら、原作知識とも合致する。

ついでに、最近メルロマルクで噂になってる謎の行商人「神鳥の聖人」が連れている

という魔物とも特徴が一致する。

つまり、尚文くん＝神鳥の聖人説の信憑性が高くなった訳だ。

結論。

見た感じでは、まだ原作知識との差異はないと仮定します。

「フィーロー！ 槍を蹴って亀裂に向かおうとする奴らにぶつけろ。加減はしろよ」

「はーいー」

と、俺が分析しながら見守っている中、尚文くんがとんでもない事を言い出した。

そして、フィー口と呼ばれた鳥は忠実に命令を実行し、元康くんを蹴り飛ばす。

元康くんは、まるでボーリングの球のようにかつ飛び、

元康くんにぶつかった勇者達は、まるでボーリングのピンのように倒れた。

何やつとるんじや？

嫌がらせか？

尚文くんからそこそこの悪意を感知したから、違うとは断言できないな。

その後、尚文くんは他の勇者達を相手に説教を始めた。

距離が離れてる上に、戦闘音が煩くて内容は聞こえないけど、

うる覚えの原作知識と、前回の波の時の尚文くんの態度から推測するに、多分、またしても考えなしに波に突撃しようとした勇者達を叱ってるんだと思う。

でも、効果の程は著しくなさそう。

尚文くん含め、勇者全員から悪意を感じる。

嫌いな相手に上から目線で説教されれば、そりゃ悪意の一つも抱くだろうし、相手の話をまともに聞いているかどうかも怪しいっしょ。

それに、そんな事してる場合か？

と思うけど、その分、尚文くん達と一緒に転送されて来た兵士達が頑張つて戦ってるから、ちよつとくらいはお喋りしてても大丈夫か。

今、この瞬間にも死傷者は増えていつてるけどな！

やがて結論が出たのか、尚文くんは近隣の村へと応援に向かい、三勇者は波の亀裂へと突撃して行った。

さて、じゃあ、俺も動くか。

前回は尚文くんについて行ったけど、今回用があるのはそつちじゃない。

俺は三勇者達の後を追いかけた。

もちろん、こつそりと気配を消して。

ストーキングである。

三勇者達は、波の魔物と戦うのに夢中で、俺の存在には一切気づいていない。

せつかくなので、三勇者とその仲間達が倒して放置してる魔物の死体を、こつそりと回収して武器に吸わせておいた。

現時点では俺より圧倒的に弱い三勇者達が余裕で倒せる魔物の素材って事で、そんなに強い武器は出なかつたけど、まあ、塵も積もれば山となる。

武器解放すれば、微々たる量だけステータスが上がるんだし、強化方法のエネルギーにもなる。

無駄にはならないでしょ。

そうしてしばらく火事場泥棒、いや、戦場泥棒みたいな事してるうちに、波の亀裂か

ら今回のボスと思われる大物が出てきた。

白くてフヨフヨしてる、幽霊みたいな大魚だ。

鑑定してみたら「次元ノソウルイーター」って出た。

レベルが他の魔物より高いし、こいつが今回のボスで間違いなさそう。

そんなソウルイーターに、三勇者達は嬉々として襲いかかる。

こうして見ると……勇者って割に弱いなあ、あの三人。

ワンランク下の七星勇者である俺はおるか、三人がかりでもミラにすら勝てないんじゃないか？

最近のミラは、イグニの竜帝の知識がもたらした力によって、レベル100を超える限界突破のクラスアップを果たしたし、マジであの三人くらいなら瞬殺できそう。

原作だと、彼らはこの後に大幅なパワーアップを果たす訳だけど……果たして信じていいものか。

いや、俺は原作において彼らが使った強化方法のおかげでここまで強くなれたんだし、できないと決めつけるものではないんだけど。

それでも、そんな弱い三勇者の皆でもソウルイーターよりは強かったみたいで、そこそこの時間はかかったけど、波のボスは討伐された。

前回の波と同じなら、これで波は鎮まり、あのワインレッドの空も元に戻る筈、なん

だけど。

空が元に戻る事はなかった。

三勇者達が困惑してるのがわかる。

だが、俺は冷静そのものだ。

こうなる可能性が高い事はわかっていた。

だから、俺はここに来たんだ。

——やがて、塞がらない波の亀裂の中から、一人の少女が現れた。

黒い和服を身に纏い、黒い扇を手を持った、黒髪の美少女。

その少女は、覚悟を決めたような険しい目付きで、三勇者達を睨んでいた。

俺の悪意感知が、彼女の三勇者達への明確な悪意、殺意を感知する。

そして、俺の見える前で。

少女が、勇者達に襲いかかった。

35話

「流星槍！」

「流星劍！」

「流星弓！」

「輪舞避ノ型・花舞奏！」

三勇者達と謎の美少女による激闘が繰り広げられております！

実況はわたくし、斧の勇者こと奥寺夕でお贈りしております！

三勇者達が、原作においても使っていた、攻撃と同時に流星のようなエフェクトが発生する強力なスキルを使って攻める！

いやー、私もこの一ヶ月の間にゼルトブルという国に行つて、あの系列のスキルが内包された武器をコピーして来ましたが、やっぱり何度見ても綺麗ですね。

どう思いますか、解説の斧の勇者さん？

そうですね。

綺麗ただけではなく、しっかりと高い攻撃力を持った広範囲攻撃スキルですから、避けづらいという意味でも、あれを放つたのは良い判断だったと思います。

しかし、相手の少女も中々のもの。

まるで舞い踊るように扇を振り回し、強烈な風を起こして見事に攻撃を逸らしてしまいました。

あれはスキルの力だけではなく、高度な武術家としての技術を感じさせる動きでしたね。

一人で三勇者とその仲間達全員を相手取り、なおかつ一步も引かぬ激戦を繰り広げているという事といい、彼女が相当な実力者である事は確かな事実でしょう。

斧の勇者さんにそこまで言わせるとは、驚きですね。

私が見立てでは、大体ミラと同程度といったところでしょうか。

二人が戦えばどうなるのか、私には予測が付きません！

ああ！

しかし、戦いが長引く程に少しずつ、少しずつではありますが！ 少女の動きからキレが失われているように見えます！

これはどういう事でしょうか、斧の勇者さん？

これは、おそらく種族的な問題だと推測しますね。

原作知識の通りなら、彼女はMPやSPがHPと直結しているという不思議な種族だった筈です。

つまり、魔法やスキルを使い過ぎると、自らのHPまで減らして弱ってしまおうという事ですね。

徐々に彼女の体が半透明になっていく様子を見るに、この推測は当たらずとも遠からずといったところではないかと私は思います。

なるほど。

ありがとうございます。

それならば、少女は短期決戦を仕掛けた方が良さそうですね。

しかし、少女は多勢に無勢の袋叩き状態。

既に取り巻きの何人か脱落していますが、それでも十人近い人数は残っています。

これを一度に倒しきるのは難しいでしょう。

「輪舞零ノ型・逆式雪月花！」

ああっとお！

ここで少女が勝負に出たあ！

少女が円を描くように舞い、それに合わせて、紅い閃光と桜の花びらが舞う暴風が発生する！

広範囲攻撃！

そして、綺麗な見た目とは裏腹に、えげつない破壊力！

それをもろに食らった三勇者達は立ち上がれない！

これは勝負ありか!?

今のをどう見ますか、斧の勇者さん？

今のは上手いですねえ。

あの攻撃の範囲内に全員を入れる為に、直前までの戦い方で相手の動きを誘導していいました。

それも複数人を同時に。

こうして遠くから見ていたから気づけましたが、近くにいたら私も引つ掛かっていたでしょう。

恐るべき戦闘技術です。

斧の勇者さんにそこまで言わせるとは……!!

しかし、三勇者がやられてしまったという事は、もう我々が出た方がいいのはありませんか？

たしか、四聖勇者全員が死んだ状態で波が起きると、世界は滅亡してしまうんですね？

まだ尚文くんが残っていますし、予防線である我々七星勇者も何人かは健在ですから、即座に世界が滅びる訳ではないみたいですが。

それでも勇者を見殺しにするのはマズイですよね？

いえ、もう少しだけ待ってみましょう。

原作知識の通りなら、この直後に……

「新手ですか」

おっと、三勇者を蹴散らした少女が、ある方向に向かって何か言っていますね。

ちなみに、その方向とは我々が潜んでいる場所とは全く違いますので、あしからず。

それはそれとして、解説の斧の勇者さん、この展開は……。

ええ。

ヒーローは遅れてやって来るといふ事でしょうね。

少女が見つめる方向。

そこには、ラフタリアちゃんとフィロリアル・クイーンを引き連れた尚文くんの姿が

！

……ふう。

そろそろ、この一人二役、実況解説ごっこも飽きてきたな。

普通に考察しよう。

「この世界の勇者だと息巻いていた方々ですが、期待外れも甚だしいですね」

少女が倒れた勇者達を見ながら、そんな事を言った。

その割にはちよつと弱らされてんじやんというツツコミはしちやいけない。

多分、あの少女が想定してたより遥かに弱かったって意味だろうから。

そんな強敵っぽい雰囲気当てられたのか、尚文くん一行は少女を相手にかなり警戒してる。

「お前がこいつらを倒した訳？」

そう言いながら、尚文くんが近くに倒れていた三勇者の仲間の一人（多分、ビッチ氏）の顔を踏みつけて足蹴にした。

こんな時にようやる。

「む……あなた、曲がりなりにも仲間に向かってなんとという仕打ちを」

「仲間？ 残念だが違うな」

「どちらにしろ、あなたのやっている事は非道なものです」

「非道で結構。こいつらはそれよりも酷い真似をしてきたんでね。強い恨みを持つているんだよ」

「ごしゅじんさま悪人みたいー」

「敵に正論をぶつけられて、返す言葉もありません……」

「フイー口も真似していい？」

「やめとけ。さすがに死ぬぞ」

「はい」

呑気な会話だなー。

敵を前にそれって、どうかと思うよ？

「……仲間ではないのでしょうか、人の道から外れた行いに違いはありません」
「どうとでも言え」

「さて、ではこの世界の方なのでしようが、我も負ける訳にはいかないのです」とか思ってたたら、少女の雰囲気が変わった。

同時に尚文くん達への強い悪意を感知した。

これは敵意だ。

あと、他に何か混ざってる。

なんだろう……罪悪感かな？

でも、そんな事、今は関係ない。

扇、鉄扇を構えた少女が尚文くん目掛けて突撃する。

尚文くんは咄嗟に盾で受けたけど……ちよつとよろめいてるな。

あの攻撃、相当重いんだろう。

「ラフタリア、ファイロ！ 気を付けろ！ こいつ……強い」

「はいー」

「うん！」

そして、尚文くん一行と謎の少女による激闘が始まった。

倒れた勇者達を巻き込まないようにする為なのか、移動しながら戦ってる。

戦況は一進一退。

尚文くんが少女の動きをなんとか止め、他の二人が必殺技を叩き込む。

しかし、少女は華麗に鉄扇を操り、攻撃の全てを受け流している。

一方、少女の方も尚文くんの鉄壁の防御力を突破できていない。

互角！

まさに互角！

だが、均衡はすぐに崩れる。

少女の方が、消耗覚悟の大技で勝負を決めたのだ。

「これで終わりです！ 輪舞零ノ型・逆式雪花花！」

あの三勇者達を吹き飛ばした技が、尚文くん一行を襲う。

それに対して、尚文くんは前にも使っていた盾の檻を生み出すスキルで自分達を囲っ

て防ごうとした。

でも、やっぱりあの技の破壊力は凄まじいみたいで、あっさりと盾の檻が砕け散る。

それでも、尚文くんは身を盾にして仲間を守りきった。

「へえ……私の攻撃を受けて立っているとは……。そちらの防御力も中々のもの様ですわね」

「お褒めに与り光栄だ」

「えーい！」

鳥が少女に向かって飛びかかる。

そのまま戦いは続くが、お互いに消耗が激しい。

どっちが先に限界を迎えるか。

そんなチキンレースのような戦いになってきた。

その時、尚文くんが不可思議な動きをした。

まるで覚悟を決めたような顔で、ラフタリアちゃんの手を掴んだ。

ラフタリアちゃんも、尚文くんの想いに答えるように手を握り返して……

——突如、尚文くんから極大の悪意が吹き出した。

「!？」

離れて観戦していた俺ですら、思わず息を呑んでしまう程の、強い強い悪意。

これは、怒りだ。

そして尚文くんの盾が、どこか俺のプライドアックスに似た、不気味で禍々しい姿へと形を変える。

てことは……あれがそうなのか。

原作における盾の勇者の切り札。

理不尽な連中への強い怒りによつて発現した、呪いの盾。

発動すれば怒りによつて精神を浸食される、リスクの高すぎる奥の手。

あれが、——『憤怒の盾』。

36話

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

尚文くんが咆哮を上げた。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

そしたら、尚文くんの仲間の鳥まで絶叫を上げた。

そして黒い炎を纏って少女に突撃した。

そこに技術もなにもなく、ただ暴れているようにしか見えない。

どう見ても理性が吹き飛んでやがる。

暴走状態だ。

「な、なんですか、これは……！ 先程よりも重い……！」

鳥の襲撃を受けた少女が驚愕している。

一方の尚文くんは、ラフタリアちゃんの手を握りながら苦悶の表情をしていた。

さつきから、尚文くんから感じる悪意が増えたり減ったりしてる。

暴れる悪意に無理矢理蓋をしようとしてる感じだ。

きつと、憤怒の盾のせいで沸いてくる自分の怒りを、なんとか制御しようと必死なん

だろうな！。

あつさりと傲慢の斧に呑み込まれた身としては、見てて尊敬すら覚えるわ。

「うおおおおおおおおおおおおおおお！」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

再び、尚文くんと鳥が咆哮を上げて、少女に襲いかかる。

作戦もなにもあつたもんじゃない特攻だ。

今の尚文くんに作戦考えてる余裕なんてないんだろうから、仕方ないんだろうけど。

「舐めないでくださいー！」

そんなんでやられる相手じゃないわな。

少女は突進してくる一人と一匹の内、一匹の方に狙いを定めて鉄扇を振るつた。

尚文くんに並大抵の攻撃は通らないから、先に鳥の方を狙うのは至極真つ当な判断だ

と思う。

「させるかー！」

しかし、尚文くんもそれは読んでいたのか、鳥の前に躍り出て、少女の攻撃を自分が

受けた。

当然のようにノーダメージだ。

憤怒の盾やべえ。

そして、尚文くんを中心に黒い炎が広がった。

反撃効果ってやつか。

文字通り、相手の攻撃を受けると発動する反撃のスキル。

それがあの黒い炎、なんだと思う、多分。

「何ッ!?!」

そして、今まで攻撃らしい攻撃を見せなかった尚文くんのいきなりの攻撃スキル発動はさすがに読めなかったみたいで、少女は驚愕しながら黒い炎に包まれた。

「ぐ……!?! ーしかし、耐えられない攻撃ではありません!」

タフだな、あの子。

あの炎を食らっても致命傷にはなっていない。

これは尚文くんの攻撃力が低いせいとか、それとも少女の防御力が思ったより高いのか。

まあ、あんまり関係ないか。

「輪舞破ノ型・亀甲割!」

お、新しい技が出た。

扇を畳んだ状態で引いて、それを槍みたいに突き出す事で光の矢みたいなのを飛ばしてきた。

それが尚文くん命中する。

「くっ……い！」

ん？

憤怒の盾で防御力が格段に上昇してる筈の尚文くんがダメージを受けてる。

今の技にそこまでの威力があるようには見えなかったけど……もしかして防御貫通攻撃ってやつだろうか？

そうなると、レベル差があってもダメージ貰いそう。

それは危ないな。

注意しとこう。

「な……い?! この攻撃で倒れないのですか……い！」

少女が思いつきり動揺してる。

それだけ自信のあった技なのか。

だとしたら、こうして観察してる内に見れたのは幸運だったな。

実際に戦う時、やり易くなる。

「ですが、あなたの攻撃の短所はわかりました」

少女が尚文くんに向けて堂々と宣言した。

「黒い炎は近接攻撃をすると発動する。遠くからの攻撃では発動しない。そして眷属の

者はあなたの叫びによつて敵を指し示す。……ですが、それまでです。眷属を倒し、あなたを遠くから攻撃すれば勝機はあります!」

……それ、敵の目の前で言っちゃって良いのん?

絶対、対策とられると思うけど。

いや、心理的なプレッシャーをかける為とか、そんな感じの理由があるのかもしれない。

そう思つておこう。

じゃないと、あの子はただのお馬鹿さんだ。

「がああああああああああああああああ!」

「させるか! シールドプリズン!」

「簡単に止められると思わないでください!」

鳥がひたすらに暴れ回り、尚文くんは少女を止める為に盾の檻を作るスキルを繰り出すも、少女の動きが速いせいで、そう簡単に檻に閉じ込める事ができない。

スキルはあつさりと外れて、見当違いの場所に檻が出現しただけで終わる。

お?

今度はラフタリアちゃんが、なんかやりだした。

魔法を唱えてんのか。

あれは……幻影を作る魔法かね？

しかも、幻影を作ると同時に、本体の姿が見えなくなってる。

俺には悪意感知があるから、どこにいるのかわかるけど。

でも、そういう感知能力を持たない相手からしたら、とんだ初見殺しだわな。

「何ッ!？」

案の定、少女はラフタリアちゃんの幻影フェイントに引っ掛かって、姿を隠していた本物の方に斬られた。

深い傷じゃない。

でも、決定的な隙が出来た。

「今ですー！」

「おうー！」

そこに、尚文くんが必殺スキルを叩き込む。

「シールドプリズン！」

「な……!？」

まず、盾の檻で少女の動きを封じる。

「チェンジシールド（攻）！」

続いて、盾の檻を構築している盾を、スキルの力によって違う盾へと変化させる。

これは原作知識から得た情報だ。

このスキルの発動方法に関しては印象に残ってる。間違ってるなら間違ってるで、別に構わない。

そして、尚文くんが本命スキルの詠唱を始めた。

『その愚かなる罪人への我が決めたる罰の名は、鉄の処女の包容による全身を貫かれる一撃也。叫びすらも抱かれ、苦痛に悶絶するがいい！』

「アイアンメイデーン！」

その詠唱を終えた瞬間、盾の檻を呑み込むように、巨大なアイアンメイデーンが出現した。

どう考えても実物より遥かに大きい。

実物見た事ないから断言はできないけど、人を閉じ込める檻を更に呑み込む程の大きさなんだから、めっちゃデカイ事だけは確かだ。

それに、何と言ってもあれはカースシリーズの必殺スキル。

その破壊力は、本物の処刑具の比ではない。

「グフツ……！」

それをもろに食らった少女はボロボロだ。

まだ立ってるのは凄いけど、戦える体じゃなさそう。

……なら、そろそろいいか。

俺は気配を消したまま、ゆつくりと彼らに近づいた。

「非常に不服ですが……一度撤退するしかないようですね……」

少女が悔しそうにそう呟く。

「我が名はグラス……あなた、名をなんと言う？」

「……話す必要があるのか？」

「ないでしょうね。ですが、我は我をここまで追い詰めた者へ敬意を表して覚えておきたい。そう言っているのです」

「武人だこと。色々聞きたい事は山程ある」

「では、名を聞く代価として盾を持つ者、あなた方に一つ、情報をお教えしましょう」

少女が話を続ける。

その内容には、俺も激しく興味がある。

「我らをただの災害だと思っているのですしたら大きな間違いです。勝つのは我らであり、あなた方ではありません」

その台詞はどこかで聞いたな。

多分、原作知識だ。

違う。

俺が知りたいのは、そんな謎かけみたいなチンケな情報ではない。

「わかった。情報の代価に答えてやるとしよう。俺の名前は尚文、岩谷尚文だ！」
「ナオフミ……その名、覚えておきます！」

少女……グラスはそう言うと同時に波の亀裂へと飛び込もうとした。
させないよ。

その為に俺は来たんだから。

「逃がさん」

「!？」

波に飛び込もうとするグラスに向かって、俺は斧を振るった。

隠密用の小型斧ではなく、しっかりと戦鬪用のやつに変えた上でだ。

それを避ける為に、グラスは大きく後退する。

そのせいで、波の亀裂からは遠ざかった。

逃走は失敗に終わったのだ。

しかし、波の亀裂がある限り、こいつが逃走を成功させる可能性は残っている。

俺を倒す事は無理でも、俺を出し抜いて亀裂に飛び込む事ならできるかもしれない。

それは困る。

「邪魔だな」

だから、俺は波の亀裂に斧を叩きつけた。

そうした瞬間、亀裂が音を立てて崩壊した。

ほほう。

正直ダメ元だったけど、やってみるもんだな。

「なッ……!?!」

「これでお前に逃げ場はない」

グラスは絶句した後……覚悟を決めたように俺に向き直った。

尚文くんも言ってたけど、君には聞きたい事が山程あるんだ。

逃がしはしないよ。

君の知ってる事、洗いざらい吐いてもらう。

「さて……やるか」

反抗的な悪意を叩きつけてくるグラスに対して、俺は斧を構え、戦闘態勢を取った。

37話

「波を力づくで鎮めるとは……あなたも勇者という事ですか」

「さあな」

しらばつくれる。

尚文くん達も見てる事だし、現時点では正体不明の謎のヒーローという事にしておきたい。

という事で、口調も少し変えよう。

軽口禁止だ。

「なににせよ、お前にはもう逃げ場もなければ勝ち目もない。諦めて投降する事を進める」

「投降？ 投降してどうなるというのですか？」

「お前には聞きたい事が山のようにあるからな。私と一緒に来てもらう。殺しはしないから安心しろ」

これは嘘じゃないぞ。

こいつが持つてる知識は喉から手が出る程欲しい。

原作知識の通りなら、こいつは波という名の世界融合現象によって、この世界と繋がりにかけている異世界の住人だ。

それが本当かどうか確認もしたいし、何より波を利用して世界を渡るなんて真似ができて以上、こいつは波に関してかなり詳しいと見た。

原作知識や竜帝の知識、各国の伝承に伝説。

調べられるものは片っ端から調べてるのが現状だ。

知識は一つでも多い方が良い。

特に、波を渡って異世界へと渡る技術。

これが知りたい。

そうすれば、もし計画が失敗して絶望的な事態に陥った時に「逃げる」という選択肢を選ぶ事ができるようになる。

神の影に怯えながら終わりの見えない逃走生活を送るなんて普通に嫌だから、本当に最後の最後の手段だけど、それでも、いざという時に逃げられるというのは大きい。

それだけの情報を話してくれるのなら、代価として生かしておいてやるのもやぶさかではないというものだ。

当然、弱らせた上で、どこぞに監禁という形になるだろうけど。

解放するのは俺の計画が成就した暁に、だな。

あ、計画が失敗して逃げる事になった時でも解放してあげよう。

「……お断りする。我には果たさねばならない使命があります。こんな所でむざむざと捕まる訳にはいかない！」

おっと、振られたか。

それは残念。

こんだけ追い詰められた状況なら素直に従ってくれるかと思っただけど、そんな事はなかつたぜ。

じゃあ、仕方ない。

予定通りにやるだけだ。

「ならば、死なない程度に痛めつけ、強引に連れて行かせてもらおう」
「やれるものならやってみなさい！」

グラスがボロボロの体に鞭打って突撃してくる。

愚かな。

三勇者達や尚文くん一行に苦戦するような実力で、しかも彼らにやられて弱りきった状態で、

彼らよりも圧倒的に強い俺に勝てると思うな。

「輪舞零ノ型・逆式雪月花！」

ほう。

意外だ。

いきなり大技を使ってきたか。

消耗を気にして出し渋るかと思っただけ……いや、それはできないか。

あんだだけ弱ってちや、どのみち長期戦はできない。

短期決戦に賭けるしかない。

まあ、無駄なんだけどね。

「ハッ！」

斧を一振り。

スキルでもなんでもない、ただの通常攻撃。

それだけで、グラス渾身の一撃を薙ぎ払う。

紅い閃光を放つ桜吹雪が、虚しく散っていった。

「なッ……!?!」

「次は私の番だ」

殺しちやいけないから、あえて遠距離攻撃スキルを使わず、普通に走ってグラスとの距離を縮める。

だが、そこは俺の化け物ステータス。

走るまでもなく、数メートルの距離を踏み込み一つで一瞬にして詰め、死なない程度に加減した攻撃を繰り返した。

「ッ!? 輪舞斬ノ型・瞬!」

しかし、グラスはこれ避けた。

そして一瞬にして俺の後ろを取り、攻撃を仕掛けようとしている。

良い動きだな。

戦闘経験二ヶ月くらいの俺じゃ、逆立ちしても真似できないわ。

だけど。

「遅いわ!」

「ぐッ……………」

無情なまでのステータス差の前では、小手先の技術など無意味!

振り返り様に薙ぎ払った斧が、真後ろにいたグラスを撥ね飛ばす。

距離が近かったせいで、刃ではなく柄の部分当たった。

おかげでグラスは大怪我を負ったものの、真つ二つにはならず飛んでいった。

命拾いしたな。

いや、殺す気はないけど。

「ハア…………ハア…………つ、強い…………! ナオフミ達よりも、圧倒的に…………! それでも…………」

諦める訳には……いかない！」

息も絶え絶えになりながら、それでもグラスは立ち上がった。

すげえ根性。

力使い過ぎたのか、今にも成仏しそうなくらい身体が半透明になってるくせに、よくやる。

「輪舞無ノ型・月割り！」

グラスが両手に持った扇を閉じ、そこから月のような輝きを放つエネルギー状の刃を出して、それを飛ばしてきた。

綺麗な技だな。

流星シリーズに匹敵するよ。

だが、効かぬ！

「ふん！」

光の斬撃を全て斧で叩き落とす。

いくら綺麗でも攻撃力が不足してちや、戦いでは何の意味もない。

「輪舞攻ノ型・花風！」

今度はなんか、花びらみたいな光が扇から飛び出してきた。

この技もかなり綺麗だ。

こいつの攻撃って、ホント綺麗な技が多いな。
しかーし！

戦いで必要なのは美しさではなく、実用性と破壊力なのだよ！

「そらー！」

再び斧を一閃。

花びらの光は、効力を失って宙に溶けていった。

しかし、この技はどうやら目眩ましだったらしい。

花びらを吹き飛ばして視線が開けた先。

そこには、閉じた扇を短剣のように握り、刺突のように突き出すグラスの姿があった。

「輪舞破ノ型・亀甲割ー！」

グラスの扇から光の矢みたいなのが飛び出して、俺へと飛来してくる。

あ、これさつきも見た。

尚文くん相手に使ってた防御貫通スキル（多分）だ。

じゃあ、まともに食らう訳にはいかないな。

「ふんー！」

俺は光の矢を斧で叩き伏せた。

いかな防御貫通スキルとはいえ、そもそも体に当たらなければ意味がない。

さあ、唯一俺にダメージを与えられそうなスキルも不発に終わった。
万策尽きたんじゃないかね？

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

それでもグラスは諦めなかった。

左右の手に扇を握り締め、俺に向かって突進する。

勝ち目のない敵に向けて特攻する。

その姿はとても気高く……そして愚かだ。

勝ち目がないんだから、逃げる事に全力を尽くすべきだろうに。

……勝ち目がない？

本当にそうか？

なんだかグラスから感じる悪意、いや、攻撃意思が膨れ上がって……。

これは、何か奥の手があるのか？

俺は気を引き締めた。

油断してやられるなんて冗談じゃない。

窮鼠、猫を噛むという言葉がある。

俺は噛まれたくない。

というか死にたくないから気を引き締める。

グラスが何をしても対応できるように、全神経を集中させる。

そして、——俺の判断は正解だった。

「輪舞無ノ型・無想！」

次の瞬間、グラスの体が消えた。

そう錯覚する程の超スピードで、俺に襲いかかってきたのだ。

今までは比べ物にならない速さ、重さの連続攻撃が俺の体に突き刺さる。

半分くらいは斧で防ぐも、残りの半分は食らってしまった。

鎧が砕け、俺にダメージが通る。

圧倒的な筈のステータス差を覆されて、俺はダメージを受けた。

「これでも……駄目ですか……」

それでも、俺は立っていた。

鎧を砕かれ、傷をつけられ、傷口から血を流したが、それでも致命傷には至っていない。

痛くて苦しいが、それでもタクトにやられて半死半生の大怪我を負った時に比べれば、
どうという事はない。

骨も二、三本しか折れていないのだから、むしろ軽傷の部類だろう。

対して、グラスは倒れていた。

明らかに俺や尚文くん達が与えた以上のダメージを受けた様子で、ぐったりとしていた。

体は今にも消えそうなくらいの半透明、というか八割透明くらいになっている。

……どうやら、今の技は凄まじい反動がある自爆技だったらしい。

すてみタツクルだ。

どうりで、最後だけやたら強かった訳だ。

まあ、なんにせよ、これで終わりかな。

「私の勝ちだな。では、最初に言った通り、お前を連行させてもらうぞ」

「……いや、私の返答は変わりません。お断りさせていただきます」

今さら何言ってるんだか。

君に拒否権なんてな……ッ!?

何ッ!?

「なん……だと……!?!」

俺が見ている前で、グラスの身体が宙に溶けていく。

さっきの技の反動に耐えきれなかったのか、消滅していつているのだ。

たしかに、あんなに弱った状態で自爆技なんて使えば、こうなるのも無理はないのか

もしれない。

つまり、こいつ死ぬ気でさっきの技を使ってきたって事か!?

正気か!?

「お前……ッ!」

「……自らの世界を生かす為に、他の世界に攻め入り滅ぼす。そんな人の道に外れた行いをしようとしたのです。死ぬ覚悟はとうに決めてきました」

いや、だからって……!

俺だつて似たような事しようとしてるけど、死ぬ覚悟なんてこれっぽっちもないぞ!
むしろ死なない為にやってるんだから!

「……で拘束され、我的世界から眷属器を一つ失わせるくらいならば……せめて、扇だけでも……次の持ち主の下へ……」

……ああ、そうかい。

ご立派な事で。

もうグラスを助ける事はできない。

その為の手段を俺は持っていない。

作戦失敗だ。

クソッ。

「名も知らぬ武人よ……。最後に……あなたのような……強き者と戦えた事を……誇り

に思います……」

「……そうか」

せいぜい安らかに眠るが良いさ。

無理だと思うけど。

まあ、気が向いたらお墓でも作ってやるよ。

お手軽に、バイオプラントで。

「では、さらばです……」

「ああ」

そうして、グラスは死んだ。

死体も残さずに宙に消えた。

そして、グラスの持っていた扇……俺の知っている通りなら、向こうの世界の七星武

器の一つもまた、主と同じように宙に消えていった。

元の世界に戻ったのか、それともこの世界をさ迷っているのかはわからない。

どっちにしても、俺にはあんまり関係のない話だ。

こうして、結果的に何一つとして得るものがなかった、

俺にとって無意味となってしまった戦いが、終わりを告げたのだった。

38話

「さて」

グラスが逝つたのを確認してから、俺はこの戦いを見ている事しかできなかった尚文くん達に向き直つた。

ちなみに、グラスに鎧を壊されたけど、兜は無事だから、俺の声はボイスチェンジャー的な機械チックな声のままだ。

顔も隠れてるし、特徴的な傷がある右半身も、地肌は見えていない。
即座にバレはしないとと思う。

「そこのお前達。何か言いたそうだな」

「……いくつか聞きたい事がある」

「なんだ？」

尚文くんが質問してくるので、一応は聞く事にする。

このまま何も言わずに立ち去ったら詮索されそうだし。

……いや、どっち道、詮索はされるか。

これだけ暴れた時点で、もう手遅れだ。

失敗した。

何も言わずに立ち去れば良かった。

「まず……あのグラスという女は何者なんだ？」

「私も知らない。知りたければ自分で調べろ」

そうと決まったら、適当に答えて早く帰ろう。

ミラとイグニが待つてるし、アックスフォードの波も近い。

とつとと済ませよう。

とつとと。

あ、俺の言葉を聞いた尚文くんから微量の悪意を感知した。

これは苛立ちだね。

俺が煙に巻こうとしてると思ったらしい。

正解だよ。

「じゃあ、あんたは何者だ？」

「私か？ そうだな……」

そういうえば、正体を隠そうとは思ったけど、偽名的なものは考えてなかったな。

この際だ。

適当に名乗っとくか。

「私はガーディアン。世界の守護者だ。この世界を守る為に戦っている」

「は？　なんだ、そりゃ？」

嘘じゃないぞー。

今適当に考えた設定だけど、あながち間違つてないもの。

俺、勇者だし。

世界守る為に戦つてるし。

「話は終わりだな。ではな勇者よ。世界の為に戦つていれば、いずれまた会う事もある」

「な、ちよつと待……」

「では、去らばだ」

強引に話を終わらせ、ダツシユしてその場から立ち去る。

転送スキル使つたら勇者だつてバレそうだし。

こんだけ圧倒的な強さを見せつけちゃったんだから疑われはするだろうけど、わざわざ疑いを確信に変えてやる必要はない。

この後は尚文くん達が見えなくなつてから、転送スキルで帰るだけだ。

ああ。

そういうえば、イグニにお土産をねだられてたな。

どこかで買っていくか。
そうして、俺はメルロマルクを去った。



「ただいまー」

「お帰りなさいませ」

「ご主人！ お土産はどこだ？」

「ほれ、メルロマルク饅頭」

「お、サンキューー！」

喜んでもらえて何より。

あの後、そういえばメルロマルクの通貨持ってくるの忘れたという事に気づいたから、波の影響でワチャワチャしてた近隣の村に忍び込んで盗ってきた饅頭だ。

存分に味わってくれ。

「ユウ様、ご報告があります」

「ん？ 何？」

盗品饅頭を食いながら自室に戻っていくイグニを見送った後、ミラが話しかけてきた。

その表情は若干厳しい。

ような気がする。

付き合いが長くなってきたおかげで、最近になってミラの表情が読めるようになってきたんだけど、まだまだ精度は低いのだ。

「三日後に迫った波への援軍として、先程、鞭の勇者タクトとその一行が、飛行船でフォーブレイを出立したもようです」

「……なんだった？」

今とんでもない事言わなかったか？

「ちよつと待って。タクトが？ 来るの？ ここに？」

「はい」

「……王様は止めてくれなかったの？ あの人、事情知ってるでしょ」

「止める暇もなかったそうです。正確にはタクト一行が出立した後、事後報告を受けたと。勝手な真似をしたフォーブレイに怒り心頭でした」

ああ、そう。

タクトめ。

強引な手段使いやがって。

おそらく、俺が波の時にしか帰って来ないって話を聞いて、「じゃあ波の時に殺してやれば良いじゃん」とか安易な事考えたんだらうなあ。

めんどうな事してくれたわ。

「いかがなさいますか？」

「斧の勇者様は旅先でトラブルにでも合われたのか、連絡がつきません。……て事にし
といて。

今ぐらいの波なら俺抜きでもなんとかなるだろうし、せいぜいタクトをこき使って
やってくれ」

「かしこまりました。波への不参加によって人望がタクトに移らぬよう、鞭の勇者がか
つて斧の勇者様に襲撃をかけた疑いがあるとの噂を兵達の間流しておきましたので、
どうかご安心ください」

「わあ。仕事が早いなあ。ご苦労様」

という事で、今回の波に俺は不参加という事になりました。

幸い、イグニの竜帝の知識のおかげでレベル100の限界を突破した精鋭戦力が何人
もいるから問題ないでしょ。

その人達は、俺が暗躍中に手に入れた「ソウルバキュームアックス」っていう、どこか掃除機に似た残念な外見の武器で一回魂を引っこ抜いて転生者や憑依者じゃないかどうか確認したし、

更に悪意感知で念入りに調べたから、そこそこ信用できる。

それに、当初に比べれば、アックスフォードの兵士達からの人望は重要度が下がってるしね。

うん。

大丈夫だな。問題ない。

「それで、そちらの首尾はいかがでしたか？」

「ああ……残念な事に作戦失敗。収穫はなかったよ。まあ、損失もなかったから気にしなくていい」

「左様ですか」

いやあ……本当に今回は失敗したなあ。

まさかグラスが自殺するとは思わなかった。

というより、あれは相討ち覚悟で俺を殺しにきてた感じか。

それが結果的に自殺みたいな形に落ち着いたと。

どっちにしろ、今回の目的だった、グラス生け捕り計画は失敗だ。

はあ……。

ため息が出そう。

いや、ここはポジティブに考えよう。

グラスが今際の際に吐いた台詞は、俺の知識にあるものと同じだった。

眷属器という言葉も聞いた。

そこら辺の知識の検証はできたと思おう。

それに、グラスは元々敵だ。

原作では最終的に尚文くん達の仲間になるが、俺の計画を進めていけば確実に敵対する奴だ。

未来の敵を一人、まだ強くなる前のこのタイミングで消す事ができた。

そう思っておこう。

さて、過ぎた事はもういい。

これからの事を考えよう。

とりあえず、アックスフォードの波に参加しないのなら、俺はしばらく暇になる。

タクトが理由をつけて波の度に来るような事になったら、ずっと暇になる。

いかん！

このままでは無職になってしまうではないか！

さては、これがタクトの策略か!?

と、冗談はさておき。

空いた時間で何をすべきか。

一つ、例の夜の暗躍生活を通して手に入れたいものがあるから、その入手を急ぐ。

一つ、竜帝の知識をより多く手に入れる為に、野生の竜帝を狩って核石を頂戴する。

ひとまずは、この二つが最優先かね。

特に前者はできるだけ急いだ方がいい。

原作知識の通りなら、あと一ヶ月後に迫った、四霊の一角『れいき靈亀』の目覚めには間に合わせたい。

後者もかなり重要だ。

実は、現在イグニが所持してる竜帝の知識の中には、四霊復活に関する知識がないのだ。

作戦の要を使う為の情報に完全に原作知識頼みつてのはマズイ。

いや、イグニ曰く「今回は終末の波だから、ほっとけば近い内に蘇るぜ」との事だけど、やっぱり手動で封印を解除する手段も持ち合わせておきたい。

こつちで目覚めのタイミングを操作できるなら、準備万端の状態で戦いを始められるだろうしね。

なんだ。

結構やる事があるじゃないか。

これなら無職にはならないな。

クツクツク。

タクトの策略敗れたり！

貴様ごときに嵌められる俺ではないわ！

よし！

これからも、計画成就に向けて邁進するとしますか！

「ああ、波への不参加により空いた時間にはお勉強の予定を詰めておきましたので、そのつもりでいてくださいね」

「……マジかい」

俺のやる気は萎れていった。

そして、ミラはいつも通り、どこまでもミラであった。

39話

アックスフオードの波はレベル限界を突破したソラちゃんやグレゴリオ、アームストロング大佐が無双し、

シルベスターさんの采配でタクトがこき使われて社畜のように働かされたおかげで、前回同様、ほぼ被害0で完全勝利を納めたいらしい。

事後報告でそう聞いた。

その時間、俺はスパルタミラ講座によつて文字と格闘していたので、そんな事を気にする余裕はなかつた。

結局、タクトは俺とは会えず、完全にふてくされた様子で帰って行つたらしい。

兵士達は表面上はタクトに感謝してたけど、王様やミラの策略で流された噂によつて、その感謝の言葉は酷く淡白で棒読みだったとの事。

報告によると、タクトは去り際に「こんな国、二度と助けてやるか！」と言い捨てていったらしいよ。

器の小さい事で。

一方の俺は、ついにミラ講座の成果が上がり、魔法文字を習得する事に成功した。

魔法書を読んで高位の魔法を覚えた時は、「やったどおとおお！」という奇声を上げて、思わずミラに抱きついてしまった。

絶対零度の目で見られた。

失態だったわ。

それはともかく、ついに魔法文字を覚えたって事で、前に読めなかつたドラウキューア山脈の碑文に再挑戦して、勇者専用の魔法を覚えてきた。

さらに、イグニに教えを乞うて竜帝の加護を受け、ドラゴン専用の魔法である「龍脈法」も習得した。

なかなか難しくかったけど、イグニとつくの昔に龍脈法を習得していたらしいミラの二人がかりで教えてもらったから、割とあっさり使えるようになった。

少なくとも、文字の習得よりは遥かに楽だった。

そして、ここからが本番だ。

たしか、原作知識の通りなら、この龍脈法と通常の魔法を混ぜ合わせる事で、勇者専用の最上級魔法「リベレイション」が使えるようになる筈。

イグニの竜帝の知識の中にも、その魔法の存在はあった。

使えるようになれば、大きな戦力アップになる。

その一心で練習を始めたものの、あまりの難易度に何度か心が折れかけた。

だけど、本来の目的と竜帝の欠片集めの傍らにコツコツと修行を続け、なんとか形にはなったというレベルだけど、一応は習得できた。

でも、発動には多大な集中力が必要で、詠唱してる間は他の事が一切できなくなるから、実戦投入はまだできないと思う。

そして、本来の目的の方。

こつちもかなり順調だ。

メルロマルクの次の波まで約二週間。

原作知識の通りなら、霊亀の復活はこの波の直前だった筈。

それが間違っているにしても、その時期に復活する可能性が高い事には変わりはない。

復活しなくても、イグニの証言通りなら遅かれ早かれだ。

情報収集班の報告でも、昔の文献を漁った結果、四霊が勝手に復活する可能性は高いみたいだしな。

そんな時間になって、ようやく夜の暗躍活動が実を結んだ。

狙い通り、欲しかったものを手に入れる事ができた。

リスクがちよっと怖かったけど……傲慢に浸食されきってるせいかな、目に見える変化は今のところはない。

なら、オールオツケーだ。

そこからの二週間は、手に入れた必勝の手札をより確実にする事に全力を尽くした。竜帝の欠片探しすら一時中断して研究を進めた。

まあ、その間はイグニが単独で竜帝狩りをしてたけど。

あいつも相当強くなってるから、そんじよそこの竜帝には負けないし。

それはともかく、結果として俺は予想を遥かに上回るリターンを獲得した。

正直、あまりの凄まじさに笑いが止まらない。

勝てる。

これなら絶対に厄災の波に打ち勝てる。

邪魔する者全てを踏み潰し、俺の生存エンドという名のハッピーエンドを迎える事ができる！

その日、俺は新たに拠点とした場所で小躍りした。

一方、俺がそんな生活を続けている間、尚文くんは中々に苦勞していたらしい。

影の皆さんからの報告で、尚文くんがメルロマルクの第二王女を誘拐して指名手配を食らったという情報が入ってきた。

これも原作通りだな。

たしか、尚文くんの活躍と、三勇者の不甲斐なさに遂に業を煮やした三勇教が、四聖

勇者全員を殺害しようとしたんだっけ？

それが成功しちやうとこっちとしても困るけど、助けようにも尚文くんの居場所がわからないから助けようがない。

それに俺は忙しいんだ。

仮にも勇者なら、自分達だけで何とかしてほしい。

という感じで知らんぷりを決め込んで研究に没頭していたら、その内、三勇教が失墜して、メルロマルクの王様と王女様が三勇教に加担した責任を取ってクズとビッチに改名したというニュースが飛び込んできた。

またしても原作知識の通りになったな。

こんな感じで未来が、というより尚文くん達の動向が掴みやすく読みやすいからこそ、今まで過度な原作ブレイクを慎んできた訳だけど。

今のところ、大きく原作から乖離してるのは、グラスが死んだ事くらいじゃないか？ その程度なら、ストーリーの展開はあんまり変わらないみたいやね。

——でも、そんな予定調和の日々も、そろそろ終わりだ。

なんかやかんやとやってる内に、時間は過ぎていった。

霊亀復活まで、あと僅か。

影の皆さんからの報告では、世界各国で霊亀の使い魔と思われる謎の魔物が大量発生

しているらしい。

原作知識に頼らずとも、
霊亀復活が目前に迫っている事がわかる。
暗躍の時間は終わりだ。
計画実行の時が来た。

第四章 靈龜進行編

40話

「四靈……世界の守護獣……なるほど。斧の勇者様が前に言っていたのは、こういう事だったのですな」

「その通りです」

靈龜の復活に合わせて、靈龜が封印されている国へと出発する前日。

俺は王様に呼び出しを食らった。

情報収集班が手に入れた情報は、当然、王様の耳にも入っている。

そこから、俺が前に言っていた言葉の真意に気づいたらしい。

つまり、俺は今日、王様の決意表明を聞く為に呼び出された訳だ。

さて、敵になるか味方になるか。

当初に比べればアックスフォードの重要度は下がってるけど、できれば味方になって

ほしいなあ。

そして、王様は口を開いた。

「……本来ならば、とてもワシ一人で決められるような事ではないのですがのう……」

しかし、こんな情報を多くの者に伝えてしまえば混乱が起きる事は確實。

故に、他の者には伝えませぬ。あくまでもワシ個人の決断としてお聞きください」

「……聞きましよう」

一瞬、あれ？ それじゃ意味なくね？ とか思っちゃったけど、口には出さない。

このシリアスな空気をぶち壊す訳にはいかないもの。

「——ワシは、斧の勇者様に最大限の支援をすると約束しました。それを違える気はありません」

お、これは。

「ワシの全権限を持って、アックスフォードを斧の勇者様を支援するように動かす事を誓います」

やった！

王様が仲間になった！

この言葉を疑う必要はない。

何故なら、王様からは俺への一切の悪意を感じないから。

あるのはただ、騙す事になる兵士達と、これから犠牲にする人々への罪悪感だけだ。

実に人間の出来た方でいらっしやる。

これから、王様は自分の権力を使って、アックスフォードの兵士達に俺の計画の助け

となるような命令を下す。

その結果どうなるのかを兵士達には伝えない。

ただ、王命として、そして神命として命令するだけだ。

そして、全てが終わった後。

世界中から非難される事になった時には、他の人達は利用されていただけという事にして、自分の首一つで事態を納めるつもりであると。

王様はそう言った。

「ご立派な決断です。協力を心から感謝します」

「なんのなんの。これも国の為、世界の為、そして斧の勇者様の為。この国の国王として、斧教教皇として当然の事ですじゃ」

……凄いなあ。

これが本物の王か。

俺には逆立ちしても真似できないや。

「それで、我らはどう動けば良いのですかのう？」

「ええ。では、まずは――」

そうして王様と話し合いを続け、その日は解散となった。



「中華だなー」

王様との話し合いを終えた数日後。

俺は霊亀が封印されているという国に来ていた。

今回も俺一人だ。

下手にミラとかを連れてきたら、霊亀に襲われそうだったから。

今のミラなら霊亀を倒せるかもしれないけど、倒したんじや意味ないんだよ。

霊亀には、思う存分暴れてもらわないと困る。

ここで一度、四霊についておさらいしておこうと思う。

四霊とは、れいき霊亀、ほうわう鳳凰、きりん麒麟、おうりゆう応竜という四体の化け物で、世界各地にそれぞれ封印

されている。

霊亀はこの国に。

鳳凰はまた違う国に。

麒麟がフォーブレイとアックスフォードの国境の街で。

応竜は竜帝の欠片の中だ。

こいつらは解放されると、あらゆる命を奪う為に暴れ回る。

その目的は、生物を殺害する事によって、その魂を集める事。

そして、集めた魂の力によって、この世界を守る強力な結界を発動し、波の脅威から世界を救うのだ。

ただし、その為に犠牲にしなければならない魂の数は、世界人口の約三分の二。

目眩がする数字だ。

波の脅威が去ったとしても、これだけの人数が死んだんじや、どっち道、大災害には違いない。

だからこそ、原作における尚文くん達は、これをどうしようもなくなった時の最後の手段として保留し、結局使わなかった。

だが、俺は違う。

世界の為に、というより俺が生き残る未来の為に、大虐殺を慣行する覚悟がある。

思いつきり手を汚す覚悟がある。

そうしなければならぬ程、波の脅威は絶望的なんだ。

波を起こしているラスボスは絶対に倒せない。

ちよっと計算してみたけど、想定できるラスボスの力は、思いつく限りの強化を繰り返

返し、最終進化形態となった俺の数億倍以上。

最低でも、それくらい力がある。

おわかりだろうか？

最低でも数億倍なんだけ？

多分、実際はそれ以上の差があるだろう。

まさしく神のごとき力を持った相手。

原作知識だけではなく、竜帝の知識、過去の伝承、科学的な観点。

そのどれで見ても勝てる気がしない。

というか、勝負にすらならない。

普通に考えれば、向こうがこの世界に直接干渉できる状況が整った時点で、ジ・エン
ドだ。

これをどうにかする？

少なくとも俺には無理です。

例えるなら、星を木つ端微塵に打ち砕く巨大隕石を野球バット一本で打ち返せと言う
が如き無茶振りだもの。

原作においては、尚文くんとかラフタリアちゃんが奇跡という名のご都合主義で覚醒し
て倒したけど、それを信じる気にはなれない。

まあ、当たり前だわな。

少なくとも、前に会った時点では俺より弱かった尚文くん達が、最終進化形態の俺より数億倍以上強いラスボスに勝てる訳がない。

常識的に考えて。

だからこそ、正直、原作知識に嘘があるとすれば、そこだと思っている。

最後の最後。

物語の終盤。

ラスボスとの対決。

そんなクライマックスの部分。

小説「盾の勇者の成り上がり」のラストは……こう言っちゃなんだけど、ちょっと強引すぎるというか、ご都合主義がすぎる終わり方だったと思う。

人によって感想は違うとは思うけど、少なくとも俺はそう思った。

勝ち目が無いどころか次元が違うラスボスに対して、主人公とヒロインがいきなり覚醒して倒すつてのはちよつと……。

それが俺の感想だ。

そこだけ納得いかなかったのだ。

例えるならば、星を木っ端微塵に打ち砕く巨大隕石を前に、突如ド○えもんが降臨し

て、巨大隕石を完全破壊する秘密道具を出してくれるが如きご都合主義だもの。
信じられるかボケ！

でも、仮にこの原作知識が全て正しいとしよう。

もしかしたら、原作知識は全てが正しいのかもしれない。

もしかしたら、最後には尚文くん達は数億倍以上の実力差をひっくり返してラスボスを倒し、全てを救ってハッピーエンドにしてくれるのかもしれない。

だとしても、俺はこの道を選ぶ。

何故なら、俺には原作知識が正しいのかどうかなんて、わからないから。

本当に尚文くん達がラスボスを倒してくれるのかどうか？

それはラスボスが実際に降臨して、尚文くん達とぶつかってからじゃないとわからない。
い。

本当にハッピーエンドになるのかどうか？

それは物語が終わってからじゃないとわからない。

ほら、わからない事だらけじゃないか。

どの選択が正しかったのかなんて、結局終わってからでしか、結果論でしか語れないのだ。

でも、確実に一つだけわかってる事がある。

それは、俺が原作知識と尚文くん達を信じて傍観者に徹し、その結果死んだら1000%後悔するという事だ。

他人に自分の命運を預けるのは怖い。

預けて木っ端微塵に粉碎したらと思うと、どうしてあの時、自分で戦う道を選ばなかったんだと、死の間際まで後悔し続けるのが目に見えてる。

なら、先のわからない俺にできる事はただ一つだ。

できるだけ後悔しないと思える選択肢を選ぶ事。

それしかできない。

だから、俺は俺が最も確実だと思える手段を選ぶ。

それが四霊による世界救済。

こつちに関してはいくらい必死になって調べた。

これで四霊に関する情報まで嘘なら、本気で救いようがないもの。

その時は諦めて逃げるしかない。

逃げ切れるかどうかは怪しいところだけだな……。

だからこそ、失敗する訳にはいかないのだ。

「フウ……」

緊張も一緒に吐き出すように、一度大きく息を吐いた。

深呼吸して呼吸を調える。

カースシリーズを解放して以来、緊張なんて久しく感じてなかったけど、やっぱりこんな土壇場となれば話は別って事かね？

「よしー」

頬を叩いて気合いを入れる。

大丈夫だ。

保険もちゃんと用意した。

今回は前哨戦みたいなもんだ。

最低限の仕事さえ完遂すれば、たとえ失敗しても次がある。

気負わずにいこう。

でも、懸念はある。

この国に潜伏してた影の皆さんが集めた情報の中に、不審な人物がウロウロしていると
いう報告があったのだ。

四霊は重要なポイント。

それに関する原作知識に嘘や抜けがあってもおかしくない。

気負わず、さほど適度に気を引き締めておくべきだ。

ちなみに、その影の皆さんは、霊亀に巻き込まれても嫌なので、既に国外へ撤退して

もらっている。

いくら俺でも、味方を四霊の生け贄にするつもりはない。生け贄はアックスフォード以外から調達するさ。

そうして緊張しながら、この国で運命の時を待つ事、数日。

バキン！

という、波が起こる時とよく似た、ガラスが割れるような音が聞こえてきた。

視界に表示されている波へのカウントダウンが止まり、代わりに「7」という数字の書かれた青い砂時計のアイコンが出現する。

同時に、ゴゴゴゴゴと音を立てて、地面が揺れ出した。

「始まったか……！」

霊亀の封印が解けた。

——そして、戦いが始まる。

41話

俺は泊まっていた宿屋から飛び出し、周囲を見回した。

辺りは既に戦場となっていた。

背中に亀の甲羅みたいな物をつけた魔物（霊亀の使い魔）が大量発生し、街の住人に襲いかかっている。

冒険者や兵士達は戦ってるけど、犠牲者は増える一方だ。

順調そうで何より。

そんな中、凄い勢いで使い魔を倒しながら、霊亀の頭があると思われる方向へ駆けていく一団を発見した。

見覚えのある顔だった。

槍の勇者こと、元康くんとその一行だ。

ビッチ氏の姿も見える。

というか、元康くとビッチ氏以外は誰だか知らない。

俺は気づかれないように後を追った。

斧を例の隠密タイプに切り替え、元康くん達が道中で仕留めた使い魔を武器に吸わせ

ながら後を追いかけた。

そして、辿り着く。

霊亀の頭がある場所へ。

「……すげえ迫力」

思わず声が出てしまった。

慌てて口を塞ぐ。

今の俺は尚文くんにガーディアンと名乗った時と同じ格好をしてるんだ。

そして、声もボイスチェンジャーを通したような機械的なもの変わってる。

この状態では軽口禁止だ。

正体がバレないように、キャラを演じなければ。

でも、思わず声が出たのも仕方ないと思える。

それくらい、直に見た霊亀はド迫力だった。

霊亀とは、山を背負った亀だ。

俺達は今、霊亀の甲羅の上に乗っている。

俺が宿泊していた街を含めて、周辺地帯が根こそぎ霊亀の甲羅の上に乗ってしまった

……というか、その下から霊亀の体が出てきた感じか。

何が言いたいのかというと、霊亀というのはめっちゃくちゃデカいという事だ。

山を背負う化け物なんだから、そりやデカくて当然だし、そんな事は事前に知っていた。

でも、百聞は一見にしかず。

見ると聞くとでは大違いってやつだ。

大きいという事は、ただそれだけで圧倒的な迫力と威圧感がある。

「いくぜ！ イナズマスピアー！」

と、その時、霊亀の迫力にも怯まずに、元康くんが霊亀の頭に攻撃を仕掛けた。

中々に良い根性してる。

ああ、いや、召喚前の知識のせいで、霊亀を雑魚だと思い込んでるんだっけ？

だが、悲しいかな。

覚醒前の元康くんの攻撃では、霊亀にはかすり傷程度しかつける事ができなかった。

その傷も、驚異的な生命力で瞬く間に回復する。

「あ、あれ？」

元康くんが困惑しながらも攻撃を続けるが、霊亀は意にも介さない。

代わりに元康くん達の周りに使い魔がよって来て妨害を始める。

元康くんは使い魔にやられる程弱くはないみたいだけど、霊亀本体を倒せる程強くも

なかった。

戦いが無駄に長引くだけだ。

愛の狩人になってから出直せって事やね。

これは撤退しかないんでないかね元康くん？

俺がそんな感じで呑気に見守っていた時、——唐突に元康くんに向けられた悪意を感じた。

直後、火の鳥のような魔力の塊が、元康くん目掛けて飛来する。

「ツー！」

「へ？」

即座に斧をプライドアックスへと変え、元康くんを庇って火の鳥を打ち落とす。

守られた元康くんは間の抜けた声を上げていた。

そして俺は、今の攻撃を放った人物を睨み付け、問いかけた。

「何者だ？」

加工された機械的な音声が口から出る。

それを聞いた襲撃者は不機嫌そうな顔で俺に悪意をぶつけてきた。

これは苛立ちだ。

物事が思い通りにいかなくて苛立つ子供のような、わかりやすく安い悪意。

「何者だ、だと？ それはこっちの台詞だ。端役が俺の邪魔してんじやねえよ」

そう言ったのは一人の男。

錬金術師？ つばい格好で、おかしな本を携えたメガネの優男。

だが、その目はやつすい悪意で濁りきっている。

お友達になりたくないタイプだ。

それだけじゃない。

事前に暗部の皆さんに聞いていた目撃情報と人相が一致する。

こいつが、この辺りをウロウロしてたつていう不審者だ。

そして何より、こいつは俺の知る原作知識にはないイレギュラー。

嫌が応にも警戒心が高まる。

でも、それだけでもないな。

なんだろう？

こいつを見てると妙な既視感を感じるというか、なんというか……。

どこかで会ったっけ？

「……いや、待てよ。ハハア、読めたぞ。お前、この世界の眷属器持ちだな。だったら、

こうしてやるよ！」

おい。

こいつ今、聞き捨てならない事を言ったぞ。

この世界の眷属器持ち？

その言葉を使うって事は、グラスの同類か!?

だったら、あいつの代わりに情報を絞って……ッ!?

「これはッ……!?!」

そう思っていたところで、腕に違和感が。

正確には斧を握っている手、いや、斧自体に違和感がある。

まるで、あのメガネに向けて吸い寄せられてるみたいな……

「カースプロテクト!」

そこまで考えた瞬間、俺は反射的に暗躍活動で手に入れた新スキルを使った。

行く所まで行ったカースシリーズの力によって武器への干渉をシャットアウトし、奪われる事を防ぐスキル。

カースに頭まで浸かった俺だからこそ習得できたスキル。

それによって、メガネによる斧への干渉を断ち切る。

「あ? いっちよまえに対策練つてやがったのか? チツ、奪えないまでも活動停止くらいにはできると思ったのによ。無駄に俺の手を煩わせるんじゃないやねえよ」

……ああ。

わかった。

思い出した。

この奇妙な既視感の正体。

この聞いているだけで人をイラつかせるような喋り方をする奴に、俺は会った事がある。

タクトだ。

ついでに、アルバさんとパールちゃん。

確信した。

このメガネ、あいつらの同類だ。

斧に何か細工しようとした事といい、間違いない。

なら、やるべき事は一つ。

問答無用で殺すまでだ。

俺はメガネに向けて攻撃を仕掛けた。

「ダークスラツシャーX!」

「な!?!」

ダークスラツシャーの破壊力が予想外だったのか、メガネはあっさりと闇の斬撃に飲み込まれた。

さて、これで終わってくれば楽でいいんだけど。

「いてえ!? やりやがったな、この野郎!」

残念。

仕留め損なったらしい。

メガネは半身に大怪我を負ったみたいだけど、普通に生きてる。

じゃあ、次だ。

「シャインアックスバーストX!」

「ぎゃああああああああああああ!」

闇の次は光の攻撃がメガネを襲う。

そこで手を緩めずにメガネに向かって突撃する。

俺は見たのだ。

どういう理屈か知らないけど、ダークスラッシャーでつけた傷が徐々に回復していたのを。

だったら、多分、この攻撃だけじゃ死んでくれない。

「てめええええええええええええええええ!」

案の定、メガネは生きていた。

闇に壊され、光に焼かれ、見るも無残な姿になりながらも、まだ生きていた。

ゾンビか。

「文式五章・列破！」

メガネが技名つぼいのを口にした瞬間、メガネを中心に衝撃波が発生した。意にも介さず突き進む。

こんなもの、今の俺にとってはそよ風みたいなもんだ。

「何ッ!？」

「パワードアックスX！」

「ぐあッ……!？」

次いで、メガネの体を肩から袈裟懸けに切り裂く。

真つ二つにしてやった。

こうすれば、さすがに死ぬと思うけど念のためだ。

追撃しておこう。

「アクセルスマツシユX！ マウンテンブレイクX！ サンダークラツシユX！ フレイムアックスX！ スターダストアックスX！ ダークスラツシャーX！」

連続して叩きつけたスキルが地面、いや、霊亀の甲羅の一部にクレーターを作りながら、メガネをひき肉にしていく。

というか、ひき肉になってたのは最初の方で、今となつては死体すら残らず木っ端微塵になってしまった。

その途中で、メガネの持っていた本が、フワリと宙に溶けて消えていった。まるで、グラスの持っていた扇のように。

そして、もうメガネが再生する気配はない。

プライドアックスには、武器合成という強化方法によって、ソウルバキュームアックスの魂喰らいの能力を移植してあるから、これで殺せたのなら魂まで消滅してる筈だ。復活しないところを見るに、倒せたと見ていいだろう。

「ふう……」

それを確認してから、俺は軽く息を吐いた。

いきなりこんなのと遭遇するとか、なんとも幸先が悪い。

いや、妨害が入るんじゃないかって懸念はしてたんだけど、実際に来られてみると、やっぱり一筋縄ではいかないなあ、と思ひ知らされる。

必勝の切り札を手に入れて浮かれてたけど、これは改めて気を引き締める必要がありそうだ。

そんな事を思いながら、俺は険しい視線で進撃を続ける霊亀を睨んだ。

4 2 話

メガネを仕留め終えた頃、周囲に元康くんの姿はなかった。多分、使い魔あたりに襲われて逃げたんだと思う。

四霊は世界を守る為に存在する守護獣だから、同じく世界を守る存在である勇者をできるだけ殺さないようにする習性がある。

だから、死んではいけないと思う。

多分。

おそらく。

まあ、それはいいとして。

「さて……やるか」

俺はここに来た第一の目的を果たす為に、甲羅から飛び降りて、霊亀の巨大な首に狙いを定める。

「ダークスラッシュァーXー」

俺の最も得意とする攻撃が、あっさりと、実にあっさりと霊亀の首を切断する。頭だけで一つの街よりもデカい化け物の首が落ちる様は壮観だ。

そして、その頭が地面に落ちる前に、武器に吸わせて回収した。
そのまま地面に着地。

それと同時に、霊亀は驚異的な生命力で千切れた首を生やした。
もちろん、この程度で霊亀は死なないと確信してたからこそやったんだけど。

霊亀が凄い咆哮を上げながら口を開く。

そして、その口の中に凄まじい密度のエネルギーが集束していく。

ドラゴンとかでお馴染み、ブレス攻撃の予備動作だ。

霊亀の巨体から放たれるブレスとなれば、軽く地形が変わる事間違いないだろう。

そんなものをわざわざ食らいたくはないので、俺は迎撃を選択する。

「ダークスラッシュアーヴー！」

霊亀の雷属性のブレスを闇の斬撃が押し返し、そのまま霊亀の顔に傷が刻まれた。
しかし、その程度の傷はすぐに修復される。

それで良いのだ。

だって、わざと手加減して放ったんだから。

二度も頭を落とす意味はない。

その代わりに、今度はゆっくりと歩を進める足を狙う。

ダークスラッシャーによって一本ずつ切断していき、武器に吸わせた。当然、切り落とした足も即座に回復している。

良いのだ。

目的は霊亀を倒す事でも足止めする事でもないんだから。

そして今さらだけど、ダークスラッシャーには他のスキルと違って、クールタイムというものがない。

さすがカーススキルというべきか、SPが続く限り使いたい放題なのだ。

俺が愛用するのかわかる利便性の良さであろう！

そうして足を回収し終えたら、今度は体内だ。

大ジャンプして再び霊亀の甲羅に飛び乗り、事前に影の皆さんが調べてくれた「霊亀洞」という場所に向かう。

地図とにらめっこしながら。

その間に、霊亀の甲羅部分も抉りとして武器に吸わせる。

その頃になると、霊亀の甲羅の上の街で必死に抗っていた住人達もあらかた死に絶えたみたいで、街は静かになっていた。

代わりに、俺を敵認定したのか、使い魔がウザイくらいにたかつて来たから、叩き潰して武器に吸わせながら進む。

そうして辿り着いた霊亀洞と思われる洞窟。

そこは、まるでRPGのダンジョンのごとき複雑怪奇な構造をしていた。

俺は無謀にもマツプもなしに内部に足を踏み入れ、案の定、五分としない内に迷子になった。

……いくらなんでも迂闊すぎるだろ俺！

気を引き締めるんじやなかったのか!?

「面倒だな」

もう、やっちまうか。

俺は覚えたての魔法を発動するべく、詠唱を始めた。

『我、世界の守護者が天に命じ、地に命じ、理を切除し、繋げ、膿みを吐き出させよう。龍脈の力よ、我が魔力と勇者の力と共に力を成せ。力の根源たる世界の守護者が命ずる。森羅万象を今一度読み解き、大いなる風の力で全てを塵と化せ』

「リベレイション・バスターストームX！」

俺の得意系統は、風と支援。

その片翼。

風の最上位魔法が洞窟内の全てを破壊していく。

普通なら生き埋めになるところだけど、この魔法は詠唱の通り、触れたもの全てを塵

になるまで破壊し尽くす死の嵐。

瓦礫すらも塵に変え、霊亀洞をただの空洞へと変えた。

そして、その先には霊亀の体内組織である肉壁が露出している。

あそこから、霊亀の体内に入れる筈だ。

早速、その中に足を踏み入れる。

肉壁をスキルで破壊しながら、道を完全に無視して直進する。

目指すは、俺に対して向けられた悪意の源。

十中八九、そこに霊亀の心臓がある筈だ。

体内にまで侵入してきた俺を脅威と見なしているのか、わかりやすいくらいに敵意を

ぶつけてくるから、逆に目印になって良いわ。

道中で免疫細胞みたいな、今までとは毛色の違う使い魔が襲って来たけど、むしろ好

都合とばかりに倒して武器に吸わせる。

よし。

順調だ。

その途中で、「7」という数字の書かれた、青い龍刻の砂時計を発見した。

原作知識、及び、竜帝の知識によると、この砂時計の砂は四霊が目的を遂げる為に必

要な魂の目安であり、

これが満タンになった時、世界を波から守る強力な結界を生成するらしい。今はまだ霊亀が目覚めて数時間しか経っていない為、その分犠牲者も少なく、砂の量も少ない。

そんな砂時計の場所を通り抜けて先に進む。

少し行つた所で、遂にそれを発見した。

心臓というイメージに違わず、ドクン、ドクンと鼓動している内臓器官。

ただし、その大きさは6メートルくらいあり、二色に別れた色合いで、それぞれの色の部分にデカイ眼球がついている。

……グロい。

間違いない。

霊亀はゲテモノ粹だったのだ！

そんなゲテモノが大きく目を見開いて振動した。

そして、目からビームを放ってくる。

ゲテモノ粹な上にネタ粹か！

「よっ」

しかーし！

そんなネタ攻撃、怖れるに足らず！

あっさり回避して霊亀の心臓に肉薄した。

「アクセルスマッシュX！」

「!?!」

そして、スキルを使つて心臓と身体を繋ぐ動脈を全て、あっさり切断した。切り離された心臓を即座に武器に吸わせる。

それと同時に、霊亀の体がドスンと音を立てて大きく揺れ、停止した。

だが、すぐに心臓は再生を始め、霊亀自身も再び動き始める。

うん。

予定通りだ。

第一の目的は達した。

もう、霊亀を無駄にいたぶる必要はない。

俺は心臓が完全に再生する前に、その場を立ち去った。

そのまま体内を駆け抜け、外に出る。

使い魔がしつこく追撃してきたけど、もうこいつらを相手にする意味もない。できる限り気配を消して、戦闘を回避するように努めた。

俺のスニーキング能力じゃ、効果はたかが知れてたけど……。

とにかく、霊亀の使い魔を徹底的に無視し、持ってきた改良型バイオプラントをそこら辺に植えて仮設テントとして使って、今日はその中で寝る事にした。

この改良型バイオプラントは、テント兼護衛用に持ってきた。

テントでありながら、外の敵を蔓でひっぱたいて追い払ってくれる優れものだ。

もちろん、命令次第ではテントではなく普通に戦力としても使える。

もしも俺が勝てないような強敵が現れた場合は、大量に持ってきたこれと霊亀を盾にして逃げる予定なのだ。

そして、寝る前に兜の中に仕込んだ特殊な水晶の欠片。

映像水晶というビデオカメラみたいな機能を持った水晶を改造して作った、音声のみを相互でやり取りする……まあ、ぶっちゃけ携帯電話みたいな機能を使って、ミラと連絡を取った。

「こちらガーディアン。応答を願う」

『……その名前、自分で言っていて恥ずかしくないのですか？ その妙な話し方も含めて』

「無論だ」

かっこよかろう？

いや、今はそんな事どうでもいいんだよ。

「コホン。とにかく、こちらの首尾は順調だ。第一目的は達成した。ここからは第二目的の達成を目指す」

『では、いつでも撤退可能という事ですね』

「ああ。だが、できる限りは粘るつもりだ。ここで頑張れば後が楽になるからな」

『左様ですか』

「で、そっちはどうだ？」

『こちらは特に何事もなくと言ったところですよ。霊亀の使い魔の襲撃がありました。騎士団、魔術師団、飛竜兵団の準備は万全。迎撃態勢が整っている以上、被害は最小限に抑えられるでしょう』

ふむ。

アックスフォードは問題なしと。

あの国には、まだ情報収集の面で役に立ってもらいたいから、潰れられると困るしね。ノーダメージで切り抜けられるなら、それに越した事はない。

「確認しておくが、連合軍の誘いがきたら？」

『予定通り、自国の防衛を最優先とし、断腸の思いでお断りさせていただきます。国王様に心変わりの兆しはありませんので、ご安心ください』

「結構」

霊亀は今のところメルロマルク方面に向けて進行してるから、アックスフォードは進行経路から外れてる。

ただし、使い魔が大量に来るくらいには近いので、言い訳も完璧だ。

これなら、どうにかなるだろう。

俺は俺の事だけ心配してればいい。

「じゃあ、切るぞ。お休み、ミラ」

『はい。ユウ様、ご武運を』

「今はガーディアンと呼べ」

『……かしこまりました。では、ガーディアン様、ご武運を』

「ああ」

そうしてミラとの通信を切り、仮眠を取る。

周りが敵だらけの状況で熟睡できる訳ないから、仕方がない。

でも、ドラウキユーア山脈の一件以来、カースシリーズを使えるようになってからは寝ながらも周囲を警戒する術を身につけたから、そこそこ安心して眠れる。

念のために、テント内にもバイオプラントを植えて護衛につけたし、まあ、大丈夫だろう。

こうして、霊亀復活の初日は終わった。

43話

霊亀が復活して数日が経過した。

その間、霊亀は進行を続け、人や魔物を殺して回っている。

大虐殺だ。

おもしろいくらい簡単に国とか滅びる。

まるでゴ○ラのようなのだ。

そして、人がゴミのようなのだ。

それに伴い、青い砂刻の砂時計にも順調に砂が溜まってきている。

一々確認しに行くのはめんどくさいから、砂時計のある部屋に設置した映像水晶というものを通して確認してる。

この数日はそんな感じで過ごした。

たまに外の様子を見に行く以外は、基本的にバイオプラントの仮設テント、テントプラントの中に引きこもりだ。

食料もテントプラントの内部で、食用のバイオプラントを植えれば調達できるし、ホント、バイオプラント便利。

取りに行つて良かった。

それと、俺が霊亀本体にも使い魔にも手を出さない引きこもりにジヨブチェンジしたおかげか、しつこくテントを攻撃しようとしていた使い魔達が、そのうち寄つて来なくなつた。

どうやら、霊亀は俺を放置する事に決めたらしい。

戦意のない勇者と無理に戦う必要はないと思つたのかもしれない。

なんにせよ、それはこつちにとつても都合だ。

俺だつて、霊亀と戦いたい訳じゃないんだから。

ちよつと首とか足とか心臓とか切り落としたけど、あれは必要経費という事で。

おかげで霊亀系の斧が揃つたし。

そうして暇な時間に新しい斧を解放させてみたり、バイオプラントの数を増やしたりしてらうちに、さらに数日が経過した。

今のところ、霊亀の敵となりうる奴は現れていない。

尚文くん達がそろそろ来るかと思つたけど、そんな事もなかった。

イグニにちよつとしたお使いを頼んで、この先に集結してるつている連合軍の所に嫌がらせ用のバイオプラントをばら蒔いてきてもらったから、それが効いてるのかもしれない。

ない。

このまま霊亀が必要数を殺しきってくれたら楽なんだけどな。

とか思ってた、その翌日。

霊亀の頭に乗って眼下を見下ろしていた時、霊亀に敵意を向ける一団が迫って来ている事を感じた。

その方向を見てみると、そこにはお供数名を引き連れた尚文くんの姿が。

まあ、そうだろうな。

「そう簡単にはいかんか」

ガーディアンボイスで口調とキャラ付けの確認をする。

その間に、尚文くん達は霊亀と戦っていた。

霊亀の巨体から繰り出される踏みつけをかわし、極大ブレスをなんとか防ぎきる。

おお。

尚文くん、前に見た時とは段違いに強くなってるな。

でも、霊亀程度に苦戦してるようなら想定外って程じゃないな。

予想通りの強さってところだ。

でも、霊亀を倒す可能性が高い事には変わりはない。

なら、俺の出番だ。

助けてやろうじやないか霊亀よ。

同じ世界の守護者として。

俺は霊亀の頭の上から飛び降りた。

そのまま、盾を構える尚文くんに向けて、重力の乗った飛び蹴りを放つ。

ガーディアンズ・ドロップキック！

「ぐッ!？」

「ナオフミ様!？」

「(ガ)しゅじんさま!？」

それを食らった尚文くんは、サッカーボールのごとく勢いよく転がっていった。

他のメンバーが驚愕の視線で俺を見つめる。

その視線を一身に集めながら、俺は口を開いた。

「そこまでだ。これ以上霊亀に手を出す事は私が許さん」

ガーディアンボイスに殺気と威圧感を乗せた声に、全員が息を呑む。

尚文くんのお供の数は、えくと、1、2、3、4、5、6人。

尚文くんを含めて7人。

正確には、6人と一羽。

一羽は例のフィロリアルだ。

残りはラフタリアちゃんと、女騎士っぽい人、幸薄そうな女の子、おばあちゃん、妖艶な美女。

女ばっかりじゃねえか！

おいおい、ハーレムかよ尚文くん！

そんな尚文くんのハーレムメンバー達は、俺の放つ強キヤラオーラに当てられて動けないでいた。

クツクツク。

他愛もない。

「ガーディアン……！」

蹴り転がされた尚文くんが驚愕の声を上げながら俺を睨む。

俺への凄まじい悪意を感じた。

そりやそうか。

いきなり飛び蹴りかましちやったし。

そうじゃなくても、俺は大虐殺の主犯だしね。

「お前か？ お前が霊亀を操ってるのか!？」

「操っている訳ではない。ただ、霊亀と私の目的が一致しているだけだ」

「何？」

ん？

尚文くんから感じる悪意が若干弱まったぞ？

あれ？

これ、事情知ってるのか？

「あなたも世界の救済を望む者ならば、聞いてください！ 今の霊亀は何者かに操られています！ このままでは守護獣としての使命を果たせません！」

俺が内心で疑問を抱いていたら、尚文くんの仲間っぽい妖艶な美人さんが聞き捨てならない事を言ってきた。

今なんつった？

霊亀が？

操られてる？

「なん……だと……!?!」

誰かが霊亀に細工したって事か!?

しまった！

それは盲点だった！

まさか、俺以外にそんな事を考えて実行できるような奴がいたとは!?

いや……俺という実例があるんだ。

その可能性も視野に入れておくべきだった。
失敗したぜ。

「詳しく話せ」

「は、はい！」

美人さんは、俺が撃破困難な強敵と見て、話し合いでの解決を試みたのか、ベラベラと喋ってくれた。

曰く、何者かの工作によって、霊亀の使命である結界の生成機能が停止させられてい
るらしい。

その為、このままでは霊亀は無駄に殺戮を続け、無駄にエネルギーを溜め込むだけの
存在と化してしまう。

だからこそ、霊亀の使い魔である自分は盾の勇者である尚文くんを協力し、本体であ
る霊亀の討伐を依頼した。

との事だ。

その言葉に嘘はない。

この美人さんからは、騙してやろうという悪意も、嘘を吐く事への罪悪感も感じな
かった。

つまり、少なくともこの美人さんは今の話を本気で信じている事になる。

人間の姿した霊亀の使い魔とか、にわかには信じがたいけど、とりあえず嘘は吐いていない。

なんだか原作知識とは大きく乖離した展開だけど、四霊という重要事項に嘘と抜けを仕込んでたんだとすれば、納得がいかなくもないしね。

「なるほどな」

それを聞いて、俺は考える。

霊亀が目的を達してくれないのは俺としても困るといふか、大問題だ。

計画が根元から崩壊しかねない。

でも、エネルギー自体は正常に溜まってるんだよなあ。

砂時計の砂は増え続けてるし、どこかにエネルギーが流れ出すような現象は確認できてない。

……なら、別に問題ないか。

「話はわかった。お前達は暴走した霊亀を止めに来た訳だが、——それは認められない」「な、何故ですか!？」

何故って言われてもねえ。

「霊亀の結界生成機能が正常に作動していないのならば、その原因を取り除けばいいだけだ。霊亀を討伐する必要はない」

「しかし……」

「それにエネルギー自体は正常に溜まり続けている。ならば、たとえ霊亀の機能回復が不可能だとしても、必要なエネルギーが集まった時点で霊亀を倒し、別の方法を使って結界を生成すればいい」

今の俺になら、それができる。

使うエネルギーは四霊全体で共有してるんだから、最悪の場合、いつでも封印を解ける応竜の機能を使って結界を作ればいい。

まあ、それはイグニの命と引き換えだからあんまりやりたくないし、そんな事しなくてもできるとは思うけど。

なんにしてもだ。

「交渉は決裂だ。霊亀を倒したければ私を倒してから行け」

ここを通りたければ俺を倒して行くがいい！

一度言ってみたかった台詞だ。

今の俺、超かっこいい。

冗談はさておき。

俺の言葉を聞いた尚文くん達は臨戦態勢に入った。

戦うつもりのようなのだ。

勝てると思っているのか？

よかろう、かかってくるがいい！

油断しないで相手をしてやる！

そうして、戦いのゴングが鳴った。

44話

戦うというのなら容赦はしない。

勇者に死なれるのは困るから、仲間も含めてできるだけ殺さないように努めるけど、死なない程度に全力でやってやる。

「はいくいつくー!」

まず最初に飛びかかってきたのは、鳥だった。

飛べない品目の鳥だけど、その分足が速い事で有名だ。

尚文くん達の中では一番スピードに優れてると思われる。

そんな鳥の飛び蹴りを、片手で掴んで止める。

「へ?」

「そらー!」

「わ!」

「うっ……!?!」

そのままハンマー投げの要領で投げ飛ばし、鳥の後ろから追撃をかけようとしていたラフタリアちゃんにぶつける。

一人と一羽は、仲良くもみくちやになりながら吹っ飛んでいった。

「ラフタリア！ フィーロ！」

「よそ見をしている場合か？」

「ツ!？」

続いて尚文くんに接近し、斧をフルスイング。

尚文くんはきちんと伝説の盾で防御してたけど、霊亀のプレスでダメージを受けるなら、俺の攻撃でもダメージを受ける。

それがスキルも使っていない通常攻撃だとしてもだ。

『力の根源たるオスト＝ハウライが命ずる。森羅万象を今一度読み解き、我が力の発現を求む!』

「重力場!」

「む?」

美人さんが魔法を唱えた瞬間、なにやら体が重くなつた。

重力魔法か？

便利そうだな。

「ハアアア!」

そこに、今度は女騎士の人が斬り込んできた。

この程度で俺の動きを止められると思ったら大間違いだぞ。

繰り出された剣による斬撃を、同じく斧による斬撃で迎撃する。

すると、女騎士さんの剣はポツキーのごとくポツキリと折れた。

「何ッ!?!」

「寝ている」

「がッ……!?!」

そのまま女騎士さんの頭を掴んで地面に叩きつける。

兜が割れて、綺麗なプラチナブロンドの髪が血に染まった。

……殺っちゃったかな？

いや、一応息はあるか。

「アチョー!」

俺が女騎士さんの安否確認をしていた隙を突いて、今度はおばあちゃんが突撃してきた。

年寄りの冷や水は体に悪いぞー。

「変幻無双流『点』!」

「ぬっ……!」

振り払おうとした斧の攻撃を流麗な技術で受け流され、反撃の掌低が俺の体に打ち込

まれる。

その威力自体は大した事ない。

でも、掌低に乗せて何かを体の中に流し込まれ、その何か体が体の中で暴れようとする。

「ああ、なるほど」

これはたしか、「気」という概念だったか。

そして、それを操る変幻無双流という流派。

この技は気を相手の体内に流し込んで暴れさせ、相手の防御力を利用してダメージを与える技、だったか。

防御力の高い相手程、逆にダメージを受けてしまうという防御比例攻撃。

俺にとっては天敵みたいな技だ。

だが、しかし。

「なんと……!?!」

おぼあちやんが驚愕の声を上げた。

この気という概念は俺も習得している。

召喚初日に強化方法を覚えた時にだ。

気……別名エネルギーポイント、E P。

魔法を使う為のM Pや、スキルを使う為のS Pとは違い、E Pはその二つの威力を向

上させるステータス。

エネルギーブーストという技術だったか。

意識すればヘルプにも現れた。

つまり、俺もまた気を使えるのだ。

このおばあちゃんみたいに相手の体内に送り込むなんて細かい操作はできないけど、自分の体内で循環させる事くらいはできる。

そのエネルギーを使つて、おばあちゃんが流し込んできた気押し潰した。

さながら大海に石ころを投げ込んで起こした波紋が、津波に押し流されてかき消えてしまうように。

圧倒的なエネルギーの差によって、おばあちゃんの技を強引に打ち消したのだ。

「良い技だな。しかし、悲しい程に弱々しい！ パワーブレイク！」

「はっ……！」

今度は俺の拳がおばあちゃんを打ち抜く。

殺さないように手加減はしたけど、骨の十本や二十本は折れてそうだな。

インパクトの瞬間に衝撃を逸らすような動きをしたのは流石だと思うけど。

「次だ」

斧を構え、まだ攻撃を加えていない二人、美人さんと幸薄そうな子に向かって走る。

美人さんとはもかくとして、幸薄そうな子は完全に戦意喪失してたけど、念のためだ。気絶させておこう。

「ラースシールドオオオオオオオオオオ！」

その時、例の憤怒の盾が進化したと思われる禍々しい盾を解放した尚文くんが、俺の前に立ちはだかった。

今さら攻撃を止める事もできないので、思いきって斧を振り抜く。

「アクセルスマッシュ！」

「ぐう……！」

おお。

耐えた。

強化していない一撃だったとはいえ、俺のスキル攻撃を耐えおったよ尚文くん。やりおる。

「ダークカースバーニング！」

そして、反撃効果の黒い炎が俺を襲う。

それを軽く斧を振り回して霧散させ、一旦距離を取った。

「すばいらる・すとらいく！」

「八極陣・天命剣！」

そうしたら、投げ飛ばしておいた鳥とラフタリアちゃんが戻ってきた。

そして、必殺技っぽい攻撃を俺に向けて繰り出す。

それを真正面から受け止めた。

速いし重いな。

普通に強い。

しかし、まだまだ対応圏内。

二人合わせてミラ一人にすら劣る。

「あなたは！ こんな事をして許されると思っているのですか！」

「……どういう意味だ」

攻撃の合間に、ラフタリアちゃんが話しかけてきた。

俺への悪意を感じる。

怒りだ。

「世界の為とはいえ、多くの人々を殺して何の意味があるんですか！ それで救われる世界に何の意味があるというのですか！」

「意味ならある。世界が滅べば全てが終わる。世界が救われれば私はそこで生きていく。意味などそれで十分だ」

ラフタリアちゃんの言葉を切って捨てる。

そんな事は百も承知なんだよ。

それでも俺は、俺が生きる為の世界を……いや、違うな。

俺が死なない為に、世界を救う。

そう決めたのだから。

「……あなたに罪の意識はないんですか！ もっと良い方法を探そうとは思わなかったんですか！」

「——さえざるな小娘。世界を救える程の力もなく、世界の為に己の手を大罪で染める覚悟もない。私にすら遠く及ばぬ存在がいくら吠えようと、私の心には欠片程も響かぬ」

踏み込み一つでラフタリアちゃんと鳥を追い越し、尚文くんと直線射程上に捉える。

そして、スキルを放った。

「ダークスラッシュャー！」

「ツ！ エアストシールド！ セカンドシールド！ ドリットシールド！」

尚文くんのスキルが二人を守るように展開されたけど、その全てをガラス細工のように砕いて、闇の斬撃は直進する。

そして、闇は二人だけではなく、他の全員を飲み込んだ。

「ハア……ハア……ハア……！」

破壊の闇が過ぎ去った後、尚文くんは立っていた。

残った仲間を懸命に守って、満身創痍で立っていた。

そこに、無情な追い討ちがかかる。

霊亀が咆哮を上げながら、口にエネルギーを集束させる。

プレスだ。

その照準が尚文くん達に向いている。

あ、これ俺も巻き込まれるな。

「オスト！ リーシア！ 倒れた連中を俺の後ろへ！」

「わ、わかりました！」

「ふ、ふええええええ」

動けるメンバーが倒れた仲間達を尚文くんの守備範囲に入れる。

俺も俺で迎撃準備を整える。

まあ、そんな大した事が必要な訳じゃないけど。

そして、霊亀のプレスが放たれた。

前はダークスラッシャーで迎撃したけど、今回は尚文くん達にダメージを負ってほしいのでやらない。

別の手段で防がせてもらう。

「大竜巻X!」

「流星盾! シールドプリズン!」

斧を振り回して暴風を起こし、霊亀のブレスを逸らす。

尚文くんは必死の防御スキルを展開してたけど、割と簡単に碎け散って、結局身を盾にしていた。

ブレスの脅威が過ぎ去った後、大ダメージを負って尚文くんは倒れた。

「……までだな」

俺はまだ動ける二人にも手刀を打ち込んで気絶させ、バイオプラントを使って縛り上げた。

ここに置いとくと、霊亀が美味しくいただいちやうかもしれないし、

バイオプラントに自走させて、どっか遠くに捨ててこさせるか。

その後、俺は霊亀を操っているとかいう仕掛けの解除だな。

専門家イグニも呼ぼう。

同じ四霊である応竜を身の内に宿すあいつなら、霊亀の異常もわかるかもしれない。

そうして、俺がそれを実行に移そうとした時。

「ん？」

遠くから、何かがかつちに向かつて来るのが見えた。

土煙を巻き上げながら、霊亀に敵意をぶつけながら、

——馬車を引いた一羽の巨大な鳥が、こちらに向かつて来ていた。

45話

「フィット……リア……」

息も絶え絶えな尚文くんが、巨大な鳥を見ながらそう言った。

フィットリアか。

聞いた事ある名前だ。

過去の勇者に育てられた伝説のフィロリアルだったつけ。

原作にも出てきたし、影の皆さんが集めた各地の伝承にも出てきた。

ついでに、イグニの口からも出てきた。

ドラゴンとフィロリアルは犬猿の仲らしいので、その話をした時のイグニは心底不快

そうだったけど。

なんにせよ、今度はそいつが出張って来た訳だ。

やっぱり、中々スムーズにはいかないもんだな。

「遅くなった……。よく時間を稼いでくれた。フィットリアも盾の勇者の頑張りに応える」

喋った!?

いや、ドラゴンだって喋るし、尚文くんサイドの鳥も喋るから不思議ではないんだけど……原作知識と違うからビックリした。

原作知識……なんで、こんなどうでもいいようなところに間違いがあるんだろうか。俺が内心で動揺してる間に、フィトリアの言葉を聞いた尚文くんの首がガクツと落ちた。

……死んだか。

それは冗談にしても、気絶はしたっっぽい。

なら、俺はあの怪鳥の相手に専念して良さそうだな。

そして、どうやらフィトリアを脅威に感じたのは俺だけじゃないみたいで、霊亀がフィトリアの方に首を向けてブレスの発射態勢に入った。

敵の敵は味方になりうる。

今の俺と霊亀は仲間だな。

だが、相手も中々のもの。

フィトリアが大きく翼をクロスしたかと思うと……むくむくと全身が膨れ上がった。

その大きさは、霊亀に肉弾戦を挑めるくらいの巨体になっている。

変身能力!?

そんなんアリか!?

と思ったけど、考えてみればウチのイグニもやろうと思えばできたわ。なら、フィトリアが使えても不思議じゃない。

「はあああああああああああ!」

そして、フィトリアはプレスが発射される前に大きく跳躍し、その爪と脚で霊亀の頭を踏み潰した。

霊亀の頭が嫌な音を立てて潰れる。

しかし、霊亀は即座に自分の頭を引きちぎって再生し、フィトリアにお返し of プレスを叩き込む。

それをフィトリアは器用に避けて、また反撃。

「クラツシユチャーザー!」

その声に呼応するように、フィトリアの引いていた馬車に変形し、巨大化する。

チャリオットみたいな、いかにも戦闘タイプですと言わんばかりの形になった馬車を引いたまま、霊亀に体当たり!

霊亀の頭と脚が破壊された。

これは、俺も参戦した方が良さそうだな。

霊亀は頭と心臓を同時撃破しないと止まらない。

逃がしちゃったか。

まあ、あの軍隊の所には、イグニがばら蒔いたバイオプラントと大量の霊亀の使い魔が襲撃をかけてる筈だし、ろくな支援は受けられないでしょ。

ちよつと不安だけど、放置で良いや。

まずはこつちが先決だ。

「パワーブレイクX！」

「ッ!？」

跳躍の勢いを乗せた全力の拳が巨大怪鳥フィトリアの顔面に突き刺さり、弾き飛ばした。

さながら、イグニと戦った時のような光景だ。

違いがあるとすれば、今回は一切の手加減をしていないところか。

だって、こいつは手加減して勝てる相手じゃない。

フィロリアル女王フィトリア。

失伝した八番目の七星勇者。

古の勇者達の強化方法をフルコンプし、長い時をかけて経験値を蓄えてきた怪物。

誇張抜きに、俺と同格かそれ以上の化け物だろう。

もしかしたらカースシリーズの差で俺が上回ってるかもしれないけど、それでも強敵

には違いない。

たとえ負けても大丈夫な逃げ切れる算段がなければ、まず戦いなんて挑まない相手だ。

そんなのと戦うなら、手加減なんてしてられない。

「止まれ、フィロリアル女王。霊亀に手を出す事は私が許さん。死にたくなければ早々に立ち去るがいい！」

でも、一応は説得を試みる。

何も好き好んでこんな化け物と戦いたい訳じゃないんだ。

正直、これで帰ってほしい。

「嫌。フィトリアは自分の使命を果たす」

ダメかあ。

やっぱり戦うしかないのかな？

「どうしても退く気はないか？ 私もお前を殺したくはないのだがな」

「嫌。今の霊亀は使命を果たせない。それに四霊は最終手段。安易に頼って良いものじゃない」

「霊亀の問題は私が解決する。そう言ってもか？」

「ダメ。カースシリーズに侵された勇者の言葉なんて信じられない」

「……そうか。残念だ」

本当に残念だ。

こいつとは友達……とまではいなくても、貴重な情報提供者として、良い関係を築きたかったんだけどなあ。

ちやうど、イグニみたいいな感じで。

この調子だと、それは無理そうだ。

仕方ない。

やるか。

同格以上と戦うのはタクト戦以来だな。

倒せそうなら早めに倒して霊亀の調査。

無理そうなら即座に逃走。

よし。

このスタンスでいこう。

勝てない戦いを死ぬまで続けるなんて、俺のキャラじゃないしな。

「後悔するなよ」

「フィトリアは負けない」

互いに最終確認のようなやり取りをした後、——俺達は目の前の敵に向かって攻撃を

しかけた。

46話

「ダークスラッシュャーX!」

先手を取ったのは俺。

もはや定番となりつつある得意技を、牽制代わりにぶつ放つ。

「てい!」

それを、フィトリアは気の抜けそうな声を上げながらも、素早く避けた。

おい、今一瞬、体がぶれて見えたぞ!

デカいくせに速い!

「ハイクイック!」

「チツ!」

更に加速しやがった!

デカさと速さ。

重量と速度の両方が乗った超火力の連続蹴りが俺を襲う。

斧を盾にして何とか全て受けきったけど、こりやスピード勝負じゃ分が悪いな。

逆に、いくらガードしたとはいえ、今のを食らってもノーダメージだった事を思えば、

スピード以外のステータスでは俺が勝っていると見た。

カースシリーズは偉大だ。

「ダークスラッシュX！」

「むう！」

至近距離からダークスラッシュを放ち、つばぜり合っていたフィトリアを振り払う。

「スターダストアックスX！」

さらに、広範囲攻撃で避けづらい流星シリーズのスキルを放つ。

巨大な斬撃の後を光輝く流星が追いかけるといふ美しい攻撃は、斬撃こそ避けられたものの、攻撃効果を持った流星は確実にフィトリアに当たり、一瞬、動きを止めた。

『力の根源たる世界の守護者が命ずる。真理を今一度読み解き、彼の者に全てを与えよ！』

「ドライフア・オーラX！」

その足止めた時間で、ドラウキューア山脈で覚えてきた伝承の魔法、全能力向上の支援魔法を自分にかける。

俺の得意属性が風と支援だったせいかな、伝承の碑文で俺が覚えたのは、原作で尚文く

んが覚えたものと同じ「オーラ」の魔法だった。

でも、そんな事はどうでもいい。

問題はこの魔法が役に立つかどうかだ。

ハッキリ言おう。

めちやくちや役に立つ。

全能力向上はチートだ。

これとプライドアックスを併用するだけで、アックスフォードの全軍を相手に圧勝で
きるんじゃないかと思える程に強くなる。

Lv限界突破や資質向上をした猛者が何人もいて、ミラやイグニまでいるアックス
フォードを相手にだ。

この状態なら、フィトリア相手でも勝てる！

多分！

そんな中途半端な自信を武器に突撃する。

さつきまでとは桁違いのスピードに、フィトリアが面食らっているのがわかる。

その動揺につけこむように、斧を振り抜いた。

「パワーDアックスX！」

「ッ!？」

斧がフィトリアの脚を掠めた。

それだけで走行に支障が出るレベルの負傷を負わせている。

なんという攻撃力！

このままドメだ！

「アクセルスマッシュX！」

確実に戦闘不能にするべく、跳躍し、頭を狙って斧を振るう。

フィトリアは速いが、やっぱりデカくて的が大きい。

だから、この攻撃は避けられない。

避けられない……そう思っていた。

「何ッ!?!」

攻撃が当たる直前、フィトリアが発光しながら縮んだ。

光が収まった時には、フィトリアがいた場所に、人間形態のイグニと同じくらいの外見年齢をした女の子が一人。

人化!?!

しまった、その手があったか！

的が小さくなったせいで、俺の攻撃は虚しく空を切る。

しかも、今の俺は無防備に空中にいる。

この状態じゃ、ろくに動けないぞ!?

風魔法で早く地上に……

「クラツシユチャージ!」

「ぐっ……!?!」

魔法を発動させようとした瞬間、フィトリアが人間形態のまま、傷ついた脚で巨大化させた馬車を引き、空中の俺にぶつけてきた。

まるで戦車にでもタックルされたかのような……いや、確実にそれ以上の威力の攻撃をもろに食らった俺は、吹っ飛んで何かにぶつかつた。

何かと思つて顔を上げれば、そこには俺達が戦つてる間に大分遠くへ行つた筈の霊亀の顔面が。

ヤバイ!

砲弾のごとく吹っ飛んできた俺を敵と見なしたのか、霊亀が口を開けて、俺に向けてブレスを放とうとする。

超至近距離から。

アカン!

「ツ……! ぐう……!」

スキルで相殺する暇もなく、霊亀のブレスの直撃を食らって地面に叩きつけられた。フィトリアの攻撃と合わせて、結構シャレにならないダメージを貰ったぞ。

即座に斧からドロップアイテムの回復薬を取り出し、兜をずらして飲み干す。これで多少は回復できた。

まだまだ戦える。

「やってくれたな」

それにしても、やっぱり強いなフィトリアは。

ステータスもそうだけど、なにより戦い慣れていやがる。

古の勇者、伝説のフィロリアルの名は伊達じゃない。

対して、俺はどうだい？

ちよつと前までただの一般市民だった男だぞ？

ステータスに任せたゴリ押ししかできないに決まっているではないか！

一応ミラとかアームストロング大佐とかに稽古はつけてもらってるけど、才能はあんまりないらしいんだよなあ。

皆無つて訳でもないけど、単純な戦闘技術の才能なら、そこら辺の一兵卒と大差ないらしい。

俺は勇者の力（特に強化方法の力）で無理矢理強者オーラを出しているに過ぎない。

それでも、負ける訳にはいかないんだよ。

たとえ今回は負けたとしても、次に活かし、最後には必ず勝つ。

その為にも、今は頑張ろう。

霊亀が暴れば暴れる程、エネルギーが溜まれば溜まる程、後が楽になる。

それにフィトリア一人、いや一羽に負けるようじゃ、この先が思いやられる。

最終的には、おそらく、このフィトリアと同格以上の奴を複数相手にしなきゃならなくなるんだ。

その頃には今調整中の奥の手が使えるようになってるだろうけど、それだけに頼るのはナンセンスだ。

ステータス的には格下の鳥一羽、自分の力で倒してみせないとな。

「さて……第二ラウンドといこうか」

フィトリアが再び巨大怪鳥形態で俺に向かってくる。

さつき付けた脚の傷は治っていた。

魔法か、俺と似たような手段で治したんだろう。

まあ、そうなるわな。

上等だよ。

かかってこいや大怪鳥。

完膚なきまでに叩きのめしてやる。
俺はプライドアックスを構え、こっちから走ってフィトリアとの距離を詰めた。

47話

俺とフィトリアの戦いは続く。

ダークスラツシャーが放たれる度に地形が変わり、フィトリアが巨大怪鳥形態で走行する度に大地が揺れる。

ついでに、たまに霊亀に流れ弾が当たってブレスの横槍が入る。

そんな、現時点では世界最強決定戦と言っても過言ではないかもしれない限界バトル。

でも、その天秤は徐々に傾き始めていた。

俺の勝利に向かって。

「ダークスラツシャーX！」

「ッ！」

もう何発目になるかわからない闇の斬撃が、避けきれなかったフィトリアの体を掠めていく。

さらに追撃して何発か放てば、やはりいくつかはかする。

そして、負傷がフィトリアの動きを鈍らせる。

こうなつた原因は至極簡単。

フィトリアが疲れてきたからだ。

どんなに化け物じみても、生物なら必ず疲労するし、疲労すれば動きが悪くなるのは自然の摂理。

そんなフィトリアと戦う俺も、当然疲れている。

しかし、疲労の度合いは明らかに俺よりもフィトリアの方が上だ。

何故なら、基礎ステータスにおいて、俺とフィトリアの間には思っていた以上の開きがあつたから。

カースシリーズの力か、支援魔法の力か、それとも何か別の要因があるのかはわからないけど、俺は単純な基礎スペックにおいて、フィトリアを大きく上回っていた。

特に攻撃力と防御力。

フィトリアの攻撃がクリティカルヒットしても、俺はせいぜい滅茶苦茶痛いで済む。

でも、俺の攻撃がフィトリアにクリティカルヒットしたら、フィトリアは致命傷クラスの重傷を負う。

かするだけでもかなりのダメージになつてるんだから間違いない。

そんな即死攻撃を延々と避け続け、死と隣り合わせのダンスを躍り続けてれば、そりゃ疲れる速度も尋常じゃない。

というか、戦いが始まって数時間。ここまで戦えてるだけでも人間技じゃない。フィトリア人間じゃないけど。

でも、そんな死闘もそろそろ終わりだ。

フィトリアはもう限界が近い。

いい加減、幕を下ろさせてもらうぜ！

「スターダストアックスX！」

命中率重視、兼、目眩ましになる流星シリーズのスキルを使う。

なんだかんだで、このスキルを完璧に避けるのは大変なんだ。

そして、避けきれずに被弾すれば、体勢を崩して必ず隙が生まれる。

「ダークスラッシュX！」

そこに更なる追撃。

崩れた体勢を更に崩していく。

そうして、どうしようもない程に大きく致命的な隙を晒すのを待つ。

あらゆるスキルを乱打しながら、その瞬間を待つ。

待つ。

待つ。

待つ。

——そして、その瞬間が訪れた。

フィトリアが足をもつれさせ、転倒する。

致命的な隙だった。

その千載一遇の好機を逃す訳がない。

容赦なく、躊躇なく、その隙を突く。

「ダークスラッシュァーX！」

闇がプライドアックスを包み込む。

いつもならこのまま放つが、今回は纏わせた状態を異常する。

「シャインアックスバーストX！」

そして、プライドアックスがまばゆく発光し、光に包まれた。

光と闇が合わさり最強に見える。

もとい、光と闇が合わさった最強のスキルが出来上がる。

俺はそれを、フィトリアに向けて振り下ろした。

「混合スキル、カオスインフィニティ！」

極大の斬撃がフィトリアを襲う。

フィトリアは人間形態になつて的を小さくし、馬車を壁にして耐えきろうとしたけど、カオスインフィニティは全てを吹き飛ばした。

フィトリアという強者を、まるで嵐に巻き込まれた蟻のように、圧倒的な破壊力で叩き潰す。

そのあまりの威力に山が割れ、谷が作り出される。

さすがは、破壊力だけならデッドエンドクロスにすら匹敵する俺の切り札。

ヤバイな。

光と闇が過ぎ去つた後、そこにはボロボロになつた女の子の姿だけがあつた。

「う……う……」

フィトリアは虫の息だけど、まだ生きていた。

凄いな。

今を受けてまだ生きてるのか。

でも、まあ、好都合といえれば好都合だな。

結果的にとはいえ、殺さずに制圧できたんなら、それに越した事はない。

勇者を殺したら、それだけ世界が減びる確率が上がる。

それに波の到来が早まってしまう。

できる限りの準備期間が欲しい俺にとって、それは困る。

それに、波への対抗戦力が減るといふ意味でも困るのだ。

フィトリアとは最終的にまた敵対する可能性高いけど、それを差し引いても今ここでトドメを刺すべきじゃないでしょ。

さて、予想外に時間がかかっちゃったけど、フィトリアは倒した。

予定通り、霊亀の調査に行くか。

霊亀が仕事を完遂してくれば、フィトリアとの再戦とか考える必要もなくなるしね。

「さくらばだ。フィロリアル女王」

もはや意識のないフィトリアに背を向け、霊亀の方向に向かって走り出す。

移動しながら戦ってたせいで、大分霊亀から離れてしまった。

霊亀自身も進行を続けてたし、キロメートル単位で距離ができてる。

でも、霊亀はデカすぎるから、離れてもどこにいるか普通にわかるわ。

あれを見失うようなら眼科に行った方がいい。

ああ、霊亀の調査やるならイグニも呼ばないとな。

フィトリアとの戦いが激しすぎてすっかり忘れてた。

兜の側面に手を当てて魔力を籠め、そこに仕込んだ通信用の水晶を作動させる。

そんな感じで霊亀に向けて走っていた時、それは起こった。

「なん……だと……!?!」

霊亀の頭の下から、巨大な多重構造のトラバサミが現れる。

そして、そのトラバサミが開閉を繰り返し、ミンチのように霊亀の頭を破壊した。

その程度では霊亀は死なない。

死なない筈なのだ。

しかし、それ以降、霊亀が立ち上がる事はなかった。

「やってくれたなあ……!」

霊亀の頭があつた位置まで辿り着いた俺は、そこで血塗れになって倒れている尚文くんに向かつてそう吐き捨てた。

今のスキルは知っている。

原作に出てきた、尚文くんが重傷を負う事と引き換えに繰り出す必殺スキルだ。

そして、体内ではラフタリアちゃんあたりが霊亀の心臓を破壊したんだろう。

つまり、俺がフイトリアに足止めされてる間に、霊亀の討伐条件が達成されてしまったのだ。

その証拠に、俺の視界に表示されていた青い砂時計の数字が「7」から「8」に変わり、タイムリミットが表示されていた。

これは次の四霊「鳳凰」復活までのカウントダウンだ。

これが表示されるという事は、霊亀が倒されてしまった事の動かぬ証拠に他ならぬい。

失敗した。

さっきの攻防で尚文くん達を倒しきつたと錯覚してしまった俺のミスだ。

そして、あんなボロボロの状態から気力と根性で立ち上がったんだらう、尚文くん達の執念の勝利だ。

くそう。

「……今回はお前達の勝ちだ盾の勇者よ。だが、覚えておけ。最後に勝つのはこの私だ」その台詞を言い終えた時、さっき呼び出したイグニが到着した。

意外と近くにいらしい。

こんな事なら、イグニに尚文くん達の妨害をさせるべきだったか？

……いや、イグニが負けて死ぬ可能性もあった。

それはやめておいて正解だろう。

無難で懸命な判断ってやつだ。

そう思っておこう。

「ただいま到着だぜご主人！ 霊亀の調査だったな！ オレ様に任せとけ！」

「いや、その必要はない。霊亀はやられた。作戦終了だ。撤退する」

「マジかよ!? オレ様の出番は、あの変な種をばら蒔いただけで終わりか!?」
すまんね。

でも、お前はウチの切り札だから。

万が一にも死なれると困るんだよ。

「行くぞ」

「チッ! 了解だぜ」

イグニがふてくされながら飛び上がる。

俺はその背中に飛び乗った。

もう身動き一つとれない尚文くんが、そんな俺達を鋭い眼光で見つめていた。

「ではな。また会おう」

最後にそう言って、俺達は撤退していった。

行き先はアックスフォードの片隅に作った新しい拠点だ。

今回の戦い。

尚文くん達の勝ちだとは言ったが、俺が負けたとは一言も言っていない。

拠点で、今回の戦果を確認しないとな。

そうして霊亀は討伐され、その進行は終わりを告げたのだった。

48話

誰が見てるかわからないので、念のためにイグニに雲の上の遙か上空を飛ばせ、そこで転送スキルを使った。

やって来たのは、思い出深い悪夢の地こと、ドラウキューア山脈近隣地帯、魔の森（俺命名）。

かつて、イグニが縄張りになっていた場所だ。

そこでようやく、俺は兜を脱いだ。

「ふー。暑かったー」

「お、やっといつもの感じに戻ったなご主人！ やっぱアレは違和感あるぜ」

「違和感って……どんな？」

「無理矢理カツコつけようとしてスベってる感じだ！」

「うわー……容赦ない言葉攻めだー……」

イグニの言葉の刃が俺を襲う！

フィトリアと戦った時以上のダメージだぜ！

俺的にはカッコいいと思ってやっているとこの事実が、より一層、俺を追い詰める。

そっかー……。

スベってるのかー……。

もしかしなくても、俺って中二病？

「まあ、それはいいんだよ。とにかく、これで今回のお前の仕事は完全に終わりだ。帰っていいぞ」

「帰るって……ここ、オレ様の縄張りなんだぜ？」

「いや、お前最近は城で食っちゃ寝してるじゃん」
知ってるんだぞ。

俺が研究に夢中になってる間、お前は呼びつけた時以外アックスフォードの城でグータラしてるって事を。

コックさん達に命令出して、美味しい料理を食べ放題な毎日を送ってるそうじゃないか。

なんて羨ましい。

「なら、オレ様は縄張りの見回りに行く事にするぜ。帰る時は声かけてくれよ」

「わかったわかった。じゃあ、あとでな」

「おう」

という事で、イグニは縄張りの巡回に出掛けた。

これも仕事といえば仕事だろう。

ここにいるイグニの配下の魔物達にはお世話になってるからな。

彼らの統率を図るのは重要な事だ。

まあ、お世話になってるといよりは、こつちが一方的に利用してる感じだけでも。

「ヤッ……」

イグニが行ったところで、俺はこの場にある一本の木に目を向けた。

一見すると何の変哲もないただの木。

しかし、よくよく注意して見ると、この木が植物の蔦の集合体である事がわかる。

これは、実はバイオプラントで作った入り口なのだ。

これがあるからこそ、この場所に転送ポイントを設置している。

『開け、ゴマ』

そして、俺は何のひねりもないキーワードを口にした。

ぶつちやけ、キーワードなんて、わかりやすければ何でもいいのだ。

俺か、俺が許可した相手の声にだけ反応するようになってるんだから。

そんな俺の声に反応して、バイオプラントが変形する。

木の幹の部分が縦に開いて、中に入れるような構造になった。

そこに足を踏み入れる。

『閉じよ、ゴマ』

そして、これまた何のひねりもないキーワードによって開いていた部分が閉じて、外見は元の木に戻る。

逆に、内部では変化が起きていた。

床の部分が徐々に下へと沈んでいくのだ。

要するにエレベーターである。

体感でだいぶ下へと降りた時、再び入り口部分が開いた。

エレベーターなんだから当然だ。

そうして、開いた出入り口から外へと出る。

そこは広大な空間になっている。

魔の森全域、そしてドラウキューア山脈の地下まで浸食した、バイオプラントで作られた超巨大な地下室。

東京ドーム数百個分か、数千個分か、あるいは数万個分の広さがあるだろう。

東京ドーム行つた事ないから、正確なところはわかんないけど。

その広大な空間の中を、メイドみたいな形をした人型のバイオプラントが何体も行き来している。

前に遊びで作った自律式ミラ人形を、便利だからって理由で量産したやつだ。

ここにある機材や設備の点検、維持管理などをやってもらっている。そんな場所に辿り着いてから、俺は斧の形状を変えた。

漆黒に豪華な金色の模様が入った、禍々しくも一つの芸術品のごとき美しさを備えるようになった。プライドアックスから、

S F 映画に出てきそうな、超古代文明チックな雰囲気を持つ鍵みたいな外見をした斧へと。

刃すらついていないこの斧。

その名は「新・七つの大罪の斧」。

名称からわかる通り、カースシリーズの斧だ。

俺が夜の暗躍活動を通して手に入れたかった本命の品でもある。

新・七つの大罪。

それは七つの大罪として有名である、傲慢、憤怒、暴食、色欲、嫉妬、強欲、怠惰とは異なる、割とマイナーな部類の大罪である。

その内容は、貧困、過度な裕福さ、環境汚染、遺伝子改造、人体実験、社会不公正、麻薬中毒の七つ。

バイオプラントを入手しに行こうと考えた時にその存在を思い出したんだけど、

原作においてチラッと出てきただけのこのシリーズを手に入れるのは中々に骨が折

れた。

何せ、入手方法が今一よくわからなかったんだから。

原作においては、行動によってカルマ値？ が一定以上に達したのが原因じゃないかと尚文くんが推測してたけど、所詮、推測は推測だ。

何の確実性もない。

そもそも、カースシリーズを意図して手に入れようとする事自体が前代未聞なんだ。イグニの竜帝の知識にすら、そんな事をしようとした勇者の記録はなかった。

しかし、俺は諦めなかった。

何としてでもこの斧を手に入れる為に、思いついた手段を片っ端から試した。

見知らぬ国で強盗行為を繰り返して、その国を貧困へと変えた。

それによって、自分は過度な裕福さを得るようにした。

森を焼き払って環境を汚染した。

バイオプラントを弄りまくって遺伝子改造をしまくった。

人体を武器に吸わせる行為は、人体実験と言えなくもないだろう。

社会不正はどうすれば良いのかわからなかったし、麻薬中毒は能力解放によって毒類が効かなくなってたから試せなかったけど。

だが、そんな風に手探りで頑張ったおかげで、成果は出た。

最初に「貧困の斧」と「過度な幸福の斧」が出て、しばらくしたら「環境汚染の斧」と「遺伝子改造の斧」が出た。

そこまでいけば、残りのシリーズが芽づる式に解放されていつて、最終的には全てが統合され「新・七つの大罪の斧」へと変質したのだ。

カースシリーズという事で、より一層の精神汚染を懸念してたけど、先に傲慢に浸食されきってたせいなのか、目に見える変化はなかったくらいだ。

原作において「新・七つの大罪の盾」という武器を解放した尚文くんは、別人格にとつて代わられるくらいの変化が起きていたというのに。

案外、俺も別人格が何かに変わってるのかもしれないけど、自覚症状がないなら別にどうでもいい。

それよりも、問題はこの斧の性能だ。

ハッキリ言おう。

滅茶苦茶使える。

この斧の真骨頂は、プライドアックスみたいな戦闘能力にあらず。

むしろ、戦闘能力は皆無に等しい。

初期のスモールアックスの方が強いまであるだろう。

その代わりに、この斧はSFチックな外見に違わず、チートなまでの科学技術……い

や、この世界では錬金術と云うべきか。

それを俺に与えてくれる。

自由自在に操れるようになったバイオプラント。

龍脈操作という技能で、大地から経験値を吸収し、何もしなくても急速にLvの上がる生活。

人体実験によって、限界を遥かに超えた力を得られる可能性。

この超巨大地下空間を形成するバイオプラント、ジャイアントプラントも、この斧の力で造ったものだ。

動力元は、龍脈から吸い上げた魔力と、イグニの配下の魔物達に提供してもらってる魔力だけ。

そして、何よりの本命はコレだ。

「よつと」

俺はあらかじめ用意していた巨大な培養液の入った水槽の中に、武器の中に吸わせておいたあるものを取り出して設置した。

当たり前のように武器からの出し入れが可能になってる件については一先ず置いておけ。

それよりも、こつちの方が百万倍重要だ。

「おお……！」

思わず感嘆の声を上げてしまった。

できるといふ事は初めから知ってたけど、実際にそれが現実になると、やっぱり心に来るものがある。

それは感動だ。

これなら、必ずや厄災の波に打ち勝つ事ができる。

確信を持って、そう言える。

俺の視線の先。

培養液の中に浮かぶのは、武器に吸わせておいた霊亀の体。

切り落として武器に吸わせた、霊亀の頭、足、心臓、甲羅の欠片、使い魔。

そう！

これだけのサンプルと新・七つの大罪の斧の力があれば、霊亀を復活させる事ができるのだ！

いや、厳密に言えば霊亀のクローン、二代目霊亀を造ると言った方が正しいか。

当然、結界の生成機能も再現可能。

霊亀が操られると知った時に、俺が大して慌てなかつた根拠がこれなのだ。

そして、この手段が使えるのは霊亀だけではない。

他の四霊にも当てはまる。

たとえこの先、原作通りに他の四霊が討伐されたとしても、サンプルさえ回収できればクローンを造る事ができる。

つまり、四霊は不滅だ。

何度でも蘇り、最後には必ず世界を救う。

まあ、波がこれからどんどん激しくなる事を思えば、そんな悠長に構えてる余裕はないだけだね。

妨害戦力である尚文くん達がこれから強くなるだろう事を考えても、短期決戦で早期逃げ切りを目指すのが一番確実だ。

でも、とりあえず、封印を解く方法がわからない四霊である鳳凰と麒麟が復活するまでは待とう。

封印解除の方法がわかるなら話は別なんだけど、わからないなら自然に解けるのを待つしかない。

そうして、全ての四霊を一度制御下においてから、一気に四霊クローンを使って大虐殺を引き起こし、結界の生成を目指す。

急がば回れ。

今は、どんな妨害が入っても問題ないくらいに準備を整えるのが先だ。

まずは次の四霊、鳳凰だな。

封印が解けるまで、約三ヶ月半。

それまでは二代目霊亀の作成をしながら、ひたすら準備を整える事に専念しよう。

奥の手の調整もしておかないといけないし。

そうして、今日もまた、俺は研究を続ける。

全ては来るべき時の為に。

そして、俺が生き残る未来の為に。

間章

49話

「そうだ、尚文くんの村に行こう」

ジャイアントプラントの中で二代目霊亀の作成に励んでいた俺は、ふとそんな事を思った。

二代目霊亀の作成は順調だ。

というか、サンプルが多すぎるせいで、再現程度なら一週間もあれば出来た。

あわよくば霊亀の量産とかできないかなー、って思ってたんだけど、何故かそれは無理だったんだ。

なんぞ、世界の法則的な謎ルールに接触したっぼい。

どうも四霊、というより世界の守護獣は四種類で各一体までしか同時に存在できないという謎のルールがあるっぼい。

それを無視して無理矢理二体目の霊亀を造ろうとしても、肝心の結界生成機能が搭載できないのだ。

どういうこっちゃと思ったけど、それが世界の法則なら仕方がない。

その抜け穴を探す事もできなくはないかもしれないけど、いかんせん時間がかかりすぎる。

ここはおとなしく諦めて別の事に時間かけた方が良いと判断し、今は二代目霊亀のバージョンアップを重ねながら、次に鳳凰を手掛ける時の為に、四霊製作のノウハウを頭に叩き込んでるところだ。

そして、その鳳凰が復活するまでは波が来ない。

これは霊亀が張った不完全な結界が原因だ。

集めた魂のエネルギーで、一時的に波の到来を押し留める結界を作ったのだ。

でも、エネルギーを満タンまで溜める事はできなかったから、あくまでも一時的。

鳳凰が復活する三ヶ月先までの繋ぎでしかない。

しかし、霊亀の結界生成機能は止まってるって話だったんだけどなあ。

だから、クローン作成の時にそっだけ先行で造って、俺が代わりにやろうと思ってるのに。

なのに、なんかその必要もなくて普通に結界が張られてた。

どういうこつちやと思っただけど、もしかしたら霊亀の使い魔を自称してた、あの美人さんが頑張ったのかもしれない。

なんにせよ、俺は時間に余裕が出来た訳だ。

もちろん、やらなければならない事はまだまだある。

奥の手の調整。

それに伴う実験体の調達。

鳳凰戦への準備。

麒麟への根回し。

軍備の拡張。

迷いの砂漠という危険地帯攻略作戦の進行。

このように、やるべき事は山のようにある。

でも、スケジュールにだいぶ余裕が出来てるのも、また事実。

だったら、その余裕を使って尚文くん、というより原作キャラ達の様子を見るのは悪い手じゃない筈だ。

例によって影の皆さんの情報収集のおかげで、尚文くんが原作通り、霊亀討伐の報酬として領地を手に入れた事はわかってる。

というか、盾の勇者様が領地を構えたっていうのは大ニュースだから、影の皆さんに頼らなくても普通に情報が耳に入ってきた。

場所はメルロマルクの片隅。

四聖勇者が召喚される前に、最初の波で滅びた村の跡地。

たしか、ラフタリアちゃんの出身地だっけ？

そこで村出身の奴隷（つまり、ラフタリアちゃんの知り合い）を集めて保護してら
しいよ。

名目は「波に挑む為の私兵の育成」だそうだから、戦闘訓練とかもしてるんだらうけ
ど。

今回はその村に、突撃！ 隣の晩御飯！ をやろうと思ってる訳だよ。

尚文くんが原作通りのメンバーを揃えてるのかどうかも気になるしね。

まあ、原作は登場キャラが多くて覚えきれてないから、そんなに意味のある行為では
ないかもしれないけど……。

その場合は敵情視察、兼、息抜きの小旅行って事で。

「——という事を考えてるんだけど、どう思う？」

「ユウ様は厚顔無恥という言葉を知っていますか？」

厚顔無恥。

厚かましく、恥知らずな様。

他人の迷惑など省みず、自分の都合や思惑だけで行動する事。

なるほど。

俺にびったりだな。

「いや、それは今さらじゃね?」

「……はあ。そうでしたね」

ミラが諦めたようにため息を吐いた。

悪いね。

俺は傲慢なんだ。

「何の話だ?」

と、そこで近くにいたイグニが会話に交ぎつてきた。

現在地はジャイアントプラントの中ではなく、アックスフォードの城に王様が用意してくれた俺の自室だ。

最近は何も不思議じゃない。

「ああ、霊亀の時に盾の勇者と会ったじゃん。彼とは前から知り合いだったから、様子でも見に行こうかと思って」

「ご主人は厚顔無恥って言葉知ってるか?」

厚顔無恥。

厚かましく、恥知らずな様。

他人の迷惑など省みず、自分の都合や思惑だけで行動する事。

って、やかましいわ!

お前まで言うか！

「べつつに厚顔だろうが無恥だろうが気にしないもんねー！ それより敵情視察の方が大事だつつうの！」

「なに拗ねてんだよ？」

「まあ、たしかに一理ありますが……」

「でも、勇者のやる事じゃねえな！」

うるさいよイグニ！

だが、これを聞いても同じ態度がとれるかな？

「ちなみに、盾の勇者は料理が上手だ。尚文くんの料理は絶品だぞ。城のご馳走で舌が肥えたお前でも、必ずや満足するだろう」

「何やってんだご主人。早く支度を整えろ。オレ様を送ってやるからよお」

現金だなイグニこの野郎。

しかし、誠に残念だけど……

「ちなみに、お前は留守番だぞイグニ」

「なん……だど……?!? どういう事だ!?!」

「いや、一般人って設定の奴が竜帝連れてたら不自然だろ。尚文くんは正体バラす気はないし」

それに、お前はドラゴン形態とはいえ顔が割れてるだろうが。

尚文くんの村には、あのドラゴンと仲の悪い鳥ことフィロリアルもいるんだから、竜帝という秘密が普通にバレそうで怖い。

という訳で、イグニは留守番決定。

うるさく騒いでたけど、黙殺。

ケツケツケ。

余計な事を言った罰だ。

存分に悔しがるがいい！

だが、まあ、安心しろ。

お土産は貰ってきてやる。

「で、ミラはどうする?」

「……行かないという選択肢はないんですね」

「ない」

これは、なんだかんだで重要な作業なのだ。

今までは過度な原作ブレイクをしてこなかったけど、今回は違う。

何せ、原作主人公と思いつきり対立したのだから。

盛大にやらかした自覚がある。

仮に、前に考えた推測が当たって、原作知識が九割方本当だったとしても、俺というイレギュラーのせいで狂いが生じている可能性は十分にあるだろう。

実際、尚文くんの所属国であるメルロマルクから、ガーディアンの子体が斧の勇者じゃないかという探りがそれとなく入ってるみたいだし。

王様がすつとぼけてくれる上に、周辺諸国は霊亀災害の復興で忙しくて本格的に調べる余裕がないって事で、現在は問題が棚上げされてるらしいけど。

でも、そういう諸々の動きによつて、原作の流れが変わってる可能性は決して低くない。

それを知らずにいれば、そのうち思い込みで痛い目を見るかもしれないじゃないか。グラスを殺つちまつた影響の調査も含めて、もう一度尚文くん達を近くで観察した方がいい。

という事を、俺はしっかりとミラとイグニに説明した。

報連相は大事だ。

イグニはふてくされてたから、半分以上聞いてなかったけど。

「で、改めて聞くけど、ミラはどうする？ 一緒に来るか来ないか」

「……まあ、ユウ様の言う事にも一理あるのは確かですね。幸い、アックスフォードの仕事は国王様に押しつけ、コホン。お任せする事は可能ですし、私も同行させていただきます」

きます」

「よし。じゃあ決定だな」

若干気になる事を言っていたような気がするけど、きつと気のせいだろう。

大丈夫。

王様が過労死するなんて事は、多分、おそらく、きつとないさ。

そこまでの激務を振ってる訳じゃないし。

せいぜい、未だにしつこいタクトへの対応と、麒麟への根回しくらいか。

麒麟に関しては、シルベスターさん主体で進めてるし、王様一人に負担が集中してる訳でもない。

「さて、じゃあ荷物を纏めるか。明日には出発するからな」

「かしこまりました」

「土産は買って来いよ！」

「わかったわかった」

という事で、尚文くんの領地へと小旅行に行く事が決定したのだった。

ちよつと楽しみだ。

主に尚文くんの料理が。

つい先日ぶつ倒した奴を相手にそんな事を思えるあたり、俺は本当に厚顔無恥だなと

自分でも思った。

50話

「到着つと」

「ここがナオフミ様の領地ですか……。変わった所ですね」

例の転送ポイントに転移してから、馬車に揺られて尚文くんの領地にやってきた。

その見た目は、ミラの言う通り変わってる。

家の代わりに植物（多分、バイオプラント）で作られた小屋が建ち並んでいるのだ。それ以外は、まあ、ただの復興中の村って感じかね。

獣耳生やした亜人の子供が多いのが特徴か。

「やあああああああ！」

「ハアアアアアアア！」

そんな村の真ん中で、一組の男女が木剣を持って試合をしていた。どつちも見えた事のある顔だ。

男の方は、剣の勇者こと錬くん。

女の方は、霊亀戦の時に俺が半殺しにしちやった女騎士さんだ。

技量は女騎士さんの方が圧倒的に上。

錬くんが一方的にしごかれてる感じだ。
というか、錬くんの技量は俺より下かも。

そして、思い出したわ。

そういえば、錬くんは原作でも女騎士さんに弟子入りみたいな事してたっけ。

そして、錬くんが村に居着いてるって事は、そこら辺は原作通りに進んだと見るべきかね？

ぶっちゃけ、錬くんが尚文くんの仲間になったシーンって印象薄くて、ほとんど覚えてないから検証のしようがないけども。

元康くんのインパクトに全部持っていかれたというかなんというか。

なんだっけ？

落ちぶれて盗賊王になってたんだっけ？

そうして記憶を探ってるうちに、やがて試合が終わり、二人が俺達に気づいた。

「む？ 客人か？」

女騎士さんの方が話しかけてきた。

錬くんは息も絶え絶えで倒れる。

逆にこの人は軽く汗をかいてる程度だ。

意外とやるね。

そんな事を考えながら、普通に返答する。

「ええ、その通り。ちよつと知り合いに会いに来ましてね」

「そうか。ゆつくりしていくといい」

「どうも」

女騎士さんはにこやかにそう言ってくれたけど、俺の正体が自分の頭をかち割って瀕死状態にした奴だとわかつたら、どう思うんだろう？

まあ、どうでもいいか、そんな事。

一方、地べたに倒れて息を整えていた鍊くんが、怪訝な表情で俺を見ているのに気づいた。

「どしたの？ 俺の顔に何かついてる？」

「いや……あんたとは、どこかで会ったような気がするな」

「ん？ ……ああ、思い出した。剣の勇者様か。前にこの国の龍刻の砂時計で会ったね」
「何？」

最初から知ってる訳だけど、あえてすつとぼけて、今思い出した風に言ってみる。

俺も面の皮が厚くなったもんだ。

「あんた……！ もしかして尚文の……」

「何やってんだお前は？」

その時、鍊くんの声に被せるように聞き覚えのある声が聞こえた。

相変わらず不機嫌そうなの、でも、前よりは険がとれた感じの声。

何人かのお供を引き連れて、彼は現れた。

「やあ。久しぶりだね尚文くん」

味方としては。

そんな一言を口には出さずに飲み込んだ。

そうして俺は、尚文くんに再会した。



「で、何で来た？」

「知り合いが大出世したって聞いたからお祝いに来ただけだよ。ま、休暇を使って小旅行って感じかな」

「旅行感覚じゃねえか」

「まあまあ」

場所を移して、現在地は村長邸（ちよっと大きめのバイオプラント）の中。

一応、俺達は尚文くんの客人という事で、お茶を出されて、村長自らが対応してくれるくらいのおモテナシを受けてる。

なんだかんだで、尚文くんは俺達に恩義でも感じてるのかもしれないね。

まあ、それは良いんだけど。

「……………」

ジー、と無言で俺を見つめてくる瞳が二つ。

いや、その言い方は適切じゃないな。

訂正しよう。

目を閉じたまま俺を見つめてくる、十歳くらいの女の子が一人。

ホワイトタイガーみたいな耳と尻尾が生えた、亜人の子供だ。

原作にもいたね。

こんな子。

「どうした、アトラ？」

「いえ………なんというか、不思議なお方だと思ってます」

不思議、ね。

たしか、この子は目が見えない代わりに、やたらと洞察力が鋭いというか、

俺の悪意感知にも似た心眼の使い手だった筈。

要するに、人の本質みたいなものを見抜いてしまうのだ。

俺の天敵だな。

対策してきてよかった。

「よくわからない……掴み所がないと言いますか……不思議なお方です」

「この子、何言ってるの？」

だが、あえてすつとぼける。

俺がそんな情報知ってたら不自然だし。

「アトラは目が見えない代わりに変なものが見えるだけだ。気にするな」

「そっか」

「尚文様!? それだと私に変な子みたいな言い方ではありませんか!」

虎の子……アトラちゃんが吠える。

平和だな。

和むわ。

この子が俺の正体を見抜いてたら、こうはいかなかっただろう。

俺がやったこの子への対策は、そんなに大したもんじゃない。

新・七つの大罪の斧の効果で作った、気配遮断のアクセサリーを身に付け、同じ効果

を持った装飾を斧の宝石部分につけて、色々と誤魔化してるだけだ。

これを付けると、カースシリーズの禍々しい気、溢れ出す強者オーラ、体から漏れ出す勇者特有の力（SPなど）を偽装して、限りなく一般人と同じように見せかける事ができる。

ついでに、心眼使いから本性とかを見破られにくくしてる訳だ。

他人に持たせて実験したところ、俺の悪意感知すら多少は欺く事ができたから、効果は保証付き。

自信作である。

でも、この子はそれを突破して、違和感程度とはいえ俺の不自然さを見抜いた訳だよ。

悔れないわぁ。

「そういえば、ラフタリアちゃんはどうしたの？ 姿が見えないけど」

俺は話題を逸らす事にした。

ボロは出したくないっす。

「ああ、ラフタリアは戦闘顧問のババアと一緒に山籠りに行ってる。しばらくは帰って来ないだろう」

「山籠りって……そういえば、盾の勇者様は波に向けた私兵の育成をしてるんだっけ？

その一環？」

「まあ、そんな感じだ」

はあー、ラフタリアちゃんが山籠りねー。

そんなイベント原作には……あつたっけ？ なかつたっけ？

忘れた。

まあ、いいや。

「ま、何にせよ、また少しの間お世話になるからよろしくねー。あ、そうだ。宿泊用の家とか貸して。あと、久しぶりに君の料理も食べたいなー」

「いきなり来たくせにずうずうしいぞ。……家はこっちで手配してやるが、飯は自分で調達しろ。それと、金は払えよ」

「はいはい。わかつたわかつた。伯爵になったって聞いたのに、相変わらず、がめついな君は」

「知るか」

という感じで、尚文くんに仮設住宅型バイオプラント（キャンピングプラントという名前だった）の種を貰って村長邸を出た。

……見た感じ、尚文くんは俺llガーディアンとは気づいてなさそうだな。

まあ、たとえバレてたとしても、せいぜい多少動きにくくなる程度だから別にいいんだけど。

でも、バレてないなら、それに越した事はない。

存分に盾の勇者の友人という立場を利用させてもらおうじゃないか！

そんなこんなで、俺達の敵情視察という名の小旅行が始まったのだった。

51話

尚文くんとお話しした後、とりあえず村の中をグルッと回ってみた。行商に行つて帰つて来る一団。

戦闘訓練に精を出す子供や兵士達。

当たり前のように畑に植えられたバイオプラント。

ボコボコにされる剣の勇者。

一回り大きいキャンピングプラントの中で研究に励むマッドサイエンティスト。

そんな感じで、色んなものを一通り見て回った。

その結果、わかつた事がある。

まず、錬くんはいたけど、元康くんと樹くんの姿はない。

まだ霊亀討伐から一ヶ月経つか経たないかだから、これは不思議ではない。

錬くんが最初にこの村に来たつても、原作の通りだ。

他には、戦闘訓練をしている連中の士気が、やたらと高い。

「凄いやる気ですね〜」って感じで声をかけて理由を問うたところ、霊亀戦の時に盾の勇者様がガーディアンと名乗る危険人物に完膚なきまでにボロ負けした事が判明。

そんな卑劣な輩に負ける訳にはいかない!

我々も強くなつて盾の勇者様をお助けするんだ!

つてな感じで、訓練に熱が入つてゐるらしい。

ちなみに、答えてくれたのは若い兵士の人だったんだけど、その卑劣な輩が目の前にいるつて知つたら、この人はどんな反応するんだらうか?

ちよつと興味あるな。

特筆して氣になつた事は、せいぜいそれくらいかな。

結論。

大体原作通りに進んでる。

内心では色々と意識の变革とかがあるのかもしれないけど、少なくとも表面上は原作をなぞつてゐる。

この分なら、近いうちに元康くんあたりが加入するかもしれない。

とりあえず、それを見届けてから帰るつて事にしようかなー。

俺も暇じゃないし、元康くん加入イベントがなくても、滞在期間は最大で一週間くらいにしておこう。

「キュアアア!」

「待つて! ガエリオン!」

「おっと」

そんな考え事をしながら歩いてたら、目の前をちっちゃいドラゴンとちっちゃい女の子が走っていった。

危ない危ない。

危うくぶつかるところだったぜ。

思い返してみれば、俺がこの世界にきた原因も、歩きスマホによる不注意によってトラックに跳ね飛ばれたからだったなー。

今さらトラックに跳ねられた程度じゃ傷一つ付かないだろうけど、軽くトラウマが疼くから注意はしないと。

……ん？

そういえば、この村にいるドラゴンといえは竜帝か？

なら、解体してイグニへのお土産にするのも良いかも。

「ギャウ!」

そんな不吉な事を考えてたら、ドラゴンが軽く悲鳴を上げた。

おっと、怖がらせちゃったか。

殺気は出してなかったと思うけど、野生の勘で身の危険でも感じたのかな？

心配しなくても、ちよっと心の中で思ったただけだって。

さすがに、尚文くんのペットに手を出したら疑われそうだから殺らないよ。善意からドラゴンを見逃してあげる。

そのまま歩いていると、今度はシャチみたいな獣人の人を見かけた。軽く会釈すると、シャチさんはこっちに近づいてきた。

「あらー。見ない顔だけど、お客さん?」

「ええ、知り合いが大出世して領地貰ったって聞いたんで、ちよつとお祝いついでに観光に来ました」

「あらあら、ナオフミちゃんのお客さん? なら、楽しんでいってねー。あいにくと何も無い所だけど」

「そうさせてもらいます」

シャチさんとは、そんな軽い会話をしただけで別れた。

あの人も、たしか原作に出てきたな。

ホント、尚文くんは着々と原作をなぞってるらしい。

「到着ー!」

「「おええええええ」」

と、今度は村の入り口あたりで、例の鳥を見かけた。

あの、霊亀の時に尚文くん達を必死で逃がした、あの鳥だ。

ある意味、あの鳥が真の英雄かもしれない。

そんな鳥は馬車を引いて現れ、その馬車の中からこの世の終わりみたいな顔した子供達が降りてくる。

Lv上げか行商の帰りつてところかな？

たしか、あの鳥が引く馬車は大層乗り心地が悪いんだっけ？

俺は酔い耐性って技能を取得してるから、多分、大丈夫なんじゃないかな？

積極的に乗りたいとは思わないけど。

そして、俺が見てる前で鳥は変身して、翼が生えた天使のような人間の少女の姿になった。

見た目はイグニと同じくらいの年齢。

すなわち幼女。

ネットの画像で見た事ある顔だ。

しかし、直に見るのは、実はこれが初めてだったりする。

まあ、また原作知識の検証ができたって事にしよう。

すげえ今さら感があるけど。

「ワンワン！」

今度はふんどしを着けた子犬を見かけた。

あんなのも原作にいたなあ、そういえば。

登場人物多いんだよ。

俺が読んだのはイラスト無し of Web 小説だぜ？

覚えきれるかってんだ！ バーロー！

そんな、どこにぶつけたらいいのかわからない憤りを感じながら村を歩き回ってる間に日が暮れてきた。

今日の探索はこのへんにしておくか。

指定された場所に尚文くんから貰ったキャンペーンプラントの種を植え、即席の仮設住宅を作って中に入った。

やっぱりバイオプラントって便利だなー。

まあ、ウチのジャイアントプラント程じゃないけどな！

カースシリーズの力を舐めちゃいけない。

ウチのジャイアントプラントさんに比べれば、キャンペーンプラントなんて月とスッポン。

俺と尚文くんくらいの力の差があるのだ！

「それで、どうでしたか、この村は？」

俺が心の中で尚文くんを軽くデイスった時、ミラが話しかけてきた。

今回の成果を問われてるっぼい。

「んー。まあ、予想通りとだけ言っとくよ。詳しい話は帰った後でする」

「かしこまりました」

ここは尚文くんのホームグラウンドだからね。

盗聴盗撮の可能性は十分にある。

込み入った話はない方が無難だ。

あ、ちなみに、ミラは基本的に俺の護衛という名目でついて来てるので、こういう敵地とかに出向く時は、大抵俺と一緒にの場所で寝る事になる。

もはや、ミラと一緒にの部屋に泊まる事に何の違和感も抱かないわ。

若い男女が一つ屋根の下で寝泊まりして何も起きないっていうのも、ちよつとも悲しいような気がするけど。

まあ、どうでもいいか。

「じゃあ、お休みー」

「お休みなさいませ」

そう言いつつ、ミラはしばらくは寝ないっぼい。

護衛だから見張りに起きてるつもりなんだろう。

俺も敵地でぐっすりと寝るつもりはないから、二時間おきに交代して仮眠だな。

こういうのも、俺とミラが男女の仲にならない理由の一つだと思う。

別に、お互い異性として意識してる訳じゃないから、何の問題もないけどね。

そんな益体もない事を考えてるうちに、俺は眠りについた。

だが、もしかしたら、こんな男女の仲うんぬんなんて事を考えていたのがフラグだったのかもしれない。

——俺達は翌日、鳥が発情したという話を聞く事になる。

性欲の権化のような存在との会合が迫っていた。

52話

「お」

翌日。

俺はいそいそと旅支度をする尚文くん達を発見した。

「やつほー、尚文くん。どっかにお出かけ？」

「まあな。ちよつとした依頼が入ったというか、なんというか……」

「ほー。さすが、盾の勇者様はお忙しいと見える」

でも、そんな事より。

「その鳥どうしたの？　なんか呼吸が荒くて目が血走ってるような気がするんだけど、病気？」

「いや、ただの発情期だ」

「発情期かー」

そんなイベントがあったなー。

元康くんこと、愛の狩人加入イベントだ。

これは是非とも確認しておきたい。

「で、俺の気のせいじゃなければ、そんな発情期の鳥を馬車に連結してるように見えるんだけど……盾の勇者様はこんな状態の奴に休暇の一つも与えない鬼畜なのかな？」

「鬼畜なのは否定しないが、俺はそこまでの鬼じゃない。これにはちゃんとした理由がある」

「ほう、理由とな？ 詳しく」

「何故、お前に教える必要がある？」

相変わらずつつけんどんだな、尚文くんは。

でも、ここで引き下がるつもりはないぞ！

何がなんでも……とまでは言わないけど、多少説得に難航してでも愛の狩人の雄姿を
拝んでやるぜ！

「まあまあ、俺と尚文くんの仲じゃん。言ってくれば力になれるかもよ？ ぶっちゃけ、ちよつとおもしろそうな臭いがするから付いていきたい」

「ぶつちやけたな……。そうだった。お前は変人だったな」

失礼な。

誰が変人か、誰が。

おい、ミラ!?

何で「わかる」みたいな顔で頷いてんだ!?

「……まあ、戦闘になるかもしれないなら、戦力は多い方が良いか」

結局、尚文くんはボツツとそう呟いて、俺達に事情を話して動向を許可してくれた。

話を要約すると、あの鳥（フィーロという名前を正式に聞いた）が発情期を迎え、何故か尚文くんに襲いかかろうとしたので、これを阻止するのが今回の目的だそうだ。

阻止する事自体は簡単で、あの俺を苦戦させた巨大怪鳥ファイトリアが、フィーロちゃんに与えた加護みたいなものを經由して、遠隔操作で静める事ができるらしい。

不思議な生態だこと。

しかし、それを頼むに当たって、ファイトリアは一つ条件を出してきた。

この辺りに馬車を狙った変わり者の山賊が出没していて、予想ではそういったら縄張り争いをするファイロリアルの可能性が高いらしい。

で、そういったらファイロリアの女王であるファイトリアの言う事を聞かないみたいで、それを尚文くん達に懲らしめてほしいと。

それがファイトリアの依頼であり、フィーロちゃんの発情を静める条件だと。

その話を聞いた俺の感想は、「あー、そういうえば、そんな感じの展開だったっけ」だ。細かいところはうろ覚えなんだよ。

でも、フィーロちゃんとファイロリアルが関わってる以上、原作通りにいけば現れる筈だ。

ファイロたんとファイロリアル様を心から愛すると公言して憚らない、自称愛の狩人。覚醒した槍の勇者、ニュー元康くんが。

それを見届けるべく、俺はミラと共に尚文くん一行に付いていく事となった。

メンバーは、俺達と尚文くんの他に、アトラちゃん、青髪の幼女ことメルティちゃん、幸薄そうな女の子リーシアちゃんの六人。

さあ、イベント開始だ！



「おえええええ……気持ち悪い」

「お前……何しに来たんだよ」

該当地域に向けて出発した直後、俺は自らの行動を後悔していた。

ファイロちゃん……いや、もう鳥でいいや。

この鳥が引く馬車は予想に違わず、否、予想以上に乗り心地が悪かったのだ。乗り物酔いで何度もりバスしそうになった。

酔い耐性があるから大丈夫だろうと甘い考えを抱いていた数時間前の自分をぶん殴りたい。

思わず、全耐性向上の専用効果があるプライドアックスを使おうかと思つてしまつた。

そんな事したら、今回の計画がパーだよ。

そんな地獄の酔いの中にあつて、ミラはすまし顔を崩さなかつた。

素直に尊敬できた。

見るからに顔が青くなつてんに、表情だけは変わんないんだもん。

結局、二人とも耐えられなくなつて、酔い止めを尚文くんから購入(貰うにあらず)する事になつたよ。

だが、これは必要経費だつたと胸を張つて断言できる。

それくらい酷い乗り心地だつた。

この鳥と比べてみて、イグニがどれだけ乗り物として優れていたのか、ようやくわかつた。

お土産は必ず買つていこう。

そんな地獄の旅路を続け、夜になつた頃によくやく目的地へと到着した。

「この辺りだったか」

「この辺りらしいわよね」

「というか、フィトリアからの依頼って、俺は何でも屋なのか？」

「ちよつと羨ましいと思うわよ」

尚文くんがメルティちゃんと話し合ってる。

でも、俺はそれどころじゃない。

酔い止めの効果が切れてグロッキーだ。

わー。

おほしさまがみえるー。

「あの……大丈夫ですか？」

そんな醜態を晒す俺に、幸薄そうな女の子、リーシアちゃんが水を差し出してくれた。

良い子だ。

この前、手刀叩き込んで気絶させちゃってごめんね。

ありがたく、そのお水をいただく。

それでも、まだ気持ち悪さが抜けない。

俺って、こんなに乗り物弱い方だったっけ？

「おいリーシア、足手まといは捨て置け」

「ふえええ……で、でも……」

「そ、そうだぞ尚文くん。君に病人を氣遣う心はないのか？」

「知るか。俺は戦力としてお前らを連れて来たんだ。足手まといになるなら面倒を見るつもりはない」

この鬼畜が！

でも、反論する元気もない。

おとなしくしておこう。

その後は件の盗賊を探すべく、ゆっくりと移動した。

馬車に揺られるよりはと思つて、俺は最悪な体調をおして自分の足で歩く事にした。

うー……。

ぶつちやけ、もう帰りたい。

ミラが肩を貸してくれなかったら、心が折れてたかもしれない。

とか思つてたら、遠くから松明の灯りみたいなのが近づいて来るのが見えた。

土煙を上げながら爆走している。

それが近づくに連れて、輪郭がはつきりとしてくる。

そして、それは俺達の目の前で急停車した。

ボロボロになった馬車。

それを引く、赤、青、緑の翼が生えた三人の幼女。

そして……

「お久しぶりです、お義父さん。走り屋の元康です」

走り屋を自称する槍の勇者、——改め、覚醒した愛の狩人が現れた。

53話

「ポータル……」

「待って待って！ 帰るの!？」

「アレを見て、帰らないという選択肢があるのか？」

尚文くんが何か言ってる。

帰るのは俺も大賛成だけど、原作通りに進むなら帰れないんだろうなあ。

知らなかったのか？

勇者からは逃げられない。

という事だよ。

俺はもうそろそろ限界なので、馬車に寄りかかって休みながら見学させてもらおう。

「帰ったらフィーロちゃんどうするの?」

「む……そうか。フィーロは諦めよう」

「そっち!？」

「やー!」

尚文くんのテンションがめっちゃ下がってるのを感じる。

無理もないか。

今の元康くんはキワモノだ。

「ふええ……槍の勇者様、何をやっているのですか!？」

「ああ、あいつは結構前からあんな感じだ」

「何をしたんですか!？」

「こいつの姉が壊して、フィーロが跡形もなくさせた」

「姉上ー!」

「剣の人も元王女様におかしくさせられたんですよね? じゃあ、助けられないのですか?」

「本人が望んでるんだよ」

「というか、お義父さんって誰?」

「俺の事らしい」

「だからなんで!？」

他のメンバーは困惑気味だ。

無理もないか。

今の元康くんはキワモノだ。

「えつと……元康、何の真似だ?」

「走り屋ですぞ」

「答えになつてねえよ! ……なんで走り屋をしているんだ?」

「この子達がやりたいと言うので、自由にさせているのですぞ」

「ああ、そう。自由過ぎるのはお前だ」

俺がフェードアウトを決め込んでる間に話が進んでいく。

元康くんが尚文くんの連れの女の子達を豚と呼んだところで、思わず吹きそうになつた。

読者という名の傍観者ではなく、目の前でこのぶつ壊れつぷりを見せられると、なんというか……ちよつと引くわ。

「では、お義父さん。勝負です」

「なんでだよ!」

「ここから先の峠にあるゴール地点になつている松明まで走り、先に辿り着いた者が相手の天使を一人、相手から貰うでよろしいですね?」

「勝手に決めるな!」

「もつくん、まだー?」

「そろそろだよ」

元康くんがマイペース過ぎる。

尚文くんの話をまるで聞いてない。

さすがだ。

「では、勝負開始です！」

「お、おい！ 話を聞け！」

あー、行っちゃったよ。

頑張っつてねー。

俺は温かい目で見学させてもらおうよ。

「ど、どうするのよ？」

「……無視して帰る」

「それって、こっちの負けになるんじゃないの!？」

「だろうな。だが、知った事ではない」

「んー？ どういう意味？」

「あのねフィーロちゃん。あの槍の勇者に負けるとフィーロちゃんは槍の勇者のものになっちゃうの」

「そのようです。フィーロちゃん。今までありがとうございます。ナオフミ様の寝所は私が代わりに努めますわ」

「え!?! やー!」

「うわっ……!?!」

なのだ。

もしかしたら、俺は何かしらの耐性で酔い止めの効果を弾いてしまったのかもしれない。
い。

だとしたら最悪だ。

「ツヴァイト・オーラ！ フィーロ！ 馬車の重心を利用しながらカーブを曲がって速度を維持しろ！」

「うん！」

うげ！

尚文くんの支援魔法で更に速度が上がりがった!?

しかも、ドリフト走行!?

あばばばばばばは！

死ぬ！ 死ぬ！

「おい！ お前らは支援魔法とか使えないのか？」

「使えるけど使ってたまるか！ これ以上スピード上げたらマジで死ぬ！」

「なら、使え！ スピードが上がれば、この地獄の時間も早く過ぎ去るぞ！」

おお!?

その発想はなかった！

「エアストシールド！ セカンドシールド！ チレンジシールド！ シールドプリズン！ フィーロ！」

「うん！」

「い、命がいくつあっても足りない」

「死んじやいます！ 絶対に死んじやいます！」

「霊亀の攻撃に耐えた俺がいるんだぞ」

「そこで言う事がそれなの？」

俺が意識を飛ばしてる間に、色んな会話があつたつぽい。

耳には入ってたよ。

頭がやられてたから、何言ってるのかはわからなかったけど。

そして――

「勝った」

馬車が止まり、鳥が勝利を宣言した。

「フィーロの勝ちー！ フィーロが一番ー！ フィーロが最速ー！ ガエリオンなんかに負けないぞー！」

うるさいぞ鳥。

そして、俺が知る限り、最速の魔物は飛行形態のイグニだ。

背中もデカくて安定してるし、お前とは比べものにならないぞ！

それはともかく……

「や、やっと終わった……」

「お、生きてたのか。お前もしぶといな」

「……心配の言葉一つないとか、君は本当に薄情者だな」

「知るか」

はあ……。

なんかもう、色々とどうでもよくなってきた。

帰りたい。

帰って、ジャイアントプラントの中で惰眠を貪りたい。

俺がそんな気持ちでグツタリとしている間に、いつの間にか追い抜いていたらしい元

康くん達がゴール地点にやってきた。

「ま、負けた……」

そして、先にゴールしていた俺達を見るなり、ガツクリと地面に手をつけて項垂れた。

走り屋元康、ここに敗れたり。

でも、たしかここからが本番か。

もはや興味が無いけど、最後の気力を振り絞って、観戦だけはしとこう。

「フイーロたん届け！ 俺の想い！」

そして、元康くんは尚文くん達との問答の末、旗のついた槍を振り回してスキルを放ったのだった。

「テンプテーション！」

5 4 話

元康くんの放ったスキルが、術者を中心に結界のようなものを展開した。

その効果は……俺には影響ないな。

他の皆は若干顔が赤いというか、息が荒いというか、元康くんを見て発情してるような感じがする。

魅了攻撃か。

俺に効かなかったのは、精神汚染は自前のカースシリーズだけでお腹いっぱいだからかもしれない。

「大丈夫か!？」

「あ、うん。大丈夫……ちよつとあの人がかっこいいと思っちゃったけど大丈夫」

「ふええ……私にはイツキ様がいるんで駄目です……」

「何がです?」

「……………」

尚文くんが注意喚起するも、一人の例外を除いて皆危ない状態だったっぽい。

ミラですら無言で顔を赤くしてる。

そして、徐に俺の方を見てため息を吐いた。

……何、その反応？

ちよつと傷付くんだけど。

「お前さー……その槍、何？」

「ラストスピアIVです。お義父さん」

尚文くんの問いかけに元康くんが答える。

名称からしてカースシリーズだな。

色欲の槍だ。

原作知識に頼らなくてもわかる。

だって、一目瞭然なもの。

「お義父さん。フィーロたんが望めば、俺との婚約を認めてください！」

「お前は誘惑スキルでフィーロを洗脳したいだけなんじゃないのか？」

「違いますぞ！俺の心が呼び出した『愛』をフィーロたん伝えるスキルですぞ！」

「別の女も誘惑してるぞ。男にもかかるってどうよ？」

「フィーロたんの愛以外ありません！」

「あつそ。……フィーロ？」

「はあ……はあ……ん……」

鳥……思いつきり発情してるな。

他の誰よりも息が荒い。

これで元康くんに襲いかかるんだったら、彼も本望なんだろうけど、そう上手くはいかないっばい。

「ごしゅじんさま……食べた」

鳥が尚文くんの方を向いて、ギラついた眼で宣言した。

尚文くんの額を嫌な汗が流れる。

「ポータルシールドー」

そして、躊躇なく俺も愛用してる転送スキルを使おうとするも、不発。

知らなかったのか？

勇者からは逃げられない。

それを知った後も、尚文くんは必死に足掻いていた。

フィトリアに報酬の前倒しを願ったりした。

アトラちゃんが暴走した鳥を止めようともした。

しかし、鳥は止まらず、どんどん尚文くん近づいて行く。

それを、元康くんは旗の端っこを噛んで思いつきり下に引っ張るといふ、

まるで思い通りに物事が進まなかった時の悪役令嬢みたいな事しながら嫉妬の眼差

しで見詰めていた。

「お前のせいだろうが！ 何、羨ましそうに見てるんだ！」

「そんな、お義父さん！ 親子でそれは犯罪ですぞ！ 俺は焼きもちなんて焼いてません！」

「見栄を張るなボケええええええ！」

うん、嘘だな。

悪意感知を持つ俺にはわかる。

元康くんが、ドロドロとしたへばりつくような悪意を尚文くんに向けているのを感じる。

これが嫉妬か。

でも、その衝動のまま尚文くんに襲いかからないあたりは凄いと思うよ。

「羨ましい羨ましいー！ フィーロさんに愛されて羨ましいー！」

「うっせえ！ 元康、早くその槍を変えろ！」

「何を言うのです、お義父さん！ フィーロたんへの愛で出現したこの槍を変えるなんて事を、俺がする筈なのですぞ！」

「このままだと、愛しのフィーロが暴走するぞ！」

「ダメだあああああ！ フィーロたあああああん！」

元康くんが尚文くんを庇うような位置に立った。
まるで寸劇のようだ。

「ダメだよフィーロたん！ 近親相姦はダメだよ！」

「実の親子じゃねえよ！」

その台詞、今は逆効果じゃないか、尚文くん？

とらえようによつては、あの鳥とヤツても良いと言つてるように聞こえるんだけど。

「フィーロたん！ ダメだよ！」

「どいてー！」

「ぬあ！ それでも俺は、君が悪の道に行くのを阻止してみせる！」

「だから、早く槍を変えろつての！」

「ごしゅじんさま……はあ……フィーロの……はあ……ん……」

「うぬううう！ お義父さん、羨ましいいいいいいですぞ！ そんなにフィーロたん
に大事にされて恨めしいいいよおおお！ と思いますぞ」

「黙れ！」

コメディーかな？

見てる分にはおもしろいわ。

車酔いでそれどころじゃないけど。

「羨ましい！ 羨ましい！」

元康くんが鳥に組み付きながら、気持ち悪い顔で地団駄を踏む。
真性の変態って、あんな感じなんだろうなー。

「ウラメシイイイイイ……」

おっと。

元康くんの槍から黒いオーラが出てきた。

俺のダークスラッシュャーに似てるわ。

カースシリーズの闇だ。

そして、槍にくくりつけられていた旗が破れて、槍の造形が明らかになる。

……見たくないものを見たぜ。

「な……な………！ なんて形した槍を持つてるのよ！」

メルティーちゃんが悲鳴のような声を上げた。

無理もない。

アレ、完全にチン○だ。

「オ、トウサン……アナタノ、むすメを、寝取つてヤル。このラストエンヴィースピアIV
で。」

フィーロタン！ オレは、君を、止めて、純潔をウバウ！」

元康くんがチン〇……間違えた。槍の先端を鳥の下半身に向けて構える。凄いい。

言動が完全に変質者のそれだよ。

「ウウ……じゃまをするなら容赦しないよ」

鳥も臨戦態勢を取る。

尚文くん達は呆れ果てた感じで、このどうしようもない戦いを眺めている。

ツツコミが追い付かないみたいだ。

「放て！ ルサンチマン！」

また元康くんがスキルを放つ。

さつきは色欲のスキルだったから、今度は嫉妬のスキルだっけ？

尚文くんの連れの女の子達が苦しそうに呻いていた。

何故か、ミラは俺を半目で睨み付けて微量の悪意をぶつけた後、素面に戻った。

だから、なんやねん？

「俺のココロが、力を、タカめる……。トドケ！ 俺の！ 愛のココロ！」

「フイーロの、じゃましないでー！」

そうして、元康くんと鳥がバトルを始めた。

勇者VS鳥。

俺とフィトリアの戦いを彷彿とさせるけど、あの時より遥かにどうでもいい戦いだな。

コメディーにしか見えない。

ギャグ漫画時空が発生しているのを感じる。

この後、どう収拾つけるんだっけ？

細かいところは忘れたな。

まあ、なんとかなるでしょ。

そんな感じで、夜は更けていった。

55話

「しねーーーーー……!」

元康くんの連れていた三羽の鳥が、尚文くんの鳥目掛けて襲いかかった。

ガツツリ色欲と嫉妬のブーストがかかっていらつしやる。

殺意マックスだ。

「な、なんで!? ミンナ!」

そんな三羽鳥を元康くんが必死に止める。

さすがに槍の勇者なだけあって、3対1でも負けていない。

でも、仲間……というより崇拜対象を傷付ける訳にもいかないのか、防戦一方だ。

そして、

「よしゆじんさま……やつと邪魔者はいなくなったよー」

元康くんが動けなくなつたという事は、尚文くんの鳥がフリーになつたという事。

つまり、尚文くんの貞操の危機だ。

すげえ、どうでもいいです。

「おい! お前ら役に立て! フイー口を止める!」

と、その時、尚文くんが俺達の方に助けを求めてきた。
当然、俺の答えは決まっている。

「無理。馬車酔いでそれどころじゃない。おとなしく童貞を差し出すといいよ」
「お前は鬼か!?!」

「君にだけは言われたくない!」
うっ……。

大声出したら頭がグワングワンする。

おとなしく静観しよう。

そうしよう。

「シールドプリ……!?!」

尚文くんがスキルを放とうとしてやめた。

スキルの発動箇所から鳥が離れたのだ。

回避能力高いな。

まるでフィトリアみたいだ。

さすがスピードタイプ。

「フィーロちゃん!」

そんな鳥の前に、メルティちゃんが躍り出た。

「危ないから下がっていろ！」

「嫌よ！ 私はファイロちゃんの友達なのよ！ こんなファイロちゃんを見捨てるなんてできないわ！」

「……なんだろう？」

感動的なシーンの筈なのに、ギャグ漫画時空のせいで小芝居にしか見えない。

不思議だ。

「メル……ちゃん？」

「そうよ！ ファイロちゃん！ ナオフミはそんな状態のファイロちゃんとの関係なんて望んでいないの。だから……あんな奴の力に操られないで！ 元に戻って！」

「ぐ……う……」

「おや？」

鳥の様子が。

「言葉責めが効いてるな」

「その言い方やめてください」

「おっと。」

ミラにツッコまれてしまった。

「さ、ファイロちゃん。元に……戻って」

「……………」

鳥がおとなしくなって頭を下げた。

説得完了か？

と思っただけど、思い出したわ。

この後の流れ。

「——ファイロ、メルちゃんも食べたい」

「え……………あ、ちよつと!？」

「今だ! シールドブリズン!」

「な、何を言っているの!?! ナオフミ……………ちよ!?!」

メルティちゃんと服の下に翼を伸ばそうとした鳥を、鬼畜な尚文くんがメルティちゃんごとスキルの檻に閉じ込めた。

ひっでえや。

「ふええ……………王女様があああ!」

「メルティは尊い犠牲になってもらった。大丈夫だ。きつと」

「尚文くんの鬼畜!」

「……………否定はしない」

悪意感知が尚文くんの罪悪感を受信した。

マジで悪いとは思ってるっぼいな。

そして、待つ事数分。

ようやくスキルの檻が消えた。

果たしてそこには——恍惚とした表情の鳥と、服が脱ぎ散らかされて半裸のメルティちゃんがあった。

食われたな。

性的な意味で。

「メルティ様！」

「メルティ……その……本当にすまなかつた。後で必ずこの埋め合わせはする……その……悪かつた……」

優しくされて、メルティちゃんはキレた。

犯人である尚文くんに向かってキャンキャン吠えてる。

関わらないようにしよう。

心配を消して空気に徹するのだ。

そして、一通りの話し合いが終わった後、鬼畜尚文くんが鳥にある命令を下した。

「あのねー！ 槍の人聞いてー！」

「ハーい！ なんですかファイーロタン！」

元康くんが、戦いながらも嬉しそうな顔で鳥の声に答えた。
凄いい嬉しそうだ。

「えつとね。フィーロはプラトニックな人が好きなの。世界が真の平和になるまで、そういうのは考えないようにしてるのー。」

他にもね、なんだつけ？ えつとね、誠実でね、皆に優しくてね、ズルをしなくてね、賭け事はちゃんと釣り合った条件でしてね。

後ね、表面だけじゃなくてちゃんと守ってー」

鳥がつらつらと尚文くんに命令された台詞を吐く。

不満爆発だな尚文くん。

そんなに元康くんが嫌いか。

「あー！ 最後にね、人の話はちゃんと聞いてー、特にごしゅじんさまの命令は絶対に聞いてね。後ね、世界が平和になるまでフィーロに付きまとわないで！」

「そ、ソウナのですか!?! フィーロタンン！」

あー……。

その理論でいくと、俺の計画が成就した場合、元康くんは向こう数十年は恋愛ができないな。

世界を救う代わりに滅茶苦茶にする予定だから、真の平和なんてしばらくは訪れない

だろう。

……うん。

ごめんね元康くん。

「だから……あつ、そうそう、その槍を別のにしないとー、嫌いになっちゃう！ 特にその槍にしたらダメー」

「そ、ソナナ！ わかりました！ ワタクシ、元康！ この槍には絶対に変えません！」
そうして、あつさり、実にあつさりと元康くんはカーズリーズの槍を引つ込め、取り巻きの三羽はブースト効果が切れると同時に、糸が切れた人形のように倒れた。

これにて一件落着だな。

無理矢理取拾つけた感がパない。

「お義父さん。これから私、元康は真に世界を平和にする為、そしてフイー口たんの心を射止める愛の狩人となって貢献する事を誓います！」

こうして、この世に愛の狩人という名の変態が生まれたのだった。

原作知識の通りに、元康くんは壊れたまま完全に固定されてしまった。

哀れと言う事なかれ。

俺だつて似たようなもんだ。

それはそれとして。

「やっと終わったかあ……」

「終わったか、じゃないぞ。完全にフェードアウトしやがって」

「逆に聞くけど、あんな状況でどうしろと？ トチ狂った奴ばつかだったじゃん。あんなカオスな空間に飛び込むような勇気はないって」

「……ふん」

尚文くんは不機嫌そうにしながらも、俺の言い分にも一理あると思ったのか、特に追及してこなかった。

そりゃね。

俺はただの客人だし、尚文くんから見れば、おもしろ半分について来ただけの人だ。

責められる筋合いはないぞ！

「はあ……帰るか」

最後に疲れたようにそう言って、尚文くんは転送スキルを発動させた。

こうして、今回の冒険は終わったのだった。

56話

翌日。

元康くんが大量のフィロリアルと共に尚文くんの村に住み着いた。

それを尚文くんが知った時に、尚文くんがフィロリアル軍団にもみくちゃにされるといふ、ちよつとした騒動が起こって、現在、尚文くんはお疲れモードだ。

「お疲れ、尚文くん」

「何がお疲れだ……遠巻きにして見捨てやがって」

「アハハ、ごめんごめん」

でも、君だつて結構な薄情者だし、おあいこだと思ふんだ。

「さて、昨日は酷い目に合つたけど、おもしろいものも見れたし。小旅行はもう十分かな。」

「てことで、突然だけど、俺達はそろそろおいとまさせてもらうよ」

「……お前らはいつも唐突に消えるな」

「まあね。俺達も暇じゃないって事さ」

「そうか」

相変わらず素っ気ない態度だこと。

もうちよつと寂しがったりできないのかね？

「あ、そういえばさ。盾の勇者様は靈亀を討伐した訳だけど、次の鳳凰との戦いには参加するのかい？」

「……それを聞いてどうするつもりだ？」

「いや、もし参加するんなら、近いうちにまた会う事になりそうだからさ。ウチの国にも連合軍の誘いが来ててね。俺もそのメンバーとして派遣される予定だから」

これは本当の事。

アックスフォードは、靈亀の時に自国の防衛に徹して連合軍の誘いを断ったという負い目があり、更にガーディアンⅡ斧の勇者疑惑もあるもんだから、

それを払拭する為に、今回の申し出は断り切れなかつたって王様が申し訳なさそうに言つてた。

でも、俺としては、鳳凰はクローンを造る為に一度倒す予定だったし、サンプル回収にちようどいいぜ！ 渡りに船だ！ ってな具合で、勇者の身分を隠して鳳凰討伐に参加する事になった。

つまり、尚文くん達が原作通り鳳凰戦に出てくるなら、共同戦線って事になる。

それを聞いても違和感はない筈だ。

「……お前は貴族じゃなかったのか？」

「まあ、似たようなもんだけど、貴族がお国の兵隊さんやってたらおかしいかい？」

「いや……おかしくはない。ウチの村にも似たような奴がいる」

それってもしかして、鍊くんをボコボコにした女騎士さんかね？

原作知識通りなら、あの人は先代領主の娘さんだったっけ。

「で、どうよ？ 共同戦線張るなら、勇者様の口から確認をとっておきたいんだけど」

「……そうだな」

そこで尚文くんは一度言葉を切った。

なんだ？

尚文くんから、どこに向かっているのかよくわからない悪意が出てるんだけど。

そして、尚文くんは言った。

「――俺は鳳凰戦に参加する。逃げも隠れもしない。お前の国の勇者にそう伝えておけ」

……ホワイ？

何の話……って、ああ、あれだ。

ガーディアンⅡ斧の勇者説だ。

という事は、尚文くんはその説を信じてるって事か？

というか、俺がアックスフォードの人間だどこでバレた？

……いや、そういえば、最初に会った時にアックスフォードの通貨を渡してたっけ。

両替する時にでも気づいたか。

幸い、ガーディアンの正体が俺だつて事まではバレてないっほいけど……より一層の注意が必要だな。

とりあえず、それっぽい話で煙に巻くか。

「尚文くん……その話、ウチの国の人達の前ではしない方がいいぞ」

「……一応、理由を聞いておく」

「ウチの国は狂信者の巣窟だ。俺みたいな節度のある一部例外以外の前で、そんなあからさまにウチの神様である勇者様を疑うような発言したら……共同戦線どころじゃなくなるかもしれない。最悪、リンチだ」

「そうか。覚えておく」

絶対に覚えとけよ！

じゃないと、気づいたらソラちゃんあたりが尚文くんを暗殺してそうで怖い。

さすがに四聖の勇者を失うのは、俺としても困る。

「じゃあ、そういう事で。また会おうぜー」

「ああ」

「それじゃ、去らばだ！」

そうして、俺達は小旅行を切り上げ、アックスフォードへと戻った。次に会う時は一応味方なんだから、その時までには仲良くしようぜ。

その方が、お互いの為だ。

そんな事を考えながら、馬車に揺られる。

勇者つて事隠してるんだから、転送スキルを使う訳にはいかないからなー。面倒だけど、目立たない所までは移動しないと。

今回の一件で馬車にはトラウマが出来ちゃったけど、仕方がない。

この村から馬車以外で出ていくのは不自然だ。

……ん？

あれ？

なんか、忘れてるような。

「あ!?! イグニエのお土産!」

俺達は急いで尚文くんの村まで引き返した。

そして、予定通りお金を払って盾の勇者様の料理を注文した。

別れの挨拶が台無しになったけど、尚文くんは呆れながらもお弁当を作ってくれた。感謝しておこう。

こうして今度こそ旅行は終わり、俺は再び、戦いに向けた準備へと戻った。さて、また頑張りますか。

57話

「お疲れ様です、シルベスターさん」

「コホツ……ええ、ご無沙汰しております、ユウ殿」

尚文くんの村への小旅行から帰ってきた俺は、今、アックスフォードとフォーブレイの国境の街に来ていた。

ここには四霊の一角「麒麟」が封印されている。

そして、それをどうにか有効活用する為に、シルベスターさん率いる魔術師団が派遣されているのだ。

ついでに、その護衛として、

「ご健勝のようで何よりであります！ 勇しや……」

「外でその呼び方は禁止ね」

「ハッ!? そうでありました！ 了解でありますユウ殿！」

「よろしい」

口を滑らしそうになったソラちゃんを嗜める。

それをジューピターさんが苦笑しながら見守っていた。

この二人がいる事からもわかる通り、魔術師団の護衛には飛竜兵団が付いている。名目上は。

いや、護衛っていうのも間違っていないんだけど、もう一つ重要な仕事を振ってるんだ。そして、もう一人。

俺の知ってる奴がこの街には派遣されている。

「おーい、イグニー。調子はどうだー?」

「ん? おお! やつと帰って来たか、ご主人! こっちは順調だぜ! で? 土産はどこだ?」

「ほれ、お土産。あと、お疲れさん」

「おう!」

イグニは、俺が取り出した、尚文くんに作ってもらったお弁当を一心不乱に食べ始めた。

手掴みという、品なんてあったもんじやない野生むき出しの食べ方だったけど、文句は言うまい。

重要な仕事を果たしてくれてるんだから、そんな細かい事でグチグチ言ったりはしないよ。

「で、実際、進捗状況はどんな感じですか?」

「コホツ……順調、としか言えません。イグニ殿の結界と、我らの封印魔法。どちらも正常に機能しています。」

コホツ……効果の程は実際に封印が解ける段にならねばわかりませんが、イグニ殿の予測では、数ヶ月の間は問題なく抑えられるとの事です」

「なるほど。ご苦労様です」

「コホツ……仕事ですので、労いは不要です」

仕事熱心な事です。

さて、この台詞からもわかる通り、俺は麒麟を封印するつもりでいる。

イグニの竜帝の知識に加え、アックスフォード魔術師団が技術の粋を集めて封印を施せば、四霊の封印ですら、ある程度は押し止める事ができるのだ。

なんでこんな事をするのかと言うと、ぶつちやけ、麒麟は倒すメリットが薄いからだ。

四霊はエネルギーを溜めれば溜める程、つまり殺せば殺す程、次の四霊復活までの時間が伸びる。

四霊は、前の四霊が張った結果が突破されそうになった時点で、つまり次の四霊が必要になった時に封印が解ける仕掛けになってるんだから、まあ、当たり前だ。

で、多分だけど、霊亀と違って、鳳凰はまともに仕事を全うできないと思う。

何せ、靈亀の時と違って、多くの国々や尚文くん達が準備万端の態勢で挑むんだ。しかも、サンプルを集めるって目的の為に、俺まで結構ガチで殺しに行く。

さすがに、それをはね除けるだけの力を、鳳凰は持っていない。持っていたら、俺がこんなに苦労する必要はない。

要するに、鳳凰が迅速に討伐されれば、すぐにでも麒麟の封印が解けてしまう。

別にそれでもいいっちゃいいんだけど、麒麟を倒しても、その次の四霊は応竜だ。最強の四霊だけど、同時に俺が制御権を握っている四霊でもある。

イグニの竜帝の欠片の中に眠ってるんだから、その気になればいつでも封印を解ける。

ここで問題です。

俺は何故、わざわざ鳳凰を倒そうとしてるのでしょうか？

答えは、鳳凰を倒さないと麒麟の封印が解けないからです。

そうじゃなければ、靈亀の時みたいに、サンプルを取るだけ取って、あとは自由に暴れさせるさ。

靈亀の時は、対抗戦力である尚文くん達が弱っちゃったから、もしかしたらこのままいけっかなー、という淡い期待を抱いて暴れさせたけど、今回はそうもいかないだろうし。

そして、鳳凰だけで役目を果たせないのなら、躊躇なく倒して、クローンとして造り直し、もっと有効に使った方が良い。

実は、四霊は同時に復活させる事にこそ真の意味があるのだ。

四霊は同時に複数体が蘇ると、相互にリンクして、馬鹿みたいに強くなる。

しかも、全ての四霊を同時に倒さないと、残ってる奴が倒された奴にエネルギーを送って復活させてしまうという、相手からすればふざけんと言いたくなるような不死身っぷりまで身に付ける。

そうなれば、ほぼほぼこっちの勝ちだ。

超強化された四霊を同時に倒すなんて真似は、不可能とまでは言わないけど、滅茶苦茶困難。

そこにガーディアンおれによる妨害が入れば、もうどうしようもなからう。

それが俺にとっての最大の勝ち筋な訳ですよ。

で、話を戻して麒麟を封印する理由だけど、

さつきも言った通り、麒麟を倒すメリットが薄いから。

鳳凰は倒さないと麒麟が復活しない。

でも、麒麟は倒さなくても応竜は復活させられる。

なら、わざわざ倒す必要もない。

一時的に封印して、こつちにとって都合の良いタイミングで解放するだけでも十分な効果がある。

一応、麒麟もクローンにしちやえば、完全にこつちの制御下におけるっていうメリツトもあるけど、

それでやる事といえば、アックスフォードに被害を及ぼさないように他に進路を誘導する事くらい。

それくらい的事、目の前に餌をぶら下げれば、普通にできる。

四霊は結界生成のエネルギーを溜める為に生物を殺しまくる都合上、生物の多くは方向に引き寄せられる習性がある。

それを利用し、飛竜兵団が生き餌となつて、麒麟をフォーブレイ方面へと誘導するのだ。

あ。

ちなみに、俺がやってる計画について、王様が信用できると判断した極少数の人には伝えてあるのよ。

ここにいるシルベスターさんとソラちゃん、ジュピターさんは計画を知っている側の人間だ。

だからこそ、指示をちゃんと聞いてくれる。

あとはアームストロング大佐とか、一部の文官の人とかが事情を知ってる。

世界救済に向けた、そして、世界救済後のアックスフォードの身の振り方について議論してたよ。

結論として、俺の世界救済計画は順調に進んでるし、事後の心配もあんまりない。

あとは、俺の知識にない、情報網にも引つ掛からないようなイレギュラーにさえ気を付ければいい。

残ってる問題といえ、迷いの砂漠にある危険物と、最終決戦の時に尚文くん達が予想以上に善戦してしまう事くらいだろう。

前者は時間をかけた搦め手で攻略を進めてるし、後者は対抗策として奥の手を用意してある。

万事抜かりはない。

これでダメなら、もうどうしようもない。

人事は尽くした。

あとは、俺自身の手で天命を引き寄せるのみだ。

頑張ろうじゃないか。

頑張つてやろうじゃないか。

目指せ、ハッピーエンドだ。

そんな感じで麒麟の街の視察を終え、迷いの砂漠にも顔を出したり、奥の手の調整をしたり、二代目霊亀のバージョンアップを繰り返したり。

そうしているうちに、あつという間に時間は過ぎた。

気がつけば、鳳凰復活までのタイムリミットはすぐそこにまで迫っていた。

俺は、ミラやアームストロング大佐率いる騎士団の一部と共に、アックスフォードを出立した。

これが今回の鳳凰討伐メンバー。

目的地は当然、鳳凰の封印された国だ。

——そうして、次の戦いが始まる。

第五章 鳳凰討伐編

58話

今回のメンバーは、俺とミラに加えて、アームストロング大佐、そして大佐が率いる騎士団が20人。

計23人である。

鳳凰なんて化け物退治に行くにはえらく少数だけど、それも仕方ないのだ。アックスフオードには麒麟がいる。

それに向けて戦力を温存しないといけないし、更に言えば、アックスフオードから鳳凰が封印された国までは地味に遠い。

大軍を派遣しても移動に困るだけって事で、少数精鋭を派遣する流れになった。

……というのが表向きの理由。

本当は、下手に弱い人達連れてきて、鳳凰に殺られるのを避けたかっただけっすよ。俺は優しいから、味方サイドの被害はできるだけ少なくしたいのだ。

最初期の計画では、四霊が復活する度に、妨害戦力を俺とアックスフオードの戦力で潰していくっていう、使い捨て上等でブラック企業も真っ青な仕事させようとしてたけ

ど、今ではそのつもりもないし。

新・七つの大罪の斧というチートのおかげで、その必要はなくなった。

戦力は四霊クローンと、無限ポップする超改良型バイオプラント軍団で十分だから、アックスフォードの兵士達を捨て駒にする作戦は破棄しました。

アックスフォードにはお世話になったし、その報酬として、できる限り無傷の状態で大虐殺を乗りきってほしい。

まあ、あくまでも、できる限りね。

で、そんな事情もあるので、今回派遣されるメンバーは、鳳凰と戦ってもまず死なないだろうっていう精鋭揃いな訳ですよ。

俺は言うまでもなく、ミラやアームストロング大佐もLv限界突破、資質向上、龍脈操作による経験値促進によって、アホみたいに強くなってる。

具体的に言うと、ミラがLv500。アームストロング大佐がLv480。資質向上でステータスを上げる代わりに、ある程度Lvを下げてこれだけ？

むしろ、鳳凰よりこっちの方が化け物だろ。

他の二十人の騎士さん達も、国と俺の信頼を得て、全員がLv限界を突破している。

平均Lv400ってところかな。

インフレが激しい。

正直、この中の一人だけでもタクトを殺せると思う。

ミラとアームストロング大佐に至っては、一人でタクト一味を壊滅させられると思う。

インフレが激しい。

それと、この人達は国と俺の信用を得ているので、俺の正体が斧の勇者だという事も知ってる。

詳細こそ教えてないものの、俺の計画の事まである程度は知っているので、この人達の前なら、サンプルの回収の為に武器に素材を入れても問題ないのだ。

全員、斧教の熱心な狂信者なので、裏切る可能性も低いしね。

それに、仮に裏切られたところで、どうとでもなる。

「見えてきましたね」

そんな事をつらつらと考えながら馬車に揺られてるうちに、鳳凰の国が見えてきた。

結構な数の兵士達が揃っているのが見える。

近隣諸国からかき集めた連合軍だろう。

多いなー。

この人達、皆、鳳凰に殺されてくれないかなー。

まあ、なににせよ、到着だ。

「じゃあ、俺は知り合いに挨拶してきますね。アームストロングさん達は先に首脳陣の所に行つててください」

「ガツハツハツハ！ 了解だ！ 腕が鳴るぜ！」

アームストロング大佐は、その名の通りストロングなアームを振り回しながら去つて行つた。

あの人、無双しそうな予感がヒシヒシとする。

あんまり目立たれても困るんだけどなあ。

まあ、いいや。

俺は予定通り、尚文くんにも挨拶してこよう。

ミラを護衛に、連合軍でこつた返す街の中を抜けて、尚文くん達が居そうな場所へと向かう。

今向かつてるのは、対鳳凰戦を想定した訓練が行われてるっていう場所だ。

うん。

いかにも、勇者が陣頭指揮とつてそう。

ちなみに、この国には俺の斧と同じ七星武器の一つである小手があるんだけど、ウチ

のメンバーは見向きもしなかった。

どうも、アックスフオードの兵士達は、神として崇める斧の勇者と同格である七星勇者の座には興味がないみたいなんだよねー。

もしかしたら、神と並び立つなど畏れ多い！ 的な思考をしてるのかもしれない。そんな訳で、脇目も振らずに訓練場へと向かう。

しかし、その場所に辿り着いた時、アカンもんを見つけてしまった。

「……マジかー」

「どうかなさいましたか？」

「いや、まあ、ちよつとね」

ミラに空返事をしながら、俺の視線は訓練場にいる一人の少女に釘付けになった。背中に天使みたいな翼の生えた、外見年齢12歳くらいの少女。

決して性的な目で見てる訳じゃない。

俺はロリコンじゃないし、そもそもアレに恋愛感情なんて抱ける訳がない。

なにせ、この前、殺し合いをした相手なんだから。

そこには、霊亀の時に、俺と直角の戦いを繰り広げた巨大怪鳥、人間形態のフィトリアがいた。

うわあ……。

マジカー……。

尚文くん、マジでカー……。

アレって、どう考えてもガーディアン対策だよね？

化け物倒す為に、化け物と手を組みおった。

今回は共闘って事にしといて、本当に良かったわあ。

しっかし、あんな過剰戦力があるんじや、原作の流れが大きく変わりそうだな。

原作知識によると、この鳳凰戦において、につきあんちきしようであるタクトの横槍が入り、アトラちゃんをはじめとする大量の人員が死亡。

それを皮切りにして尚文くん達とタクトが対立する事になるんだけど……フィトリアという鉄壁のガードウーマンをタクトごときが突破できるビジョンが浮かばねー。

まあ、それでも別に構わないんだけど。

計画は既に、最終段階一歩手前まで来てる。

事ここに至れば、もう原作知識などいらぬ！

どうせ、あと数週間もしないうちに最終決戦を仕掛ける予定なんだ。

今さら俺の知らない未来に行つたところで、正直、知つたこっちゃない。

唯一の懸念は、尚文くんがタクトを殺してくれないかもしれない事だけど、それくらいならどうともなる。

最終決戦のゴタゴタに紛れて殺してもいいし、最悪取り逃がしても問題はない。

あの程度の小物に何ができるとも思えないし。

世界が救済された後にでも、有り余る時間でゆっくりと追い詰めて殺せばいいんだから。

そんな小物の事は頭の隅に追いやつとと。

当初の予定通り、尚文くんに挨拶しておこう。

なんか、今は鳥に乗って訓練中みたいだから、それが終わったタイミングで行くか。

もうちよつとで終わりそうだし。

ていうか、派手な訓練だな。

遂に勢揃いした四聖勇者のスキルが飛び交い、その仲間達も良い動きしてる。

魔法も威力が高くて、たまに集団で唱える夢の合体魔法である、合唱魔法や儀式魔法まで放たれてる。

これだけの戦力が鳳凰にぶつけられるのかー。

鳳凰の強さを霊亀の二、三倍くらいと想定しても、普通に勝てそうやね。

フィトリアまでいるし、マジで鳳凰討伐が作業と化すかもしれんなー。

そんな感想を抱きながら、俺は訓練を見学した。

ある意味、これも敵情視察だわな。

59話

「やつほー。来たよ、尚文くん」

「……ああ、予定通りか」

ありや？

尚文くんから微量の悪意を感じるぞ？

これは警戒心だ。

もしかして、あんまり歓迎されてない？

いや、そりやそうか。

アックスフォードはガーディアンに加担してる疑いがある。

首脳陣的には、アックスフォードの兵士達をガーディアンへの盾として使って、「味方を巻き込んで信用を失いたくなければ、おとなしくしてろ！」と暗に言ってる訳なんだけど、

尚文くんみたいな現場の人達からすれば、獅子心中の虫を飼うような気分だろうよ。

そりや、警戒の一つもするか。

まあ、いいや。

今回はおとなしくしてゐるつもりだから実害もないし。

それより、この場にいるもう一人の知り合いにも挨拶しておこうか。

「君とは本当に久しぶりだね、ラフタリアちゃん」

「はい！ お久しぶりです！ ユウさん、ミラさん！」

うーん。

こつちは、疑り深い尚文くと違って、ほとんど悪意がないね。

この子は多分、俺達の事を恩人として認識してゐるんだろうな！。

信じる者は救われる。

尚文くんも見習うと良いよ。

まあ、ラフタリアちゃんとは霊亀の時に思いっきり口喧嘩した上に、ぶっ飛ばし

ちやっただけだな！

でも、知ってるかい？

バレなければ犯罪じゃないんだよ。

「で、お前ら二人だけか？」

「いやいや、まさか。俺達は別行動で君達に会いに来ただけだよ。本隊は首脳陣の所に

挨拶に行つてる」

「そうか。まあ、来たからには役に立て」

「はーい」

「ナオフミ様！ その言い方は……」

ラフタリアちゃんがグチグチと小言を言い始めた。

そんなこんなで旧交を温めつつ、尚文くんから鳳凰の情報や、想定してる作戦なんかを教えてもらった。

壁画とかに残された文献によると、鳳凰は二体一对の巨大な鳥で、二体を同時に撃破しないと、残った方が強力な自爆攻撃をした後に再生する可能性が高い事。

二体の鳳凰は、片方が低高度で接近戦、もう片方が高高度で遠距離攻撃をしてくるといふ事。

それに対処する為の訓練のやり方。

そんな感じの話聞いた。

大体、俺の持つてる情報と同じかな。

四霊に関してはさんざん調べ尽くしたから、このタイミングで俺の知らない新事実が出てこれると非常に困るところだった。

いやー、よかったよかった。

で、肝心の訓練に関しては、他の皆さんが休憩を終えた後、合流したアームストロング大佐達と一緒にやった。

当然ながら、俺は尚文くん達の所ではなく、アームストロング大佐達と一緒に戦う事になる。

慣れない奴を連携に交ぜるよりも、慣れてる奴どうして組ませた方が良いというのが表向きの理由。

俺の目的は鳳凰の素材回収なんだから、尚文くん達に隠れてこつそりと拝借したいというのが本当の理由だ。

ちなみに、過剰戦力にしか見えないフィトリアは遊撃……というより、ガーディアンが現れた時の為に、鳳凰との戦いには参加させずに温存するらしいよ。

鳳凰との戦いに横槍入れるような奴が現れたら迎撃、あるいは時間稼ぎ。

ガーディアンはフィトリアを倒した実績があるので、油断せずに、確実な手段で相手するとの事。

終わつたなタクト。

ざまあ。

まあ、あんなのでも神の尖兵。

謎のチート能力で超強化されてる可能性もなくはないから、警戒はするけどさ。ぶつちやけ、可能性としては低いと思うけどねー。

今は不完全とはいえ霊亀の張つた結界が作用してるから、黒幕の神がタクトに力を与

えようとしても、外界からの干渉は弾かれるだけなのよね。

そもそも、神に与えられるチート能力っていつでも、何でもありって訳じゃない。

ちやんと、限界も制限も存在する。

せいぜい、普通の人が限界まで鍛えたくらいのを生まれつき持つてて、更に伝説の武器を無理矢理奪って使役するって力がオプシオンとして付いてくるくらいだ。

神が直接この世界に乗り込んできて色々と弄るんだったら話は別だけど、外から尖兵として送り込む奴に持たせられる力としては、それが限界。

神が直接乗り込むには、波の終わりまで待つて、世界を完全に融合させないといけな
いから、その心配は今のところない。

この先、世界の融合がより進んだら、神もより干渉してこれるようになってちやうけど、
その前に終わらせる予定だから、やっぱり問題ない。

そして、もはや尖兵ごときの力じゃ、俺の敵ではないのだよ！

たとえ、タクトが前に会った時の十倍強くなつたとしても、余裕で勝てる自信があ
る。

伝説の武器を奪う力も、対策ができてればどうという事はない。

正直、今の俺とタクトの間には、ライオンとネズミくらいの力の差がある。

窮鼠が猫を噛まないように注意してれば、まず負けようがない。

むしろ、怖いのは尚文くん達、俺と同じ勇者の方だ。

俺は原作知識というチートを土台にして、カースシリーズという裏技を全開で使う事によつて、ここまで強くなつた訳だけど。

尚文くん達の武器にだって、俺の強さの源である斧と同等以上のポテンシャルがある。

むしろ、武器の格で言えば、七星の俺より、四聖の尚文くん達の方が上だ。

俺と同じ手段を使えば、彼らは確実に俺よりも強くなる。

まあ、俺の取つた手段は人間として越えちゃいけないラインを軽く越えてたりするから、尚文くん達の人間性を考えるに、全く同じ手段を使われる事は、おそらくない。

でも、強さの種類は多種多様。

ポテンシャルが上である以上、違う方法で俺を超える可能性は十分にある。

そんなのと敵対しなきゃならないんだから、気を引き締めないとな。

まったく。

同じ勇者で、波に挑み、世界を救うという目的も同じなのに、選ぶ手段一つで完全に敵対しなきゃならないんだから、ままならないよなあ。

何？ 説得？

できなくはないかもしれないけど、こうして鳳凰に挑もうとしてんだから、まず無理

でしよ。

俺が知ってる波の脅威を一から十まで説明すれば何とか……なるのかなあ？

ならないような気がする。

尚文くんは、なんだかんだで優しすぎるから、大虐殺に賛同するとは思えないんだよ。

それに、説得が失敗した時のデメリットが大きすぎるし。

説得する為にノコノコと出ていって、話し合うつもりが袋叩きにされましたじゃ、笑
い話にもならない。

説得は、するにしても、もう取り返しがつかないってくらいに計画を進めてからだな。
そこままでいけば、まあ、少しは聞く耳持つてくれるかもしれない。

その為にも、まずは鳳凰だ。

よっしゃ！ 気張っていこー！

そうして気合いを入れていくうちに、元々僅かしか残っていなかった鳳凰復活までの
時間は瞬く間に過ぎていった。

視界に表示されている「8」という数字の書かれた青い砂時計のカウントダウンが、ど
んどん進んでいく。

それに比例するかのように、連合軍の準備も整っていった。

準備は万端。

俺にとつても、尚文くん達にとつても。

——そして、鳳凰復活の日がやって来た。

60話

00:12

鳳凰復活まで、残り十二分。

連合軍は、復活した鳳凰が現れると予想される地点に集結していた。

「久しぶりの決戦だ。できる限りの事はしてきた。皆、被害のないよう、生き残る為に戦うんだぞ！」

『おお！』

盾の勇者である尚文くんが先頭に立って宣言し、それに連合軍は一丸となって答えた。

俺も拳を空に突き上げながら声を上げて同調しておいた。

もちろん、内心では一人でも多く死んでくれないかなあ、と思ってる。

00:01

そんな事を思いつつも戦意を高めているうちに、時間はあつという間に過ぎる。

「アル・リベレイション・オーラー！」

尚文くんができる限り広範囲に、勇者にしか使えない最上位支援魔法をかける。

ちやつかり、俺もその恩恵にあずかった。

おお……！

中々に素晴らしい力を感じるではないか！

効果としては、俺がフイトリア戦の時に使ったやつよりちよい上つてところかな。

そんなもんが連合軍全て……とは言わないけど、相当な人数にかけられている。

お手軽超人軍団の出来上がりやね。

なんにせよ、これで準備は完了だ。

そして――

00:00

バキン！

――開戦だ。

霊亀の時と同じ、ガラスを割るような音が俺の耳に響く。

同時に、連合軍が見詰める山の中腹から巨大な火柱が上がり、そこから巨大な二羽の鳥が現れる。

鳳凰の姿は……孔雀もどきっていうのが一番かな？

孔雀っぽい体に鱗を纏い、魚みたいな尻尾を持ち、五色くらいのカラフルな色合いをしている。

そして、二羽の色合いは全くの逆だ。

カツコいいっちゃカツコいいけど……そこはかたなく漂う、コレジャナイ感。

「キュイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！」

そんな馬鹿な事考えてる間に、鳳凰は甲高い鳴き声を上げながら、こつちに向かつてきた。

完全に、俺達を獲物と見なしていらつしやる。

四霊に喧嘩を売る相手を選ぶくらいの知能があれば楽なのに。

クローンには必ず搭載しておこう。

「お前らー！ 間違ってもトドメを刺すタイミングを誤るんじゃないぞ！」

そんな尚文くんの指示が聞こえた。

お任せあれ、つてね。

今回は指示通りに動かしてもらおうよ。

「キュイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！」

鳳凰は事前情報の通り、片方が低高度、もう片方が高高度に別れて攻撃してくる。

まず狙うのは低高度の方だな。

そっちの方が、素材を剥ぎ取りやすい。

「じゃあ、行きますか」

「かしこまりました」

「了解だ！ 暴れてやるぞお前ら！」

『ハッ！』

騎士団の皆さんとミラを引き連れ、俺は低高度の鳳凰に突撃をかました。

低高度の鳳凰は、巨体を活かした肉弾戦をやってるから、狙いやすくて良いや。

「ドライブア・アクアブラスト！」

まずは、ミラの水魔法が鳳凰の顔面に直撃し、怯ませる。

「ドライブア・ウインドソード！」

「ドライブア・アイスエッジ！」

「ドライブア・ストーンブラスト！」

更に、騎士団の皆さんによる魔法の追撃。

そう。この人達、魔術師団程じゃないけど、普通に魔法が使えるのだ。

そうして出来た隙を、残りの俺達が狙う。

「そらー！」

俺の一撃が鳳凰の脚に傷を付ける。

身バレを防ぐ為にスキルは使わないけど、それでも結構な力を籠めた通常攻撃。

伝説の斧は、鳳凰の脚を半分くらい抉った。

「オラアアア！ バスタードオオオオオ！」

そこにアームストロング大佐の追撃。

大佐の持つ業物の斧が、鳳凰の脚に命中し、その箇所を更に削り取る。

そう、この人も俺と同じで、斧を武器にしているのだ。

そして、斧は言わずと知れた重量武器。

それをアームがストロングな大佐が渾身の力を籠めて振るえば、とんでもない破壊力になる。

しかもしかも、アームストロング大佐は、そこに魔法剣ならぬ魔法斧みたいな感じで、魔法の力までも攻撃力に加えているのだ。

この人が魔法を使えると知った時には驚いた。

ただの脳筋じゃなかったんだ、って。

『ハアアアア！』

そして、残りの騎士団の皆さんが、見事な連携プレーで、辛うじて繋がっている鳳凰の脚へと流れるような連続攻撃を放った。

剣を持つ人が斬り、槍を持つ人が貫き、大剣を持つ人が断ち切った。

鳳凰の脚が切断され、地面に落ちる。

「キュイイイイイイイイイイイイイイイイ！」

しかし、鳳凰は損傷箇所を炎を纏い、まるで不死鳥のごとく瞬く間に修復してしまっ
た。

やるなー。

でも、脚一本切り落とされて怒ったのか、鳳凰が大きな瞳で俺達を睨み付ける。

「今だ！ 重力剣！」

「八極陣天命剣二式！」

「タイガーブレイク！」

「いきますー！」

その時、俺達と同じく低高度の鳳凰と戦っていた鍊くん達が、注意の逸れた鳳凰に必
殺技を叩き込んだ。

それを守るように、高高度の鳳凰が羽ばたき、羽と一緒に火の雨を降らしてくる。

皆の視線は上に釘付けだ。

お、チャンス到来。

「流星盾！」

尚文くんが、お馴染み流星シリーズの一つである、バリアーみたいなスキルで火の雨
を防いでる。

その隙に、俺は切り落とした鳳凰の脚を回収。

よし、誰にもバレてないな。

鳳凰の巨体と火の雨を、上手く目眩ましに使えませ。

さて、次は首でも落としたいところだけど、それやったらさすがに死にそうだな。

そしたら自爆再生コース一直線だ。

俺は別にそれでもいいけど、それやったら、尚文くん達に殺されそう。

やめとこう。

お？

鳳凰の羽が落ちた場所から、鳳凰の使い魔が出現してるぞ。

ちようどいいや。

あっちを重点的に回収しておこう。

使い魔にだってエネルギーの回収機能はあるんだから、サンプルとしては申し分な

い。

ていうか、ぶっちゃけ、サンプル回収はさっきの脚だけでも十分なんだよなー。

クローン作成の為のサンプルは多いに越した事はないけど、少なくともできなくはない。

い。

ちよつと、時間と手間と素材とエネルギーが必要だけど、僅かな断片からでもクロー

ンは造れるんだ。

だから、この先の戦いはおまけみたいなもん。

サンプルを回収しつつ、疑われない程度に働いておけばいい。

あとは、イレギュラーへの警戒だな。

油断せずにいこう。

そう、俺は油断なんてしていなかった。

それに準備は万端。

態勢も整っていた。

負ける要素は少なかった。

だから、この先の出来事は仕方のない事だったんだと思う。

——ただ、敵の力が俺の予想を超えていた。

本当に、ただそれだけの話だ。

61話

鳳凰との戦いが始まってから数十分。

二羽の鳳凰は、勇者をはじめとした連合軍の攻撃を食らい続け、ずいぶんと弱ってきた。

そろそろ倒せそうだ。

「よし！ このまま畳み掛けるぞ！」

尚文くんが号令を発し、連合軍が動く。

十分サンプルは集まったので、俺も使い魔狩りを中断して攻撃に移る。

狙いは低高度の鳳凰。

高高度の方が弱ってるので、こつちを攻撃してダメージを調整するつもりなんですよ。

このままいけば、特に問題なく勝てそう。

というところで、遂にフィトリアが動いた。

遥か後方から、高高度の鳳凰目掛けて飛んできた見覚えのある閃光。

忘れる筈もない。

俺の半身に消えない傷を刻んだ攻撃。

それを、フィトリアは強力な魔法で弾き飛ばした。

やっぱりこうなったか。

これでタクトの企みも失敗かね。

実に使えない奴だ。

ここで鳳凰を自爆させて大量の被害者を出せば、少しは俺の心証も良く……良く……ならないな。

どのみち、死刑確定だったわ。

そんな感じで、俺が脳内でタクトを罵倒していた時、——その現象は起こった。

「い、これは……!?!」

どこからか送られてきた、大地を流れる龍脈のエネルギーが、タクトがいると思われる場所へと集束していく。

エネルギーが流れてきた方角……これ、まさか、迷いの砂漠から!?

嘘だろ!?

アレはこんな事までできるのか!?

マズイ。

具体的にどうなるのかはわからないけど、何かマズイ事が起こるのは確定だ。

見れば、尚文くんの村で見かけたドラゴンが、尚文くんに警告を発してる。

——そして、不吉な予感が現実のものとなった。

タクトがいると思われる場所。

そこから、さつきとは比べ物にならない出力の閃光が放たれた。

おいおい……！

この威力、俺のダークスラッシャーを超えてるぞ！

下手したら、カオスインフィニティ以上だ！

さすがのフィトリアも、そんな超火力の攻撃を弾く事はできず、閃光は高高度の鳳凰に直撃し、跡形も残らず消し飛ばした。

……という事は。

「キュイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ——」

残った低高度の鳳凰が動きを止める。

そして、ゴボ……と不気味を立てながら膨らんでいく。

魔力や熱量が、残った鳳凰の体に凝縮されていく。

どう考えても自爆攻撃です！ ありがとうございます！

って、ふざけてる場合じゃねえよ！

「一斉攻撃だ！ 早く！ 一刻も早くコイツを仕留めろ！」

「流星劍！ 重力劍！ ハンドレッドソード！」

「流星槍！ ブリユーナク！ エアストジャベリン！ セカンドジャベリン！」

「流星弓！ バードハンティング！ スプレッドアロー！」

「エアストスロー！ セカンドスロー！ ドリットスロー！ トルネードスロー！」

「八極陣天命劍連撃！ 一式！ 二式！ 三式！」

「タイガーブレイク！」

「すばいらる・すとらいく！ はいくいつく！」

「クラツシユチャージ！」

「プロミネンス・ダークノヴァ！」

尚文くんの指示に従い、勇者を筆頭とした連合軍が自爆寸前の鳳凰を袋叩きにしていく。

それでも、鳳凰の膨張は止まらない。

今にもはち切れて爆発しそうだ。

「ユウ様、いかがなさいますか？」

「後ろに下がろう。下がりながら魔法で攻撃」

「かしこまりました」

という事で、俺達アックスフォード部隊は遠距離攻撃を選択。

俺やミラを筆頭に、23人のインフレ戦力達による魔法攻撃が鳳凰に殺到する。しかし、それでも足りない。

まあ、手え抜いてたから当たり前かもしれないけど。

「貫け！ シールドプリズン！ チェンジシールド（攻）！ アイアンメイデン！」

最後に、尚文くんの切り札の一つ、処刑器具のアイアンメイデンが鳳凰を閉じ込め、内部の針山で貫いた。

皆、肩で息をしている。

しかし、これで鳳凰は討伐された——かに思えた。

鉄の乙女が内側から碎け散り、そこから破裂寸前の鳳凰が現れる。

ダメだな、こりゃ。

「くそっ！ ここでもやられる訳にはいかない！ ブラッドサクリファイス！」

尚文くんがスキル名を唱えた瞬間、その身体から鮮血が吹き出したのを遠目に確認した。

そして、それを代償としてスキルが発動。

あの、霊亀の頭をミンチにした、巨大な多重構造のトラバサミが現れ、鳳凰に食らいつく……直前。

遂に、鳳凰が弾けた。

その身体は、まるで太陽のような、凝縮された炎の塊となり。

それが弾けて、灼熱の炎が大地を焼き尽くしていく。

当然、その場にいる連合軍もろとも。

「うおおおおおおお！」

しかし、一人の勇者が皆の盾となつて、拡散する炎を一身に受けて耐える。

耐えきれぬどうかは微妙なところだけど、とりあえず尚文くんが守つてる方向は今のところ無事だ。

だが、ここで残念なお知らせが一つ。

俺達がいる場所は、尚文くんの防御範囲の外である。

つまり、灼熱の炎が直撃する位置だ。

アカン。

このままだと、皆仲良くウエルダンになつてしまう。

「皆さん、俺の後ろに」

「かしこまりました」

「了解だ！」

『ハッ！』

「あ、もつともつと後ろの方に行ってください。巻き込まれるので」

俺の指示に従って、アックスフォード部隊は俺の後方へと避難する。

もちろん、俺には尚文くんみたいな、皆の盾になろうなんて殊勝な心掛けはない。

こんな炎を真つ正面から受ける訳がない。

受け流してくれる。

「大竜巻X！」

拡散する炎を目眩ましにしてスキルを使う。

これなら、まあ、バレないだろう。

そして、このスキルは斧を振り回して竜巻を起こすスキルである。

その竜巻の回転に合わせて、炎が俺達から逸れる。

逸れた先には、——近くに居た連合軍の姿が。

『……………!?!』

悲鳴も上げられずに、俺達の身代わりとなった連合軍の皆さんが跡形も残らずに焼け

死んでいく。

ごめんね。

スキル使っちゃったから、目撃者はできるだけ減らしたいんだよ。

それに、これで結界作成のエネルギーの足しになるだろうし、一石二鳥だわ。

あなた達の犠牲は決して無駄にしないから、安らかに成仏してほしいです。

心の中で黙禱を捧げてる間に、状況が変化していた。

アトラちゃんやんが尚文くんの前に飛び出し、「気」のエネルギーの流れを操作して、尚文くん達を襲う炎を自分へと集めたのだ。

まごうことなき自殺である。

しかし、ただの自殺ではない。

大切な人達を、自らの命と引き換えにして救うという、気高き自殺だ。

凄いなあ。

俺には絶対に真似できない。

だって、その行為は、ひたすらに生を望む俺とは対極にある行いなんだから。

原作でこのシーンを讀んだ時は、「ふーん、ありきたりな展開だなー」くらいにしかなかったけど、実際に目にするとあれだね。

ちよっと、頭が下がるね。

そんなアトラちゃんやんの自己犠牲のおかげで、全滅という最悪な事態は避けられた。

俺としてはおもしろくない展開だけど、アトラちゃんやんの命に免じて、文句つけるのはやめとこう。

そうして、尚文くんは焼け焦げたアトラちゃんやんの成れの果てを抱えて、後方に撤退していった。

尚文くん自身もかなりのダメージを負ってるから、治療が必要だしね。

復活した鳳凰は、残った勇者達と、何とか動けるメンバーをかき集めて対処するっばい。

でも、俺はそれに参加する訳にはいかないな。

早急にやらなきゃいけない事ができちゃったから。

「アームストロングさん、あとは任せてもいいですか？」

「ん？ 別に構わねえが、どうかしたんですかい？」

「いえ……ちよつと緊急事態が発生しましてね。俺はその対処に行きます。ここに来た目的は既に達しましたし」

「ああ、あれか。なるほどなあ……。了解した！ あとは任せてくれ！」

「では、頼みました」

「おう！」

という事で、あとの仕事をアームストロング大佐に丸投げする。
それと、

「ミラ、お前は一緒に来てくれ」

「かしこまりました」

ミラは連れて行かないとな。

あとは、イグニも呼ぼう。
強い戦力が必要だ。

そうして俺は鳳凰が暴れる場所から撤退し、移動を開始した。

鳳凰の縄張りの外、土地や空間に影響がない距離まで離れてから、転送スキルを使う。

その間に、通信水晶を使ってイグニに連絡。

転送スキルのクールタイムの関係で直接迎えには行けないけど、全速力で飛んですぐに合流するとの事。

そして俺は、ミラと共にある場所へと飛んだ。

目的地は、迷いの砂漠。

今回の事件の裏に思うられる存在が根城にしている場所だ。

さて、俺がやるってのも変な話だけど、アトラちゃんの仇討ちといきますか。

62話

転送スキルで迷いの砂漠にやって来た。

そこには混沌とした光景が広がっていた。

大地から生える、巨大な黒いバイオプラントの塔。

そこから無限に沸き出す、人や魔物の形をした、黒い戦闘用バイオプラントの群れ。それらと戦いを繰り広げる魔物達。

その魔物達は、いかにも邪悪って感じの悪魔みたいな姿をしていた。ていうか、悪魔だ。

鑑定しても悪魔だったし、武器に吸わせてみても悪魔っぽい名前の武器が解放された。

実は、この状況は何も不思議な事ではない。

この場所で、ここ数ヶ月の間、ずっと繰り返されてきた、いつもの光景なのだ。

この迷いの砂漠という場所には、とある装置がある。

遠い昔に神の尖兵が造った、大地から龍脈のエネルギーを吸収する装置。

龍脈のエネルギーとは、それすなわち経験値だ。

野生の魔物が龍脈からエネルギーを吸い取ってLvを上げ、

その魔物を倒す事によって、人間は経験値を得てLvが上がる。

この世界は、そういう仕組みになっている。

この事実はイグニに竜帝の知識として教えてもらった時に判明した。

聞き覚えがある話だったから、多分、原作知識にもあったんだと思うけど、あいにくそんな細かい設定までは覚えてなかった。

でも、その装置に関しては別だ。

これの存在は、龍脈に精通したドラゴン、しかもその頂点であるイグニですら気づいていなかった。

俺は例によって原作知識でその存在を知った訳だけど、確信を持ったのは新・七つの大罪の斧を解放して少し経った頃だ。

なにせ、新・七つの大罪の斧にも、龍脈操作という似たような力がある。

それによって、俺は龍脈のエネルギーを吸収して、自分を含めた味方のLvを自由に上げられるようになった。

そうやって龍脈に何度も手を出してた時に気づいたんだ。

あれ？　なんか、エネルギーの流れがおかしいぞ？　ってな。

調べてみれば、龍脈のエネルギーはある場所に集束してる事がわかった。

それが、この迷いの砂漠。

ここにあるものがその装置だというのは原作知識頼りの情報だけど、少なくとも龍脈のエネルギーを操作できる何かがあるという事を確信した瞬間だった。

あとは簡単な話だ。

その発見をした当初は霊亀に向けた準備で忙しかったから一旦放置して、二代目霊亀がある程度造り終わったあたりで行動を起こした。

まずは霊亀の素材で出たフロートアックスという、浮遊する斧を生み出せるスキルを応用し、新・七つの大罪の斧のコピーを作成。

それを十本くらい束ねて、迷いの砂漠の一角にぶっ刺した。

そのコピーした斧の力で、装置が吸収する筈だったエネルギーを横から奪取し、ジャイアントプラントの中に設置した同じコピー斧を通して、拠点のエネルギーとして貯蓄している。

ちよつと違うけど、兵糧攻めみたいなものだ。

もちろん、その装置にだって自衛の手段くらいある。

それが、この悪魔軍団。

原作知識によると、装置の機能は経験値を収集する事と、手先となる悪魔を生み出す事の二つ。

今回タクトに力を貸した（多分）ように、他にもできる事があるんだろうけど、基本的な機能はその二つと見て、まず間違いないと思う。

で、そんな悪魔が襲って来るなら、コピー斧を守る戦力が必要って事で、超改良型バイオプラントを使って、コピー斧の周りをグルツと囲むような塔、タワープラントを作成。

そして、奪ったエネルギーで戦闘用バイオプラントを生み出し、タワープラントの防衛に当てた訳だ。

バイオプラントの色が黒いのは仕様です。

バージョンアップを繰り返したら、何故かこうなった。

そして今、この迷いの砂漠には、そうして作ったタワープラントが実に数十塔も建ち並び、迷いの砂漠を包囲するように等間隔で並んでいる。

それを何とか破壊しようと装置が悪魔を派遣し、俺の命令を受けたタワープラントが必死に防衛し。

そうして、こんな戦場が日常な素敵空間が完成した訳ですよ。

今では世界有数の危険地帯と化してるから、良い子は近づいちゃダメだぞ！
でだ。

俺はそんな危険な装置を、そのうち破壊するつもりでいた。

あくまでも、そのうちだ。

すぐにやろうとは思わなかった。

何せ、大陸中の経験値を集めてるような相手だぜ？

タクトなんぞより遥かに強いだろう。

真つ正面から無策でぶつかつたら、さすがに負けるかもしれないので、こうして
搦め手の兵糧攻めで、ちよつとずつ、ちよつとずつ、エネルギーを奪って行って、弱り
きつたところを叩こうと思つてた。

でも、やめだ。

今回みたいに想定外の事を起こせるのなら、予定を前倒しにして潰しちやつた方がい
い。

幸い、もう十分に弱体化はさせた。

今なら、普通に勝てると思う。

念のためにミラも連れて来た。

イグニも呼んだ。

戦力も十分。

さあ、壊そう。

「進軍開始！」

俺はミラと共に、タワープラントに群がっていた悪魔どもを蹴散らし、新しく生産させたバイオプラントの軍団に命令を下した。

ここだけではない。

特殊な魔物紋を通じて、全てのタワープラントに号令を発した。

一万を超えるバイオプラントの大軍勢が、装置のある根城に向かって進軍を開始する。

前は、この地域が迷いの砂漠と呼ばれるようになった原因と思われる、空間に作用して根城に近づかせない仕掛けがあったんだけど、

タクトに無理矢理力を貸した分でエネルギーが底をついたのか、今は停止している。バイオプラント軍の進行を妨げるものは何もない。

飛んで来る悪魔は、圧倒的な物量に任せてゴリ押しだ！

俺が出るまでもないわ！

そうして進軍を続けていた時、毛色の違う敵が現れた。

ドラゴンだ。

ただし、アームストロング大佐みたいなゴツい体格した、人型に近いドラゴン。

リザードマンと言った方がいいかも。

他の悪魔よりも遥かに上の力強さを感じるリザードマンが、空の上から闇属性つばいブレスを吐こうとしている。

俺はそれを迎撃するようにダークスラッシャーを撃とうとして……やめた。

俺よりもドラゴンの相手をするに相応しい奴が来たからだ。

「ハッハー！ 待たせたな！」

そんな声と共に猛スピードで現れたイグニが、その勢いのまま、リザードマンに体当たりした。

リザードマンは、まるでフィトリアに撥ね飛ばされた時の俺のような勢いで、どこかに飛んでいったよ。

「やつと来たか、イグニ」

「おう！ 只今参上だ！ しっかし、来て早々竜帝に行くわすとは、オレ様は運が良いぜ！」

あー、あのリザードマン、竜帝なんだ。

じゃあ、倒せばイグニがパワーアップだな。

そのリザードマンは、イグニに突撃されてそれなりのダメージを受けたみたいだけど、まだ健在の様子でこっちに向かって飛んで来た。

タフだなー。

「助けはいるかい？」

「いらねえ！　すぐに終わらせっから助太刀無用だ！」

「そっか」

手早く頼むよ。

こつちは予定が詰まってるんだから。

「ドラゴンクロー！」

弾丸のように飛翔していたリザードマンを、イグニは爪の一撃で迎撃し、空高く打ち上げた。

ホームラン！

いや、真上に打ち上げたから、キャッチャーフライか。

「極炎ブレス！」

しかし、これは野球じゃない。

殺し合いだ。

飛距離ではなく、最終的に生きてた方が勝者だ。

哀れ。

リザードマンは、イグニにこんがり焼かれてウエルダンになってしまった。

空から落ちてきたリザードマンの成れの果ては、どう見ても絶命している。
ホントに瞬殺だったよ。

「さて、竜帝の欠片をいただくぜ」

イグニが舌舐めずりしながら、リザードマンの死体を解体し、竜帝の核石を取り出す。
せつかくだ。

死体の方は武器に吸わせておこう。

前に竜帝の核石を吸わせたから、ドラゴンシリーズはほぼコンプリートしてるけど、
もしかしたら掘り出し物が出てくるかもしれない。

しかし、肝心の核石を手に入れたイグニは、何故か顔をしかめていた。

「どした？」

「この欠片……思いつきり悪魔の力に汚染されていやがる。浄化するのに苦労しそうだ
ぜ」

「食わないのか？」

「いや、食う。食って体内で浄化してやる。でも、その前に……ミラ姉、協力してくれ」

「ええ、いいでしょう」

「助かるぜ」

そうして、ミラの水魔法とイグニ自身の力で核石をある程度浄化した後、イグニは嫌

そんな顔でパツクリと食べた。

お腹壊すなよー。

「どうだ？」

「浄化には二、三日かかりそうだ。でも、行動に支障はねえ」

「そっか。なら、行くぞ」

「おう！」

こうしてイグニをパーティーに加え、敵の根城への道を急ぐ。

そうして辿り着いたのは、不気味な雰囲気を持つ廃城。

RPGの魔王城みたいな場所だった。

さあ、ボス戦の時間だ。

63話

廃城の玄関をダークスラッシャーで抉じ開け、無理矢理内部に侵入。

屋内戦闘だと数が多すぎて邪魔になりそうなバイオプラント軍団の一部を、城の中にあるかもしれないお宝の探索に当て、残りのバイオプラントを壁にして、ボス部屋を指す。

向かったのは城の地下。

さっきのリザードマンから回収した核石から、僅かに解析できた情報が頼りだ。

ダメだったら、バイオプラント使って人海戦術だな。

でも、その心配はなかったみたいで。

迷路みたいな地下通路を抜けた先に、それはあった。

ドーム状の、地面をくり抜いて作られた空間。

その中央。

地下を通る龍脈のエネルギーに蓋をするような形で造られた、不気味な機械装置。

これが、今回の標的だ。

「マサカ、タカがシチセイのユウシャごとときに、神のシトであるこのワレが、ココマデ追
い詰められるとは」

喋った!?

いや、知ってたけどさー。

フィトリアが喋った時の衝撃に比べれば、機械が喋った事くらい何でもないね。

「二応聞くけど、さつき鳳凰との戦いの時に横槍入れたのって、あんた?」

「ソウダ。ワレと同じ神のシトに一時的に力を貸し、ユウシャどもの抹殺を試みた。失
敗シタガナ」

そうだね。

あれは、完全に大失敗だね。

タワープラントの包囲網を抜けてエネルギー送ってきた時は面食らったけど、最終的
には俺が喜ぶだけの結果に終わったよ。

尚文くんの中には大ダメージだろうけど。

まあ、それはいいとして。

「じゃあ、万策尽きたって事で、——おとなしく壊れろ」

「断る。アノカタの為にココで使命を果たせず、セカイのオワリを見届ける前に果てる
訳にはイカナイ」

返答と同時に、機械装置の周りに大量の魔法陣が浮かぶ。

これが、こいつ流の魔法って事だろう。

魔法にも色々あるからな。

「ワレの力はマダ尽きてイナイ。コゴデ死ぬのはキサマラだ」

「それは嫌だな」

言いながら、俺も斧を構える。

今使っているのはプライドアックス。

鳳凰相手にしてたさつきまでとは違う、正真正銘、俺の最強装備だ。

これなら勝てる。

そう判断したからこそ、俺はここにいる。

「死ネ」

「壊れろ」

そして、戦闘が始まった。

機械装置の魔法が発射され、ダークスラッシャーがそれを迎撃する。

しかし、装置はすぐに次弾を装填してきた。

延々と撃ち合いを続ける気はないぞ！

「ミラ、イグニ！ 時間を稼いでくれ！」

「了解しました」

「任せろ！」

ミラの魔法とイグニのプレスが、装置の魔法を撃ち落とす。

しかし装置は、今度は魔法を撃ちながら悪魔を造って俺達にぶつけてきた。

悪魔軍団にはバイオプラント軍団をぶつける。

その為に連れて来たんだ。

役に立ってくれよ壁。

そして、ミラ達が時間を稼いでいるうちに、俺は魔法を詠唱する。

『我、斧の勇者が天に命じ、地に命じ、理を切除し、繋げ、膿を吐き出させよう。龍脈の

力よ、我が魔力と勇者の力と共に力を成せ。力の根源たる斧の勇者が命ずる。森羅万象

を今一度読み解き、彼の者らに全てを与えよ』

「アル・リベレイション・オーラX！」

俺を中心に、この場にいる味方全てに最上位の支援魔法をかける。

鳳凰戦の時に尚文くんが使った魔法の強化版だ。

その威力は、推して知るべし。

ミラとイグニ、そしてバイオプラント軍団の動きが格段に良くなり、攻撃の威力が

めっちゃ上がった。

今まで互角に近かった戦況が、一気に傾く。

「グ……………」

ミラの魔法とイグニのプレスが、装置の魔法を相殺するに留まらず、ぶち抜いて本体にダメージを与える。

バイオプラント軍団が、悪魔を哀れな程ポコポコにして死体に変える。

更に、強化された俺自身もまた動いた。

「ダークスラッシュX！」

「グ……………!?!」

闇の斬撃が、機械の体に大きく傷を付ける。

まだだ！

もつと、しこたまぶち込んでやろうではないか！

「スターダストアックスX！ アクセルスマッシュX！ パワードアックスX！ マウ

ンテンブレイクX！」

「グ……………グググ……………」

さあさあ、壊れる壊れる！

ダメ押しじゃあ！

「ダークスラッシュX シャインアックスバーストX！ 混合スキル、カオスイン

「フイニテイ！」

最高火力のスキルをぶっ放つ。

そしてえ！ トドメじゃあ！

『その愚かなる罪人への我が決めたる罰の名は、断罪の十字架による磔也。神をも裁く絶対の力に囚われ、届かぬ叫びと共に朽ち果てるがいい』

「デッドエンドクロスX！」

SPの消費が激しく、命中させるのが難しい切り札の一つを使う。

ただし、このスキルは命中さえすれば、防御不能の一撃である。

前に使った時と同じように、装置の後ろに黒い十字架が現れ、漆黒の極光を放った。

その光に耐えきれずに、装置が崩壊していく。

「オノレ……申し訳……アリマ……メデイ……」

装置は最後にかすれた機械音声でそう呟きながら、——機能を停止して破壊された。終わった……。

仇は取ったぜ、アトラちゃん。

いや、マジで俺が言う事じゃないし、別にあの子の為に戦った訳でもないけどさあ。しかし、ここで問題発生。

この廃墟がゴゴゴゴゴという音と共に崩壊を始めた。

「イグニ！ 脱出だ！」

「わかつてるぜ！」

すぐにミラと共にイグニの背中に乗り込み、イグニのプレスで天井に穴を空けて脱出した。

ふう。

生き埋めの危機は去った。

完全勝利だ！

……でも、あの装置が消えた事によって、世界中で取得できる経験値が増える事になる。

タワープラントを使って、拡散するエネルギーを何とか押し留めようとはしてみるけど、完全には無理だろう。

つまり、これからドンドン、四霊への対抗戦力が強くなってしまふ。

そいつはいただけない。

計画を急がないとな。

あと、俺が装置の相手をしている間に、とつくに鳳凰は討伐されてしまったらしく、青い砂時計の数字が「8」から「9」に変わって、タイムリミットが表示されていた。

やっぱり鳳凰はそんなに殺せなかつたみたいで、表示されてるタイムリミットは約三

日つてところだ。

尚の事、急がないとな。

その後、バイオプラント軍団に跡地の掘り起こしを命じて、

崩落する前に別動隊が入手していたお宝と一緒に、転送スキルでジャイアントプラントの所へと飛んだ。

ちなみに、お宝の中に魔杖アポカリプスとかいう良さげな杖があったので、それはミラに持ってもらう事にした。

まあ、破損状態だったから、ジャイアントプラント内の設備の一つを使って修復してからの話だけ。

他にも、お宝の中に紛れていた、やたらと性能の良い斧をウエポンコピーでコピーさせてもらった。

なんにせよ、これで味方の戦力が少しは向上した訳だ。

そして、俺は本命の計画を進める。

霊亀の時と同じように、回収した鳳凰の素材を培養液に入れて、二代目鳳凰の作成を開始。

今回は霊亀の時と違って、四霊作成のノウハウをちゃんと覚えている。

装置からぶんどったエネルギーもあるし、三日で仕上げてやる。

それが終わったら、奥の手の最終調整と実装だな。

やる事は多い。

頑張らないと。

で、そのあとは、——遂に最終決戦だ。

そこで全てが決まる。

いよいよ、その時が近づいてるんだ。

必ず成功させてやる。

殺して、殺して、殺し尽くした先で世界を救おう。

俺が生き残れる世界を作ろう。

すぐそこにまで近づいた決戦の日に向けて、俺は着々と準備を進めていった。

最終章 世界救済編

64話

装置を潰してから三日。

二代目鳳凰の作成が完了したあたりで、視界に表示されている青い砂時計に変化があった。

砂時計を鎖が縛りつけるようなエフェクトが出た後、表示自体が暗くなって沈黙したのだ。

そして、通常の波到来までのカウントが、再び動き出した。

これは、無事に麒麟を一時封印できたって事だろう。

念のために、通信水晶でシルベスターさんに確認もとっておいたから間違いない。

計画通りだ（ニヤリ）。

そして、俺が奥の手の調整をしていた時、手が離せない俺に変わって、ミラがシルベスターさんからの報告を伝えてくれた。

なんでも、タクトの馬鹿がフォーブレイの王権を奪取した上に、世界征服なんて馬鹿

な事を宣言して、全世界に向けて宣戦を布告したらしい。

原作知識の通りだな。

あの馬鹿、ついにやりやがった。

で、タクトは現在、最初に滅ぼすと宣言したメルロマルクに向けて進軍しつつ、アックスフォードにもちよつかいかけてるらしい。

あー。

そういえばアックスフォードは、常日頃からタクトを軽くあしらった上に、前の波でこき使ったっていう前科があっただけ。

あいつ、いかにも根に持ちそうなタイプだもんなー。

攻めて来ても不思議じゃない。

そのせいで、麒麟封印の地である国境の街では、中々の激戦が繰り広げられてるんだとか。

まあ、元々麒麟への対策で住人の避難は完了してたし、

あそこにはアームストロング大佐並みに強いソラちゃんやグレゴリオをはじめとした、Lv限界を突破した戦力が数多くいる。

でも、フォアブレイは腐っても世界一の大国。

このままだと、数の差で押し込まれる可能性もあるらしい。

「いかがなさいますか？」

「シルベスターさん達には、あと数日でいいから持ちこたえてつて伝えといて。その後は計画通りに進めるつて事もね」

「かしこまりました」

そして、数日後。

タクトが元気にメルロマルク軍とドンパチャつてる頃、遂に全ての準備が完了した。

「よし、——じゃあ、出撃するぞ。ミラも計画通りに頼む」

「はい。……ご武運を」

「ああ。……必ず生きて帰つて来る」

ミラに向けて、そして自分に対して言い聞かせるように言葉を吐く。

そうだ。

俺の目的はただ一つ。

死なない為に生き残る事だ。

それを履き違えるな。

必ず計画を成功させる。

世界を救つて、生きて帰る。

よし。

覚悟完了だ。

そうして、俺はガーディアンの鎧を付け、帰るべき場所であるジャイアントプラントを飛び出した。

戦闘用バイオプラントの一つ、ドラゴンの姿をした空を飛べる空戦型バイオプラントに乗り込み、まずはメルロマルク軍とフォーブレイ軍が戦ってるという場所を目指す。

イグニを使わないのは、ちゃんとした理由あつての事だ。

決して、解雇したとか、そういう事ではない。

そして、わざわざ戦場に赴くのは、まあ、確認の為だな。

タクトの馬鹿がどうなってるのか確認しておきたい。

原作通り、尚文くん達に無様にやられてるなら良いんだけど、

あの装置が力を貸した時みたいに、想定外のパワーアップをしてたら困る。

敵を知り己を知れば百戦危うからず。

何が言いたいかというと、敵情視察大事って事だ。

そんな感じで辿り着いた戦場で、それは起こった。

「盾の勇者が命ずる。眷属器よ。我が呼び声に応じ、愚かなる力の束縛を解き、目覚めよ」

尚文くんが詠唱を唱えると、タクトが持っていた爪、奪われていた七星武器の一つが淡い光を放った。

それを俺は、遙か上空から見つめていた。

「――汝から眷属の資格を剥奪する!」

そして、爪だけではなく、タクトが奪っていた六つの七星武器……いや、俺の持つ斧と、フィトリアが持つ馬車以外の全ての眷属器が光り輝き、タクトの手を離れていく。

「な、なんだ!?! 何が起こっているんだ!?! ぐ……! 力が抜けていく!?!」

「新たな所有者を探し、宿れ!」

タクトの手から離れた眷属器達が、新しい七星勇者を選んで戦場に散らばっていった。

そのうちの三つは尚文くんの近くにいた、ラフタリアちゃん、鳥、虎っぽい青年の三人を選んだっぽい。

それぞれ、鎚、爪、小手の三つだ。

他のは……お? 鞭だけはアックスフォード方面に飛んでいったぞ。

あの方角って……麒麟封印の街の方だ。

ひよっとして、ソラちゃんあたりが選ばれてたりして。

グレゴリオなんて強力なドラゴンを使役してるんだし、可能性は高いよな。

しかし、残念ながら、計画の最終段階にあの子の出番はあんまりないんだよなー。

あ、でも、尚文くんサイドの戦力を削ってくれたと考えれば、大きなプラスか。

で、七星の力を失ったタクトは、哀れ、尚文くん達にボコボコにされてしまいましたとさ。

結局、こうなったか。

懸念してたタクトスーパーパワーアップもなかったな。

装置が貸してた分の力もなくなってるみたいだし。

そうなれば、タクトはただの雑魚だ。

まあ、あの装置がタクトに貸した力っていうのは、本当に一時的というか、

むしろ、タクトは龍脈のエネルギーを攻撃力に変換する為の発射台として利用されただけっていうか。

言うなれば、一発限定で超強力な支援魔法がかかってたみたいな状態だったからなー。

その効果が切れたら、ただの雑魚に逆戻りだ。

「わかるか？　これが勇者と偽勇者の実力の違いだよ。仮初めの力で誇っていたお前の

時代は終わったんだ。

世界で遊んだ罪、その身で償え！ シールドプリズン！ チェンジシールド（攻）！」
そして、タクトは完全に倒された。

尚文くんの攻撃が終わった後、全身傷だらけでピクリともしない。
でも、死んではいない。

たしか、原作知識の通りなら、この後、公開処刑するんだっけ？

後々の事を考えれば、そっちの方が良いんだろうけど、俺はそんな悠長に構えてるつもりはないんだわ。

予定通り、本日、計画を実行する。

その為に、不確定要素は排除しないとね。

——俺は空戦型バイオプラントから飛び降りた。

そのままタクトが倒れている地点へと轟音を響かせながら着地し、足の下に構えた斧で、タクトを踏み潰した。

魂まで粉碎してやったぜ！

こいつとは割と長い因縁があった訳だけど……実にあっけない終わり方だったな。

まあ、所詮はタクトという事か。

「な……!? お前は!?」

「久しぶりだな、盾の勇者」

尚文くんに挨拶。

でも、時間をかけるつもりはない。

まだ、七星武器の強化方法を共有する前に、終わらせてもらおう。

ん？

そこにいるのは最重要危険人物こと、ビッチ氏じゃないか。

ちようど良い。

死ね。

「ダークスラツシャーX」

「え？ ギャアアアアアアアアアアアアアアア！」

尚文くん達とタクトの決戦の舞台となっていた砦の一角を闇の斬撃が破壊し尽くし、

それに巻き込まれてビッチ氏も死んだ。

魂まで粉碎してやったぜ！

さて、これで勇者以外の目立つ邪魔者は片付いたな。

その勇者である尚文くん達は、俺の放ったスキルの威力に戦慄しながら、俺を警戒し

て距離をとってる。

すぐに相手をしてあげようではないか！

でも、その前に。

俺は兜の側面に手を当て、魔力を流し込む事によって、通信水晶を起動させた。

「こちら、ガーディアン。総員に告ぐ」

この通信を聞いている、計画を知っている一部の人間達へと、俺は号令を発した。

「——これより予定通り、世界救済計画最終フェーズを開始する」

それと同時に、魔物紋を通じてジャイアントプラントの中にいるメイドプラント達に指示。

培養液の中で眠らせておいた、二代目霊亀と、二代目鳳凰を目覚めさせる。

そして——

バキン！

バキン！

バキン！

ガラスの割れるような音が三回連続して耳に響き、視界に再び青い砂時計のアイコンが出現した。

その数は三つ。

それぞれ「7」「8」「9」の数字が刻まれ、砂時計同士の間が「11」で繋がれていた。「なんだと……!!? いったい何が……!!?」

尚文くんが青い顔で混乱している。

それを無視して、俺は一方的に、上から目線で、どこまでも傲慢極まりない宣言をした。

「さあ、——世界を救ってやろうじゃないか」

こうして、最終決戦の幕が上がる。

6 5 話

「まずは、お前達を倒しておかなくてはな」

俺はプライドアックスを構え、尚文くん達と向き合う。

油断はしない。

まだ強化方法の共有ができてないとはいえ、相手は勇者が複数人。

『盾の勇者』尚文くん。

『剣の勇者』錬くん。

『鎚の勇者』ラフタリアちゃん。

『爪の勇者』鳥。

『小手の勇者』虎っぽい青年。

その他にも、強そうな仲間が多数。

これで油断なんてできる筈もない。

「ガーディアン！ お前、何をした！」

思わずといった感じで、尚文くんが問いかけてきた。

なんだい？ お喋りかい？

割りとうエルカムだぜ！

なにせ、時間が無駄に過ぎて有利になるのはこつちだ。

今頃、機動力のある鳳凰と麒麟あたりは、すでに仕事を始めてるんじゃないか？

「簡単な事だ。青い砂時計の表示を見ればわかるだろう？ 霊亀と鳳凰を復活させ、麒麟

の封印を解いた。それだけの事だ」

「馬鹿な……!? そんな事……」

「できる訳がないとでも？ それは誤りだ。私はそれを成し遂げた」

俺はやったぞー！

いや、まだやり遂げてはいないけどさ。

帰るまでが遠足。

四霊結界を張って、生きて帰るまでが俺の計画だ。

その為には……

「そこで提案だ。戦いから手を引き、静観に徹してほしい。そうすれば、お前達の周りにいる者達は巻き込まないと誓おう。……まあ、麒麟に関しては制御できないので、保証もできないがな」

「ふざけるなー！」

嗚みついてくるねえ、尚文くん。

やっぱり君とは相容れないのかな？

残念だ。

「ん？」

と思つてた時、俺の視界に新しい表示が現れた。

波の到来を報せる赤い砂時計と、何かのカウントダウンが表示されている。

その発生地点を示す、世界地図と共に。

そして、『応じますか？』『はい／＼いいえ』の文字。

これは、マズイな。

「……どうやら、これ以上話を続けている場合ではないようだな」

俺は尚文くんとの会話を打ちきり、メニューを弄つて準備を整えた。

そして、『はい』を選ぼうと……した瞬間に通信が入った。

「どうした？」

『勇者様！ 何やらおかしな鞭が飛んで来た上に、私の視界に変な砂時計が表示されているであります！ どうしたら良いでありますか!？』

ソラちゃんからだった。

てか、やっぱり七星の鞭に選ばれてたのか。

やるじゃないか。

いや、今はそんな事どうでもいい。

「問題ない。お前は計画を続行しろ」

『ハッ！ 了解であります！』

通信を切った。

ソラちゃんには、麒麟誘導という大事な仕事がある。

それに、ここで波に呼び出したりなんてしたら、「自国を守るのに必死でした！」という言い訳が使えず、

世界救済後に「なんで他の勇者達と一緒に四霊と戦わなかったんだ！」ってクレームつけられそうだし。

それは可哀想だ。

幸い、戦力は足りてるから、ソラちゃんの助けは必要ない。

ああ、あと、ソラちゃんの声は普通の携帯電話と同じように俺以外には聞こえてないから、尚文くん達にバレる心配もないよ。

「ヤッ」

なんか、ちよつとグダグダになっちゃったけど、改めて『はい』を選ぶ。

そして、俺は波の発生地点へと飛ばされた。

——俺だけではなく、さつきパーティーに加えておいた霊亀と一緒に。

「な……!?! は……!?!」

「靈亀!?!」

「なんで!?! 盾の勇者様が倒した筈じゃ!?!」

波に挑んでた人達が、驚愕と絶望の視線で靈亀を見上げていた。

でも、そんな場合じゃないでしょ?

波の亀裂は、今にもはち切れそうな程に大きく開き、その先にもう一つの世界が映し出されていた。

波という世界融合現象。

その終焉。

このまま放置すれば、波の亀裂が裂けて世界が融合し、自分が乗り込める土台を作り終えた神が降臨する。

その後待っているのは、神の圧倒的な力によって一方的になぶられ、いたぶられ、玩具にされる蹂躪だけだ。

そんな未来、断じてごめんこうむる。

だから俺は、靈亀の頭にライドし、命令を下した。

「やれ、靈亀! 波の亀裂を粉碎せよ!」

命令に応えた霊亀が、前とは比較にならない程強力なブレスを波の亀裂に向かって発射した。

波から溢れてきた魔物や、それに挑む連合軍もろとも、霊亀のブレスが全てを破壊していく。

『ギャアアアアアアアアアアアアアアア！』

南ー無ー。

どうか成仏してください。

ていうか、俺も遊んでる場合じゃないな。

霊亀のブレスを受けても、波の亀裂はまだ閉じてない。

迫撃が必要だ。

「霊亀！ 撃ち続けろ！」

俺の命令を受けて、霊亀が次弾の発射準備に入る。

さして、俺自身も働かなくては。

「やめなさい！ エネルギーブラスタースターX！」

「！ ダークスラツシャーX！」

霊亀に向けて放たれた結構強力な攻撃を、反射的にダークスラツシャーで相殺する。

闇の斬撃は、そのまま相手のスキルを押し返し、術者に向けて飛んでいった。

「な!? くッ……………」

それを何とか避ける襲撃者。

よく見れば、それはライフルを構えた『弓の勇者』樹くんだった。

君、何やってんねん？

仲間割れしてる場合とちやうやろが。

いや、気持ちはわかるけども。

まあ、いいや。

あれくらいの攻撃なら、超強化された霊亀にはあんまり効かない。

気にしない方向でいこう。

「アル・リベレイション・オーラX」

最大の支援魔法を、霊亀を含めた自軍と俺自身にかける。

そうして発射された次弾のプレスは、確実にさつき以上のダメージを波の亀裂に与え

ていた。

よし。

もう、ひと押しだ。

今度は、俺も出よう。

靈亀の頭から飛び降り、波の亀裂に向けて走る。走りながらスキルを放つ。

「ダークスラッシュX！」

横薙ぎに放った闇の斬撃が、波の亀裂に吸い込まれるようにしてぶち当たる。それに続くように、この場にいる他の勇者達の攻撃が殺到した。

道を違えても、世界を守るといふ目的は同じって訳だ。

波を相手にするなら、一時的にでも共闘した方が良い。

そう考えると、さっきの樹くんはホントに愚かな事したな。

最後に靈亀のブレスが直撃し、何とか波の亀裂を閉じる事に成功した。

ふう。

地味に危なかった。

俺か靈亀のどっちかがいなければ、今で終わってたかもしれない。

次の波が来たら、確実に勝てる自信がないな。

だが、しかし！

次の波など来ない！

この俺が、来ないようにさせてやる。

現在進行形で四霊が大虐殺を敢行し、エネルギーを集めて、結界の補強を行ってるか
ら、視界に表示されている次の波までのカウントダウンは一時停止してる。

エネルギーが満タンまで溜まれば、一時ではなく完全に停止させる事ができる。

ここまで来たんだ。

必ずやり遂げて帰る。

その為に……

「さて、さっきの話の続きといこうか、盾の勇者……いや、勇者達よ」

この邪魔者達をなんとかしないとかな。

俺は再び、尚文くん達に語りかけた。

66話

この場には、尚文くんの仲間達が勢揃いしている。

尚文くん、元康くん、鍊くん、樹くんの四聖勇者全員。

ラフタリアちゃん、鳥、虎っぽい青年、リーシアちゃん、改心したっぽいメルロマルクの王様、フィトリアという、俺とソラちゃん以外の七星勇者全員。

＋連合軍。

そんな彼らを相手に、もう一度対話を申し込もうと思う。

「先程の話を聞いていない者もいる。故に、もう一度言おう。四霊を放置し、静観に徹しろ。そうすれば、お前達の周りにいる者達には手を出さない」

「ふざけるな！」

「そんな事が許される訳がないでしょう！」

皆を代表するかのように、鍊くんと樹くんが吠えた。

そして、全員が結構な悪意を俺にぶつけてきている。

敵意。

そして、拒絶。

そうか。

それが答えか。

「そういう事だ、ガーディアン。俺達はお前を認めない。……世界の為とはいえ、多くの命を平然と犠牲にするお前は勇者じゃない！ ただの魔王だ！」

尚文くんが俺を罵倒してくれやがった。

……魔王、魔王ね。

なるほど。俺にぴったりだ。

魔王が決戦前に「もし、俺の味方になれば、世界の半分を貴様にやろう！」と言って、勇者は決して首を縦には振らないって事か。

残念だよ。

本当に残念だよ。

「そうか。ならば、——ここで果てるがいい」

俺が決戦の意思を示したと同時に、霊亀の召喚した大量の使い魔が、勇者達と対峙するように俺の後ろに並んだ。

加えて、ここに飛ぶ時に連れて来た空戦型バイオプラントから大量の種がばら蒔かれ、戦闘用バイオプラント軍団が産み出される。

更に、霊亀本体も連合軍を殺戮しながら、こつちに向かって来ている。

しかもしかも、こいつら全てに俺の支援魔法がかかっている状態だ。とてつもない戦力と言えるだろう。

「アル・リベレイション・ダウンX!」

「アル・ドライブア・ダウンX!」

樹くとメルロマルクの王様が、俺の支援魔法を打ち消すように全能力低下の魔法を使ってきた。

だが、効かぬ!

いや、効かない訳じゃないんだけど、この二人と俺の間には、結構な魔法系ステータスの差がある。

完全に打ち消す事はできないって意味だ。

「アル・リベレイション・オーラX!」

「アル・ドライブア・オーラX!」

そして、尚文くとメルロマルクの王様が、味方全員に俺と同じ全能力上昇の支援魔法をかけた。

ふむ。

これで、両軍の力は大体互角つてところかね?

あくまでも、俺を除けばの話だけだ。

ていうか、メルロマルクの王様有能やな。

さすがは、魔法特化の杖の勇者。

「鍊と元康は何人か連れて霊亀の心臓を潰せ！ 樹とクスは頭の方だ！ 残りはここで

ガーディアンを倒す！」

「わかった！」

「了解ですぞ、お義父さん！」

「わかりました！」

「承知しましたですじゃ！」

尚文くんの指示によって、向こうの戦力がバラけていく。

ケツケツケ。

好都合だぜ。

今の霊亀は半分不死身。

せいぜい、骨折り損のくたびれ儲けでもしてるがいいわ！

「作戦は決まったか？ ならば、いくぞ！」

そうして、俺は残った戦力を相手にする。

俺との戦いに残った勇者は、尚文くん、ラフタリアちゃん、鳥、虎っぽい青年、フィ
トリアの五人。

勇者以外の戦力は、霊亀の使い魔とバイオプラント軍団が相手をしてくれる。俺は、目の前の彼らに集中すればいい。

「パワードアックスX！」

「ぐう……！」

割りと手加減抜きの攻撃を受けて、尚文くんはすつ飛んでいった。

死んではいけないっぽい。

できれば勇者は殺したくないから、生かしたまま拘束したいけど……計画が大詰めを迎えた今、そうも言ってられないか。

邪魔するのならば、半分くらいは殺してでも止めよう。

「トールハンマー！」

「エアストクロー！」

「滅竜烈火拳X！」

まずは、力の差もわからずに突撃してきた、この愚か者三人からだ。

尚文くんがぶつ飛ばされて、冷静さをかいたか？

容赦なく、プライドアックスを振りかぶる。

「ダークスラッシュX！」

「流星壁X！」

ん？

三人の周りにバリアみたいなのが発生したぞ？

気にせず振り抜いて破壊したけど、結構固かったな。

おかげで、三人とも死んではない。

「うう……」

「いたいいい……」

「ぐあ……」

まあ、瀕死状態で戦闘不能だけどな！

よし。

縛るか。

バイオプラント、カモーン。

「ぐう……！ ラフタリア……ファイロ……フオウル……」

んん？

なんか、ぶっ飛ばした尚文くんが、明らかに俺が与えた以上のダメージ受けて虫の息になってるんですけど？

これはどういう……ああ、思い出した。

たしか、そんな感じのスキルがあつた気がする。

味方のダメージを肩代わりするのなるほど。それか。

納得。

したところで、今度こそ捕縛させてもらおう。

「クラツシユチャージ！」

ま、そう簡単にはいかないよな。

多分、この場で俺の次に強いフィトリアが馬車を引いて突撃してきた。尚文くんの支援魔法のおかげで、前に戦った時より遥かに勢いがある。

だが、効かぬ！

「ハアアアアア！」

「ツ!？」

フィトリアの突進を片手で受け止める。

さすがにちよつと後退したけど、それでも片手で止めてやったぜ！
どうだ！

絶望的な演出であろう！

強くなってるのは、お前らだけじゃないんだよ！

「シャインアックスバーストX！」

「ツッ」

空いていたもう片方の腕でスキルを放つ。

だが、フィトリアは相変わらず素早い動きで避けた。

チツ。

完全に意表を突いたと思ったのに。

上手くないもんだな。

でも、せつかくだ。

戦意を挫くような、残酷な真実を伝えてやろう。

「こういう事を言うのは、あのタクトのようで少し嫌だが、あえて言おう」

ちなみに、これも本音である。

「――諦めろ。私のLvは1000を超えている。お前達に勝ち目はない」

こんな嘯ませ犬全開の台詞だけど、その効果は大きい。

ここはゲームみたいな世界だし、俺からすればラノベみたいな世界でもあるけど、現実だ。

そして、現実ってやつは理不尽で残酷。

遙か格上をご都合主義で倒すなんて奇跡は、まず起こらない。俺が神に勝てないように、今の尚文くん達じゃ俺に勝てない。

これが真理だ。

斧と完全に癒着し、カースプロテクトを持つ俺相手だと、タクトにやったみたいなの武器剥奪もできないしね。

実際、彼らは俺の台詞を聞いて絶句してる。

「……盾の勇者。ここはフィトリアが時間を稼ぐ。一旦退いて」

お、そうきたか。

だが、逃がさんよ。

「何を……！」

「敵は前に戦った時よりも遙かに強い。今のままじゃ勝てない。一旦退いて、強化方法を共有して」

……チツ。

フィトリアめ。

鳥のくせに理知的で冷静な事言いやがって。

そうなんだよなあ。

それが、現状、尚文くん達が取れる最善手であり、唯一の勝ち筋なんだ。

いくら俺でも、最大強化された勇者全員を相手にして勝てる自信はない。

まあ、七星武器が二つこつちサイドにある以上、最大強化はできないんだけども。

それでも、強くなる前に、ここで潰しておきたい。

「逃がさん」

「逃げて！」

フィトリアが馬車の扉を開ける。

あの馬車、乗り物ってだけあって、転送スキルの強化版みたいな、要するにど〇でも

ドアみたいな効果があつた筈。

ここは霊亀の領域だから転送スキルは使えないと思つたけど、まさかアレなら使える

のか!?

「バードサンクチュアリー！」

あ、違った。

自分の領域で霊亀の領域を上書きするつもりだ。

良かった。

それなら、対抗策がある。

「させん。ドラゴンサンクチュアリー」

俺の領域が、フィトリアの領域を更の上書きした。

これで、転送スキルは再び使用不能だ。

「な、なんで……!?!」

フフフ。

驚いてるな、フィトリアの奴。

これは研究の副産物というやつだよ。

さあ、おとなしく、お縄につけ!

「スターダストアックスX!」

「うっ……!?!」

前はお前を倒すのに何時間もかかったが、俺は強くなった。

一分だ。

今度は、一分で沈めてやる。

「ダークスラツシャーX! シヤインアックスバーストX! アクセルスマツシユX!

マウンテンブレイクX!」

フィトリアが対応しきれない速度でスキルを乱打し、崩していく。

やってる事は前に戦った時と同じだ。

俺は相変わらず、ステータスに任せたゴリ押ししかできない。

だが、そのステータス差が何倍にもなれば、もはや対処不能!

死ねえ！　フィトリアアアアアア！

「ブリューナクX！」

「何ッ!？」

しかし、そこに救世主が現れてしまった。

なんと、霊亀に向かつて行つた筈の元康くんが帰つて来やがった。

何でここに……と思つたところで、元康くんの連れている三羽のフィロリアルが目に入った。

その頭で揺れるアホ毛と一緒に。

ああ！

そうだった！

フィトリアの奴は、フィロリアル相手に遠距離から通信ができるんだった！

前に鳥を相手にやってた！

てことは、フィトリアが呼び寄せやがったのか!?

どこまでも厄介な奴め！

「鳳凰烈風剣X！」

「ヘブンズジャッジメントX！」

「グングニルX！」

「ナイフレインX！」

「裁きX！」

「ぬう……」

霊亀の方に行っていた他の勇者達も戻って来て、俺にスキルの雨を降らせた。

さすがに痛い。

徐々には後退させられていく。

「煩わしい。ダークスラッシュX！ ショインアックスバーストX！ カオスイン

フイニティ！」

『ぐあああああああああああ！』

だが、それでも大火力のスキル一発で吹き飛ばせる。

俺の有利は変わらない。

「キュアアア！」

「ラフー！」

「ん？」

と、その時、ドラゴンとタヌキみたいな魔物が、何かを展開した。

フィトリアが使ったものと同じ、領域を上書きする魔法だ。

でも、それで押し返せたのはごく一部。

その程度、すぐに押し潰せる。

だが、その一瞬をフィトリアは逃さなかった。

「ッ!？」

「なッ!？」

「え!？」

「フィトリアたああああああん!」

領域が上書きされた一瞬、フィトリアが尚文くん達四聖勇者を馬車の中に放り込んだ。
だ。

やられたが、彼らだけではどうにもならない。

強化方法を教えてくれる七星勇者さえ逃がさなければ問題ない。

そう思っていた。

その時、

「ハアアアアアアアア!」

「雷撃鉋!」

「変幻無双流奥義『満月』!」

「ワンワン！」

「む!？」

このタイミングで、勇者以外の人達が命懸けで特攻してきた。

女騎士さん、シヤチつぽい人、おばあちゃん、子犬。

勇者でもなく、資質向上もLv限界突破もしていない相手など、俺の敵ではない。

その人達を蹴散らすのに数秒もあれば事足りる。

しかし、彼女達が命懸けで稼いだ数秒を使って、フィトリアは残りの勇者を逃がしきった。

……ちくしょう、やっつけてくれたな。

だが、お前だけは逃がさん。

「アクセルスマッシュX! パワードアックスX!」

「うっ……!？」

最後にメルロマルクの王様を無理矢理馬車に叩き込んだ隙を突いて、フィトリアを昏倒させる。

——そして、そのままトドメを刺した。

こいつは危険だ。

下手したら。計画を破綻させかねない。

勇者を殺す事によるあらゆるデメリットを呑み込んででも殺しておいた方がいい。

フィトリアの死と共に、眷属器の馬車が光の珠となって、どこかへと飛んでいった。

……長きに渡って世界を守り続けた最古の勇者よ。

せめて、安らかに眠れ。

そして、フィトリアが死に、他の勇者が消えた今、残された連合軍に、もう逃げ場はない。

「さて、——死ぬ覚悟はいいな？」

圧倒的強者である俺の死刑宣告を聞いてなお、まだ戦う意思のある勇敢な戦士達は、それぞれの獲物を握りしめ、立ち向かって来た。

でも、彼らの相手は俺ではない。

俺が手を出すまでもない。

世界の守護獣たる霊亀がその使命を果たすべく、世界を救う為に殺戮を続けていく。そうして、守ってくれる勇者様のいなくなつた連合軍の命を、狩り尽くしていった。

それは、まさに蹂躪だった。

67話

勇者達との戦いから数日。

世界救済計画は順調に進んでいる。

霊亀と鳳凰は仕事を果たし、麒麟は誘導するまでもなく、封印の街に攻め込んでいたフォーブレイ軍に襲いかかり、そのままフォーブレイ方面へ向けて進行して行ったらしい。

シルベスターさんからの通信で聞いた。

そのシルベスターさん達は、麒麟がフォーブレイの奥深くに進行するのを見守つてから、アックスフォードへ帰還。

先に帰つてたアームストロング大佐と一緒に、アックスフォード方面に来た麒麟の使い魔を駆逐してらしい。

アックスフォードはインフレ戦力が大量にいるし、鞭の勇者に選ばれたソラちゃんもいる。

被害は限りなくゼロだそうです。

すげーな。

世界中が終末もかくやという被害を受けてる中で、アックスフオードだけ無傷だよ。で、そっちはいいとして。

逃げた勇者達は、どうやらあの後、強化方法の共有を済ませたらしく、めっちゃ強くなった状態で再び霊亀に向かって来た。

散らばっても俺に各個撃破されるだけと考えたのか、四霊全てではなく、まずは霊亀に戦力を集中してきおったわ。

ので、それをいち早く察知した俺は、すたこらさつさと逃走させてもらいました。

誰が勇者全員と真つ正面から戦うかっての。

霊亀の相手でもしてろ。

でも、さすがに強化された勇者九人を相手にしては、魔改造を繰り返した超強化霊亀でも勝てなかったみたいで、割とあっさり敗北したっぽい。

視界に表示されてる「7」の砂時計が明滅してたのもあって、やられたのが一発でわかったよ。

調子に乗って、霊亀の体内にコアを三つくらい作っておいたんだけどなー。

それ全部に加えて、頭と心臓の計五ヶ所を同時撃破しないといけないっていう、割と鬼畜な仕様になってたのに、あっさりとやられた。

勇者、強いわー。

まあ、その頑張りも無駄なだけだね。

「7」の砂時計が明滅した瞬間、残った「8」と「9」の砂時計から「7」の砂時計に何かが供給されるような表示がされた後、当たり前のように霊亀が復活した。

そう、前にも言った通り、同時に復活した四霊は全てを同時に撃破しないと倒せないのだ！

どうだ、絶望的であろう！

その事実を知った勇者達は、悔しそうな顔で霊亀の討伐を諦めて撤退していきました。

なんで勇者達の顔色がわかるのかって？

霊亀の体内の各所に映像水晶を設置しておいたからだよ。

さながら、監視カメラだな。

実に便利だ。

これで、勇者達が撤退したのを確認してから霊亀の護衛に戻る。

そんな感じで、四霊を止める事は誰にもできていない。

霊亀はメルロマルクの波の現場に飛ばしたから、メルロマルク国内を縦断しながら進行し、

鳳凰は、二羽が別々に行動して、空を飛べるといって圧倒的な機動力に任せて世界中で

暴れ回り、

麒麟は世界最大の国フオーブレイを殲滅中。

犠牲者は増え続け、エネルギーはガンガン溜まっていく。

霊亀の体内にある青い龍刻の砂時計に、凄い勢いで砂が溜まっていつてるよ。

この分なら、奥の手を使うまでもないかもしれない。

でも……

「……まあ、このまま終わる筈もないか」

四霊が復活してから、約一週間後。

先行させていた偵察型バイオプラント、映像水晶を搭載した奴から、敵対者の映像が

送られてくる。

軍を率いて霊亀に向かって来る勇者達の姿。

勇者の人数は……四人か。

盾と槌と爪と杖。

つまり、尚文くん、ラフタリアちゃん、鳥、メルロマルクの王様の四人。

残りは他の四霊の所に行ったのかな？

さて、四人か。

多いな。

あっちサイドの勇者の約半数だよ。

やっぱり俺対策って事か？

俺がここに居る保証もないだろうに。

勝てなくはないだろうけど、逃げて他の四霊の護衛についた方が良いか。

……あ、鳳凰と麒麟の現在地に飛べるポータルがない。

ヤベー。

じゃあ、おとなしく霊亀の護衛やるしかないな。

本当にあと少しなんだ。

今さら邪魔されてたまるかい。

「アル・リベレイション・オーラX」

霊亀と使い魔、バイオプラント軍団、そして俺自身に支援魔法をかける。

ほぼ同時に、メルロマルクの王様から全能力低下の魔法が飛んできたけど、樹くんがいない今回は前よりも効果が薄い。

効かなくはないけど、焼け石に水だ。

そもそも、霊亀達はともかく、俺は自前の魔法耐性で弾いてるしね。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオ！』

そして、勇者達に率いられた兵士達が、尚文くんを先頭に、雄叫びを上げながら突撃

してきた。

同時に、メルロマルクの王様がレーザービームみたいな、魔法なんだかスキルなんだかよくわからない攻撃を霊亀の頭に向けて放って援護する。

でも、そんな程度で揺らぐ霊亀じゃない。

兵士達は使い魔とバイオプラント軍団がお相手し、霊亀の頭を兜のように覆った黒いバイオプラントがレーザービームを弾き飛ばす。

さすがに頭はちよつと削られたけど、霊亀の生命力なら、その程度の傷はすぐに再生する。

頭一つ潰すだけでも一苦労だ。

そして、反撃のプレスが兵士達を襲う。

尚文くんができる限り守ったみたいだけど、決して少なくない死者が出た。

目的達成も近づいたけど、尚文くん達も霊亀に近づいて来た。

なら、迎撃あるのみ。

俺が行く。

霊亀の頭から飛び降り、もう随分前になる、初代霊亀進行の時と同じように、尚文くん目掛けて飛び蹴りをかます。

ガーディアンズ・ドロップキック！

「ッー」

「……ほう」

しかし、前とは違って尚文くんはしっかりと受け止めてみせた。

チツ、無駄に強くなりやがって。

下手な反撃をされる前に、蹴りつけた脚に力を籠めて跳躍し、距離を取った。

霊亀の使い魔とバイオプラント軍団に命令し、一時的に俺と向き合っている部隊への攻撃をやめさせる。

そして、今一度語りかけた。

「懲りずにまた来たか、盾の勇者」

「……………」

語りかけるも、返答がない。

無視はちよつと寂しいなー。

代わりに、勇者兵士含めた全員から飛びつきりの悪意を感じるけど。

恨み、怒り、復讐心。

物騒な感情のオンパレードで嫌になる。

まるで、俺が悪役みたいじゃないか。

いや、悪役だって事を否定するつもりはない。

どんな外道になろうとも生き残ってやると誓ったのは、他ならぬ俺だ。

でも、悪役には悪役なりの、外道には外道なりの、信念と目的がある。

それを全否定するような態度をとられるのは……ちよつとイラつくな。

聞く耳くらい持ってほしい。

俺は話を続ける。

「何故、まだ戦う？ お前達もわかっているだろう？ もはや全てが手遅れだという事を」

四霊は、もう既に取り返しがつかない程の命を奪ってしまった。

今さら四霊を討伐し、俺の計画を阻止したところで、待っているのは消耗しきった戦力で波に挑まねばならないという、無情な現実だけだ。

「それとも、まさかわかっているのか？ ここでお前達が戦い、勝利する事こそが、今までに払った犠牲を無にする最大の愚行だという事を」

「……………」

尚文くん達は答えない。

でも、その心が少し揺れてるのはわかる。

俺への悪意が若干弱まった。

許したとかそういうんじゃなくて、迷いが心を乱して、悪意を薄れさせてるんだ。どうやら、少しは聞く耳持つてるらしい。

なら、もう少し揺さぶってみるか。

「黙れ」

ん？

俺が何か言う前に、尚文くんが遂に口を開いた。

「どう言い繕っても、お前は俺達の仲間を殺した敵だ。許せる筈がないだろう。

そして、俺は盾の勇者だ。守る事しかできない勇者だ。——だから、こんな理不尽から、一人でも多くの命を守る！ その為に、お前をここで倒す！」

……その言葉を受けて、他の連中も覚悟を決めてしまったらしい。

おいおい、まったたく。

救えないなあ。

「つまり、お前は世界を救うという使命の為ではなく、あくまでも人を守る為に戦うと、そういう事か」

優しすぎやろ。

一時期は世界を呪うような濁った目付きしてたくせに。

ああ、いや、そんな濁った目してた時でも、尚文くんは誰かを守る為に動いてたわ。

優しすぎやろ。

その優しさを、少しは俺にも分けてくれませんかねー？

復讐は何も生まんよ？

でもさー。

なら、こういうのはどうだい？

「お前の考えはよくわかった。そんなに人を助けたいか。それならば、良い事を教えてやろう」

尚文くん曰く、俺はただの魔王みただからなー。

魔王らしく、悪辣に、非道に、勇者の心を弄んで、折ってやろう。

「——お前の仲間達はまだ生きてるぞ」

そう言うと同時に、俺は腰から受信用の映像水晶を取り出し、魔力を流し込んで作動させた。

そこから、ホログラム映像のように、意識を奪われ、バイオプラントで拘束された尚文くんの仲間達の姿が映し出される。

尚文くん達が目を見開いた。

どうだい？

少なくとも、これで復讐という大義が少し薄れただろう？

「大多数は殺したが、一部の、盾の勇者、お前が懇意にしていた仲間達は生かしておいてやった」

具体的には、前に尚文くんの村で見かけた人とか、初代霊亀との戦いで連れてた人とかだね。

女騎士さん、シヤチっぽい人、おばあちゃん、子犬、ついでにタヌキみたいな魔物だ。残りは、顔を覚えてなかったから殺しちやっただけ。

あ、竜帝は美味しくいただきました。

え？

なんで、この人達をわざわざ生かしたのかって？

決まってるじゃん。

「さて、改めて告げよう。四霊を放置し、軍を退け。でなければ、捕らえたお前の仲間達を殺す。これは交渉ではない。——脅迫だ」

「お前え……！」

尚文くん達の敵意が膨れ上がる。

でも、相当動揺してるのもわかる。

ハーツハツハツハ!

人質作戦は効果覲面だな!

さあ、悩め、迷え、勇者達よ。

そして、あわよくば、そのまま退くがいい。

俺は、尚文くん達の返答を待った。

68話

「……それがお前達の答えか？」

尚文くん達は、——無言で戦闘態勢をとり続けた。

「残念だ」

まあ、普通に考えて退ける訳がないか。

いくら人質を取ったとはいえ、それを理由に引き下がるといふ事は、仲間を優先してその他の奴らを犠牲にする、ただの傲慢な行いでしかない。

そんな事、尚文くんの仲間達ならともかく、後ろにいる兵士達をはじめとした民衆が認めない。

自分の大切なものだけ守って、大虐殺を見て見ぬふりすれば、その行いは、その口で魔王と呼んだ俺と大して変わらないのだから。

勇者であるが故に、退くに退けないか。

そもそも、ここで退いたら、今、共に戦っている兵士達や、別の場所で鳳凰や麒麟の相手をしているだろう他の勇者達への裏切りだ。

優しい尚文くんが、そんな事できる訳もない。

いや、その理屈だと仲間を見殺しにする事もできないだろうけど。

ただ、この状況は、選択肢があるようではなかった。

それだけの話だ。

俺は映像水晶をしまい、両手でプライドアックスを握った。

交渉も脅迫も失敗した以上、あとは戦うしかない。

「では、——いくぞ」

超ステータスを活かして、一気に踏み込む。

同時に、霊亀の使い魔とバイオプラント軍団に、中断させていた攻撃を再開させ、兵士達を襲わせる。

場は一気に、話し合いから血みどろの殺し合いへと変わった。

「アクセルスマッシュX！」

「流星盾X！」

俺のスキルは、尚文くんのバリアを硝子細工のように破壊して、そのまま本人を捉えた。

でも、さすがに威力は削られたみたいで、ガッチリと受け止められている。

やっぱり、かなり強くなってるな。

「トールハンマーX！」

「すばいらる・くろーてんー！」

そして、動きの止まった俺に、ラフタリアちゃんと鳥が飛びかかってくる。

避け……ようとしたけど、尚文くんが斧をガツチリと搦んで、すぐには動けない。仕方がないから、左腕で受けた。

「ぐ……！」

痛たた……。

骨にヒビくらい入ったかもしれない。

実際、左腕部分の鎧が砕けてしまってる。

ガーディアンの一張羅が……。

この代償、高くつくぞ！

「パワーブレイクX！」

傷付いた左腕を振りかぶり、渾身のパンチを近くにいた鳥に向けて放つ。

なーに、骨が折れても大丈夫だ。

特製回復薬がある。

「流星壁X！」

お、尚文くんのバリアが鳥を守った。

俺の鉄拳は、それを容易く砕いたけど、勢いが削れた一瞬の隙に、鳥はパンチをかわ

して後ろに下がった。

ラフタリアちゃんは追撃をかけようとしている。

「いい加減離せ。ダークスラツシャーX!」

「ツ!」

斧に闇を纏わせ、それを掴んでいた尚文くんの手を攻撃する。

思わず手を離れた瞬間を見計らい、ラフタリアちゃん目掛けてダークスラツシャーを振り抜く。

「ラフタリアアッ!」

「ナオフミ様!」

それを、尚文くんが身を呈して守った。

二人仲良く吹っ飛ばされて距離が空く。

その間に腰から特製回復薬を取り出し、一口あおる。

それだけで、左腕の怪我は完治した。

残りには大事に腰のポーチにしまって、再びダツシユ。

追い討ちだ。

「シールドプリズンX!」

「効かぬ!」

盾の檻を軽く破壊して突き進む。

そんなやわな盾で、この斧の魔王を止められると思うてか！

「ん？」

と、そこで違和感。

尚文くん達とバトツてて気づかなかったけど、よく見たら兵士達がこの場から撤退して、霊亀に飛び乗ろうとしてる。

そして、メルロマルクの王様は、霊亀の頭を相手に善戦中だ。

あっち、先に潰すべきだな。

俺は進行方向をメルロマルクの王様に定めた。

「!? クズー！」

尚文くんが警告の声を発し、メルロマルクの王様がこっちを向くけど、既に遅い！

その首、刈り取ってくれる！

……と見せかけて。

「ダークスラッシュX！」

「なッ!?」

フェイントオ！

俺はメルロマルクの王様ではなく、追い縋ってきた尚文くん達に向けてスキルを放つ

た。

技を十全に活かす為には、その前の崩しこそが重要。

崩れた体勢では、まともな防御も回避もできない。

ミラやアームストロング大佐に教わった、基本的な戦闘術の一つだ。

やつぱり、才能なくても教わつとくもんだな。

「フロートシールドX！ セカンドフロートシールドX！」

しかし、尚文くんはこれも防いだ。

浮遊する盾が二枚、ダークスラッシャーの前に立ち塞がる。

しかも、その盾は正面ではなく、やや横向きに設置されていた。

ダークスラッシャーが二枚の盾にぶち当たり、砕く。

だが、盾の向きによって進行方向を歪められ、闇の斬撃は無人の場所を通り過ぎていった。

外したか。

「グラビティハンマーX！」

「すばいらる・すとらいく！」

「むう……！」

そして、尚文くんを守られて無傷のラフタリアちゃんが、重力みたいな力で俺の動き

を鈍らせ、鳥が蹴り飛ばした。

ダメージは大した事ないけど、胴体の鎧が砕けちゃった。ガーディアンの一張羅がドンドン破壊されていく……。

おのれえ！

「裁きX！」

「くッ……！」

今度は、メルロマルクの王様が放った魔法に撃たれる。

空から降ってきた光の柱は、結構な威力を持っていた。

痛いわ！

っていうか、霊亀と戦いながら、よく俺にまで手が回るな！

優秀すぎやろ！

「ハアアアアアアア！」

そして、魔法に撃たれて動きが止まった俺を、ラフタリアちゃんと鳥が狙い撃つ。尚文くんが盾となり、二人の血路を開こうとしている。

迎撃。

「ダークスラッシュX！」

「エアストシールドX！ セカンドシールドX！ ドリットシールドX！ ぐ……おお

「おおおおお！」

至近距離からのダークスラッシュャーを、尚文くんは防ぎきってみせた。

渾身の力で軌道を逸らされた闇の斬撃が、またしても誰もいない場所を通り過ぎていく。

そんな尚文くんを追い越して、ラフタリアちゃんが七星武器の一つ、伝説の槌を振りかぶる。

回避……無理だ。

さつき迎撃を選んだ時点で、回避できるタイミングは逃している。

ならば、防御を固めるのみ。

俺は、斧の柄を頭上に持っていき、槌の一撃を防ごうとした。

「はいくいつくー！」

「む……！」

しかし、その防御に回した柄を、鳥が蹴り飛ばす。

ガードが空く程ではない。

でも、確実に体勢が崩れた。

そこに、ラフタリアちゃんの鉄槌が下る。

「ミヨルニルX！」

「ぬ…………お…………！」

重い。

さすがは斧と同じ重量武器。

それも強化された勇者の、必殺技と思われるスキル。

鳥に崩された無理な体勢では、受け、きれない…………！

そして、槌の一撃が俺の防御を突破し、ガーディアンのお尻を、砕いた。

「ダークスラツシャーX！」

だが、そこまでだ。

頭から血が流れるも、致命傷ではない。

反撃のダークスラツシャーで、ラフタリアちゃんを仕留めにかかる。

「流星壁X！」

しかし、それは尚文くんのバリアに阻まれた。

バリアがダークスラツシャーを止めている僅かな時間で、ラフタリアちゃんは跳躍して距離をとる。

凄い反射神経と戦闘センス。

数ヶ月前までは、俺と同じド素人だったくせに。

あーあー。

天才ってやつは羨ましいねー。

「そんな……!」

でも、そんな天才様は、何故か俺を見て顔を青くしている。

見れば、尚文くんも驚愕の眼差しで俺を見詰めている。

なんぞ？

と、一瞬思っただけど、すぐに気づいた。

そうだ。兜が壊れちゃったんだ。

つまり、隠してた俺の素顔が見えちやつてる訳だ。

「あー……。バレちゃったか……。」

ボイスチェンジャーもいかれたみたいで、俺の口から出た声は、加工されていない地声だった。

それもあつて、俺はガーディアンのカヤラを演じるのをやめた。

そうして、俺は初めて、ガーディアンではなくユウとして、尚文くん達の前に、敵として立ち塞がった。

69話

「お……前……！」

「やあ、尚文くん、ラフタリアちゃん。素顔で会うのは久しぶり……でもないか。二週間ぶりくらい？」

正体バレした俺は、開き直ってこのままいく事にした。

本当は、正体バレたら地獄の底まで追いかけれそうだから、最後まで隠し通したかったんだけどなー。

まあ、バレちやつたもんは仕方ないさ。

これも運命だろう。

次に会う時は変装しよう。

「な、なんで……あなたが……！」

「ん？ 決まってるじゃん。俺がガーディアンだったってだけだよ。正体を知った程度で、何を驚いてるんだか」

動揺して、隙だらけだぞ？

なんだい？

「それはね……」

まあ、言っちゃってもいいか。

「――君が主人公だったからだよ。盾の勇者、岩谷尚文くん」

俺は遂に言っちゃった。

原作の主人公に向かつて、原作知識の事を。

尚文くんは怪訝そうな顔をしている。

「君ならわかるんじゃないかい？ 俺と同じ日本から召喚された、色々な物語に詳しいオタクの君なら」

「!? お前……なんでそんな事まで……!?」

「お、やっぱり当たりか。また検証が進んだよ。……まあ、今さらだけどさあ」
軽く肩を竦める。

本当に今さらすぎるな。

でも、説明くらいはしてあげよう。

「君も知ってるんじゃないかな？ 自分の知っている漫画やラノベの世界に転生とか転移する話。俺にとって、この世界は君を主人公にしたライトノベル『盾の勇者の成り上

がり』の設定に酷似した世界なんだよ」

尚文くんが目を見開く。

ラフタリアちゃんと鳥は話に付いて来れてない。

「まさか……！　お前はそれを信じて……」

「ああ、違う違う。俺はこの知識を疑ってるよ。召喚前の知識に踊らされて大失敗した誰かさん達の事も知ってたからね」

言うまでもなく、鍊くん、樹くん、元康くんの三勇者達の事だ。

これは原作知識頼みの情報だったけど、尚文くんが反論しないところを見るに、間違ってるなさそうだな。

そして、俺は話を続ける。

「だから調べた。この世界の事を、特に世界を滅ぼす波と、世界を救う四霊に関してはクドイくらい調べ尽くした。これで騙されてたら仕方がないってくらいに」

竜帝を仲間に取り入れ、国を使って過去の文献を調べ、新・七つの大罪の斧で科学的に立証した。

俺、超頑張った。

誰か褒めて。

「それもこれも、全ては死なない為。殺されない為。俺は死ぬのが怖いんだよ」

俺は君達勇者と違って、ごく一般的な感性を持つ小市民なんだぜ？

歩きスマホでトラックに弾かれるなんて間抜けな死に方をしたけど、激痛を味わって死ぬなんて体験をすれば、普通にトラウマになる。

死ぬのが怖くて怖くて堪らなくなる。

幸いというべきか、カースシリーズに浸食されたおかげで恐怖はだいぶ薄れたけど、それでも死にたくないって思いだけは、ずっとずっと消えなかった。

それだけが、俺の原動力だった。

「だからさー、絶対に勝てない波の黒幕に登場されるのは困るんだよ。波の終焉で世界が滅ぶのは非常に困る。」

原作では君達が謎のご都合主義で倒してた相手だけど、俺はそれ信じてないから。俺にすら苦戦するような君達が、俺なんかとは次元の違う相手である黒幕に勝てる道理はないよ」

はー。

なんか色々吐き出してスッキリしたな。

あと、最後にこれも言っておこう。

「だからこそ、残された道は四霊による世界救済しかなかった。……それなのに、世界を守る勇者のくせに、使命を優先せず、目先の困った人を助ける事だけに必死になって、自

分の手を汚す覚悟もなく、いたずらに四霊を討伐して回る君達は……正直、見てて腹立たしかったよ」

なんだろうか。

ずっと、ずっと、こう言つてやりたかつたような気がする。

そうか。

そうだよな。

今、やつとわかつた。

口に出して、ようやくわかつた。

俺はきつと、尚文くん達が嫌いだったんだ。

俺は死にたくないだけなのに。

死なない為に、慣れない悪役になって、憎まれ役を買つてまで、こんなに頑張つてるのに。

いっつも正義の味方面して現れて、まるで自分は正しいと言わんばかりに俺の計画を邪魔しようとする。

下手に性格を知つてるもんだから、説得もできない。

勇者だから、下手に殺せない。

排除できない最大の邪魔者達。

ある意味、タクトや黒幕の神以上に厄介な存在だよな。

アハハ。

こうして並べてみると、嫌うに足る理由が山のようにあるじゃないか。

なんで、今まで自覚がなかったんだろうか？

心のどこかで、尚文くんの方が正しいって認めてたからかな？

……くつつつだらねー。

魔王なんて呼ばれる事やつてる時点で、正しいとか正しくないとか、そんな事は関係ないだろうに。

いや、まあ、この感情を自覚しなかったおかげで、ナチユラルに尚文くんの周りをうろちよろできたと考えれば、あながち悪くはなかったのかもしれない。

なんという皮肉。

そして、それは、この斧に宿る精霊の考えと同意見だったんだよなあ。

世界を救う事を第一に考えない四聖……いや、聖武器の精霊達に憤りを感じていた。

だからこそ、聖武器の補助でしかない七星武器……眷属器の精霊に過ぎない身でありながら、行動を起こした。

勇者としての適性は度外視で、とにかく眷属器が聖武器に抗える手段であるカーズシリーズに侵される可能性が高く、どんな手段を使っても世界を救ってくれそうな奴を

勇者に選んだ。

俺は精神が弱いから、それを補強する為にカースシリーズに侵されやすい。

俺は死ぬのが怖いから、カースシリーズでタガが外れれば、手段を選ばずに自身の生存を、つまり世界の救済を望む可能性が高い。

それこそが、どこまでも一般人で、どこまで行ってもモブでしかなかった俺が、斧の勇者に選ばれた理由だ。

……ん？

「お前は……」

「どうやら、お喋りの時間は終わりみたいだね」

視界に表示されてる青い砂時計に変化があった。

「8」と「9」の砂時計が明滅している。

鳳凰と麒麟がやられたらしい。

他の勇者達が上手くやりやがったな。

残るは霊亀だけだけ……どうだろう？

大丈夫かな？

メルロマルクの王様がやたらと優秀なせいで、頭の方は、いつやられるかわかったもんじゃない状態なんだよなー。

体内のコアの方は、向かってるのが雑魚な兵士ただだから、多分、大丈夫だと思うけど確証はない。

もしかしたら、兵士の中に一騎当千の武士ものぶがいるかもしれない。

ここで万が一にでも霊亀がやられたら、かなりヤバイぞ。

……仕方ない。

奥の手を使うか。

できれば使いたくなかったけど、使わずに失敗するよりは百倍良い。

俺は尚文くん達とは違う。

最終手段の使い時を見誤ったりはしないのだ。

「やるぞ、イグニ」

『おうー!』

俺が呼び掛けた瞬間、イグニからテレパシーが届いた。

竜帝の欠片を集めるうちに、いつしかイグニが使えるようになっていた技能だ。

まあ、それはどうでもいい。

俺は、ガーディアンの鎧の上半身部分の中で、唯一破損しなかった箇所である、右腕の鎧を自ら外した。

「なんだよ……その腕は……!?!」

「これかい？　これは俺の奥の手さ。文字通りの意味でな！」

鎧を外した右腕は……竜の鱗に覆われていた。

そして、手の甲の部分に、宝石のようなものがハマっている。

これは、イグニの竜帝の核石。

新・七つの大罪の斧の力の一つ、人体実験の力によって、俺の右腕に移植しておいたものだ。

この封印されし右腕の力を、今こそ解き放つ！

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

俺は雄叫びを上げて気合いを入れた。

同時に、右腕に凄まじいエネルギーが集中しているのを感じる。

気を抜けば乗っ取られてしまいそうな、膨大なエネルギーの奔流を。

バキン！

俺の耳に、勇者達の耳に、彼らにとっての絶望を知らせる音が鳴り響いた。

それは、最後の封印が解けた音。

最終兵器の目覚めの声。

そして、——視界に「10」という数字の刻まれた、新たな青い砂時計が表示された。

70話

力が荒れ狂う。

体内で解放した、最後にして最強の四霊「応竜」の力が、俺の中で暴れ回っている。

下手したら、意識を乗っ取られそうだ。

「カースプロテクト！」

それを、カースシリーズの力で無理矢理抑え込む。

神の力も、聖武器による干渉すらも断ち切る呪いの力は、応竜すらも抑え込み、その力のみを俺に与える。

応竜の、最強の四霊の力によって、俺の体が歪に変形していった。

右半身に大きく残った傷痕。

かつて、タクトに付けられた古傷の部分を、竜の鱗が覆っていく。

背中から翼が生え、腰から尾が生え、顔の右側から角が生える。

右目の色も変わっているだろう。

そして、右腕は巨大な竜の頭部へと変わった。

「……………ふう。どうだ、イグニ？」

『頭がいてえ！　だが、予定通り応竜を制御できてるぜ！　長くはもたねえだろうがな！』

「そうか」

どうやら、イグニの自我も問題なく残ってるみたいだな。

奥の手の発動は成功だ。

大量の被験者を使って人体実験を繰り返した甲斐があった。

フツフツフ。

俺は変身を残していたのだよ！

なんで、素直に応竜を解放しないで、こんな面倒な手段を使ったのかって？

簡単だ。

四霊だけじゃ勇者達に阻止される可能性があると思っただからだよ。

原作の外伝において四霊が同時復活した時も、かなり際どい攻防だったしね。

実際、移動チートを持つフィトリアあたりが生きてれば、もつと早い段階で追い詰められてたと思う。

じゃあ、どうするか？

そうして頭を悩ませた末に思いついたのが、この方法だった。

俺の仕事は四霊を護衛し、世界の救済を成し遂げる事。

なら、一番確実に護衛対象を守れる方法はなんだ？

断言しよう。

それは、俺自身が四霊になる事だ！

冗談でも何でもなく、本当にこれが最善の方法だったんだよ。

自分で言うのもなんだけど、俺は強い。

全ての強化方法を実践し、Lv1000を突破した勇者だ。

ステータスだけなら、世界最強と言っても過言ではなからう。

そんな最強な俺に竜の力をプラスするという暴挙。

鬼に金棒どころの話じゃない。

完全に撃破不能だ。

確実に護衛したいなら、護衛対象を最強無敵にしちやえば良いじゃない。

まあ、長時間の変身は無理だから、使いどころに悩む切り札だけでも。

そう、長時間はもたないんだよ。

だから、この無敵状態のうちに、一人でも多く脱落させなければ。

俺は翼をはためかせ、遙か上空へと飛び上がった。

生まれてこのかた、自力で空を飛んだ事はなかったけど、同化したイグニの竜帝の欠片が飛び方を教えてくれる。

始末だ。

とつと尚文くんを殺っちまった方が良い。

でも、焦るな。

まず優先すべきは、数を減らす事だ。

俺は翼に力を籠め、一気に降下する。

強酸の雨が体にかかるけど、俺の防御力の前には普通の雨と変わらない。

鎧すらも溶けないし。

そして、降下と同時に、再び応竜の力を使う。

竜頭が開き、そこからブレスを放つ。

「サイレント・ブレス！」

カッと光が瞬いた。

回避困難な、光のブレス。

攻撃力自体は大した事ないけど、これの真骨頂は追加効果。

技名の通り、近くにいる相手を問答無用で状態異常「沈黙」にする。

これにかかると声を出せず、魔法もスキルも使えなくなるという、とてつもなく厄介な状態異常である。

勇者の耐性なら、治療薬を飲んで即座に回復できるだろうけど、どうしても無視でき

ない隙ができる。

その隙を突いて狙うのは……お前だ！

俺は兵士達を指揮しているメルロマルクの王様に向けて飛翔した。

この人は杖の勇者。

つまり、魔法戦闘に特化した勇者。

それが魔法を封じられたら、俺の相手は務まらないぜ！

「クズー！」

早速、状態異常を治したらしい尚文くんが声を上げるけど、もう遅い！

死ぬがよい！

「パワーブレイクX！」

竜頭を拳に見立てて繰り返し出したスキルで、メルロマルクの王様を覆っていた尚文くんのバリアを突き破る。

どうも、このバリアは全部連動してるみたいで、一つ壊したら、他の人に展開される分も壊れた。

守りを失った兵士達が強酸の雨に焼かれてい死んでいく。

そして、死ぬのはあんたも同じだ、メルロマルクの王よ！

「極炎ブレス！」

イグニの必殺技、大雨の中でもまるで威力を落とさない紅蓮の炎を至近距離から浴び、——メルロマルクの王様は死体すらも残らずに焼失した。

彼がいた場所に光が集まり、七星の杖が光となって空に飛んでいく。

厄介な勇者を一人消せた。

これで、この場に残る勇者は、——あと三人。

71話

「クズ……」

一瞬で焼失した王様を見て、尚文くん達が沈痛な表情を浮かべる。

悲しんでる場合じゃないぜ？

次は君達の番だ！

「ダークスラッシュX！」

右腕が竜の頭になってるから、仕方なく左腕一本で斧を振るう。

しかし、応竜のステータスまでプラスされた今の俺の力は、さっきまでとは比べ物にならない。

片手だというのに、放ったダークスラッシュの威力は凄まじく、変身前のカオスインフイニティを軽く超えている。

それを見て、受け止めるのは無理と判断したのか、尚文くん達は回避を選択した。

距離があつたせいで普通に避けられたわ。

でも、ダークスラッシュは余波だけで尚文くん達を吹き飛ばし、何とか生き残つていた兵士達を消し飛ばして、大地にグランドキヤニオンもかくやという大峽谷を作り出

した。

……インフレが凄まじいな。

俺はいつからド○ゴンボールの世界に来てしまったんだろうか？

思わず、そんな事を考えてしまうレベルだ。

しかーし！

インフレ大いに結構！

敵がやったらふざけんんだけど、自分がやるならバッチコイだ！

このまま、ぶっ殺してやるぜえ！

「ダークスラツシャーX！ シャインアックスバーストX！」

これで、まずはカオスインフィニティが完成した。

しかし、今回はこれにひと味加える。

竜頭に魔力を集中し、エネルギーブーストを使って、力を溜める。

更に同時並行で魔法を詠唱。

数秒をチャージ時間に費やし、その必殺スキルを発動する！

「極炎ブレス最大出力！ リベレイション・バスターストームX！ 混合スキル、カオス

インフェルノ！」

カオスインフィニティに、更に最大出力の極炎ブレスと、その炎を増幅させる風の最

上位魔法まで追加した超火力スキルをぶっ放つ。

斬撃の形をした混沌の炎が、全てを断ち切り、焼き尽くさんと直進していく。さっきのダークスラッシュャーとは比べ物にならない高威力、高範囲攻撃！

斬撃と言っても、もはやデカすぎて完全に別物である。

星を両断するんじゃないかと思えるような、極大のエネルギー波だ。

実際に星を両断する程の威力はないだろうけど、それでも軽く半径数百キロを焦土にできる破壊力を有していそう。

正直、あまりのインフレ攻撃力に、撃った俺自身がビツクリした。

だが、これで詰みだ。

威力が高すぎて、防ぐ事は不可能。

効果範囲が広すぎて、避ける事も不可能。

おとなしく死ねええええええ！

「0の……！」

最後に何かスキルを発動させながら、尚文くん達は混沌の炎に呑み込まれていった。

やったか？

なんて言わない。

そんな、あからさまな生存フラグは立てない。

確実に殺った。

変身前の攻撃ですら、直撃すれば大ダメージを負うような防御力で、この一撃を防げる道理はない。

それに、今ので遠く離れた場所に避難していた人達まで殺せた。

応竜と一体になった今、俺には結界生成に必要なエネルギー量がなんとなくわかる。

今、殺した分で、九割九部エネルギーを集め終わった。

あと一押しだ。

もう一、二発、カオスインフェルノをどこぞに向けて放てば、全てが終わる。

長かった……。

召喚されてから、早数ヶ月。

そう考えると、そんなに長い時間でもないな。

それでも、神の影に、逃れられない死の影に怯えて過ごした時間は、とても長く感じた。

それが、遂に終わる。

この手で、今、終わらせる。

「くや……！」

斧と右腕に力を籠め、魔法を詠唱し、カオスインフェルノの発動準備をする。

これで……終わりだあああああ！

「とー！」

……は!?

さつき消し飛ばした場所から、気の抜けそうな掛け声を上げながら、何かが飛び出してきた。

鳥だ。

尚文くんの鳥だ。

背中には、尚文くんとラフタリアちゃんも乗っている。

バカな!?

なんで生きてる!?

いや、考えるのはあとだ！

迎撃優先。

今の彼らからは、なんだか嫌な感じがする。

何故か、背筋が凍りつくような悪寒がする！

俺は発動に少し時間のかかるカオスインフェルノをキャンセルし、単発のプレスで迎

撃した。

「極炎ブレス！」

「0の盾！」

「何ッ!？」

尚文くんが掲げる盾が、ピカッと光を放った瞬間、——迎撃に繰り出したブレスが
き消された。

「こんな事が……!？」

「いや、そうか！」

あのスキル、神殺しの！

原作において、かすり傷程度とはいえ、神に手傷を与えたスキル。

神以外に対しては全く効力を発揮しないが……神に近い性質を持つ
ドラゴンには有効！

「マズイ！」

「0の槌！」

「0の爪——！」

「ぐッ……!!？」

通り抜きざまに繰り出された、ラフタリアちゃんと鳥のスキルが、俺にダメージを与

ない。

決して、戦況が逆転した訳じゃない。

あくまで、彼らは俺の攻撃に耐えられるだけの防御力と、俺にダメージを通す攻撃手段を手に入れただけ。

ただ、俺が無敵じゃなくなっただけ。

変身前と同じだ。

いや、変身前よりも力の差は離れている。

俺の優勢に変わりはない。

なら、殺せる！

「霊亀イイイイー！」

そして、有効な攻撃手段はもう一つある。

メルロマルクの王様も兵士達もいなくなり、手の空いた霊亀を俺のサポートに回す。

霊亀はドラゴンじゃない。

その攻撃は、普通に通用する筈だ。

霊亀のブレスが尚文くん達に襲いかかる。

それに合わせて、俺も遠距離攻撃スキルを放ちながら追撃する。

中々当たらないけど、効果がない訳じゃない。
たまにかすってるし、そうじゃなくても体力は削れる。

戦いは佳境を迎えていた。

そして、終わりに向かって、戦いは加速し続ける。

決着の時間が訪れるまで、——あと僅か。

7 2 話

雨あられと放った攻撃スキルの数々を、尚文くん達はひたすら避け、防ぎ、耐える。勇者のスキルだけでなく、応竜の力も全開にして攻め続ける。

あの神殺しのスキルも常時発動できる訳ではなく、発動したとしても、勇者の力の混ざった応竜の力を完全に遮断する事はできない。

永続攻撃である強酸の雨も降り続けているし、時間が経てば経つ程、こっちが有利になつてるといふ確信がある。

特に、尚文くん達の機動力の要である、鳥の消耗が激しい。なにせ、ひたすらに全力ダッシュで逃げ続けているんだ。

いつ潰れてもおかしくない。

鳥が限界を迎えた時が、尚文くん達の最後だ。

でも、そんな事は向こうだって百も承知。

当然、そうなる前に決着をつけにくる。

こっちだって、そろそろ応竜を抑えてられる限界が近いし、短期決戦は望むところだ。

そして、——鳥が軌道を変えた。

今までの逃げる動きをやめ、ダメージ覚悟でこっちに向かってくる。

「ダークスラッシュX！ 極炎プレス！ 混合スキル、ダークインフェルノ！」

「流星壁X！ 0の盾！」

カオスインフェルノは地味にチャージ時間がかかるので、そのワンランク下のスキルで迎撃する。

それでも、威力は十分。

神殺しのスキルで補強した尚文くんのバリアを貫き、燃え盛る黒い炎が尚文くん達を焼いていく。

あのバリアの反動で、もはや尚文くんはボロボロだ。

しかし、まだ倒れない。

尚文くんは、身を呈して仲間を守っている。

実にしぶとい。

まるでゴキブリのようだ。

「スターダストアックスX！」

「流星盾X！ 0の盾！」

追撃。

またしてもバリアを張られて防がれる。

バリアは砕いたけど、トドメを刺すには至っていない。

だが、ここで遂に鳥がダウンした。

疲労とダメージが限界に達し、倒れる。

鳥の背中に乗っていた二人が投げ出された。

「フイーロー！」

「チャンス！」

尚文くん達の機動力が死んだ！

今こそ、大技を叩き込む絶好のチャンス！

逃しはしない！

「ダークスラッシュァーX！ シャインアックスバーストX！」

さつきと同じように、カオスインフェルノの発射態勢をとる。

カオスインフィニティを完成させた後に、竜頭に力を集中し、ブレスの威力を最大にまで上げ、リベレイション・バスターストームの詠唱をする。

弱りきった尚文くん達に、あのインフレ攻撃力を二度も耐える力は残されていない。

今度こそ終わりだあ！

「極炎ブレ……」

「うううううううううううう！」

だが、俺がカオスインフェルノを放とうとした瞬間、鳥が最後の力を振り絞ったのか、単騎で突撃してくる。

そのまま、発射直前のブレスを阻止するように、俺の右腕目掛けて、七星の爪を振り抜いた。

「0の爪ー!」

「ぐあッ……!?!」

完全に攻撃態勢に入っていた俺は、それを避ける事ができず、鳥の爪が俺の右腕を切断して、竜頭が宙に舞う。

竜頭に集中させていた力が霧散する。

攻撃のせいで詠唱も中断してしまった。

これじゃ、カオスインフェルノは不発だ!

だが、応竜の生命力をなめるなよ!

「何ッ!?!」

遠くで見ていた尚文くんが驚愕の声を上げる。

それも無理はない。

なにせ、俺の右腕と竜頭の断面がスライムのように蠢いて、何事もなかったかのようにくつついたのだから。

鳳凰が身体を炎にして再生したように、応竜は水となって再生する！

この程度の傷なら、HPが減るだけで致命傷にはならないのだよ！

そして、詠唱が中断され、極炎ブレスがキャンセルされて最大火力こそ失われたが、左手の斧はカオスインファイニティの発射準備が完了している。

全ての力を出し尽くし、ぐったりとした鳥にこれを避ける事はできない！

まずは、一つ！

「カオスインファイニティ！」

「……あ……」

「フイーロォー！」

掠れた声を残して、鳥は混沌の斬撃に呑み込まれて果てた。

鳥のいた場所に光が集まり、七星の爪が光の珠となって空へと飛んでいく。

殺った。

残り二人！

「くそッ……！ シールドプリズンX！」

「なッ……!?!」

しかし、鳥の犠牲を無駄にはしないと云うかのように、斧を振り抜いて動きの止まった俺を、盾の檻が包み込んだ。

だが、こんなもん、すぐに壊して……

「0の盾！」

「んなツ!?!」

マジか!?

檻自体が、あの神殺しの光を放ちやがった!

それが、俺の動きを一瞬止める。

「チエンジシールド(攻)！」

檻を構成する盾の種類が変わり、内側に無数の針が出現した。

この流れは……マズイ!

『その愚かなる罪人への我が決めたる罰の名は、鉄の処女の包容による全身を貫かれる一撃也。叫びすらも抱かれ、苦痛に悶絶するがいい!』

「アイアンメイデンX！」

「ぐあああああああああああ！」

針の山が、内部の俺を突き刺し穴だらけにする。

凄まじい激痛!

さすが処刑器具!

しかも、なんかこの針山まで神殺しの光を纏ってやがる!

俺の防御力も、応竜の生命力すらも貫いて、俺の体に大ダメージが入った。
スキルの効果が切れ、檻が消える。

俺の全身は……血にまみれていた。

「ま……ただ……！」

それでも、倒れる訳にはいかない！

俺は！ 死なない！

誓ったんだ！

全てを踏みにしてでも生き残ってやるって！

約束したんだ！

必ず、生きて帰るって！

だから、倒れる訳には、死ぬ訳にはいかない！

「ハアアアアアアアアア！」

瀕死の俺に、ラフタリアちゃんが突撃してきた。

涙を流しながら、槌を振りかぶり、俺を殺しにきている。

その涙は果たして、何を思っ流しているのか。

……どうでもいい。

向カツテクル敵ニハ、死、アルノミダ。

「0の槌！」

「ダークスラツシャーX！」

槌が神殺しの光を放ち、斧が呪いの闇を纏う。

——プライドアックスX。

最も長く使ってきた、俺が最も信頼する呪い武器が、神殺しの力を迎撃する。

光と闇が激突し、そして……

——遂に、決着はついた。

7 3 話

最後の攻防の末に、——立っていたのはラフタリアちゃんの方だった。

フルスイングされた槌が、崩れた体勢の上に片手で振るった斧に押し勝ったのだ。

俺は吹き飛ばされ、無様に地面に転がって空を見上げている。

もう動けない。

変身も制限時間に達し、応竜は事前に仕掛けた通り、再び竜帝の欠片の中へと封印された。

「10」の砂時計は、鎖が巻き付くような表示がされた後、沈黙して消える。

同時に、降り続けていた強酸の雨もやんだ。

「俺の……負けか」

見れば、霊亀も活動を停止していた。

でも、それは決して、討伐されたからじゃない。

役目を終えたからだ。

霊亀の中から青い龍刻の砂時計が出てきた。

物質をすり抜けるように霊亀の中から出てきたそれは、空へと浮かび上がる。

その砂は、いつしか満タンにまで溜まっていた。

パアアアアと、青い砂時計から青い閃光と共にドーム状の何かを展開されていく。

何かとは言うまい。

あれこそが、波の脅威から世界を救う結界だ。

遂に、遂に完成した。

これでもう、神の影に怯える必要はなくなる。

世界は救済されたのだ。

「満足か？」

見れば、尚文くんが俺を見下ろすように立っていた。

もうボロボロだ。

隣にはラフタリアちゃんの姿もある。

こっちもボロボロだ。

戦う力なんて、残ってなさそう。

「満足な訳ないでしょ。帰るまでが遠足。生きて帰るまでが俺の計画だよ。ぶっ倒され

てちゃ意味ないわ」

俺の計画はまだ完遂していないのだよ。

なんとかして、この場から生きて帰らないとな。

「満足かって、それはむしろこっちのセリフだよ。満足かい？ 世界救済の邪魔をして、大事な仲間を沢山失って、一応は救世主な俺をボコボコにしてさあ」

尚文くん達に恨み言を漏らす。

ホント、客観的に見れば、尚文くん達のやった事は、骨折り損のくたびれ儲けでしかないよね。

しかも、折った骨は取り返しのつかない大切なものばかり。

マジで、何がしたかったんだよ？

「……満足な訳ないだろう。俺は、俺達は理不尽な事から一人でも多くの人々を救おうとした。だが、結果はこの通りだ。……お前の言う通り、俺は綺麗事の為に動いて、沢山の仲間を失っただけの間抜け。勇者失格だよ」

「ナオフミ様……」

尚文くんは、凄く悔しそうにそう言った。

おもいつきり拳を握りしめて、歯も食いしばってる。

勝者の顔じゃないなあ。

いや、尚文くんは俺を倒したけど、勝利条件を満たした訳じゃないから勝者じゃないか。

むしろ、負け犬に近いかも。

「ユウさん……どうしてこんな事をしたんですか」

お、今度はラフタリアちゃんが話しかけてきた。

やりきれないって顔してる。

俺への悪意も、あるようなないような、不思議な状態だ。

色々あつた上に複雑すぎて、感情が追い付いてないのかもね。

「言つたでしょ。俺は死にたくなかつたんだよ。この世界に召喚される前にトラック……デカい馬車みたいな物に撥ね飛ばされて死んじゃつてね。あれは痛くて怖くてトラウマものだった」

どうせ動けないし、せつかくだから、このまま話をするのもいいかもね。

魔王を倒した勇者には、魔王の動機を知る権利くらいありそうなもんだし。

「でさ、俺が持つてる知識だと、斧の勇者は召喚されてすぐに死んじゃうんだ。怖かつたよ。また死ぬんじゃないかって恐怖に押し潰されそうで、仲間も信じられなくて。」

そしたら、案の定というか、冒険開始から一週間くらいで仲間を殺されかけてねー」
アルバさんとパールちゃん。

今となつては懐かしいな。

「その時、カースシリーズに目覚めてタガが外れたというか、そんな感じだよ。死にたくない。だから、全てを踏みにじつても生き残つてやる。その思いだけでずっと生きて

きた」

でも、ふと冷静になってみると、——俺って何の為に生きてるんだろう？

……死なない為に生きてるとしか言えないな。

なんか、生きた屍みたいで、あんまり価値のある人生とは言えないかもしれない。

「それは……とても悲しいですね」

ラフタリアちゃんが同情するような目で俺を見ていた。

よく見たら、尚文くんも似たような目をしてる。

ハハハ。

優しいなあ。

「大虐殺をやらかした魔王相手にそれって……前から思ってたけど、君達はちよつと優しすぎるね。」

最初の波の時も、次の波の時も、霊亀の時も、鳳凰の時も、今回も。なんだかんだで人を助ける為に働きすぎだ。そんなんじや、いつか俺みたいな奴に殺されちゃうよ?」

「……余計なお世話だ」

「そつか。まあ、せいぜい気をつけてね」

……さて、お喋りもそろそろ終わりかな。

「君達は、俺をこの後どうするつもり?」

「今回の騒動の犯人として世界に突き出す。その後は知らん」
「アハハ。それ、公開処刑まつしぐらじゃないか。やだなあ」

そんな未来は、ノーサンキューだぜ。

「ねえ、尚文くん」

「なんだ」

俺はこんな状況なのに、笑って尚文くんに告げた。

なんで、笑ってられるのかって？

それはね……

「やっぱりさあ、——切り札は最後まで残しておくものだよね」

俺には助かる自信があるからだよ。

その言葉を言い切った直後、どこからか飛んできた超威力の水の魔法が、尚文くん達に直撃した。

俺との戦いで弱りきってた尚文くん達には、これを避ける事も防ぐ事もできなかつた。

二人は驚愕の顔でそのまま吹っ飛んでいき、地面に叩きつけられる。

俺は、魔法が飛んできた方向を見た。

そこは、霊亀の甲羅に乗った山の上。

いくら内部を探索しても辿り着けず、応童復活によって水没した時にも無事なように設計した部分。

そこに、俺の最後の切り札が立っていた。

メイド服を着て、魔法の杖を持った彼女は、あらかじめ渡しておいたバイオプラントの種を使って、空戦型のバイオプラントを生み出し、それに乗って俺の方に向かってきた。

「お前は……!?!」

『我、杖の勇者が天に命じ、地に命じ、理を切除し、繋げ、膿を吐き出させよう。龍脈の力よ、我が魔力と勇者の力と共に力を成せ。力の根源たる杖の勇者が命じる。森羅万象を今一度読み解き、彼の者を大いなる水の力で押し流せ』

「リベレイション・アクアプラストX」

「なツ……!?! 流星壁X!」

……ふあ!?!

なんか、予想外の事になってるんですけど!?!

え? リベレイション? 杖の勇者?

……マジでか。

「ユウ様、今のうちに」

「あ、うん。……いや、ちよつと体が動かないから、乗せてくれない？」

「……はあ。かしこまりました」

仕方ないとばかりにため息を吐きながら、彼女、ミラは俺をお姫様抱つこでバイオプラントの上に乗せてくれた。

さっきの魔法で流されてしまった尚文くん達に、これを止める事はできない。

逃走成功だ。

あばよ、とつつあん！

「じゃあねー！ 尚文くん、ラフタリアちゃん！ もう二度と会わない事を祈るよ！」

「ま、待て……！」

「ああ、そうだ。人質にした人達は実は殺してないんだ。だから、返してあげるよ。その代わり、俺達の事、探したり追いかけて来たりしないでね！」

一方的にそう言い捨てて、バイオプラントはぐんぐん上昇していく。

イグ二程じゃないけど、このバイオプラントも中々に高性能なのだ。

つまり、結構な速度が出る。

すぐに、尚文くん達の姿は見えなくなつた。

そうして、俺が転送スキルを使えるくらいに回復するまでの間、ミラと空の旅を楽しんだ。

さすがに、神ならざる身で神殺しの力を何発も受けたダメージは大きく、杖の勇者となったミラの回復魔法でも、中々治らなかつた。

こうしていると、タクトに付けられた傷を治してくれてた頃を思い出すなあ。ていうか、

「いつの間に杖の勇者になってた訳？ 驚いたわあ」

「霊亀の中でユウ様の戦いを見守っていた時、突然この杖が飛んできたんですよ。むしろ、私の方が驚いています」

それを軽々と使いこなすお前もどうかと思うけどね。

勇者に成り立てのくせに、俺があんだけ苦労して覚えたりベレイションを普通に発動させるとか……。

これが才能の差か。

七星の杖がミラを選んだ事に関しては、驚きはしたけど、不思議には思わない。鞭がソラちゃんを選んだのと同じ理由だろう。

武器の精霊も、俺サイドに付くか、尚文くんサイドに付くかで、結構揺れてたって事

だ。

で、鞭と杖はこつち派だったんでしょ。

杖は前の持ち主に入れ込んでたつて話だし、あのメルロマルクの王様が生きてる間は義理を通して、死んでからミラを選んだつてところかな？

「まあ、いいや。なににせよ、約束通り生きて帰れる訳だし。計画は達成だな」

「まだ帰りついた訳ではありませんよ。気は緩めないでください」

「はいはい。わかっているって」

今や、俺はとんだ大罪人だしな。

しかも、現在は滅茶苦茶弱ってる。

襲撃されたら死ぬわー。

早くジャイアントプラントの中に帰りたいね。

で、帰ったら、とりあえずイグニを俺の体から分離してあげないとな。

ずっとこのままってのは不便だし、幸い、今は疲れて寝てるから、起きる前に終わらせてやりたい。

「あ、そうだ。ミラはこの後どうするんだ？」

俺はずつと気になってた事をミラに聞いた。

「この後とはっ？」

「いや、計画は終わったし、アックスフォードに戻るのか、隠居生活する俺に付いて来るのかって話。……まあ、ガッツリ俺に協力するところ見られちゃったから、アックスフォードに戻った場合、尚文くん達に殺されるかもしれないけど」

そこ問題だよな。

「はあ……。選択の余地がないじゃないですか。当然、ユウ様にお供させていただきます。あなたを放置してもろくな事にならなそうですし。お目付け役は必要でしょう」

「うわあ。酷い言い方」

まあ、魔王の大虐殺をやらかした手前、反論できないな。

ぐうの音もでねえぜ。

「じゃあさ、その更にはどうする？」

「更には……ですか？」

「うん」

と、ここで、俺はミラにこの先の人生計画を話した。

「ほら、俺って晴れて大罪人になっちゃった訳だし、これからは自由にお天道様の下歩けないじゃん？ 少なくとも、尚文くん達が生きてるうちは無理。見つかったら殺されちゃう。だからこそ、基本ジャイアントプラントの中で隠居するしかない訳だよ」

別名、引きこもりだな。

「でも、そのまままで人生終えるのも嫌だからさ。新・七つの大罪の斧の力で、寿命を伸ばそうと思ってるんだ。人体改装すれば寿命くらい伸ばせるだろうし。」

せつかく頑張つて生き残つたんだから、百年か千年かわかんないけど、気の済むまで生きてみたいと思うんだよ」

幸い、一人ぼっちにはならないだろう。

竜帝であるイグニは不老だし、半分不死身だ。

殺されでもしない限り、俺より先に死ぬつて事はないと思う。

でも、俺は……

「そこでお願ひなただけど。……ミラ。俺と一緒に生きてほしいんだ」

一番最初に助けてくれたこの子と、一緒に生きたいと思った。

別に色恋とか、そういうんじゃないよ。

なんていうか……そう、ただ一緒にいたいと思ったんだ。

こんな犯罪者がなに言つてんだとも思うけど、残念、俺は傲慢なんだ。望んだ事は、叶えたいと思つちやうんだよ。

「……なんですか、それ？ プロポーズですか？」

「いや、そういうんじゃないよ」

そう言うつと、ミラは何故だか肩を落としていた。

どうした？

「……いいですよ。ユウ様のような危険人物を残して逝くのは心配ですし。生きると言うのならば、どこまでもお付き合います」

「……そっか。じゃあ、これからもよろしく頼む」

「かしこまりました」

——こうして世界は救われ、俺は使命から解放されて、新しい人生を歩み始めた。

今までは、ただ死なない為に生きてきた無価値な人生。

これからの事で、それが少しでも価値あるものに変わる事を祈る。

そうして俺の大冒険は終わり、魔王の役目もまた終わった。

そして、俺にとっての平和な時代が訪れたのだった。

74話

あれから数年が経過した。

四霊結界は、今もすっかりと世界を守ってくれている。

波は起きていないし、神の影も見えない。

結界が壊される様子もない。

実に平和だ。

「ユウ様、国王様からの定期連絡です」

「なんだって?」

「いつも通り、今のところは問題なしとの事です」

「そっか」

アックスフォードも変わりないみたいだな。

あの時、四霊によって世界中が滅茶苦茶になった時。

首謀者である俺の片棒を担いだアックスフォードだけが、ほぼ無傷の状態で大虐殺を乗りきった。

他の国は完全崩壊か、よくて半壊くらいの被害が出たというのに。

世界最大の国だったフォーブレイは、麒麟による直接的な被害を受けて崩壊。

勇者達の所属国だったメルロマルクは、霊亀と応竜おれが暴れまわったせいで崩壊。

他の国も、縦横無尽に世界中を駆け抜けた鳳凰と、各四霊の使い魔の襲撃によつて半壊、あるいは崩壊。

結果として、アックスフォードは世界で最も力を残した国となり、繰り上がりで世界最大の国となった。

復興にはアックスフォードの力が必要であり、いくら大虐殺に加担した疑いがあるうとも、潰す訳にはいかない。

そもそも、アックスフォードは戦力のインフレが激しすぎて、疲弊しきつた他の国の戦力じゃ、どう足掻いても倒せない。

勇者達なら何とかなるかもしれないけど、激戦になるのは確実だし、勝つても何にもならないからね。

ちよつとばかり、彼らの鬱憤が晴れるだけだ。

それも、多大な犠牲と引き換えに。

さすがの尚文くん達も、そんな愚かな選択はしなかった。

そのおかげで、世界はこれ以上の争いが起こる事なく、順調に復興を進めている。

俺達は基本的にジャイアントプラントの中に引きこもり、

アックスフォードからの報告で外界の様子を知ったり、
たまに魔法や特殊なアクセサリーで変装して外に出たりしながら、まるで世界の観測者みたいな生活を送っている。

優雅な隠居暮らしって感じだ。

尚文くん達に見つかつたら殺されるつてところがスリリングで嫌だけどね……。

で、やつぱり殺されるのは嫌なので、今は尚文くん達に見つかつても大丈夫なように、防衛の為の戦力を整えてる感じだ。

拠点もこのジャイアントプラントだけじゃなくて、緊急避難用にくつつか作っておいた。

危なくなつたら、そつちに逃げればいい。

これで、俺達の身の安全はひとまず保証されたと言えるだろう。

「帰つたぜ、ご主人！」

「おー、おかえりー」

イグニの声が聞こえたので、俺は研究の末に完成させた、人を駄目にする感じのソファアーに寝そべつたまま返事をした。

あいつは相変わらずだ。

縄張りの巡回をして、配下を適当に管理して、たまに人化して人里に飯を食いに行く。

俺と同じで、実に平和を謳歌していやがる。

自由気ままとは、あの事だろう。

唯一の懸念は尚文くん達に見つかって討伐されちゃう事だけど……今のあいつは相当強いし、勇者を筆頭にした大規模な討伐隊でも組織されない限りは負けなと思う。いざって時は、俺達と一緒に逃げればいいし。

うん。何の心配もいらぬな。

「ご主人、またそれやってるのか？」

「まーなー。他にやる事もあんまりないし」

イグニに指摘されて、自分が今やってる事を再確認する。

人を駄目にするソファアに寝そべりながら、肩にかけてるのは、新・七つの大罪の斧。いじってるのは、タブレットみたいな操作パネル。

これでやっているのは、新しい四霊の作成と強化だ。

三代目霊亀、三代目鳳凰、二代目麒麟、つてところかな。

それというのも、四霊結界は決して永遠に続く代物ではないからだ。

もちろん、かなり長い時間を稼いでくれるのは間違いない。

軽く計算してみたけど、最低1000年は安泰だ。

でも、その先は保証ができない。

俺が1000年先まで生きてるのはかは知らないし、1000年も経てば神も諦めて他の世界に行ってくれるとは思う。

でも、確証はない。

神が予想より執念深いかもしれないし、他の神が攻めて来るかもしれない。その時に、もし俺がまだ生きていたら、やっぱり死なない為に動くと思う。

なら、今回みたいに確実に世界を救える手段は必要だ。

だつて……

俺はチラリと、ミラの方を見た。

ジャイアントプラントの中に設置したキツチンで、あの猟奇的な料理を何とか改善しようとして頑張っている杖の勇者を。

……俺にも、自分の命以外に守りたいものが出来たからなあ。

死なない為にも、守りたいものを守る為にも、それに見合った力がある。

拠点防衛の戦力と自分達の強さは、恨みを買った勇者達から身を守る為の力。

新しい四霊は、神という理不尽極まりない存在から、自分の大切なものを守る力。

いぎ、波みたいな災害や、人間どうしの争いが起こった時、そういう力のない奴から死んでいく。

ここは、そういう世界だ。

だから、俺は力を欲する。

平和の中でも、もしもの時に備えて力を蓄え続ける。

まあ、四霊に関しては、もうちよつと効率的な手段がないか、有り余る時間で研究してみるつもりだけど。

さすがに、何回も大虐殺やって恨みを買うのも心臓に悪いしね。

「なあなあ、ご主人」

「ん？」

俺がタブレットをポチポチやりながら、自分の行いの正当性を考えていた時、イグニがなんか聞きたそうにしていた。

どうした？

俺は、テーブルに置いてあった牛乳を飲みながら、先を促す。

「前からずっと思ってたんだけどよ。ミラ姉とご主人は交尾しないのか？」

「ぶっ!」

俺はコントのように牛乳を拭いた。

汚れた床を、すぐにメイドプラントがお掃除しに来る。

見れば、ミラも動揺したのか、包丁で盛大に指を切っていた。

あの程度なら、回復魔法で簡単に治るけど。

……ていうか、いきなり何を言い出すんだ、この俺様系幼女ドラゴンは？

「なあなあ、ヤらないのか？ 人間ってやつは愛し合うと交尾するんだろ？ ご主人達は割と良い感じなのに、なんでヤらないんだ？」

こいつ……!?!?

デリカシーというものが無いのか!?

いや、たしかに世界が救われて、生活に余裕が出てきたら、ずっと側に居てくれる美少女を意識したりもしたけどさあ！

そういうのは、意識する↓フラグを立てる↓好感度を上げる↓告白する↓ゴールイン、みたいな段階を踏んでやる事だろ！

ムードもへったくれもない事言ってるんじゃないよ！

下世話すぎるぞ！

「野生のルールに従ってるお前にはわからないかもしれないけどなあ！ こういうのは色々複雑なんだよ！ 段階とかムードとか、大事な事がいっぱいあるの！」

「そう言ってる時間だけが過ぎていくよな。……ご主人。そろそろ腹くくつたらどうだ？」

ミラ姉も多分、待ってるぜ？」

「うっ……!?!」

それを言われると、弱い。

たしかに、有り余る時間にあぐらをかいて、積極的にいかなかったのは俺の落ち度だ。俺のミラに対する好感度は高い。

それこそ、惚れてるといっても過言じゃないくらいには。

昔は、生きる事に必死すぎて、色恋にうつつを抜かしてる場合じゃなかったから気づかなかったけど。

考えてみれば、最初に命を助けられた時から始まり。

大虐殺を敢行すると決意した俺に付いて来てくれた事。

ずっと側において、支えてくれた事。

これから先、長い長い時間を共にしてくれると言ってくれた事。

そういう諸々が積み重なり、俺はもうずっと前からミラを信頼していた。

だからこそ、計画の最重要部分、俺が敗北した場合に救出して撤退するという役割を任せただ。

そして、そんなミラに、俺は徐々に惹かれていった。

呪いに侵され、人を信頼できなくなった筈の、この俺がだ。

もしかしたら、最近はずっと平穏な時間を過ごせてるおかげで、呪いが少しは軽減してるのかもしれない。

それに、ミラを非道な計画に加担させ、外の世界での居場所を奪ったのは俺だ。

同意の上とはいえ、ミラの人生を歪めて、ずっと手元に置いてる鬼畜野郎も俺だ。俺はミラに対して、なんというか、こう、色々と責任みたいなものがあると思う。責任はとらないといけない。

知った事かと投げ出す事もできるけど、ミラ相手にだけはそういう事をしたくない。だから、最低でも、想いを伝えて当たって碎けるくらいはしないとけない。

でも、もうちよつと！

もうちよつとだけ時間をください！ お願いします！

その時間で、色々と覚悟を決めるから。

振られる覚悟も、受け入れられる覚悟も、その先の覚悟も、絶対に決めておくから。

そうして、俺達が『家族』という関係になるのは、もう少しだけ先の話。そして、それは。

死にたくない足掻き続けて、外道になって、非道に染まって。

その果てに魔王と呼ばれてまでも、必死に守ってきた。
俺の命の、生きる意味を見つけた瞬間だった。

××
話

——ミラ視点

私は両親の顔を知りません。

どうやら、物心つく前に捨てられたらしく、拾ってくれた教会の孤児院が私の家でした。

そして、このアックスフォードという国にある教会の殆どは、斧の勇者様を神と崇める、斧教の教会です。

私を拾ってくれた教会もその例に漏れず、斧教の教えを徹底していました。

私もまた、物心ついた時から、斧教の掟を叩き込まれて育つたのです。

そこに疑問を挟む余地などありませんでした。

それが、私にとっての常識でしたので。

そのまま、私は狭い世界で敬虔な斧教の信者として成長し、ある時、魔法と戦闘の才能を見込まれて、お城に召し抱えられました。

あとから知りましたが、私のような純粹培養の斧教徒は、神の次に偉いとされる国王様を裏切る可能性が低い為、とても重宝されるという話です。

そして、どうやら私の才能は自分で思っていた以上のものだったらしく、瞬く間に出世して、近衛侍女という大役を任せられました。

アックスフォードは実力主義。

より優秀な者こそが、より斧の勇者様のお役に立てるといふ理念を貫いています。アックスフォードの全ては斧の勇者様の為にあります。

優秀な者とは嫉妬の対象ではなく、全ての信徒は斧の勇者様の忠実なる僕しもべである。

私を含めて、そんな極端な考えを持った狂信者の多い国でしたので、私は嫉妬の目よりも尊敬の目で見られる事が多かったですね。

そうして、お城で働く日々を送っていた時、世界を揺るがす大事件が起こりました。

世界各地で、「波」と呼ばれる古の厄災が発生し始めたのです。

緊急事態として、各国はすぐさま勇者召喚の儀を執り行いました。

当然、我が国も神として崇める斧の勇者様の召喚を試み、それは成功します。

そして、私は今代の斧の勇者様、——ユウ様と出会いました。

最初にユウ様に対して抱いたイメージは……正直、あまり良いものではありませんで

した。

国王様との謁見で目を回し、お部屋の中で奇声を上げ、その後も、終始怯えているかのように挙動不審でした。

私は、斧の勇者様は完璧な神様なのだと思われてきた私の常識が、音を立てて崩れるような感覚を覚えました。

それでも、斧の勇者様がどのような方であろうとも、忠実にお仕えするのが斧教徒の務め。

斧の勇者様のパーティーに抜擢されるという名誉を与えられた私は、使命感に燃えていました。

しかし、——私は油断によって、取り返しのつかないミスを犯しました。

私と同じくユウ様のパーティーに選ばれた二人、アルバとパールが不審な動きをしている事に気づいていながら、まあ大丈夫だろうとたかをくくって、ユウ様への襲撃を許してしまつたのです。

それどころか、その窮地に立ち会ふ事すらできないという体たらく。

即刻処刑されてもおかしくない大失態。

いえ、むしろ、自分で自分を殺したくなりました。

しかし、その場で私が死ねば、まだ生きておられるかもしれないユウ様を見殺しにす

る事になる。

その一心で、川に落ちたユウ様を不眠不休で探し回りました。

何とかギリギリのところまでユウ様をお助けする事はできましたが、——再会したユウ様は、まるで別人のような冷たい目をするようになってしまわれました。

おそらく、あの二人に裏切られた事や、その後には襲つて来たというタクトなるクズのせいで、お心を病んでしまわれたのでしょうか。

ユウ様をお守りできなかった、私の責任です。

そして、そんなユウ様を見て、私は気づきました。

いかに勇者と呼ばれようと、神と呼ばれようと、ユウ様もまた人間だという事に。人間であるがゆえに、完璧である筈がない。

恐怖も感じるし、不安も覚える。

シヨツクな事があれば、心を病む。

それは当然の事です。

その時から、私はユウ様の事を、斧の勇者様としてだけではなく、お一人の人間として見るようになりました。

その後、お心を病んだユウ様は、四霊という化け物を使い、大量の犠牲を持って世界

を救済するという計画を立ち上げました。

最初は、その計画のあまりのおぞましさに尻込みもしましたが、結局はユウ様の下手くそな励ましを受けて迷いを断ち切り、私自身も外道となる覚悟を決めたのです。

どこまで堕ちようとも、命を懸けて、今度こそユウ様をお守りする。

その覚悟を改めて固めたといったところでしようか。

それから、本当に色々な事がありました。

伝説の竜帝であるイグニを仲間に加えた事。

不可思議な植物の種を取りに行った事。

お一人で出撃されるユウ様を見送った事。

ユウ様が馬鹿みたいに広大な空間を造り出し、その中に立ち入る事を許された事。

そして、最後には四霊全てをユウ様は復活させ、計画を完遂させて世界を救われました。

私もまた杖の勇者として選ばれ、今度こそユウ様をお守りする事ができたのです。

そして今、私はここにいます。

「俺と一緒に生きてほしい」というユウ様の言葉を受け入れ、これから先も未来永劫、

ユウ様がお亡くなりになるその時まで、私はユウ様のお側に仕え続けます。

この先、何があっても、また私がユウ様をお守り致します。
ですから、どうかご安心ください。

かつて、私のせいで病まれてしまったお心が、少しでも安らぐように。
私が、あなたの心の支えとなれるように努力します。

……それに、時には、存分に甘えてくださってもいいのですよ？

そうして、私とユウ様の新しい日常は続いていきます。

いつまでも。

どこまでも。